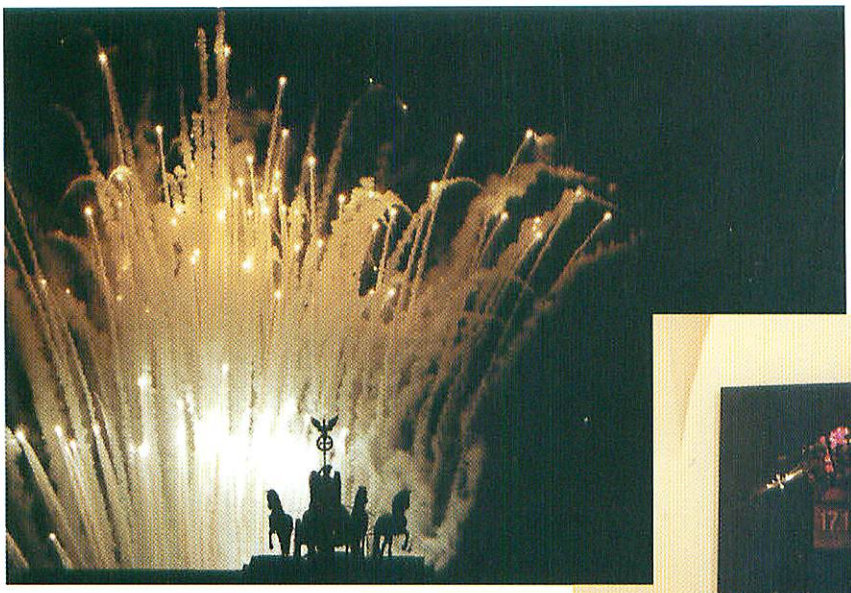
平成11年度
教育研究共同プロジェクト経費
成　果　報　告　書

旧ソ連圏における
市民的アイデンティティーの研究



東　北　大　学

平成12年3月31日

目次

はじめに(1)

岡　洋樹　民族範疇としての「モンゴル」の形成と清朝の支配(3)

北川誠一　チェチェン市民の社会的帰属意識(23)

佐藤雪野　チェコの市民社会の陰としてのロマ問題
　ーウースーチー・ナド・ラベム Ústí nad Labem の「壁」問題ー(59)

田中継根　現代ロシア人の国民的アイデンティティと読書状況(71)

寺山恭輔　ソ連時代に関する史料の発掘・回想・研究(1990年代のロシア):
　文献目録(75)

徳永昌弘・松本かおり・林裕明
　ロシアにおける貧困問題について
　ー住民の意識、社会階層の変化、家計の動向ー(121)

Abazov,Rafis The Foreign Policy Maling in Transitional Countries:
　The case ofInterest Groups in Kyrgyz Republic(149)

(掲載は日本語、英文、愛上尾順)

講演記録

Анна ЩЕГОЛЕВА　**90-е：читаем по-русски**　(185)

シチョガーレフ、アンナ
　90年代：ロシア人として読めること(195)

研究会資料(203)

はじめに

ベルリンの壁崩壊から10年、ソ連邦消滅から8年が過ぎるが、世界の地域的再編成という観点から、改めてソ連およびソ連圏の存在を歴史的に再評価するべきであるという動きが生じている。しかるに本学には、この地域を主として対象とする研究機関が存在しないので、随時プロジェクト研究を組織する必要がある。

そこで、関連３部局教官で研究組織を編成し、共同研究を行うこととした。研究主題を「旧ソ連圏における市民的アイデンティティーの変化に関する研究」としたが、その特徴は以下の３点にある。

1 最近の研究動向をみると旧ソ連圏研究は、政治・経済に関する分野主導で行われている。このプロジェクトでは、人々の意識を研究の対象として、社会・文化の変化を明らかにしようととした。

2 権威主義的社会で形成された市民意識が、体制の崩壊によってどのように変化する（しないか）という研究テーマは、地域と時代をこえた重要性がある。

3 今日、旧ソ連圏は東アジアと西欧を結ぶ中継ルートであると評価されているが、このプロジェクトはこの地域の人々を理解するに資する最新の知識を得ることができる。

上記の目的を達成するために下記の研究組織を編成した。

ロシア

田中継根（言語文化部教授）

寺山恭輔（東北アジア研究センター助教授）

徳永昌弘（東北アジア研究センター研究員）

東ヨーロッパ

佐藤雪野（言語文化部助教授）

北アジア

岡洋樹（東北アジア研究センター助教授）

中央アジア

木村喜博（大学院国際文化研究科教授）

カフカース

北川誠一（大学院国際文化研究科教授）

なお、以下の５氏に発表者として協力をいただき、研究会を開催したので、ここにお礼を申し上げる次第である。

ラフィス・アバゾフ（オーストラリア、ラ＝トローブ大学）

松長昭　（文教女子短大）

木村真（東京大学）

早坂真理（東京工業大学）

アンナ・シチョーガレヴァ（ロシア、科学アカデミー）

平成12年３月31 日

北川誠一（研究代表者）

民族範疇としての「モンゴル」の形成と清朝の支配

岡　洋樹

はじめに

東北アジアにおけるモンゴル民族の分断が、モンゴル史における近代史の始まりである 1911 年の清朝の滅亡に前後して生じ、確定したという事実は、モンゴル人の近代的民族意識のあり方をきわめて複雑なものとした。清代、満洲の支配下において「モンゴル」と呼ばれていたものと、1911 年にのろしをあげた独立運動において独立国家の担い手として考えられた「モンゴル」、さらには現在言うところの「モンゴル民族」との間には、相互に微妙な違いがあり、これが、モンゴル人の民族アイデンティティーに揺らぎを生じさせているように思われるのである。その揺らぎのある部分は、清朝の治下において既に芽生え育ったものであり、ある部分は、独立の初期において既に分断が固定化されたことによるズレでもある。またある部分は、分断以後の社会発展のプロセスにおいて形成されたものであるだろう。本稿は、清代における「モンゴル」範疇と、近代民族意識の担い手としてのモンゴルとのズレを主題として、本共同研究「旧ソ連圏における市民的アイデンティティーの変化に関する研究」の報告としたい。

現在モンゴル民族を自認する人々は、カザフ民族（４％）や少数の露・中国人を除くモンゴル国住民と、中国内モンゴル自治区及び周辺諸省に分布する「蒙古族」を主たる内容としている。そしてその外縁上に、ロシア連邦のブリヤート人、カルムィク人、中国のダグール人等が位置している。一方モンゴル人自身は、モンゴル民族構成諸要素を「北モンゴル」「南モンゴル」「西モンゴル」の三つに大別することがある。「北モンゴル」とは、主としてハルハ族はじめモンゴル住民を指す。「南モンゴル」とは中国の内モンゴル自治区及び黒竜江省・吉林省・遼寧省等に居住するモンゴル人を指し、「西モンゴル」とはすなわちモンゴル国西部のドルベド、バヤド、ザハチン、ホショード、トルグード、ミャンガド、オオルド等、中国新疆ウイグル族自治区北部のトルグード、ホショード、青海省のホショード等オイラド系の諸集団を指す用語である[1]。ロシア連邦内のブリヤートには、この三区分と出自において関わりを有しながらも、自分達を独立した民

族として意識する傾向も存在する[2]。ダグールについては、歴史的にモンゴル民族の範疇に含める認識がある一方で[3]、現在の中国では独立した民族と認定され、かつダグール自身の間にもモンゴルとは異なる民族であるとする認識がある[4]。

モンゴル民族という概念がかかる複雑な内容を形成するに至ったのは、直接的には近代に入ってからのことであるが、その歴史的な基礎は、近代に先立つ清朝の時代に形成された[5]。そこでまず、清代におけるモンゴルとモンゴル民族形成にこの時代が果たした役割について、素描を試みたい。

第一章　清代のモンゴル

清朝の支配下に入る前のモンゴルは、ある意味で極めて明確な概念であった。すなわち、モンゴル帝国の北帰以後、モンゴル高原に分布した大ハーン支配下の遊牧民の内、チンギス・ハンの後裔たる大ハーンの権威に服し、その一族たるボルジギン氏族の王族によって統治された遊牧集団を指してモンゴルと称したのである[6]。これに対置される概念が、オイラド oyirad であった。「四十と四 döčin dörben qoyar」という言葉で大モンゴル国全体を指すことがあるが、「四トゥメン dörben tümen」のオイラドは、「四十トゥメン döčin tümen」のモンゴルとは截然と区別され、チョロス čorus、ケレイド kereyid 等異姓氏族により統治される集団であった。１５世紀後半におけるバトムンフ・ダヤン・ハーン batu möngke dayan qaγan はモンゴルを再統一し、オイラドを屈服させた後、属民を六つのトゥメンに組織し、これにホルチン qorčin 等チンギス諸弟系のウルスを併せて支配下においた。しかしまもなくオイラド諸部は次第にモンゴルの支配を脱して自立傾向を強め、１７世紀には新疆北部や青海に独自の勢力として定着していく。特にガルダン・ボショクト γaldan bošuγtu の時代にはチョロス部を中心として国家を形成し、ズーンガル（ジュンガル jegün γar）と呼ばれた[7]。一方のモンゴルは、ダヤン・ハーンの諸子に分与され、諸弟系の集団とともにボルジギン borǰigin～borǰigid 氏族を統治集団とする遊牧集団に分裂しながら、大ハーンの間接的な支配下におかれていた[7]。

つまり、前近代における「モンゴル」とは、必ずしもエスニックな意味での集

団概念ではなく、帝国構造を引きずった支配集団区分の名称として理解されるべきものなのである。

17 世紀初頭に現在の中国東北部に分布した女真 jušen 諸族を統合したツングース系の満洲 manju は、アイシンギオロ aisin gioro 氏族を中核として国家形成を果たし、やがて西隣のモンゴルへと進出する[8]。彼らは、モンゴル東部にいたホルチンや内ハルハ qalq-a の諸集団を漸次服属させつつ、ついに 1634 年にモンゴル最後の大ハーン・リグデン lingden を西に逐って、内モンゴルに兵を進め、まもなくリグデンの遺児エジェイ ejei の服属を受けて内モンゴル征服を果たした。ここに大清国が成立する。清朝は、服属したモンゴルの一部を八旗組織に編入する一方で、大半をザサグ旗に組織して統治することになる。当初のザサグ旗とは、一部の例外を除いてボルジギン氏族の首長に王公の爵位を与えて既存の属民の統治者＝ザサグ（jasaγ 旗長）として公認し、間接統治下に置いたものをいう。王公とは、和碩親王・多羅郡王・多羅貝勒・固山貝子・鎮国公・輔国公等の爵位を持つ者を言い、本来アイシンギオロ家宗室に与えられたものである。ここに、宗室王公（内王公）に対するモンゴル王公（外王公）という身分範疇が成立した[9]。これは、基本的には、モンゴルの黄金氏族たるボルジギン氏族の個々の地方レヴェルにおける特権的身分を追認したものであったが、既存の支配関係に重大な変更をも加えるものであった。第一に、ザサグ旗中、ハラチン qaračin とトゥメド tümed において非ボルジギン氏族に属するウリヤンハイ uriyangqai 氏族の首長を王公に任じたことである。これによって、ボルジギン氏族が、非ボルジギン氏族と格式上同範疇に位置づけられる先例が開かれた。一方同じボルジギン氏族であっても、清朝が初期において服属を受け、協力関係を打ち立てたホルチン部の首長に優越的な地位が認められたことが重要である。チンギスの弟ハサル qasar を祖とするホルチン部の首長は、大ハーンとなる権利を持たない等、チンギスの第四子トゥルイ tului の後裔たるダヤン・ハーンの子孫と比べると一段低い地位に甘んじていた。ところが、清朝とのいち早い協力関係の構築によって、彼らはダヤン・ハーン系の王公と同列もしくはより優位に位置づけられることになった。

さて、清朝は、1691 年にガルダン・ボショクトの侵攻を避けて保護を求めて内モンゴルに移動したハルハ部を受け入れ、まもなくガルダンを破った。このよ

うな中で、オイラドを構成するホショード qošuud 部のホラリ qorali が清朝に服属し、康熙 36（1697）年にザサグ多羅貝勒を授かる[10]。これによってオイラド系の王公が誕生する。ホショード部の首長達はボルジギン氏族であったが、やがてチョロス系の首長にも王公の爵位が授与されたことで、オイラドも、ボルジギン氏族と同格の身分範疇を与えられることになるのである。

このように、満洲は、征服以前のモンゴルに存在していた身分上の区別、すなわちボルジギン氏族と異姓首長の区別及びボルジギン氏族内のダヤン・ハーン系とチンギスの諸弟系の区別を、首長として爵位を認める限りで同格の身分範疇に包摂したのである[11]。しかも、満洲はオイラド系諸族に対して「額魯特蒙古（ûlet monggo）」の名称を用い、モンゴルの一部として認識した。さらに王公の範疇はこれにとどまらず、ハミやトゥルファンの郡王家や、チベットの一部の首長にも及ぼされ、モンゴル王公同様の待遇が与えられた。ところがその一方で、八旗に編入したモンゴルの首長達の多くに対しては、ボルジギン氏族に属する者にさえ世襲王公の爵位は授与されなかったのである。

この結果として、モンゴルに存在したボルジギン氏族と異姓諸族という首長間の身分的差別は相対化され、新たにモンゴルとオイラドを包含する王公という身分範疇が作り出される一方、八旗に編入されたモンゴル王族は、他のモンゴル諸部から身分的に切り離されることになったのである。

この王公という身分範疇が、モンゴル民族の形成過程においてその構成要素を決定する際の一つの枠組みとなる。既に清代においてさえ、王公身分はモンゴルの枠を規定する概念であった。その実例は、19 世紀半ばに成立したハルハの年代記『エルデニィン・エリヘ erdeni-yin erike』に見ることができる。この年代記の撰者ガルダン γaldan は、『外藩蒙古回部王公表伝』の記事を引用してモンゴル諸盟旗を列挙しているが、その中にトルファンやハミの回部王公やチベット王公を含める一方で、八旗に編入されたモンゴルについては、まったく沈黙しているのである（後述）。

1911 年、ハルハの王公が中心になって清朝からの分離運動が発動された。その際、彼らが合流を呼びかけたのは、まずは王公によって統治される内モンゴルの諸部だった。

このように、モンゴルの民族形成の前夜において、清朝が作り出した王公とい

う身分範疇が与えた影響は決定的なものがある。清朝滅亡後、王公層が統治するザサグ諸旗のモンゴル人がモンゴル民族として認知されていく一方で、八旗に編入されたモンゴル人はこれから脱落し、むしろ満洲族の一部として、別の民族範疇に含められることになるのである。

一方、1689 年のネルチンスク条約によってロシアへの帰属が決定したブリヤート buriyad も、当然この王公範疇からは脱落する。近代においてブリヤートをモンゴル民族の構成要素とする理解は、むしろブリヤート側から与えられたものであって、1911 年にロシアを頼ったモンゴルの王公達がブリヤートとの統合を考えていたわけではない。また、ロシアやソ連が、ブリヤートをモンゴルへの政策遂行の架け橋として用い、かつブリヤートの民族主義者達がこれに積極的に関わったことも重要である[12]。

また、これに関わって興味深いのは、タグナ・ウリヤンハイ tangnu uriyangqai の例である。現在トゥバ共和国と呼ばれている地域は、清代はウリヤンハイと呼ばれ、ハルハ・ザサグト・ハン部 jasaγtu qan-u ayimaγ やオイラド系の旗が貢納を取り立て、また一部はウリヤスタイ将軍の管轄下にあった[13]。モンゴルが、独立の初期にあって、執拗にトゥバの回復を追求したことはよく知られている。厳密な意味では、ウリヤンハイをモンゴル系民族の範疇に含めることは難しいにも拘わらず、モンゴルとの統合が求められた背景には、清代以前から存在したウリヤンハイとモンゴル・オイラドの貢納関係と、清代になってからの王公制度の影響、及び外モンゴルの独立時にウリヤスタイ将軍の管轄地域を領域としたこと等を考える必要があるように思われる。

もう一つ注目しておきたいのは、漢人の問題である。清代、多くの漢人農民が内モンゴル南部の諸盟旗に入植した。彼らは牧地を開墾することによって、モンゴル人の生活圏を狭める一方、行政的にも清朝によって庁・県に編入され、旗の行政区画を圧迫するようになる。庁・県に組織された漢人は、漢族としてのアイディンティティーを維持していくが、中にはモンゴルの旗籍に編入され、王公属下となる者も現れた。彼らは元来のモンゴル人との区別を維持しながらも、次第にモンゴルに同化していった。こういった人々の多くが、モンゴル民族の範疇に加えられていくのである。これもモンゴル王公に帰属することによって、民族範疇が決定された例と認められるものである[14]。

逆に、モンゴル王公属下でないにも関わらず、モンゴル民族の範疇に加わった集団もある。「内属蒙古」と呼ばれた人々がそれである。「内属」とは、八旗直轄で、かつモンゴル高原で遊牧に従事していた集団を指す。具体的には、フルンブイルの新旧バルガ barγu、チャハル čaqar、帰化城トゥメド köke qota-yin tümed 等がこれに当たる。これらの旗はその牧地が万里の長城外にあった。またバルガやチャハルは遊牧生産が維持されており、その意味で他のザサグ旗モンゴルと近い環境を有していた。八旗所属のモンゴルの内、この部分のみが、近代的モンゴル民族の形成に参与しえたのは、地理的位置と、遊牧生産に立脚する生活様式の共通性に基づくところが大である。もう一つ忘れてはならないのは、これらの地域には他のモンゴル諸地域同様、チベット仏教が浸透していたことである。同様なことは、ホヴド qobdu の一部の総管旗についても言うことができよう[15]。

内属蒙古と呼ばれた地域は、ザサグ旗で旗行政を担った世襲王公が存在しないか、存在しても旗政には関与せず、都統や総管といった官僚を通じて、八旗都統衙門や兵部の直接統治を受けた。国家が必要と認めた場合には、これらの旗の内政に容易に介入しえたのである。清末新政に際して、欽差墾務大臣貽穀はチャハル右翼、オルドス ordus、ウラーンチャヴ ulaγančab における開墾に当たったが、チャハルでは順調に進んだ開墾・清丈作業が、オルドス、ウラーンチャヴでは王公の強い抵抗に直面して思うように進まなかった事実は、内属旗とザサグ旗の違いを鮮明に示している[16]。

一方八旗蒙古のモンゴル人達の場合はまた異なっていた。周知のように、八旗は満・蒙・漢の三部分からなり、八旗蒙古の全体と、八旗満洲の一部には、モンゴル人が組織されていた。彼らの多くは、清初内モンゴル東部にいたハラチン、ホルチン、ハルハや、後に服属したチャハル、オオルド系のモンゴル人であった。後述の『蒙古世系譜』の撰者ロミ lomi のように、彼らは自らの出自を知ってはいたが、遊牧生産から切り離されて兵として各地に駐防し、都市生活になじむにつれて次第に満洲化し、さらに満洲人とともに漢化していった。最後の庫倫辦事大臣で八旗蒙古出身の三多が、清朝側の駐防官として、モンゴル王公によって追放されたように、彼らはもはや近代モンゴル民族の構成部分として加わることはできなかったのである。

同じく八旗に編入されたダグール（daγur 達斡爾）の場合、京旗や駐防八旗に

編成されたり、東北地方にあって八旗に編入された者もいたが、ダグール族の中から王公が現れることはなかった。この点、エヴェンキやシベの場合も同様である。彼らは満洲からも概念上区別されていたが、モンゴルとの間も、かなり距離のある集団だったといえよう[17]。

このように、清代におけるモンゴルは、大きく八旗に編入された者と、王公ザサグの下で盟旗に編入されたものに区分された。そしてモンゴル王公属下のモンゴル人と、八旗属下中内属蒙古と呼ばれた部分が、後のモンゴル民族の基礎となるのである。

ところで、これに関連して言及しておきたいのは、「内モンゴル」と「外モンゴル」の問題である。中国を中心とした名称であるとして忌避されることもあるこの両範疇は、清代に作り出されたものであり、もともとモンゴル人自身が持っていた区分ではない。当時も現在も、モンゴルの区分としてあったのは、「内」「外」よりは「北」「南」である。ただし、ウヴル（öbür 南）モンゴルという範疇は史料上確認できない。存在が確認されるのはアル（aru 北）モンゴルである。現在アル・モンゴルは、主としてモンゴル国を指す名称として用いられているが、17 世紀には、興安嶺北に遊牧していたホルチン、アルホルチン aru qorčin、ドゥルベン・フーヘド dörben keüked、モーミャンガン muu mingγan、ウラド urad、オンニウド ongniγud、アバガ abaγ-a、アバハナル abaqanar、ハルハといった遊牧集団を指していた[18]。そしてそれらの多くは、北ハルハを除いて、清代には内モンゴルに含められることになる。

用語の歴史的な意味はともかくとしても、現在アル・モンゴルという範疇は、やはりモンゴル国を指し、中国でいう「外蒙」とほとんど同義として用いられている。ここには、これら歴史的用語法の理解の混乱が見られる。ウヴル・モンゴルは、現在の中国内モンゴル自治区（モンゴル語で öbür mongγul-un öber-tegen jasaqu orun）を指して用いられている。ウヴルが、漢語の「内」に対応していることになるが、清代においては、「内」にはドトード dotuγadu、「外」には γadaγadu という言葉があてられていた。清朝の用語としての内モンゴル（内蒙古、内扎薩克）とは、ジレム（jirem-ün čiγulγan）盟・ジョスト盟（jostu-yin čiγulγan）・ジョーオダ盟（juu oda-yin čiγulγan）・シリンゴル盟（silinγol-un čiγulγan）・ウラーンチャヴ盟（ulaγančab-un čiγulγan）・イヘジョー盟（yeke juu-yin čiγulγan）の

六盟 49 旗を指す。すなわち、現在の内モンゴル自治区興安盟、哲里木盟、赤峰市、錫林郭勒盟、巴彦諾爾盟、鄂爾多斯盟及び黒龍江省杜爾伯特蒙古族自治県、吉林省郭爾羅斯蒙古族自治県、遼寧省阜新蒙古族自治権、同省喀喇沁左旗蒙古族自治県の各地域がこれに含まれる。これ以外の諸盟旗は、全て外モンゴル（外蒙古、外扎薩克）と称された。すなわち、アラシャ・オオルド旗 alaša ögeled qosiγu、エジネ・トルグード旗 ejin-e torγud qosiγu、ハルハ四ハン部 qalq-a dörben ayimaγ 86 旗、ドルベド dörbed 2 盟 14 旗、青海の 29 旗、新疆の各旗である。かつての外モンゴルの内、アラシャ、エジネは現在内モンゴル自治区に含まれている。また、これも現在内モンゴルに含まれている内属蒙古諸旗、すなわちチャハル八旗、新バルガ、旧バルガ及び帰化城トゥメド旗も本来は「内モンゴル」の概念には含まれない。

このように、清代における内外モンゴルは、現在言うところの南北モンゴルとはかなり異なった概念である。内外モンゴルは、南北のような地域概念というよりは、むしろ清朝の対モンゴル政策運用上の区分、あるいはモンゴル行政管轄官庁である理藩院の管轄権限に基づく行政区分とでもいうべき概念である。すなわち内モンゴル・ザサグ諸盟旗の事務は、理藩院の典属清吏司が、外モンゴルの事務は柔遠清吏司がそれぞれ管轄した。では内外モンゴルの両者にそれ以上のいかなる違いがあったのかとなると、これを明確に述べることは頗る困難である。清宗室が内モンゴル王公と多くの婚姻関係を結んで、より親しい関係にあったのは事実であるが、外モンゴルにも清朝公主の降嫁を受けた者はおり、満蒙の通婚が内モンゴルに限られたわけではない。確かに内モンゴルには「備指額駙」の制度があって、満洲宗室との通婚が制度化されてはいたが、全ての内モンゴル王公が対象だったわけではない[19]。内モンゴルの旗を構成する佐領数が相対的に多く、外モンゴルでは少なかったために分割支配がより貫徹したとはいっても、旗・佐領組織自体に制度上の違いがあったわけでもない。内モンゴルのザサグには兵権が与えられていたとはいえ、外モンゴルにおける軍務担当者である副将軍にも、常に地元の王公が選任されていた。

このように、清代における内外モンゴルは、行政区分としては明確であったものの、制度上の違いとなると、極めて曖昧なものだったのである。

清代の統治区分を考える場合、エスニックな区分や帰属意識、居住形態の地域

的分布から論を立てようとすると複雑になり、理解を困難なものとしてしまう。この時代のモンゴルの枠組みをより効率的に理解するためには、統治者の区分を手がかりにするのが近道である。初期の満洲国家の構造は、ハンの下に、ハンの父系氏族たるアイシンギオロ一族が王公として属下を分割統治することによって成り立っていた。一族中の有力王公は、旗王として八旗を統御し、属下としていたのである。一方モンゴルを支配下に組み込む過程で、ボルジギン氏族を初めとするモンゴルの統治集団にも王公の爵位を与え、その属下に対する首長としての地位を保証した。ここに、属民全体は、アイシンギオロ宗室王公属下と、モンゴル王公属下に大きく区分されることとなる。前者は乃ち八旗に、後者はザサグ旗に編成された。八旗や内属蒙古に編入されたモンゴル人は、前者に属したのである。そしてザサグ旗に編成された部分＝モンゴル王公属下が、内属蒙古を取り込む形で近代モンゴル民族の枠組みの基礎が築かれるのである。

統合の原理が王公統治に存する以上、その言語・出自は副次的な要素となる。例えば、モンゴル系の言語を話すダグール、東郷、保安、東部裕固といった民族は、モンゴルの民族形成からははずれていく。ところが、言語的には異民族でも、王公との統属関係から、モンゴルへの帰属が求められたタグナ・ウリヤンハイのような例もある。

ただ、ここで問題となるのは、ブリヤートである。前述のようにブリヤートは、1689 年のネルチンスク条約以後、帝政ロシアの属下として、他のモンゴル諸部からは切り離される。彼らがモンゴル民族の枠組みとなった王公制度からも、清朝の支配からも切り離されて独自の歴史を歩んだことは、この民族の民族意識を複雑なものとする一因となる。現に当のブリヤート自身の間には、己をモンゴルから峻別しようとする傾向が抜き難く存在する[20]。この事実は、70 年にわたるソ連の民族政策のしからしめるところであるとともに、革命以前の２００年余の間、他のモンゴル諸部から国境によって切り離されていた歴史の影響を無視することも難しいだろう。ところがその一方で、２０世紀初頭のモンゴル独立の過程で、リンチノやジャムツァラノといったブリヤートの民族主義者が、ロシアの援助を求めるモンゴルとの橋渡しの役割を果たしたばかりでなく、内外モンゴルの統合と解放を追求するパン・モンゴリストとしてモンゴル革命に関わったことによって、モンゴル民族の概念がブリヤートをも含むものとなる反面、両者の関係

に一定の違和感をも残すことになった[21]。

とはいえ、清朝属下のモンゴル王公が、中国からの分離を求め、これにブリヤートが合流した時、王公制度の枠組みが、近代的な民族主義の枠組みへと転化する契機がもたらされたのであり、近代におけるモンゴル民族概念の形成にブリヤートが果たした役割には、実に大きなものがある。

第二章　モンゴル年代記にみるモンゴルの枠組み

前章にて述べたとおり、清代のモンゴルは、大きくザサグ王公属下と八旗属下に大別することができ、王公による清朝からの独立運動は、前者が中心となって、後者の内、内属蒙古部分をまきこんで展開されたものであった。清朝支配下のモンゴル人の内、残る八旗属下のモンゴル人は、独立派の王公によって統合の対象とは見なされなかったのである。

蒙古八旗を含む清末の八旗出身の駐防官達が、新政の担い手としてモンゴルの王公によって敵視されたことはあるとしても、八旗のモンゴル人達が、既に清朝中期の時点でモンゴルの王公との繋がりを失いつつあったことが、清代に著されたモンゴル文年代記からわかる。モンゴル文年代記は、モンゴルの歴史を叙述したものというよりは、その多くがチンギス・ハンの末裔としてのボルジギン氏族の王統譜としての性格をもっている。そこでは、インド・チベットの王統につなげて、ブルテ・チノ、ゴア・マラルからチンギス・ハンを経てリグデンに至るモンゴル大ハーンの系譜と事績が述べられ、ダヤン・ハーン以降については、清代各盟旗の王公タイジに連なる系譜が述べられるのである。つまり、地域としてのモンゴルの歴史ではなく、その支配者としてのボルジギン氏族の系譜なのである。清初、満洲のモンゴル征服の過程で、多くのボルジギン氏族の王族が八旗に編入された。このような八旗属下のボルジギン氏族成員について、これら年代記はどのような扱いをしているのであろうか。そこで以下に、系譜記述を伴う清代の年代記を四つ取り上げて、系譜叙述の範囲を明らかにすることで、モンゴルの範疇からの八旗属下脱落の状況を検討してみたい。

八旗モンゴルの歴史記述：蒙古世系譜

『蒙古世系譜』は、正藍旗蒙古出身のロミによって、雍正 13（1735）年に著された系譜であり、チンギス・ハンからリグデンまでの大モンゴル国歴代大ハーンの事績を主内容とする[22]。作者ロミの同時代である清代に関しては、その最後の部分において、内外モンゴル各盟旗について簡単な記述がある。ここでは、ダヤン・ハーンの子、トゥルボロド törübolud、バルスボロド barsbolud、アルツボロド alčubolud、ゲレセンジェ geresenje、ゲレ（ゲレボロド gerebolud）の子孫について述べ、さらに作者ロミ自身が所属するバルスボロド系ハラチン部王族について、やや詳しい系譜が記されている。

『蒙古世系譜』の清代部分の記述の最大の特長は、各ザサグ旗のみならず、八旗に編入されたボルジギン氏族に関する記述を含む点にある。例えば、該当部分の冒頭に、

> 現在モンゴルの内には、ウズムチン２旗、ホーチド２旗、スニド２旗のザサグ・王・タイジ達、正黄旗チャハルのタイジ内大臣 šeüšitai、間散大臣 ayuu、正白旗 čuqum tüsimel 間散大臣 čorji 等は、皆バトムンフ・ダヤン・ハーンの長子トゥルボロドの子孫である。(10v-11r)

と述べ、内属旗であるチャハル八旗に編入された者に言及し、また、

> オルドス６旗のザサグ王タイジ等、トゥメド貝子 qamuγbayasγulangtu の１旗、フフホトのトゥメドのタイジ norbu、qatursi 等、またハラチンのハン・ aqai buyan、aqai abai noyan、正黄旗のハラチン貝子 lasǰab efu、紅旗のハラチン貝勒 birasi efu、čuqum tüsimel bilig nandai、urtunasutu、正藍旗のハラチン貝勒 dai darqan borǰitu efu、貝子 ǰolbi、一品副都統 sonumraši、副都統 bayartu、都統 lomi、副都統 güwambuu、ǰičeng、正藍旗副都統 bandi 等は皆バトムンフ・ダヤン・ハーンの第３子 barsabolud の子孫である。(11r)

と述べて、自らも含む八旗編入者についても記載している。

ダヤン・ハーン以来の系譜を内容とする以上、ザサグ旗のみならず、八旗編入者についても記載を怠らないロミの立場は、あるべきものと言えようが、実際には、一群のモンゴル年代記と呼ばれるこの時期の歴史記述において、唯一の事例であることは、注目されてよい。ロミの系譜観は、八旗に編入されたボルジギン氏族成員において、ザサグ旗の王公と自分達を一連のものとして把握する系譜観が維持されていたことを物語る。しかしかかる見方は、ザサグ旗のモンゴル史家等によっても共有されているとは言い難いのである。

ゴムボジャヴの『ガンガの流れ』

やはり雍正年間の系譜史料として、ゴムボジャヴ γombuǰab の『ガンガの流れ γangγa-yin urusqal』を挙げることができる[23]。作者はウズムチン右翼旗 üǰümčin baraγun qosiγu のタイジで、雍正３（1725）年に同書を完成させている。同書も、チンギス・ハーン以来の歴代大ハーンの系譜と事績を主内容とするものである。この書も、リグデンの死後、満洲への服属後は、チャハル、スニド sünid、ウズムチン、アオハン aoqan、ナイマン naiman、オルドス ordus、トゥメド、ホーチド quučid、ヒシクテン kesigten、ジャルード ǰarud、バーリン baγarin、ハラチン、ウラド、ウリヤンハン、ハルハ、モーミャンガン、ホルチン、アルホルチン aru qorčin、ドゥルベン・フーヘド、ウラド、フフノール kökenuur（青海）のオオルド ögeled（ホショード qošuud）、オンニウド ongniγud、アバガ abaγ-a のそれぞれについて、簡単な系譜を記す。八旗については、チャハルの部分についてのみ、「モー・キタド・タイジ muu kitad tayiǰi の二子内大臣 siüsitei tayiǰi ayuu。これらの子孫は今鑲黄旗蒙古にいる。チャハルのノヤン達はこれらである」(p.36)と記すのみで、他の諸部については、八旗編入組に言及したものはない。ゴムボジャヴは、中央で学歴を積んだ人物であり、八旗蒙古の事情をある程度知っていたものと思われるが、彼の著作において八旗のボルジギン氏族は著述の範囲から除外されているのである[24]。

ダルマ・グーシの『ミャンガン・ヘゲースト』

この年代記の作者ダルマ・グーシ dharm-a güüsi は、内モンゴル・ジョーオダ盟 ǰuu uda-yin čiγulγan ジャルード右翼旗 ǰarud baraγun qosiγu 出身のラマで、乾

隆4（1739）年にこの書を著した。この年代記は、ダルマ・グーシがチャンキャ・ホトクトの下で『メルゲド・ガラヒーン・オロン merged γarqu-yin orun』等の仏教語彙辞書の編纂に関わるなど、中央で活躍したこともあって、この時期の年代記著作特に同じジャルードのラシプンツォグ rasipongčuγ 撰『ボロル・エリヘ bolur erike』に一定の影響を与えている点で重要なものである。ところで、チョイジ čoyiji によると、フフホトの内蒙古社会科学院所蔵の同書写本は、ダルマ・グーシの原著をドロンノール彙宗寺のソマティ・シーラ sumati sila が書写し、かつ補訂したものである[25]。この人物もダルマ・グーシとほぼ同時代の人のようであるが、チョイジがダルマ・グーシの原著の写本であるとするコペンハーゲン蔵本になく、ソマティ・シーラの書写本にあるとする記述には、各盟旗のノヤンの系譜以外に、たとえばスニド部について「これらボヤン・セツェンの子孫は、西スニドである」（p.204）とか、トゥメドのアルタン・ハーンの子トゥベド・タイジの子孫について、「これらトゥベド・タイジの子孫は、フフホトの両トゥメドに含まれている」（p.214）等といった記述が付加されている。このような付加的な記述の中には、たとえば内ハルハ五オトグ中のオンギラド onggirad を統治したノヤンについて、「これら両者の子孫は、内なる北京に入ったという」（p.224）「バヤド、ウジェード両オトグのノヤン達は、内に入った。現在その子孫がいる」（p.225）といった情報を記している。とはいえ、八旗に編入されたノヤンについては、おおかたその系譜は省略されており、このダルマシラにおいても、八旗モンゴル人は叙述対象から除外されているのである。

ラシプンツォグの『ボロル・エリヘ』

『大元ウルスのボロル・エリヘ dai yuwan ulus-un bolur erike』は、内モンゴル・ジョーオダ盟バーリン右翼旗 baγarin baraγun qosiγu の協理三等タイジ・ラシプンツォグが、乾隆39（1774）～40（1775）年に著した年代記である[26]。その題名から明らかなように、この年代記の大半はチンギス・ハーン以後元朝期に至るモンゴル史に当てられており、第9巻第4節以降において、ダヤン・ハーンの諸子の系譜が展開されている。とくに、第10巻において、各部の世系を述べるが、最初にラシプンツォグが属するダヤン・ハーンの第5子アルツボロドの子孫内ハルハのノヤンを列挙する。内ハルハの五オトグは、バーリンとジャルードがザサ

グ旗となったが、オンギラド、バヤド、ウジェード三オトグは八旗に編入された。ラシプンツォグは、ジャルードとバーリンのノヤンを述べた後、バヤドとウジェードについて、

> qorqači qasar noyan の第４子、bayud の地を統治した sonin dayičing noyan 及び第５子 üjiyed の地を支配した šoqai joriγtu qong baγatur noyan、この両ノヤンの子孫は、内八旗 dotuγadu naiman qosiγu に入った。(p. 897)

と述べるに止まり、具体的な系譜を記すことはしていない。

ラシプンツォグは、続けてダヤン・ハーンの第６子オチルボロド wčirbolud の子孫が統治するヒシクテンのノヤンを述べ、さらに続けて第７子エルボロド elbolud の子孫、第８子 čing par、第９子 Karudi、第 10 子 gerebolud についてそれらの子孫の所在を不明とする。そして第 10 子 geresenje の子孫ハルハ四部のノヤンを列挙する。続く第５節では、「その他のノヤン達の根源」として、ブルテ・チノからチンギスの父イェスゲイ・バートルまでの各代の分枝を不明とし、さらにジュチ系・チャガダイ系について「アルタン・フルドゥン・ミャンガン・ヘゲースト」により簡述する。さらにチンギス諸弟系の系譜について、ハサル系のホルチン、アルホルチン、ドルベン＝フーヘド、ウラド三旗、ブフ・ビリグテイ系のアバガ、アバハナル abaqanar、ハチウン系のオンニウド及びオトチギン系のノヤン達の系譜を述べる。そして最後に uliγ ijaγur としてウリヤンハンのジェルメの子孫ハラチン４旗に言及し、ジェルメがタブナンと呼ばれたいわれについての伝承をいくつか紹介している。結局、ラシプンツォグが自著の中に書き込んだのは、内外モンゴルのザサグ旗中ボルジギン氏によって統治されるものとウリヤンハイ氏が旗長となった諸旗であった、八旗に編入されたボルジギン氏族も、オイラド系の諸旗についても、述べるところはないのである。彼は、叙述の対象とした諸部について、拠るべき情報を持たない場合には、その旨明記しており、八旗・オイラドに関する沈黙は、決して単に無知によるものではない。特に注目されるのは、ハサル系の諸部について述べた最後に、フフノール（青海）のハサル系すなわちホショード部について「また eseldei の第２子 uruγ temür の子孫はフフノ

ールにいるという。また、王 bolunai の dölgügen をはじめとする６子の子孫は不明である（ese γarγaǰuqui)」（p.928）と述べて、オイラド系諸部の内、ボルジギン氏族をザサグとするホショードについては、記述を試みた事実である。ウリヤンハン氏族のジェルメの後裔たるハラチンについても、「我がモンゴルには、昔から uliγ iǰaγur-tan はいなかった」（p.935）と述べ、原理的にウリヤンハン氏族はモンゴルから除外されるべきものとして述べている。

これらの事実は、ラシプンツォグがモンゴルという概念で語る内容が、ボルジギン氏族を指していることと、八旗に編入された同氏族については、叙述の対象からはずされていることを示しているのである。

ガルダンの『エルデニィン・エリヘ』

『エルデニィン・エリヘ erdeni-yin erike』の作者ガルダン γaldan は、ハルハ・トシェート・ハン部左翼後旗 qalq-a tüsiyetü qan-u ayimaγ-un ǰegün γar-un qoyitu qosiγu 協理タイジであり、ダヤン・ハーンの第７子ゲレセンジェ・ジャライル・ホンタイジの第３子ノーノホ・ウイゼン・ノヤン nonuqu üiǰeng noyan の子孫に属する。彼がこの歴史書を書き終えたのは、道光 21（1841）年のことである[27]。この年代記の特長は、全体の７割を清代史の記述に割いていることと、系譜とは別に、内外モンゴル各盟旗を、『欽定外藩蒙古回部王公表伝』によって盟旗名とザサグの爵位を列挙する点にある。清代部分は大きく二つの部分に分かれ、前半は『欽定外藩蒙古回部王公表伝』を写す形で、モンゴルの盟旗を列挙し、後半では、主としてトシェート・ハン部のハン家系諸旗王公の事績と、ジェヴツンダムバ・ホトクト ǰebzundamba qutuγtu の事績を中心として論述している。興味深いのは、彼がこの前半部分において列挙したモンゴル諸盟旗の記述が、『表伝』の記述形式を受け継いで、内外モンゴル、オイラド、回部、チベットのザサグ王公に限られ、八旗に編入されたボルジギン氏族や、王公のいないチャハル・バルガ等の内属諸旗の非王公については、沈黙している事実である。とはいっても、内属諸旗中の王公については、叙述の対象としているのであるから、その記述の範囲は、外藩王公と重なることになる。その意味で、ロミの『蒙古世系譜』とは著しい対照をなしている。１９世紀の外モンゴルにおける歴史記述が、既に八旗内のボルジギン氏族を記述対照から排除していることを示すものである。もちろん、

これには八旗内の同氏族に関する資料を彼らが持ち合わせていなかったことも、原因の一つであろう。意図的なものであるか否かはともかくとしても、ここには既に、モンゴル史の記述がザサグ王公に限定される傾向が明瞭に看取されるのである。

しかも注意しなければならないのは、『王公表伝』を引用する形で、ガルダンはオイラド系王公をも記述の対象としており、その点でこれ以前のモンゴル文年代記のボルジギン氏族の歴史としての記述とは決定的に性格を異にしていることである。つまりガルダンのエルデニィン・エリへは、既にモンゴル文年代記伝統のボルジギン氏族の王統譜としての性格から、外藩王公全体を対象とした記述へと変質しているのである。

以上、清代に著されたモンゴル文年代記の記述内容中の清代部分を検討しつつ、その叙述の枠組みについて検討してきた。その結果、チンギス・ハーンの後裔としてのボルジギン氏族の歴史と歴代ハーンの事績を中心に述べる年代記は、オイラド系の諸盟旗の記述を対象とはせず、しかもザサグ旗側の年代記では八旗に編入されたボルジギン氏族の系譜も脱落させるものであった。この点で、八旗中のボルジギンであるロミのように、ザサグ旗王公の系譜と八旗内のボルジギン氏族の系譜を同時に視野に収める立場は、既にザサグ旗側の歴史記述者の採るところではなくなっていたのである。さらに 19 世紀も半ばになると、ハルハの年代記エルデニィン・エリへのように、王公範疇をもって記述の枠組みとし、八旗を落とす一方でオイラドを記述の対象として取り込むという事態が生じる。オイラドを、ボルジギン系王公と同等な叙述対象とするガルダンの記述は、モンゴル伝統のチンギス以来のボルジギン王統譜としての年代記の性格を変質させ、かつ『王公表伝』という清朝の系譜記述と、清朝が作り出した王公という身分的枠組みを受容したものと言えるであろう。

結　語

以上述べてきたように、清代の治下にあってモンゴル人は、ザサグ王公によって統治されるザサグ旗と、八旗属下の八旗蒙古及び内属蒙古に区分された。また

ネルチンスク条約の締結によって、ブリヤートはロシア帝国の属下に入った。ザサグ旗のモンゴル人は、王公によって統治されたが、清朝が導入した王公概念は、チンギス・ハンの子孫たるボルジギン氏族のみならず、ウリヤンハイ氏族や、オイラド系の氏族をも等しく含むものであった。これによって、少なくとも公式には清朝服属以前にモンゴルに存在した格式上の区別、すなわちチンギス系と諸弟系の区別や、ボルジギン氏とオイラド系異姓諸氏族の区別は相対化されたのである。清末、ハルハの王公が中心となって独立運動を起こした時、独立国家の範囲に包含されるべきものとして構想されたのは、まずはこのモンゴル王公が統治する諸旗であった。しかし独立運動がロシアの援助を頼んだことから、ロシア支配下のブリヤートの民族主義者がこれに関与することとなった。彼らは、パン・モンゴリストとして、内外モンゴルの統合を目指したが、これはハルハ王公の側の意思とは言い難いものがあった。一方八旗属下のモンゴルの内、チャハルやバルガ等の内属蒙古は、モンゴル高原の一角をしめる地理的な位置や、生活様式の類似等から、統合の対象とされたのである。

これら三部分の内、八旗属下に編入されたモンゴル人は、ロミのように、ボルジギン氏族としての出自を血統としては意識していた。しかしザサグ旗側の年代記記述からは、既に清代中期において、脱落していくのである。清末に独立運動が顕在化した時、八旗のモンゴル人が、既に来るべき独立モンゴルの成員として参加する道は、モンゴル人の側から閉ざされていくのであって、近代中国の歴史の中で、むしろ満洲族の中に融解しつつ、その漢化とともに民族としてのアイデンティティーを失っていくのである。

注

（1）ただし、この内西モンゴルは、必ずしも南北モンゴルと対等の概念ではない。モンゴル国のモンゴル人は北モンゴルと称されるが、この内オイラド系の諸集団が西モンゴルと呼ばれる。また南モンゴルと呼ばれる内モンゴル自治区にも、アラシャ盟に西モンゴル系住民が居住している。

（2）渡邊日日「民族の解釈学へのプロレゴメナ――セレンガ・ブリヤート、1996」『民族

の共存を求めて』(2)、北海道大学スラブ研究センター、札幌、1997年、pp.106-153。渡邊氏の調査に対するブリヤートの反応は、彼らの意識をよく表している。彼らには、ブリヤートとモンゴルを近縁の関係にあるとは考えても、自らをモンゴルの一部であると考える者が少ないようである。

(3) オノン・ウルグンゲ『わが少年時代のモンゴル』学生社、東京、1976年。とくにオーエン・ラティモアによる「日本語版への序文」は、ダグールの民族帰属意識の複雑な様相を次のように述べている。「彼ら(ダグール族)は他のモンゴル族とは別のものになりながら、あくまでもモンゴル人であり、たんにモンゴル人としての自覚をそなえているだけでなく、モンゴル人であることをこの上もない誇りとしているのである」(p.2)

(4) 新中国成立後、ダグールは民族として認定され、自らの希望でダグールを民族名としたという。高文徳『中国少数民族史大辞典』吉林教育出版社、1995年、p.735.

(5) モンゴルにおける近代の開始をどの時点に求めるかについては、ここでは1911年のボグド・ハーン政権成立をもって近代の始まりとして考えておく。

(6) 護　雅夫・岡田英弘編『中央ユーラシアの世界』民族の世界史4、山川出版社、東京、1990年、342～345頁。

(7) ジュンガルについては、宮脇淳子『最後の遊牧帝国:ジューンガル部の興亡』講談社、東京、1995年に詳しい。宮脇氏は、部族連合体としてのオイラドについて、モンゴル同様ネーションに近い意味合いで「オイラト民族」という言葉を用いている。オイラドをモンゴルの一部分として見るのではなく、モンゴルと同等の別集団として明確に位置づける氏の見解は正しいように思われる。

(8) 満洲の勃興過程を要領よくまとめたものとして、松浦茂『清の太祖ヌルハチ』中国歴史人物選第11巻、白帝社、1995年、石橋崇雄『大清帝国』講談社、1999年が挙げられる。

(9) 宗室王公とモンゴル王公の関係については、片岡一忠「朝賀規定からみた清朝と外藩・朝貢国の関係」『駒沢史学』第52号、1998年6月、240～263頁参照。また拙稿「清朝国家の性格とモンゴル王公」『史滴』16、1994年12月、54-58頁参照。

(10)『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻80、伝64、扎薩克多羅貝勒和碩理列伝。

(11) 清朝のザサグ旗においては、個々の旗において特定の氏族が王公タイジとして、貴族身分を与えられた。しかし同一旗内においては、他の旗で王公タイジの待遇を得てい

た氏族が存在しても、当該旗ではかかる待遇は与えられなかった。例えば、ハルハではダヤン・ハーン系のボルジギン氏族が王公タイジとなったが、一部にチンギス・ハンの弟ブフ・ビリグテイ系のタイジがいた。彼らはタイジとは認められたものの、一段格の低い所属タイジ qariyatu tayiji と呼ばれて、区別された。しかし内モンゴルのアバガ旗やアバハナル旗では、ビリグテイ系の王公がザサグとなっている。また、ハルハには、チョロス姓も分布しているが、これらには、ドルベドやオオルド諸旗におけるような王公タイジ待遇は与えられず、平民とされた。

(12) モンゴル革命におけるブリヤートの革命家の活躍については、二木博史「モンゴル人民革命党第一回大会とブリヤート人革命家たち」『一橋論叢』第 120 巻第 2 号、1998 年 8 月、34-50 頁等参照。

(13) 李[illegible]『外蒙政教制度考』中央研究院近代史研究所専刊、台北、1962 年、185～254 頁。

(14)『李守信自述』内蒙古文史資料第二十輯、1985 年、2-3 頁。これによると、李守信はジョスト盟トゥメド右旗出身のモンゴル人であるが、祖先は山東省済南府から同旗に移住した漢族であり、旗籍に入って「随蒙古」と呼ばれたという。

(15) Н. Магсаржав: Монгол улсын шинэ түүх. Monumenta Historica Tomus VII, Fasc. 1, Улаанбаатар, 1994. マグサルジャヴは、ボグド・ハーン政権が独立に際して合流を呼びかけたのは、「内モンゴルのジレム、ジョスト、ジョーオダ、シリンゴル、ウラーンチャヴ、イヘ・ジョー六盟、帰化城トゥメド左右翼、黒竜江のイヘ・ミャンガン・オオルド・ザサグ、アラシャ王、ダリガンガ、新旧バルガ諸旗総管等」であったと述べている。同書 11 頁。

(16) 汪炳明「清末新政与北部辺疆開発」馬汝[illegible]・馬大正編『清代辺疆開発研究』中国社会科学出版社、1990 年、63 頁。

(17) ダグール人をモンゴル民族の一部であるとする強い指向性は、例えば近代ダグールの革命家郭道甫（メルセー）や、モンゴル学者オノン・ウルグンゲに見いだすことができる。ただしダグールの場合もブリヤートがそうであったように、モンゴル側にダグールをモンゴル民族の一部とする認識が共有されているかは疑問である。

(18)『欽定外藩蒙古回部王公表伝』巻 30、伝 14、阿[illegible]科爾沁部総伝。

(19) 備指額[illegible]制度の対象となったのは、ホルチン、バーリン、ハラチン、ナイマン、オンニウド、トゥメド、アオハン、ハラチンの 13 旗である。趙雲田『清代蒙古政教制度』

中華書局、1989年、227～228頁。

(20) 渡邊日日前掲論文。

(21) モンゴル人はブリヤート人を裏切り者と考えているという渡邊日日論文中のブリヤート人インフォーマントの証言（115頁)。筆者も、モンゴルのブリヤート人をユダヤ人に例える発言を、同国のブリヤート人から聞いたことがある。

(22) Walther Heissig und Charles R. Bawden: Mongol Borǰigid oboγ-un teüke von Lomi (1732). Gottinger Asiatische Forschungen Band 9, Otto Harrassowitz, Wiesbaden, 1957.

(23) Гомбоджаб: Ганга-йин урусхал (История золотого рода владыки чингиса. Сочинение под названием Течение ганга. Издание текста, введение и указатель Л.С.Пучковского. Москва, 1960.

(24) čoyiǰi: γangγ-a-yin urusqal. öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, kökeqota, 1980. p.2-14

(25) čoyiǰi: altan kürdün mingγan kegesütü. öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, kökeqota, 1987. p.19-23.

(26) kökeöndür: bolur erike. öbür mongγul-un arad-un keblel-ün qoriy-a, kökeqota, 1985.

(27) γaldan: erdeni-yin erike kemekü teüke bolai. Monumenta historica Tomus III, Fasc. 1, Улаанбаатар, 1960.

チェチェン市民の社会的帰属意識

北川誠一

初めに

チェチェン共和国はソ連時代には、今日のイングーシ共和国とともにチェチェン・イングーシ自治ソヴィエト社会主義共和国を構成していた。現在国際法上はロシア連邦内の共和国であるが、主権国家であるイチュケリア・チェチェン共和国（Chechenskaja Respublika－Ichkerija）を宣言した1991年以来、独立を巡ってロシア連邦との間で紛争が続いている。1994年から1996年までの第１次チェチェン戦争の結果、チェチェン独立派は、国際的な承認は得られなかったものの、連邦政府からは事実上の独立を獲得した。３年にわたる対ロシア戦争を継続する事ができたのは、独立と国民統合を求める強力な国民的意志が働いたのであって、ドゥダイェフ大統領のカリスマ性にのみ記する事はできないであろう。しかし、1997年以降の状況をみると、グロズヌイ政府の統治能力は限定され、各地には様々な武装勢力が割拠し、あるいは中央政府の機構と地方勢力機関が拮抗していた。政府の統治能力の欠如は、1999年と2000年にまたがり、現在でも山間部で戦闘が継続している第２次チェチェン戦争の間接的原因であった。戦時における連帯にも拘わらず、チェチェン人が平和時に見せた混乱は、チェチェン人の社会は、国民意識などとは別の原理で行動しているのではないかという疑念を抱かさせる。

さて、帝政期にテレクTerek州グロズヌイGroznyj県であった今日のチェチェン共和国の領土は、ロシア革命後の1920年山岳共和国に含まれた。ボリシェヴィキの勝利後、革命委員会の支配下に置かれた後、山岳自治ソヴィエト社会主義共和国に編入された。1922年11月30日には、分離してチェチェン自治州が編成され、当時グロズヌイは州外であったが、ここに州政府が置かれ、1929年にはグロズヌイ市とグロズヌイ州、スンジェSunzhe・コサック区が編入された。1934年にはイングーシ自治州と合同してチェチェン・イングーシ自治州となった。行政の中心

はグロズヌイに置かれた。1936年12月5日には、チェチェン・イングーシュ自治共和国に格上げされたが、1944年２月23日の全チェチェン人、イングーシ人の強制移住にともない自治共和国は解散された。この状態は1957年1月9日の最高会議幹部会の布告によって旧住地帰還が承認され、さらに1957年1月11日ソ連邦最高会議幹部会はチェチェン＝イングーシ自治ソヴィエト社会主義共和国再設置に関する布告を発布した。新生の共和国は新たにスタヴロポリ辺区（クライ）から、カルギンスキーKargunskij、ショルコフスキーSholkovskij（ショルキSholki）、ナウルNaur3郡４千平方キロメートルの地域を得たが、これは、北オセチア、ダゲスタン、グルジアに残されたチェチェン人居住地域の代償として与えられたものであった（Bugaj,N.F.,i A.M.Gonov.*Kavkaz:Narody v Eshelonax(20−60−e gody*）,Moskva/Insan, 1998,str. 310-312；*Nezavismaja Gazeta*,Ot Shajkh Mansura do Generala Dudajeva, 12 Nojabr,1991）。

1990年11月23-25日に開催されたチェチェン国民議会 Chechenskij Natsional-nyj S`ezdは、チェチェン全民族協会 Obshshenatsional'nyj Kongress Chensko-go Narodaの指導者であったジョハル・ドゥダイェフDzhokhar Dudayevを執行委員会議長に選任し、ノフチ・チョ＝チェチェン共和国　Chechenkaja Respublika Nokhchi-Choの成立を宣言した。これと対抗関係にあった共和国最高ソヴィエトは、27日、チェチェン・イングーシ共和国が主権国家であることを宣言した。1991年７月12日、チェチェン全民族会議第２回大会は、ノフチ・チョ＝チェチェン共和国が、ソ連にもロシア連邦にも加わらないことを宣言した。この年8月モスクワでクーデタ未遂事件が生ずるが、グロズヌイではソ連共産党チェチェン・イングーシ党委員会、最高ソヴィエト、政府がクーデタ派を支持、チェチェン全民族会議は、これに抗議して、ソ連、ロシアからの離脱を求める運動をおこなった。９月４日、ドゥダイェフは最高ソヴィエトの解散を宣言、６日、ドゥダイェフ派の群集とチェチェン全民族会議の衛兵隊が最高ソヴィエト施設を占拠、ザヴガイェフDoku Zavgayev議長は退陣した。翌日、臨時ソヴィエトが組織された。これは選挙管理機関の機能を持っていた。しかし、翌17日、チェチェン全民族会議執行委員会は、臨時ソヴィエトを解体し、自らその機能を奪い、10月27日に大統領選挙を、11月27日に最高ソヴィエト選挙を実施することが決定した。この間、イングーシ人居住地域の中心ナズランNazranでは、９月15日、イングーシ地域選出の自治共

和国最高ソヴィエト議員集会が行われ、ナズラン地方はイングーシ共和国として分離し、独立は要求せずロシア連邦に所属する事を決定した。また、11月30日と12月1日両日にわたる国民投票でイングーシ共和国の樹立が承認され、1992年7月4日ロシア連邦最高ソヴィエトの布告によって法的にも承認された（ *Rossija-Chechnja:Tsep' oshibok i prestupleni*, Moskva,1998,str.23-35;Splidsboel-Hansen,Fleming. The 1991 Chechen Revolution:the response of Moscow,*Central Asian Survey*,,vol.13, Nos.3,1994,pp.395-407;Broxup,Marie Bennigsen.After the Putsch,1991,*The North Caucasus Barrier*, ed,Marie Bennidsen Broxup,London,1992, pp.221-240)。

この結果、チェチェン・イングーシ自治ソヴィエト社会主義共和国は、チェチェン共和国とイングーシ共和国に分離した。チェチェン・イングーシュ時代のグロズヌイ、グデルメスGudermes、マルゴベクMalgobek、ナズラン、アルグンArgunの4都市の内、分離独立により、マルゴベクとナズランはイングーシュ共和国に残された。新国境は1934年の合同前の境界にそって、アチホイ・マルタンAchkjoy-Martan、グロズヌイ、ナドテレチュヌイNadterechnyj、ナウル、ノジャイユルトNozhaj-Jurt、シャリShali、ショルキShelki、シャトイShatoj（ソヴェトスコエSovetskoje）,ウルス・マルタンUrs-Martan,ヴェデノVedenoがチェチェン領となりナズラン郡とスンジェ郡がイングーシ人に残された（Bennigsen Alexandre,Chantal Lemercier-Quelquejay,The Communist Party and the Sufi Tariqat, *Central Asian Journal*,vol.10,1991,133-145 ）。その結果チェチェン共和国は面積17,300平方キロメートル、12郡rajon、五都市からなることになった（Ajdaev,Ju.*Chechentsy:Istorija i sovermennost'*,Moskva,1996）。

今日ナウルとショルキの2郡（面積4,000平方キロメートル）が、テレク川の北に首都グロズヌイを含めた他の地域が南側（面積13,3000平方キロメートル）が置かれている。イングーシ人がまとまってして居住しているスンジェ郡の一部がチェチェン共和国所属となっているが、こチて、大統領側と議会の対立が激化、1993年3月には大統領は議会を解散、大統領直接統治制を導入した。大統領の暗殺未遂事件が起こった後、大統領側武装勢力は、次々と政府庁舎の占拠を行った。議会は大統領信任の国民投票の実施を議決したが、実行されずに終わった。このような状況下、ナドテレチュヌイ、ウルス=マルタンとアルグンに反大統領武装集団が形成された。ロシアでは1993年12月の新議会選挙後、新憲法が布告されたが、

これにはチェチェン共和国を領土であると明言していたので、ドゥダイェフ政府は1994年１月、国号をチェチェン・イチュケを巡って、大統領側と議会の対立が激化、1993年３月には大統領は議会を解散、大統領直接統治制を導入した。大統領の暗殺未遂事件が起こった後、大統領側武装勢力は、次々と政府庁舎の占拠を行った。議会は大統領信任の国民投票の実施を議決したが、実行されずに終わった。このような状況下、ナドテレチュヌイ、ウルス=マルタンとアルグンに反大統領武装集団が形成された。ロシアでは1993年12月の新議会選挙後、新憲法が布告されたが、これにはチェチェン共和国を領土であると明言していたので、ドゥダイェフ政府は1994年１月、国号をチェチェン・イチュケリア共和国と改称した。12月16日、反大統領派のウマル・アフトゥルハノフUmar Avturkhanovは、ナドテレチュヌイにチェチェン共和国臨時最高ソヴィエトを樹立した。1994年夏からは両者の間に小規模の戦闘が起こった。７月３日、臨時最高ソヴィエトは、チェチェン民族議会S`ezd Chechenskogo Narodaを招集、議会はソヴィエトに全権を与えた。これを受けてアフトルハノフは、ロシア大統領に臨時最高ソヴィエトをチェチェンにおける唯一の合法政府であるという承認を要請した。ドゥダイェフはアフタルハノフを売国奴と批判し、総動員令を発布し、一触即発の情勢になった。

アフトルハノフ派のグロズヌイ占拠の試みが失敗した後、12月ロシア軍は本格的介入を開始し、激しい無差別空爆の末、２月グロズヌイが占領され、戦闘は南部丘陵地帯に移った。アフトルハノフに替わって、ザヴガイェフが臨時政府の首班になり、12月には信任国民投票を行った。1996年４月22日ロシア連邦軍は南部丘陵地帯で転戦していたドゥダイェフをゲヒチューGekhi-Chu村で爆殺したが、独立派は副大統領ヤンダルビイェフZelimkhan Jandalbiyevが大統領に就任し、戦闘を続けた。８月独立派はグロズヌイを再占領、ロシア軍はキべての連邦軍はチェチェン領内から撤退した。1997年２月大統領選挙が行われ、マスハードフが選出された。マスハードフ新大統領はロシア政府と実質的権力委譲と法的承認のための様々な交渉を続けたが、地方は戦争当時の方面軍司令官や野戦軍司令官が割拠する状況になっていた。更にヤンダルビイェフ前大統領、ウドゥゴフ元外務大臣、さらに彼自身の副大統領アルサノフ等からなる反大統領派が形成され、武装集団やイスラーム過激派と結びついた。1999年にはいると両者の対立は先鋭化したが、対立の局面は国家制度のイスラーム化の度合いを巡るものであ９にヤンダルビイ

ェフ前大統領、ウドゥゴフMovladi Udugov元外務大臣、さらに彼自身の副大統領アルサノフVakha Arsanov等からなる反大統領派が形成され、武装集団やイスラーム過激派と結びついた。1999年にはいると両者の対立は先鋭化したが、対立の局面は国家制度のイスラーム化の度合いを巡るものであった。また、武装集団のダゲスタン各地に攻撃が相次ぐ一方、国内外で地元住民や外国人の誘拐事件が頻発した。このような中で、1999年秋のバサイェフShamil Basayevやハッターブ Khattabに率いられたチェチェン人武装集団のダゲスタン西部占領が切っ掛けとなって、ロシア連邦軍のチェチェン領内侵入が開始された。2月首都グロズヌイが占領されたが、このとき親ロシア政権を樹立したのはビスラン・ガンテミロフBislan Gantemirovであった。

このように複雑な政治的抗争の構図は、チェチェン人の国家・社会構想すなわち、自分をどのような国家、社会の一員とみなす立場に様々なものがあることを示している。ここでは1991年からの1999年にいたる政治状況にそって、チェチェン人の市民的アイデンティティーがどのように変化したかを、民族、地域、社会組織、宗教の側面から考察したい。

第１章　チェチェン国家の民族的アイデンティティー

第１節 ロシア系住民の移住

1989年センサスによるチェチェン・イングーシ自治ソヴィエト社会主義共和国の全人口は１,270,429人で、チェチェン人734,501人、イングーシ人163,711人ロシア人・ウクライナ人・ベラルース人からなるスラヴ系住民は308,985人である（Henze,P.B.,The Demography of the Caucasus according to 1989 Soviet Census Data,*Central Asian Sourvey*,vol.12,1991,pp.147-177）。分離前の都市人口率は40パーセント程度であったが、1991年以来の経済的政治的社会的混乱の結果人口は減少、特に戦争の結果都市人口率は激減した。

1995年12月17日、ロシアでは連邦議会選挙が実施された。チェチェンでは、連邦議会選挙と同時に共和国指導者ザヴガイェフの信任投票が実施されたが、ドゥダイェフ大統領派と連邦軍の戦闘が続く状況では、ザヴガイェフが信任されるかどうかより、投票そのものが成立するかどうかに議論が集中した。ジャーナリス

トのディミトリ・バルブロフDimitrij Balburovは、郡ごとに選挙実施の可能性を勘案し、選挙が実施されるであろう地域、選挙が実施されなであろう地域、両方の可能性のある地域に分けて図示した（図２）。選挙が実施されると予測された地域は、反ドゥダイェフ、親ロシアの臨時政府支配地域であったが、首都グロズヌイ、第２の都市グデルメス、西部のナドテレチュヌイ郡、グロズヌイの南のウルス・マルタン郡等が含まれている。

どちらの可能性もありとされた地域は先ず、テレク川の北のナウル、ショルキの２郡、およびテレク川の南のアチホイ・マルタン、シャリの２郡であった。

最後に選挙は成立しないと予測されたのは南部山岳地帯のヴェデノ、ノジャイユルト、ショトイなどの郡であった。この図と言語地図（図３）を重ねると有意味の一致が見られる。

言語地図によるとロシア人およびロシア語系住民はグロズヌイやグデルメスのような都市部に集中している。図１の２個所の選挙実施可能地域に当たる。図２では、やはり、グロズヌイとグデルメスを含む東西に細長い楕円形で現わされている。もう一つのロシア人人口分布地域はテレク川の北岸（左岸）である。この地域は、帝政時代グレベン・テレク両コサック軍団の村々（stantsija）が置かれていた地域であった。16世紀にコサックの二つの集団がテレク川の右岸にわたり、一隊はスンジェ山脈の東山麓に、もう一隊はテレク川デルタに定住した。前者はグルベン衆grubentsy、グルベン・コサックgrubenskije kossaki）、後者は、テレク衆tertsy、テレク・コサックterskije kossakiと呼ばれた。チェチェン人は金帳オルダの崩壊後南の丘陵から北の平野に下る傾向があったが、コサック集団とオコキokoki、シブツィshibtsy、ミチュキズィmichykizy等のチェチェン人はテレク川の右岸で衝突し、その結果、グレベン衆は1685年に、テレク衆は1712年にテレク川の右岸から左岸へ移動した。この結果、テレク川がロシア帝国の南の国境、コーカサス線を形成した。一方チェチェン人は1760年アルシトホイ（カラブラク）集団が、スタロ・ユルトStaro-Jurt市を建設した。グレベン衆とチェチェン人は通婚し、コサックはチェチェン人の文化を生活の中に取り入れた（*Narody Kavkaza*, I, Moskva, 1960, str.347; Gammer, M. *Muslim Resistance to the Tsar;Shamil and the Conquest of Chechenia and Daghestan*, London, 1994, p.1）。さらに18世紀半ばには、1,000家族のドン・コサックがグレベン衆とテレク衆の間にテレクセメイヌィterek

semejnyj集団を形成した。また、1770年にドン・コサックがモズドクを建設すると517家族のヴォルガ・コサックがモズドクとグレベン衆の間に入植し、モズドク軍団を形成したが、彼等は200家族のキリスト教に改修したクムイク人コサックによって補強された。（Baddley, J. *The Russian Conquest of the Caucasus*, London, Rep. 1999, p.14）これらがテレク川左岸のロシア人住民の起源である。

テレク川左岸のナウル、ショルキ両郡は1957年に始めてチェチェン・イングーシ共和国に編入されたものであるから、両郡のロシア系住民とテレク・コサック団は、両郡のチェチェン共和国からの分離を要求している（Tur'jalaj, Svetlana, V sertse Rossii vonzjattsja kop'ja mesti?, *Komsomolskaja Pravda*, 22 Jan., 2000）。またこれはチェチェン共和国の国境そのものに関わるものではないが、テレク軍団スタヴロポリ管区アタマン行政府（アタマン、ヴァスィーリ・ボンダレフVasilij Bondarevは、スタヴロポリ管区への編入を求めるナウル郡のコサックの誓願を受理した（*Izvestija*, 23 Feb., 2000）。

ソ連崩壊後の伝統回帰の風潮の中で、コサック軍団の伝統の回復が主張すれ団体が設立され、軍団の制服を着用する人々も現れた。実際に志願兵としてプリドニエステル、北オセティアなど旧ソ連各地の紛争に参加する若者が現れた。アブハジア内戦に際してはアブハジア・コサック軍団が再建されアブハジア側に加わっただけでなく、北コーカサスから個人的に志願する若者も存在した。アブハジアにおいて彼らはチェチェン人とともに戦ったのではあるが、北コーカサスにおいてコサック軍団を組織してチェチェン戦争に投入すべしであるという声は、イェリツィン政権の中からも起こった。モスクワも、1995年グルズノイの元共産党幹部ドク・ザヴガイェフの脆弱な傀儡政権の支持者を地元のコサックに見出そうとした。他方、コサック志願兵の戦闘能力を評価しない連邦軍は当然コサック部隊の編制に反対で、1995年３月クバン・コサックのアタマン、グリゴリー・ポグレブノイGrigorij Pogrebnojにコサック軍編成に反対する声明を出させた。案の定1996年３月に編成され戦線に投入されたコッサク志願兵のイェルローモフ部隊はほどなく200人の死傷者を出して撤退した。

第１次チェチェン戦争でのロシア軍の敗退にもかかわらず、1997年１月20-21日にスタヴロポリで開かれたコサック・アタマンの会議で、ロシア軍の中にコサック部隊を編制してチェチェンに送り、北チェチェンのコサック地域に展開して、

ロシア系住民を保護し、この地域をチェチェンから分離すべきであるという主張がなされた。テレク・コサックの代表の１人であった ヴィクトル・ザイツェフ Viktor Zaitsevも、テレク川左岸の損失を承認しない決意を表明した。ドゥーマに提出されたコサック部隊編制に関する法案が提案されたが、現地に派遣されたボリス・ベレゾフスキーBoris Belezobskjは彼らの再武装化を支持する意見を表明した。

テレク・コサックに軍団編成の意見が強いのは、チェチェン内部のコサックの窮状とも関係がある。1994年３月テレク川左岸のナウル郡のロシア系住民は、チェチェン人の犯罪行為は、チェチェン人当局に見逃されていることを訴えた。ドゥダエフ政権は、1994年の夏ドン・コサックのアタマン、ニコライ・コズィツィンNikolaj Kozytsynと協定を結び、ドゥダエフはチェチェン領内のコサックを保護し、ドン・コサックはチェチェン共和国に対する敵対分子の通過を阻止する約束を取り結んだ。しかし、ドゥダエフはチェチェン人の犯罪・不良分子のロシア系住民に対する不法行為を阻止することはできなかった。同年12月までに、５分の２（１万８千人）のロシア系住民が移住したという。

先に述べたように、古くからのコサックの土地にチェチェン人が移住したのは、1957年の帰還以後であり、特に60-70年代の（民族）融合政策により、山地から多くのチェチェン人とイングーシ人との左岸への移住し、その一方コサックのチェチェン領土外への移住により、テレク川以北のナウル郡とショルキ郡では、チェチェン人々口の増加が顕著となった。1997年２月の段階でテレク川左岸におけるコサックの中心地はナウルとショルクヴォドスコエであった。ナウル郡では1991年にロシア形住民は５万人を数え過半数を占めていたが、1997年には１万人程に減少し、チェチェン人の人口がロシア人々口を凌駕するに至った（*NG*, Ot sheikha Mansura do Generala Dudajeva,13 November,1991,；Mashtakova,G., *Moscow News*, Cossaks Spell Torubles for Chechenha's Russians, 6-12 Feburary, 1997）。1991年以降チェチェン共和国全体において人口が大規模に減少した。1989年に1、270、000人を数えた人口は、1998年の推計で50万人ほど、ロシア人は5万人までに減少している。特にグロズヌイでは国民革命が起こった1991年、市民の約半数はロシア人であった。３年後にはその３分の２が去り、残っているのは個人的にチェチェン社会と関わりののある人々か、行き場のない年金生活者だけ

であった。爆撃で殺された市民の大半はロシア人でその多くは年金生活者であった（Gakaev,Dzh.,Rossija-Chechnja: Est'li vykhod?, *NG-Stsenarij*,No.7,1998; Leiven,45, 46）。

このようにして、1995年にはまだ一定の政治的意味を持っていたチェチェンのロシア人は、第二次チェチェン戦争までにはマイノリティーと言うよりはむしろ消滅しつつある存在のように見えた。テレク川左岸の状況は簡単ではない。ロシア連邦軍の武力による支配の下で、チェチェン人はロシア系住民に対してテレク左岸を放棄し、よりチェチェン的な国家を樹立するか、左岸とロシア系住民を残した多民族的原則に基づいた国家を持つかの選択を求められているといってようであろう。

第２節　ノガイ人問題

チェチェン、ダゲスタン、スタヴロポリにまたがる低い丘陵地帯は、ノガイ・ステップと呼ばれ、主として牧畜に従事するノガイ人の居住地である。アチクラクAchkurak,ビヤシBijash、カラテュベKara-Tjubeカヤスラ Kajasula等60程のアウルが彼らの郷里である。ロシア帝国とソ連の時代にノガイ人は、スタヴロポリ県、テレク州、キズラル管区、ウラディカフカース地方、グロズヌイ州を経て、１９５７年からは、ノガイ、キズリャルKizkjal、タルモフTarumovの３郡がダゲスタンへ、ショルコフスキー郡がチェチェン＝イングーシに、ネフチクム郡がスタヴロポリ地方に分割された。ロシア革命後ロシア連邦の内部にノガイ人とカルムイク人とのノガイ＝カルムイク自治ソヴィエト社会主義共和国を建設する主張があったが実現しなかった。しかし、ノガイ人はスタヴロポリ辺区のキズリャル管区okrugでは、主要民族の立場にあり、事実上民族自治区であった。ここは広大な牧地と多数の家畜を持ち、カスピ海への出口、産油地であったのでスタブロポリ地方とダゲスタンの係争地となった。1922年、当時ダゲスタンに含まれたノガイ人に対してダゲスタン政府は広範な自治（アジャリア的）を与える事を約束したが実現しなかった。ノガイ人民族主義者は、チェチェン共和国、ダゲスタン共和国、スタヴリポリ地方のノガイ人居住区を合わせたノガイ共和国の要求を持っている。民族統合の問題は、第２回（1988年）第３回（1990年）、第４回（1992年）の民族大会の主要議題になった。第３回大会ではロシア連邦内部にノガイ共和国を建

国するプランが採択されたが、ロシア政府からの反応はなかった。

チェチェン共和国では、6,884人のノガイ人がテレク左岸東部のショルキ郡にすむが、特にダゲスタンの国境に接した北東部に集中する。1994年のチェチェン＝イングーシ自治ソヴィエト社会主義共和国解散とグロズヌイ州oblast'樹立、1957年にはノガイ草原は三分されカラノガイ、キズリャル、クライノフスキー諸郡はダゲスタンに、カヤスリンスキーKajasulinskij郡とアチクラクスキーAchikulakskij郡がスタブロポリに、ショルコフスィー郡がチェチェン＝イングーシュに分割された。1989年人口数は、1万2人に増加したたが、2000年2月現在、半数がスタヴロポリとダゲスタンに避難している。一般的に経済的混乱、加えて社会的すなわちチェチェン人犯罪集団の活動に対するドゥダイェフ、マスハドフ政府の無能力がその原因であると主張されている。チェチェン共和国側ではドゥダイェフ大統領はロシア政府がノガイ問題をチェチェン共和国に対する牽制に用いる可能性を見て、逆にノガイ問題の解決を約束した。ノガイ人の社会・政治組織「統一Birlik」は、トルコ系民族協会Assanbl' Tjurksikikh Narodovに参加し、支持を獲得した。また1992年の大会ではアゼルバイジャン政府代表が主張を支持した(Stern,L.,Mezhdu Checehnej i Rossiej,*NG*,5 Nojabr 1992;Bondarenko,Marina,Nogaiskij narod ne mozhet smirit'tsja c oshshushsheniem istroichekogo tupika,*NG*,11 Fevral'.,2000;Gadzhieva,S.Sh.,*Material'naja kul'tura nogajtsev v XIX–nachale XX v.*,M.1976,ctr.7)。ノガイ人々口は、ロシア人よりも更に少数であるが、同じくスタヴロポリ辺区との国境に接して居住するグルジア人、グエデルメスの東に集中するダゲスタン人とともにチェチェン共和国が近代国家であるための試金石となるであろう。

第3節　イングーシ人の分離

かって、ソ連時代チェチェン人はイングーシュ人と単一のチェチェン・イングーシュ自治ソヴィエト社会主義共和国に所属させられ、チェチェン・イングーシュ語が国語であるとされた。しかし、1992年チェチェン人はイングーシュ人を除外して旧チェチェン・イングーシュ自治ソヴィエト社会主義共和国から分離してチェチェン共和国を樹立した。チェチェン人とイングーシュ人を別個の民族であると認識したのであるが、これには留保点が必要である。チェチェン語はイング

ーシュ語や言語学的に両者の中間にあるバツビ語などと共に北コーカサス語族の北東（チェチェン・ダゲスタン）語群のヴァイナフVainakh語グループに属している。これは単に学術語であるだけでなく、チェチェン人とイングーシュ人（自称およびチェチェン語の呼称はガルガイGlalglaj）に共通の民族的枠組みを示す呼称で、彼らにとってヴァイナフ即ち「我々の人々」は、近縁だが、単一の国家を持つほどではない関係にまで広がっているのである。チェチェン人とイングーシ人が兄弟民族であるというのは、少なくともソ連時代において公認の関係であった。イングーシ共和国のロシア国会議員バシル・コヅォイェフBashir Kodzojevは、

（チェチェン）共和国のあらゆる人々を服従させた野戦隊長たちの専制は、イングーシュに及んだ。彼らの強盗行為と誘拐のためにイングーシュの住民は他の北コーカサスやスタヴロポリ同様に苦しんだ。それでもヴァイナフ民族は兄弟であり続けた。イングーシュ国は今でも、北オセティアから流入する自民族の難民に窮屈な思いをしているにもかかわらず、そのような怒りを越えて、故郷を後にせざるを得ない、数千の難民に避難所を提供している。（Kodzojev,Bashir.Sud'ba vajnakhov,*NG*,23 Fevral',2000）

この言葉が全く公式の挨拶であるにしろ、チェチェン人のイングーシ人感は、しばしば対極的でさえある。リーヴェンは、（Lieven,A.Chechnya-Tombstone of Russian Power,New Haven and London,1993,p.348）

私は典型的な言葉をチェチェン人の老人と若者の戦士から聞いた。私はチェチェン人とイングーシ人の関係を訪ねたのである。老人は標準的で公式の２民族はロシアによって分断された兄弟であると答えた。若者はチェチェン語の悪口で話し始め、非難するようにロシア語で結んだ。勿論我々は関係があるが、ライオンとハイエナの様にだ。

チェチェン人独立派の人々は、イングーシ人が独立を求めずロシア連邦の共和国の地位に甘んじることに不満を持っていた。この若者がイングーシ人をハイエナと罵ったのは。この理由によるかもしれない。さらにまた、チェチェン人のイングーシ人に対する反感には、18世紀から20世紀にかけておこされたロシアに対する反乱に対する評価も関わっている。バシール・コヅォイェフ議員は続けて、

「ヴァイナフ民族のロシアに対する400年間の闘争」は、和解できないというのはプロパガンダ以外の何者でもない。実際は16世紀にテレク地方に最初

のコサック集団が来てから、丁度第一次コーカサス戦争まで、ロシアに対していくつかの山地のテイプが自分の存在をかけて特に山賊として抵抗を行ったが、大部分のヴァイナフ人は新しい移民と良好な関係を続けていた。

いずれにしろ、文化的にも言 語的にも非常に近く、共通のヴァイナフという名称の２集団は別々の国家、１つは独立国家、他の１つはロシア連邦構成国家を形成する道を選んだのである。

第２章 地域的・部族的・氏族的アイデンテティー

第１節 地域的アイデンティティー

先に言及した選挙が成立すると判断された地域の一つウルス・マルタン郡は、反ドゥダイェフ派の武装集団を率いるかってのグロズヌイ市長ビスラン・ガンテミロフの地盤であった。当時グロズヌイの武装警官の大部分はウルス＝マルタン出身、すなわちガンテミロフ派の人間であった。ガンテミロフは反ドゥダイェフ派臨時政府軍の司令官であり、ザヴガイェフ政権には閣僚として参加することになる。一方、東部の小都市アルグンは、一時ドゥダイェフのボディーガードの長であったが、個人的理由で袂を分かったルスラン・ラバザノフRuslan Labazanovの根拠地であった。また、テレク左岸のナドテレチュヌイは、臨時政府の長ザヴガイェフの堅固な地盤であり、同じく左岸のショルキ郡トルストイ＝ユルトは、元ロシア連邦議会副議長で、反独立派のルスラン・ハスブラトフの家族の居住地であった。

1995年の選挙に及んで、親ロシア派が平野部、ドゥダイェフが山地部に強いという傾向を図式的に説明したが、1997年1月の大統領選挙では、マスハドフ、ヤンダルビエフ、バサエフ、ウドゥゴフ等の候補者のなかで、マスハドフが64.8パーセントの得票を得て当選した（バサエフ22.7パーセント、ヤンダルビエフ10.2パーセント）。マスハドフはドゥダイェフ政府の軍事的責任者ではあったが、出身地は低地のナドテレチェノイェ郡の出身であった。このためイスラム的な国家を求める農村部と近代的世俗的秩序を求める都市部の均衡を取る（Lieven,op.cit. p.145）政策が選挙民の支持を得たと言う評価がなされた。このようにチェチェン政治において、地域は一定の意味を持っていると考えることができる。

チェチェン共和国の領域はテレク川により南北に分けられ、テレク川の右岸は支流スンジェ川によって、北西部とそれ以外の地域に分かれる。テレク川の北は乾燥した平原であり、テレクとスンジェの南は丘陵から次第に急峻な大コーカサスの山岳地帯となる。また、テレク本流とスンジェの間にもテレクおよびスンジェの２列の山脈が東西に走る。伝統的にはスンジェ川の支流でチェチェン南部を東西に隔てるアルグン川によって東の大チェチェンBol`shaja Chechnjaと西の小チェチェンMalaja Chechnjaに区分されていた。チェチェン人は、自らの国土をノフチモフクNokhchimokhk、山地ランモフクLammokhk、内部チェチェンCh`o、テレク川沿岸Terk-jisteに区分したが、後に全住民を山地民lamrojと平地民okh`arah akhに区分し、平地の人々だけを特にノフチと呼ぶこともあった。

ソヴィエト時代の研究は、18世紀にチェチェン人とイングーシュ人の居住分布地が大きく変わったことを強調する。既に17世紀までにイングーシ人はテレク渓谷にアングシュトAngusht村をもっていたが、18世紀60-80年代にカンビレフカ川Kambiljevka両岸およびアチャルクAchaluk川に沿って多数の集落を持っていた（小イングーシュティア、大イングーシェティア）を持ち、スンジェ川流域にナズランとエンデリプスEnderipsuの基礎を置いていたが、チェチェン人も、チェチェン村とその周囲にハジ・アリア・アウルKhazhi-Alia-aul,アスタウンクルAsta unkul,ジャタガZhataga,シフケレイShikhkerej,スルSur`,ハシュバット＝アウルKhashbat-aul,バシェムバハ＝アウルBashem Bakha-aul,アルダAldaなどの集落をもっていた。18世紀末、スンジェ川とゲヒ川の間は稠密な定住人口を持っていた。また18世紀の半ば以前にはイチュケリ地方カラブラキ地方、アッキAkki地方の人々はグデルメスの南、グムスGums川北岸の山地であるカチカリクKachkalyk山地の北の平地方面に進み、アクサイAksaj、ヤマンスーJamansu、ヤルィクスーjaryik -su、アクタシュAktashの中流に定住した。最も北はグデルメスの東であるクムイク人の住む平原であった。スンジェ川との合流点より上流のテレク川では40年代より以前に始まり、最初の集落はデウレットギレイスコイェDevletgirjejevskoj e（スタルイ・ユルトStaryj Jurt）であった。70-90年代にはブラウンスカヤ・デレヴニヤBraunskaja derevnja から上ナウルまで約10個所に大きな集落があった（*Istorija Narodov Severnogo Kavkaza*, Moskva, 1988, t.1, str.371-2）。

カフカース戦争の時も親ロシア的（あるいは反シャミール的）住民はテレク左

岸やズナメンスコエZnamenskojeへ移住したという（Lieven,op.cit.str.79,414n.）主張がなされる。19世紀にもナドテレチュヌイの上ナウル住民の大部分は土地不足によって、山地から移住。ザンダクZandak村の人々は上ナウルより少々上流のエマソリEmasoliに移住した。シャロ＝アルグン川上流のシカロイShikarojテイプの人々も上ナウルの下村に移住した。カラブラキ人がロシアの支配を逃れてトルコへ移住すると上流にいたメルヒスト部族、マイスト部族がマルタン川中流のアルシュトゥイArshty、バムトBamut、ガズィ・ユルトGazy Jurt、カトゥィ・ユルトKaty Jurtに移住した（Anchabadze,Ju.D.,Volkova H.G.,*Narody Kavkaza*,Kn.1,Moskva,1993,str.175）

チェチェン社会における低地民と山地民の違いは、この2､3世紀間の移住によるものであるが、両者の間には、生活様式や対ロシア感のはっきりとした違いをみることができる。両者の間には社会意識の相違と、お互いの違和感があると言われる。チェチェンの国名に取り入れられているイチュケリという地名は、元来現在のチェチェン共和国の領域のうち山部にかかわる地名であるが、国名をチェチェン・イチュケリア共和国としたのは、平地民に対する山地民の勝利を強調（談Vakhit Akajev,Rotar',l.,Tejpovo-virdovye,*MN*,11 Djekavr',1996）という主張が有るが、1991年の革命にあっても、ドゥダイェフの全チェチェン民族評議会とヴァイナフ民主党の側には、農村住民の相当部分とグロズヌイの急進派があり、一方に、アフメドおよびイリヤス・アルサノフ兄弟の「チェチェン－イングシュ単一運動があって、知識人、平地チェチェンの農村住民の一部、党・政府機関関係者が支持していた。マスハドフが大統領に選出されたのは、イチケリアと北の平野を統合できる人物であると期待されたからであるという評価もなされる（Shermatova,S.,Prerenders to the Chechen Throne,*MN*, 19-25 December,1996）。意識された地域差は、さらに部族と氏族に対する帰属意識と結びついて、チェチェン人の政治行動において、一層具体的意味を持つことになる。

第２節 部族的氏族的アイデンティティー

チェチェン政治の描写の特徴として政治的指導者の成功や軍人としての力量があたかも彼らの所属する集団に帰属するかのような記述が見られることが指摘できよう。ドゥダイェフ大統領の護衛隊は隊長ただ一人を除いて、ドゥダイェフの

出身氏族であるとか（Lieven,op.cit,p.30）またチェチェンではベノイBenoiとゲンデルグノイGendergnoiが巨大氏族で、それぞれ数十万の構成員を持ち、グノイGunoi,チェベルロイCheberloi,ヴァランドイVarandoiなどの小さい諸氏族を圧倒しているなどという表現である（ Balburov,D., Chechen Elections;the Tajik Variant,*MN*,7-13 July,1995）。また,ドゥダエフは1994年、ヤンダルビエフ以外の味方を失うと氏族、部族の長老を召集して政治的基盤を再構築しようと（Lieven,op.cit.,79）とも言われた。出身地域による対立や縁故主義は、どの社会にも見られるが、チェチェンの場合チェチェン民族の成り立ちそのものに関わる問題が控えている。

チェチェン人の伝統的見解によると彼らは幾つかの部族（トフムTokkhum,Tokhum）に別れていた。マムカイェフによると19世紀中葉世紀今日のチェチェン各地は、以下9個のトフムが存在していた（Mamkajev,M.*Chchenskij tajp v period ego razlozhenija,* Groznyj,1973,st.r15-28, cited, Ajdaev,185）。この九つのトフムはチェチェン国旗の９本の線によって象徴されている。

アッキAkkija,A'kkhij

ミャルヒMjalkhij, Ma`lkhij

ノフチマクハホイNokhchmakhkakhoj,Nokhchmakhkakhoj

テルロイTerloj、Tlerloj

チャンティChantij、CHla`itij

チェバルロイChebarloj,Chlebarloj

シャロイSharoj,Sharoj

シャトイShotoj,Shauotoj

エルシュトホイErshtkhojあるいはアルシュトホイArshtkhoj

又はオルシュトホイ（母音は転写のシステムによっては異なる）

トフムは多数の氏族や拡大家族の連合によって形成される政治的経済的組織であり、血縁系譜関係とは関係が無い。所属の氏族が生業をおこなう一円的地域独自の方言を使用していた。氏族とは異なり、政治的首長や軍事的指揮者は持たなかった。協議機関としては、氏族の長老は必要のあるときにだけ開かれる長老

会議mekhkan kkhelには、イスラーム化以前には固有宗教の祭司が出席した。トフム内部の即ち氏族間の問題を解決しただけでなく、戦争や和平を締結にあたる。しかし、トフムの中には、チャンティ、テルロイのような血縁的につながりのあるあるテイプから組織されている団体があり、更にトフムに属していない氏族もあった。

しかし、このチェチェン人を構成する9個のトフムはチェチェン人社会の均等な一部分であるとは言えない。ヴォルコヴァは次の様に述べる（Volkova,op.cit., str.164）。

> 現在ヴァウナフ種族共同体は、ノフチ、ガルガイ、オルストホイ、アッキの4種族からなるが、自分たちの間では、またヴァイナフ人達の意見では、全く異なっているのである。

オルストホイ、別名カラブラキKarabulaki、チェチェン西部フォルタンガFortanga川と支流、アサAssa川下流、スンジェ川下流の一部に居住するが、18世紀60年代までは、山地に居住していた。彼らの多くは19世紀60年代ロシアの支配を嫌ってオスマン領内へ移住した。今日彼らはチェチェンとイングーシの全域に住むが特にチェチェンのアチュホイ＝マルタン、イングーシのスンジェ郡、ナズラン郡に分布している。民族籍、国籍は居住地によるものが多い（Ajdajev,op.cit., str.208-209）。最も興味ある事実は、ドゥダイェフ大統領自身が、この集団の一人であることである。

アッキ人は古くから周辺民族の記録に現れる集団でロシア語文献に見えたオコキも彼らを指すと考えられる。現在彼らは、主としてダゲスタンの北西部ハサブユルトKhasab Jurt、ババユルトBaba Jurt、ノヴォラクNovolak,カズベクKazbek等の諸郡に7万人ほどが住み、かなりの人数がチェチェンとイングーシ各地に分散している（ibid.,str.191-208）。旧チェチェン＝イングーシュの一部が、ダゲスタンに取り残されたときアッキ集団は、その他のヴァイナフ集団と分断された。このためチェチェンへの再統合運動や新しい移住者であるラキ人との衝突も生じている。特に、ハサブ＝ユルトに対しては、第2次チェチェン戦争までチェチェン人武装勢力による攻撃が頻発していた。また、アッキ人の問題をダゲスタンの一部のチェチェンへの割譲という狭い視野からではなく、イスラーム国家としてのチェチェンとダゲスタンの統合をめざす「チェチェン・ダゲスタン民族会議」

の運動も注目されなければならない。しかも複雑なことに9トフムの中には、マイストイやマルヒストのように祖先はグルジア人で、純粋のノフチョとはみさなれていない集団も含まれている。

第3節　チェチェン政治の氏族的性格

19世紀以来、地縁団体に過ぎないトフムは社会的政治的意味を失った。しばしば、トフムが血縁団体であるテイプの上の組織であるのか、下部の組織であるのかという疑問がだされることがそれを物語っている。またチェチェン人政治家や野戦軍指揮官の出自が主張されるとき、両者は区別されずにあるいは混同して使用されることも多い。

ジャーナリストのリーヴェン（Leiven,op.cit.,p.336）が、1994年8月に入手したテイプ政治に関する連邦保安委員会レポートは、1991年の革命は、ザヴガイェフの指導下に党と政府の機構を独占していたテレフスコイTjerekhskoye氏族を排除する目的であったと主張されている。反対派はチェチェンに住んだことがなく、弱小の氏族の一員であったドゥダイェフを名目的指導者祭り上げて団結したというのであるである。ドゥダエフが没落した原因も彼がミヤルヒMjalkhiと組んで政府と石油を支配しようとしたからであるという（Lieven,op.cit.,pp.336-337）。しかし、このレポートには若干の注釈が必要である。ザヴガエフは、1940年ナドテレチュヌイのベノイ・ユルトBenoi Jurt生まれであるが（Balburov,D.,Chechen opposition leaders make strange bedfellows,*MN*,9-15 Sept.,1994）、ベノイ・テイプは、ノフチ・マフハカホイ・トフムに属する。先に述べたようにドゥダイェフ自身はエルストホイであり、エルストホイとミアルヒは、非ノフチョ系の特殊なトフムであった。党と政府および石油の権益を握っていたとされるテレフスコイというトフム名は上に上げた9個のトフム中になく、またアイダイェフやヴォルコヴァのテイプのリストには見えないが、リーヴェンが「この集団の要素は、シャミールと縁を切るために山地からやって来た全く異なった諸テイプのメンバーであった」と述べているのであるから、トフムでもテイプでもなく、（低地の）テレク地方の人々という意味であろう。

チェチェン共和国のイスラーム教最高のポストにあったムフティーの職にあるカドゥィロフは、ツエントロイTsenterojテイプ（Gerasimenko,S.,A samyj stra

shnyj chasv boju,*Kom. Pr.*,19 Dekabr',1999)。ノフチモフク・トフムである。カディーロフはドゥダイェフ流の政治的イスラームや原理主義に反対し、長くマスハドフ大統領を支持してきたが、大統領がチェチェンにイスラーム法を実施する宣言をするの及んで、袂を分かった。2000年の初めの段階では、カドゥィロフはロシア軍によって、占領グデルメスに住んでモスクワとの交渉を続け、親族のヤマダイェフの武力に守られている。1998年の夏にワッハーブ派からグデルメスを奪還したスリム・ヤマダイェフSulim Jamadajev国家防衛隊Natsional'maja gvardija副隊長(1963年生まれ)である。

アスラン・マスハドフはカザフスタン生まれ(1951年)であるが、1957年ナドテレチュヌイ郡Zebir Jurt村の両親の家に帰り少年時代を過ごす。1994年ごろより、同郷の人々をロシア側に裏切ったと非難していたが、(Balburov,D.,Aslan Maskhadov:Rival to Dudahev,*MN*, 15-21 September,1995)大統領就任後は自分のアレロイ・テイプAlleroiテイプ(保安大臣Turpal-Ali Atgareijev)やベノイを重用したと非難された(Balburov,D.,ShariaTrailfor Maskhadov,*MN*, 7-13 April,1999)。アリロイAlirpj,lalirojも、ノフチマフハホイ・トフムに属する。彼の妻のテイプは、同じトフムのゴルダロイGordalojでこれはサルマン・ラドゥェフと同じテイプである(Krutikov,E.,OdinokijVolk.*Izvestija*,13,Nojabrja,1999)。アリロイは、ノフチムフク・トフムの名門で、最も分離主義的であると言われた。本来の出身はダゲスタン国境のザンダクZandakである。

ヴァハ・アルサノフ は、1997年の選挙後、副大統領に就任したが、後反マスハドフ大統領に廻り、解任された人物であるが、彼が政治と経済に実権を振るうことができたのは彼が強力なチェベルロイCheberloj族の出身であって、同族が要職について彼を支持(Shermatova,S.Is Basayaev Returning to Politics,,*MN*, 9-15 October,1997と言われるが、これも先に述べたようにテイプではなくトフムである。(ibid.)。グロズヌイのスタロプロムイシュロフスキ、モルソホーズMolsovkhoz、ドリンスクDolonskにはチェベルロイが集中(Balburov,D.,A Family Business,*MN*,15-21 May,1997)している。

ジャーナリストのバルブーロフは、チェチェン政治における氏族的要素の重要性を評価した上で、氏族の長達は停戦をもたらし、民族和平を実現することができるかもしれないが、ヴァイナフの氏族間の関係に何も問題がなかった訳ではな

い。制止、均衡、復讐。しかしドゥダイェフ自身が公然とその一つを「奴隷と臆病者の氏族」と呼んでいることは、氏族間の対立を引き起こす可能性を指摘する。(Balburov,D.,Chechen Elections:the Tajik Variant,*MN*, 7-13 July,1995)。しかし、同じくジャーナリストのリーヴェンは逆にテイプの過大評価に反対し、以下の三点を指摘した。

①長期間にわたりテイプに対する忠誠心は、結婚、他のテイプとの地縁的関係、トフム、ヴィルド、イスラーム教徒意識によって挑戦されている。

②ソヴィエト支配、特に追放によってテイプ制度は次第に弱体化した。

③ソヴィエト時代に教育された人々は、近代的なナショナリズムの思想を抱いている。 p.338

今日のチェチェン人が100年前のチェチェン人でないことはもちろんであるが、チェチェン人が中央アジアとカザフタンへの追放時代をたえることができたのは、テイプが存在したからであるという主張や1990年代の社会的経済的混乱の中でのテイプの有効性の主張もなされている。重要なことはチェチェン人の社会全体に均等にトフムやテイプが存在することはないであろうし、テイプ自体よりもその下部の拡大家族(gar)の重要性が高まっていることも指摘されている。何よりも幾つかの複合的要素がチェチェン人の社会を動かしているのである。

このような状況を反映して、部族制度を基盤に政治制度を再建しようとする意見が生まれる。アクブラトフは、1942年シャトイ生まれ、1944年にカザフスタン北部へ追放、レニングラード大学卒業後帰国、1993-4年には対ロシア交渉使節団員を勤めた人物である。彼は、トフム会議mekhk kkhelの法制化を主張、最高議決機関は、各テイプの代表者会議で選ぶ各9トフムが一人の代表を選出、新しい国家体制を採用して現在の大統領、議会、内閣、省庁制の廃止するという提言を行った。未来は人間本来の権利に基ずくテイプによらなければならないのである(Akbulatov,Aslambek,Chechnju spasahet obrashshenije k traditsijam-Jevropejskije instituty vlasti nje vpisalis' v Bainakhskij mentalitet,NG,10.10.98)。このような主張は他の人物によってもなされている。カフカス共通市場社々社長のホジュアフマド・ヌハイェフKhodzh-Akhmadk Nukhajev氏も地元の『グッルズネンスキー・ラボーチー』紙に「チェチェン=イチェケリア共和国権力機構の基本的組織について」という論文を寄稿した。まずテイプの長の集会を行い、

国民投票によりこれを最高権力機関メフク・クメルとする。第１回メフク・クメルが国民に最高機関とする事を呼びかけ、議長を選出する。９トフムの間の公平を帰するために、議長はトフムの間の輪番性とする。大統領（Eli Da）は執行機関の長である。大統領は９トフムの長の中から選ばれた２名の候補者の直接秘密投票によって、メフク・クメルで選ばれる。任期９年。大統領はメフク・クメルに直接責任を持つものとし、大統領はメフク・クメルにおいて国民に対する誠実をコーランにかけて誓ってから権能を有する、大統領はメフク・クメルの承認を得て首相を任命。首相は国軍最高指令官であって、メフク・クメルによってのみ法律違反の場合召還される。憲法はコーランの法的・道徳的基準に基づかれていなければならない。民族的少数派も代表を送ることができる。立法機関であるロル・イスLor Ishは、メフク・クメルによって承認された、９人の各トフムの代表者から構成される。ロル・イスを構成するロル・ダLor Daは、法の規定によって、あらかじめメフク・クメルの決定があるときのみ召還することができる。法執行機関ユスト・イスは、メフル・クメルの承認を受けて、９トフムから選ばれる。ユスト・イスJust Isは、共和国の最高裁判所であり、憲法裁判所でもある。裁判官ユスト・ダJust Daは、法の規定によって、あらかじめメフル・クメルの決定があるときのみ召還される（ Nikolajev,Valerij.Srochnaja model' gosudarstva, *NG*,2 Feb.,1993）。ここでもチェチェン人の社会がトフムとテイプに二重構造に分節された社会であり、更に９のトフムに属さない人々は民族的マイノリティーとみなされている。完全な世俗国家でなはいが、イスラームはシンボルに留まっている。立法および司法機関が、イスラーム聖職者によって行われるという規定がないからである。

第３章　世俗主義からイスラーム原理主義へ

第１節 政治的イスラーム

ソ連においてチェチェン＝イングーシとダゲスタンでは、コーカサスの他の地域や中央アジアに比較して、イスラム信仰の度合いが大きかったことが知られていた。1973年にマカトフA.Makatovが実施したチェチェン＝イングーシ全体の調査によると、チェチェン人の52.9、イングーシ人の43、ロシア人の11.9パーセント

が信者であり、ロシア人の69.1,イングーシ人の29.8、チェチェン人の21.5パーセントが無心論者であり,その信仰の深さは、1971年に農村部で実施された調査によるとチェチェン＝イングーシの農村部では、39.3パーセントが信念による信者、54.7パーセントが習慣による信者、６パーセントが別の理由による信者であった（Bennigsen,Alexande et Chantal Lemercier-Quelquejay, *Le soufi et le commissaire*, Paris,1985,pp.58-59）。

1991年から2000年までの10年間に、チェチェン共和国のチェチェン人が、特にイスラームに関して、自分をどのような社会の一員とみなそうとしてきたかは、急速に変化してきたドゥダイェフ、ヤンダルビイェフ、マスハドフ３代の大統領統治下のグロズヌイ政府の政策によって観察する事ができる。1962年以来ソ連軍に勤務し、1987年から1990年までエストニアのタルトゥスの重爆撃部隊の隊長で、少将で退役したジョハル・ドゥダイェフは最初民族主義者として政治的舞台に登場したが、彼の民族主義の中にはイスラーム教も含まれていた。政治学者セルゲイ・ロイは、「ドゥダイェフ政権の方針は、イスラームとチェチェン型ナチズムによっている。どちらもテイプによる細分化と一定の政治的団結をもたらした。私がチェチェン・ナチズムと言って単に分離主義であるとか、民族主義であると言わないのは、ドゥダイェフのカスピ海から黒海までの大チェチェンであるとか、チェチェン人がコーカサスの種族的の中心的民族であるなどと言う、その過激な攻撃的、拡張的性格にある」と観察する（Roj,S.Chechnja and Russia before and after Budjonnovsk,*MN*, 7-13 July,1995）。

ドゥダイェフ政権は誕生後まもなくチェチェン共和国をイスラム国家であると宣言したが、ドクダイェフの経歴から彼が以前からの熱心な信者であったと観察することは困難である。「イスラームの道党」党首でドゥダイェフの最初の腹心の同志、ドゥダイェフ政権のグロズヌイ市長に就任したが、後に反対派に廻ったビスラン・ガンテミロフは自分の政策をイスラム民主主義であるとし、トルコ型国家建設を目標とすると主張した（Balburof,D.,Chechen Opposition Leader Requsts Help from Russian Battalion in Fight Against Dudajev,*MN*,30 Sept.-6 Oct.,1994）。ドゥダイェフがガンテミロフを解任した理由は、彼が反ドゥダイェフ派の規制に消極的であったからであるという。警官に劇場広場で講義行動を続けていたダイモフクDaimokhk党のケチェ・ウムハイェフKeche Umkhayevの支持

者をドゥダイェフ派の攻撃から保護する命令を出していたのである。しかし、ドゥダイェフ派の議会および憲法裁判所攻撃での衝突でガンテミロフの親族が死亡し、彼自身がドゥダイェフの敵となることになる（Babulov,Dimitry,Chechen opposition leaders make strange Bedfellows,*MN*,9-15 Sept.,1994）。またドゥダイェフの最初の衛守隊長であったルスラン・ラバザノフは、単なるマフィアに過ぎなかった。（Lieven,op.cit.,p.29）

リーヴェン（Lieven,op.cit.,p.363）は、ドゥダイェフのナショナリズムからイスラム政治への移行時期を1993年に議会を解散し、テイプの長老に支持者を求めた以後であり、しかもイスラムが国民的統合の手段に得ればれたのは、1994年冬の初め、内戦の直前からであるとする。ドゥダエフにイスラム政治の可能性を示唆したのは、副大統領のヤンダルビエフ（Bart調和党、後のヴァイナフ民主党のリーダー）であると言われるが（Lieven op,sit.,pp.59,363）、リーヴェンはそれも確信によるというよりは、行きがかりであり、ドゥダイェフは1994年11月長老会議で、ロシア軍が撤退すれば、イスラム憲法を撤回すると述べたとする（Lieven,op.cit.,354）。しかし、ドゥダイェフ政権は、独立早々の1991年にイスラム大学を設立し、その初代の学長マイルベク・ナスハンMajrbek Nasukhanは、イスラームがチェチェン人の民族文化の不可欠の一部であると主張している（Torchavna、N.,Islamskij faktor iz Chechenii,*NG*,27 July,1994）。

更に、ドゥダイェフはイスラム政治に反対の立場を取ってきたムフティーに対抗してチェチェン・イスラムセンターIslamskij Tsentr Chechniを置き、自分の宗教問題顧問ムハンマド・フサイン・アルサベコフMukhammad Khusejn Alsabekovを置いた。1992年、ドゥダイェフはマフムド・ガルカイェフAkhmad Garkayevを新ムフティーに任命したが、モッラー達の一部は、ムフティヤット（宗務庁）が政府の統制下に入るのに反対したので、ガルカイェフに代えてアルサベコフをムフティーに任命した（ Krutikov,E.,Bombadldja muftijja,*Izvestija*,27 Maj,1999）。

ドゥダイェフ政権の情報大臣、マスハドフ政権の第一副首相兼外務大臣に就任したが、後に原理主義的との関係を指摘されるモヴラディ・ウドゥドフもドゥダイェフ大統領時代の1992年に、リーヴェンとのインタヴューで、次の様に述べた。

ドゥダイェフ政権の任務は民主的憲法に基づいた政府を作る事である。今までのところ国民もそれを支持している。しかし、モスクワがテロ事件をでっち上

げて、それをドゥダイェフのせいにするのであれば、これは内戦になる、そうなればイスラム原理主義が勝利して、ここはアフガニスタンのような状態にたる。これはロシアの利害にも西欧の利害にも合わない。だからトルコ型であってイラン型ではない民主的、世俗的国家の指導者を目指すドゥダイェフを支持する事は国際社会の利害にかなうことである（Lieven,op.cit.,p.364）

アスラン・マスハドゥフは1972年トビリスィ高級砲術学校を卒業、極東で小隊長として最初に勤務し、1981年にはカリーニン軍事アカデミーを卒業、ハンガリーで大隊長、連隊長を歴任、1990年のヴィルヌス事件ではロケット部隊長として派遣、一九九二年ドゥダイェフの求めに応じて帰国。副参謀長に任命される（参謀長はヴィスハン・シャハボフViskhan Shakhabov）、1994年12月にシャハボフを更迭した（Balbulov,Dimitry.Aslan.Maskhadov;Rival to Dudayev?, *MN*,15-21 Sept.,1995）。マスハドフの経歴から彼が古い民族主義者あるいは、熱心なイスラーム教徒であるとは考えられない。

マスハドフ現大統領は、1996年に現地テレビに出演し、ロシア軍撤退後、チェチェンはイスラム国家たることを宣言（NG, 1996,Okt.,12）する事を表明したが、大統領就任後の1997年８月６日のテレビ放送で、市民法を放棄しシャリアだけを用いることを宣言を発布した（Shermatova,S.,The Court of Sharia Awaits Attesation,*MN*,11-17 Sept.,1997）、実際に行われるようになったシャリア的体僕刑や公開処刑の実施に関して、これまで世俗国家の中における信仰としてのイスラームを追求してきたムフティーAkhmad khaji Kadyrovは、シャリーア法廷の展開を今日制度化することが、チェチェン人を理想からそれさせることの懸念を表明した（ibid.）。

シャリーアの導入について、マスハドフは、「ヤンダルビイェフはムスリムだが、マスハドフはそうではないと言う者があるが、それは違う。チェチェン人はムスリムである。我々は我々の習慣というか宗教を失いたくない。しかし、一方我々は効果的な経済を樹立し、宗教や民族にかかわりなく個人の権利が保護される秩序を打ち立てたい」。（サノバル・シェルマトヴァとのインタヴー、MN,May 22-28,1997）。従って、マスハドゥフの求めるものは穏やかなシャリーアの実施であった。事情は不明であるが1997年10月23日には、マスハドフは最高シャリア法廷の長官を反大統領で過激な主張を持つシャムスッディン・バトゥカイェフSh

amsddin Batukajevを穏健な叔父フセイン・バトゥカイェフKhusein Batukajevに更迭している（Shermatova,S.,Maskhadov Shuffles His Top Personnel Around, *MN*,30 October-5 November,1997;Lieven,op.cit.,p.344）。

1999年３月マスハドフは、シャリーアの全面的採用と憲法の停止、議会から立法権を剥奪し布告した。議会とムフティー庁に対して１か月以内にシャリーア憲法の制定を委託（Kornilov,Sergej,Maskhadov vvel shariatskoje pravlenije,*Izvestija*,5 Feb.,1999；Ksakob,Il'ja.Shariat ili Prezidemt,*NG*,5 Feb.,1999）した。当時大統領と反対派の対立は危機的な状態にあり、大統領は反対派のリーダー格であった２月５日アルサノフ副大統領を解任した。しかし、大統領派の勢力は衰えつつあり、それまで中立であったアフマドザカイェフAkhmad Zakajevとルスラン・ゲライェフRuslan Gelajevなども反対派に回りつつあった（Kornikov,Sergrj.Za chto zhe Vakhu-to Aesenova,*NG*,6 Feb.,1999；Olegov,Fodor,Maskhadov prodolzhaet reform,*NG*,6 Feb,1999）。　大統領令では、大統領のもとにシューラーとシャリーア法廷を置くが、シューラーには反大統領はをすべて集めることにして、反対派の活動を封じようとした。しかし、逆に反対派は大統領を廃止して、マスハドフ自身がイマームになることを提案している。結局反対派は自分の国家シューラーを組織し、バサイェフをアミールに任命した（Maksakov,Il'ja. Khaos kak stabilizirujushshij faktor,*NG*,24 Feb.,1999）。

シャミル・バサイェフに対しても同様なことが言えよう。バサイェフはチェェン南東のヴェデノで生まれた。故郷で義務教育を1982年に終了、４年間ヴォルガグラドのアクサイAksaiソホーズで勤務、モスクワ鉱物資源専門学校に入学、平凡な学生であったが、当時の女子学生は彼に対してはコーカサス人的性格を好感をもって語る。バサイェフはしばしば彼女たちにカフェでシャンペンを振る舞った。しかし、1988年、学業不振のために放校。1991年のモスクワ、クーデタ未遂事件には、大統領府の防衛に参加した。11月にはチェチェン共和国に対して出された非常事態宣言に抗議するためミンヴォドからトルコまで旅客機をハイジャックした。帰国後ドゥダイェフの特別部隊の隊長に任命された。しかしバサイェフはチェチェン国家像に関するラジカルな考えがあって、ドゥダイェフを批判し、一方カフカース山地民同盟と関わりを持っていて、1992年８月以降いわゆるアブハズ大隊を率いて、アブハズ内戦に参戦した。バサイェフは1994年舞台を率いて帰国、

しかし経済活動や犯罪、政争には加わらず待機して次の機会を待った。1994年夏内戦開始後ドゥダイェフ側に味方し、6月にはルスラン・ラバザノフのグロズヌイの、9月にはアルグンの陣地を攻撃した。その後トルストイユルトのハスブラトフの根拠地、ガンテミロフのウルス＝マルタンの根拠地を奪った。ロシア軍が進入した1994年12月以降はもっとも勇敢に戦った。戦闘期間中、バサイェフのアブハズ大隊はドゥダイェフ大統領にもマスハドフ総司令官の指揮下にも属せず独立して戦った。彼の名声を慕って多数の優秀な志願兵が集まった。1995年6月のブジョンノフスク事件で有名だが、直前の7月3日連邦軍の爆撃でヴェデノ村の妻子で死亡している。（Shamil Basayev-The Lone Wolf,*MN*, 30 June-6 July, 1995）。リーヴェンは「チェチェンのイスラムに関して少なくとも　ヨーロッパのジャーナリストに対しては、彼はイスラム国家の必要に関しては何も語らなかった。彼が後にこれを支持したのは戦争から生じたことであった。彼はソ連軍にいた時のことを思い返し、彼は消防士に過ぎず、唯一の実戦大権はアブハジアだけであったことを強調した（ Lieven,op.cit.,pp.35）と述べる。バサイェフは1998年8月『独立新聞』記者に「ワッハーブ派」に対して、

> 私は彼らを無政府主義者と呼んでいます。ワッハーブというのはイスラーム教では良い意味の言葉です。彼らをイスラーム教徒と呼ぶのは、特によろしくない行為について言うのはいけません。我々にはそのような考え方があります。様々な考え方があります。人々は極端に向うものです。しかし、極端というものはいつも極端です。純粋な信仰を求めるのはいつも若い人々です。一人一人が自分のやり方で行きますが、過ちも沢山あります。これは許容できる問題です。大きな悪意は無知から来るものです。

とも述べた（ Shevchenko,M.,<<Bol'shaja vojna na Kavkaze ygodno Rosii>>、*NG.*,1998,8,6）。

1997年の大統領選挙後、上位得票者であったバサイェフとウドゥゴフは、第一副首相、外務大臣として選挙で争ったマスハドフの政府に入閣したが、ドゥダイェフ大統領の死後、臨時大統領に就任したヤンダルビイェフは在野に留まった。ヤンダルビイェフは、原理主義というよりは過激な民族主義者で「ドゥダイェフ将軍軍」を率いるキズラル事件の首謀者サルマン・ラドゥイェフに対する好意を隠さない一方、いわゆるワッハーブ派の人々とも接触を保っている。1998年第二

の都市グデルメスで政府軍と衝突して、スタールイ・アタギに移動して来たアルビ・バライェフ等の原理主義者たちが同地出身のヤンダルビイェフに村に移動し、彼に彼らの指導者になるように要請した時、村の長老たちの反対にあったが、このとき彼は「自分の氏族の了解なしに彼らのもとに加わることはできないと返事して、要請を断ったといわれる（ Balburov,D.,Moscow Backs Aslan Maskhadov, *MN*,6-12 August,1998)。このようにヤンダルビイェフの立場も曖昧である。

ドゥダイェフは、政略的にイスラームを利用したのであって、彼の参謀であったウドゥゴフは現在、マスハドフ大統領のイスラム反対派に属するが、彼もマスハドフもまた1991年以降徐々にイスラム的になったのである（Lieven,op.cit.,p.357）。マスハドフとバサエフやウドゥドフ等の立場がはっきりと別れるようになったのは1997年の選挙においてであろう。バサエフが伝統とイスラムに傾倒するのに対し、マスハドフは独立派であるが、ロシアとの妥協を求めた。彼の軍隊の体験はアナトリー・ロマノフやアレクサンドル・レーベディやロマノフのようなロシア軍の指揮官と協議するのに役立った（Lieven,op.cit.,p.37）。特にチェチェンとダゲスタンの関係設定には、マスード派と反マスード派の相違がはっきり現れているが、1998年にはマスハドフと反マスハドフ派の間で、議会とシャリーア法廷の権能を巡る闘争が続けられ、反対派は野戦軍司令官（小軍閥）の評議会であるシューラーを設置した。大統領派は夏のグデルメス事件以外は押され気味であった。1999年に入ると両者の関係には新たな展開が見られる。1999年スターロイ・アタギに集まった反対派の政治家・将軍達ヤンダルビイェフ、アルサノフ、バサイェフ、カズベク・マハシェフkazbek Makhashjevhaは「国家が危機から抜け出すための提案書」を提案した。ウドゥゴフが起草したこの提案では、評議会と終身制の議長として大統領が残されていた。この文章中にはイスラーム、コーラン、シャリーアなどの用語は使われておらず、両者に妥協の余地が残されていたことになる。この案とマスハドフの新しい提案とには一種の捻れが起こっている。このようなことが起こったのは、これらの反大統領派の信奉するイスラームは、伝統的なもので、しばしばジャーナリストが主張するように、彼らがシャリーアという時、原理主義者と同様のシャリーアではなく、チェチェン人のアダート（イスラーム慣習法）を指していると考えることができる。

第２節　ワッハーブ主義。

ワッハーブ派の存在は、チェチェンとダゲスタンの情況を一層複雑にしている。一説ではチェチェンにワッハーブ主義を導入したのは、モヴラディ・ウドゥゴフであるといわれている。グデルメス出身のジャーナリストであったウドゥゴフは生活のあらゆる面をイスラム化することの何よりの利点は金持ちのアラブ諸国と協力できることであるとジョハル・ドゥダイェフを説得した。アラブ人からの最初の使節はヨルダン議会議員で高齢のアブドゥルバキ・ジャモAbdul Baky Dzhamoであった。しかし、結果は彼は確信ある無神論者であるドゥダイェフと意見が合わず、アンマンに帰った。チェチェン人の宗教家であるジャモは「チェチェン全民族会議Obshshenatsional'nyj kongress chechenskogo naroda」に参加する為に来訪したが、ドゥダイェフ派の武装集会に驚き、ズィクルで人々がドゥダイェフは神によって遣わされたというのを聞いて不快の念を抱いたという（N.,Pachegina,N.,Vne yrochnyj<<sagladakkhar>>,*NG*.,8 August,1993）。その後にワッハーブ派信者が現れた。ダゲスタンの宗教学者達は、ワッハーブ主義を採用し、ワッハーブ信者の整ったコロニーをいくつかの村々の基地に作りあげた。この住民は一人残らずこのセクトに移り、ウドゥゴフのイデオロギー的基地となった。この人物はバガウドゥイン・ムハンマドとムハンマド・タギイェフに味方した」（Krutikov,E.,Natsional'naja ideja dlja Chechni,*Izvestija*,14 August,1999）。

マスハドフ大統領のイスラム主義反対派（ヤンダルビイェフ、バサイェフ、アルサノフ、ウドゥゴフ等）は、事実上原理主義的な動きを見せてきた。1998年彼らはチェチェン共和国の行政組織とは別に、彼ら自身の執行機関シューラーShuraと地方組織ジャマーアトとを組織した。アルサノフは第一次チェチェン戦争時代の北西戦線を基盤にヌールッラー（神の光を意味するアラビア語）・ジャマーマットを構成して、そのアミールに就任。南西ジャマーアットはルスラン・ゲライェフRuslan Gelajevが務め、ウルス・マルタンが第３のジャマーアットとなり、そのアミール（長）には、アプティ・アビタイェフApti Abitayevが就任、さらに全チェチェンのアミールにははアルビ・バラタイェフArbiBaratajevが就任した。バサエフはシューラのエミールとなった。３ジャマーアットの中で、ウルス・マルタンが、最もワッハーブ派的といわれる。しかしこれらはウルス・マルタン・

タンの住民の大多数がワッハーブ主義者であることを意味しない。逆に代表者がグロズヌイに行きワッハーブ派の追放を請願したと言われる（Balburov,D.,Moskow Backs Aslan Maskhadov,*MN*,6-12 August,1998）。

しばしば、チェチェンの政治的エリートの世代とソヴィエト的制度との関わりが論じられている。ザヴガイェフやドゥダイェフは強制移住以前にチェチェンあるいは中央アジアに生まれ、ソ連共産党や赤軍の機構でそれなりの地位を得た。マスハドフもこのようなグループに入るであろう。第２のグループは、年齢的にソ連的機構との関わりが深くなる以前にペレストロイカやソ連崩壊を迎えた人々である。バサイェフがその代表である。第３は10代にペレストロイカを迎えた人々である。ワッハーブ派の支持者の多くは、第3のグループに属している。ジャーナリストのバブロフは次の様に述べる。

> 普通純粋なイスラムの支持者は若者であると知られている。アルビ・バライェフは25歳に満たないし、アプティ・アビタイェフも同じ年であった。彼は副官のハムザットKhamzatと一緒に来たが彼は20歳ほどの若者であった。全身隈なく武装し、迷彩服を着、防弾チョッキをつけて、柔らかい口調で話したが、話がコーランに及ぶと目は異常な印象を与えた。それを狂信的とも霊感をうけているともえよう。」「なぜかって、反ドゥダイェフ派、親ロシア派の中心ウルスマルタンのあらゆるところで、純粋なイスラムが根を張ったかという質問に、たまたま座にいたシャミル・バサイェフは普通のジェネレーション・ギャップだ。親と子の争いだ。古い世代は面目を失い、一方若い世代はよりよい運命を求めてイスラムに帰心した。それで子供が先手を取ったのだ(Balburov,D.,Sharia,*MN*,7-13 April,1999,)。

また、このようにも言われる。

> 18歳から20歳の若者は事実上普通の学校で勉強をしたことがない。結局1991年以来、我々は無秩序と無法状態にあった。多くの十代の若者は特に農村では人生で戦争しか目にしたかった。そこえ遣ってきたのが、布教団で彼らの目を開き、善と永遠に関する福音を説いた。子供たちは彼らの手に落ちた。こういうわけで新しい聖戦士がそろった(Balburov,D.,Checheniya:Just A Little Civil War,*MN*,30 Julay-5 August,1998）。

政治的イスラームに対してだけでなく、イスラム原理主義に対する制度的イス

ラームの立場は明確かつ不動であった。チェチェンのムフティー・アフマド・ハッジ・カディーロフ等の主導により、1998年7月25日にグロズヌイでチェチェン、イングーシ、ダゲスタンから代議員千人を集めてカフカース・ムスリム会議S`ezd musl'man Kavkazaを開催して、ワッハーブ派撲滅の方法が協議された（Fatullayev,M.,S`ezd musl`man osudil Vakhkhabizm,*NG*,28 July,1998）。同年8月には3か国に北オセティア、カバルディノバルカリア、カラチャエヴォ・チェルケスリアのムフティーが参加した北コーカサス・ムスリム・センター Tsentr Musul'man Severnogo Kavkazaを組織し、ナズランに本部を置き、ワッハーブ派に対抗することが決定された（*Izvestija*,19 August,1998）。さらに「外務大臣のウドゥゴフもワッハーブ派と呼んでもいいが、共和国の一番はっきりした布教者はヤンダルビイェフだ」と述べ、ワッハーブ派を総括する時がきたと宣言がなされた」（Maksakov,I.,I.Rotaat',V.Njetralizatsij Maskhadova zainteresovanyvChechneMnogo,*NG*,24 Ijul',1998,）。1999年5月25日、ムフティーアフメド・ハッジ・カドゥイロフ暗殺未遂事件がおこったのはこのような中であった。チェチェン人の間においても、その他のムスリム社会におけると同じく、政治的、正統的、伝統的、原理主義的等の潮流に分かれ、その内部の対立は、しばしば非常に厳しいのである。

結論にかえて

チェチェン・イングーシュ自治ソヴィエト社会主義共和国は、ソ連型のまたカフカースに多い多民族国家であった。かっては兄弟民族と言われて、総人口の13パーセントパーセントを占めるイングーシ人の大部分を除外した国造りを始めた。しかし、58パーセントを占めたロシア人、ノガイ人、若干のグルジア人、およびその他の人々が居住するテレク川以北の2郡に対しては、分離を行わなかった。民族的行政的組織をもたないロシア人は徐々に脱出したが、コサックを中心にテレク以北2郡のチェチェン共和国からの分離を主張する声は強い。しかし、この2郡は近い将来ロシア連邦の中にチェチェン共和国が再建されるとその政治的経済的基盤とならなければならない地域である。

ドゥダイェフは当初よりノフチョ人の国家建設を目指したが、ノフチョ人は出自の異なる9個のトフムと政治的社会的経済的活動に意味のある多数のテイプに

分かれている。近代的政党は成長しておらず、行政組織と官僚養成機は、10年の愛第箒されたままであった。トフム、テイプ、拡大家族であるガル、あるいは種々のイスラーム教神秘主義教団が再生して社会生活を伝統的に再組織している。

ソ連崩壊当時イスラーム的背景を持つ人々が好んで発言したのは、トルコ型の世俗国家を目標とするということであった。しかし、国家機関の解体と社会的混乱の中で、チェチェン革命の指導者中グロズヌイ政府のに残った人々は、次第に伝統的イスラームに傾いていった。

さらに、より若い世代の中には純粋の「イスラーム」を求める勢力が増大した。マスハドフ政権自体がシャリーアの実施に踏み切ったが、イスラーム勢力は政治組織の根本的イスラーム化を要求した。

さらに、政治的立場のイスラーム化はチェチェンとダゲスタンという人為的国境を無視し、必然的にダゲスタンを再イスラーム化しようとするメカニズムが生ずる。これが1999年の第二次チェチェン戦争の切っ掛けとなったチェチェン人武装勢力のダゲスタン西部侵入を引き起こした理由であると考えることができよう。

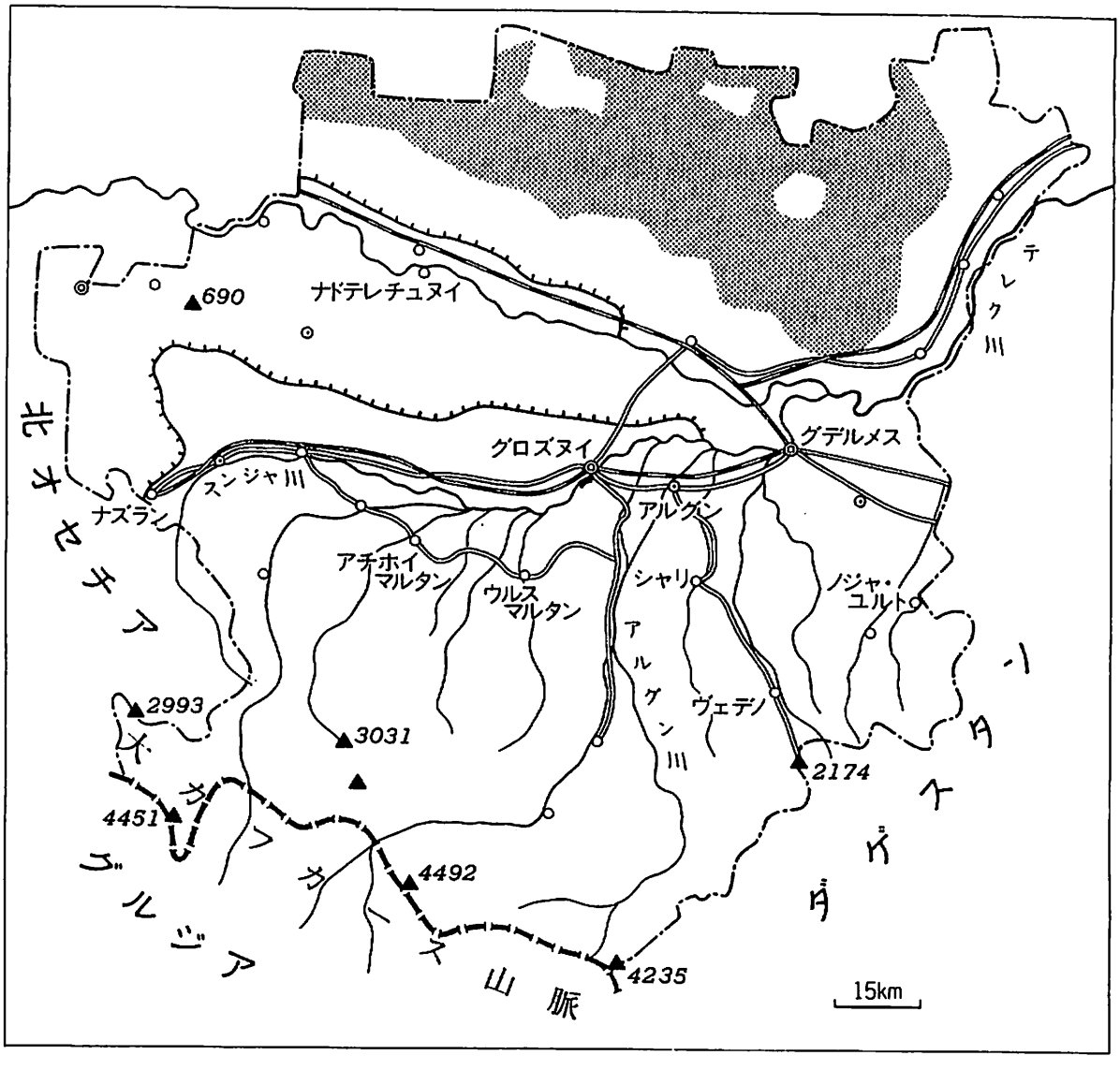


図　1　旧チェチェン＝イングーシ自治的ソヴィエト社会主義共和国

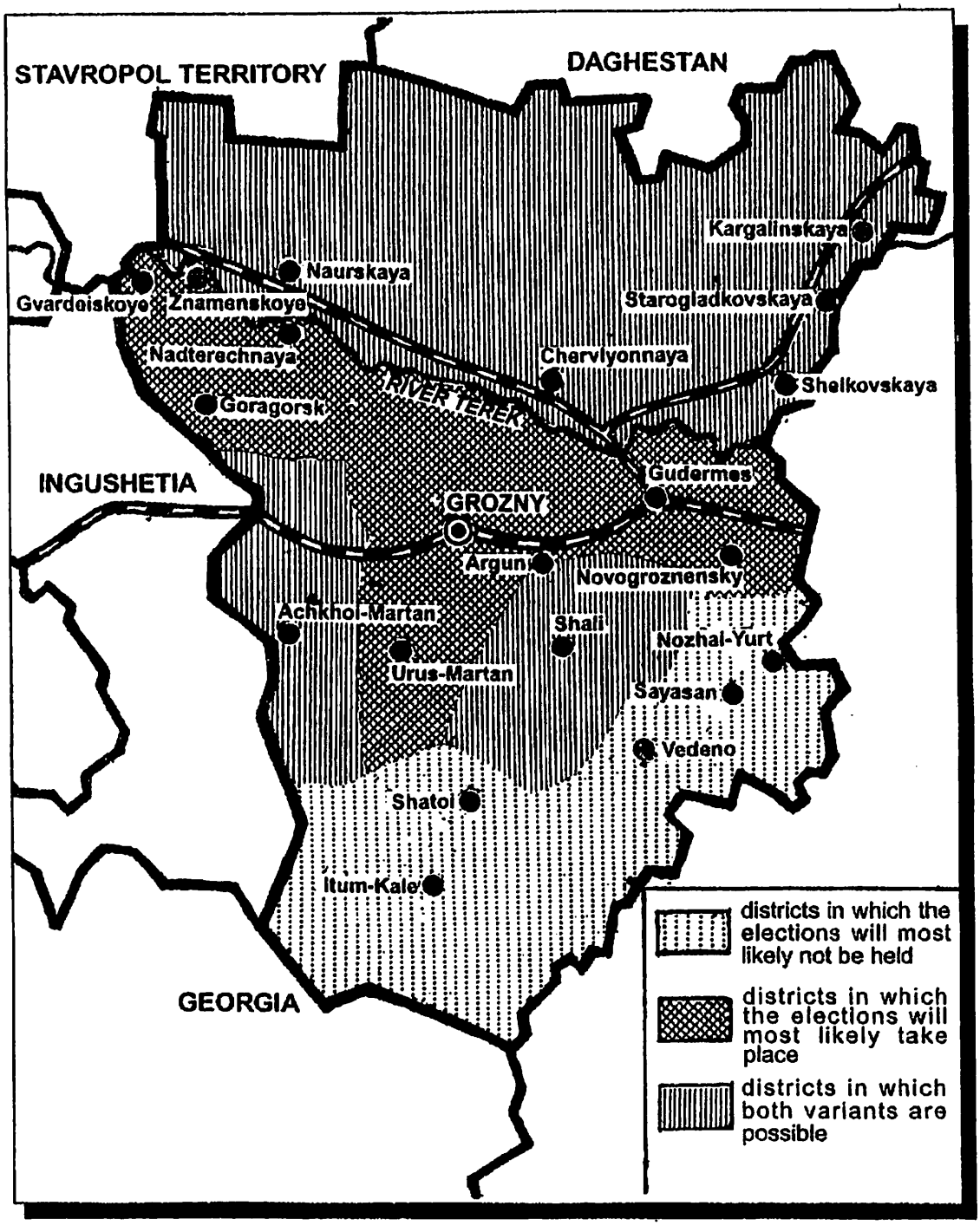


図　2　信任投票成立予想地図

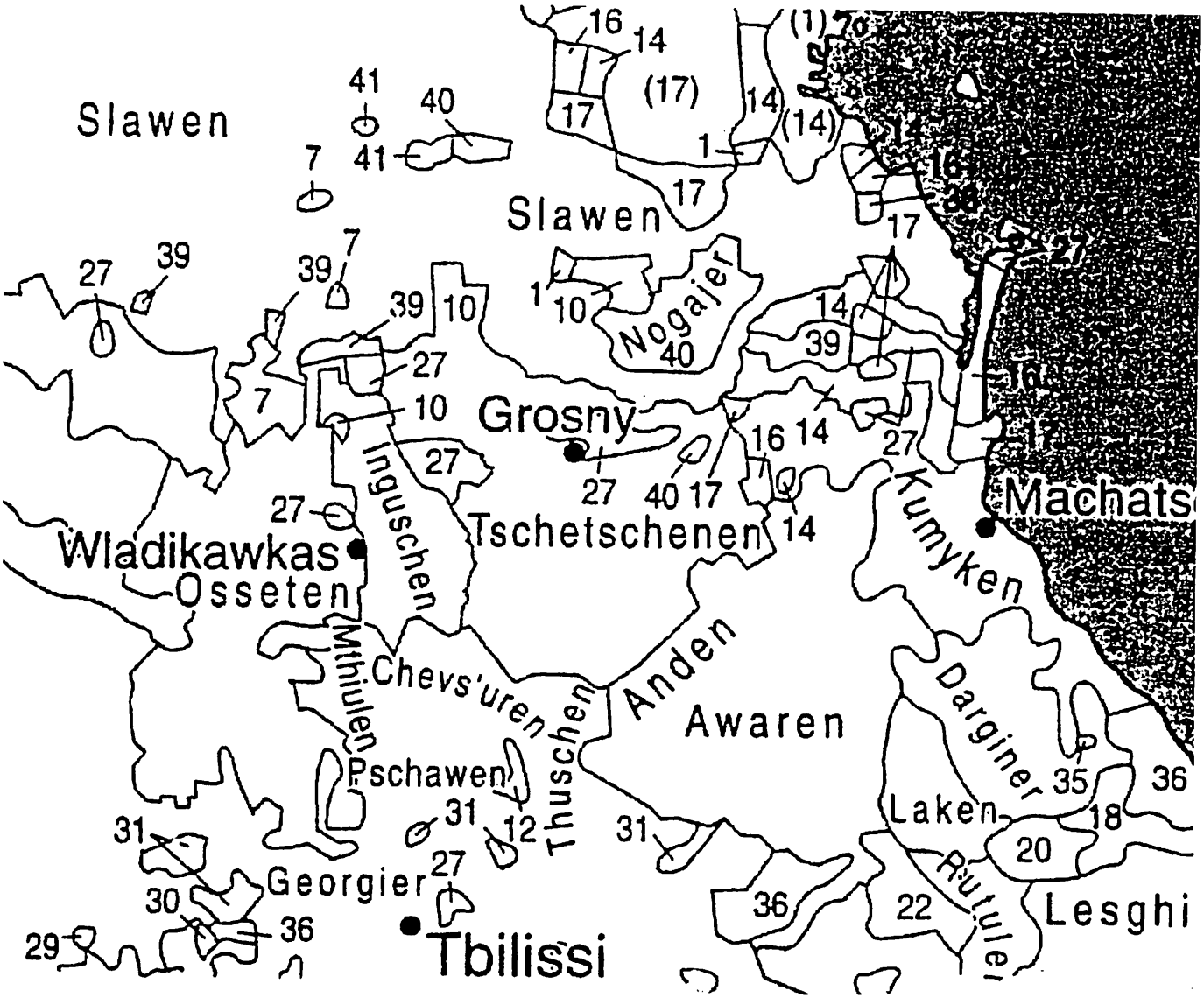


図　3　東北コーカサス言語地図

1　グルジア人　10　チェチェン人　11　イングーシ人　16　アンド　17　ダルギン人
27　ロシア人、ウクライナ人　40　ノガイ人

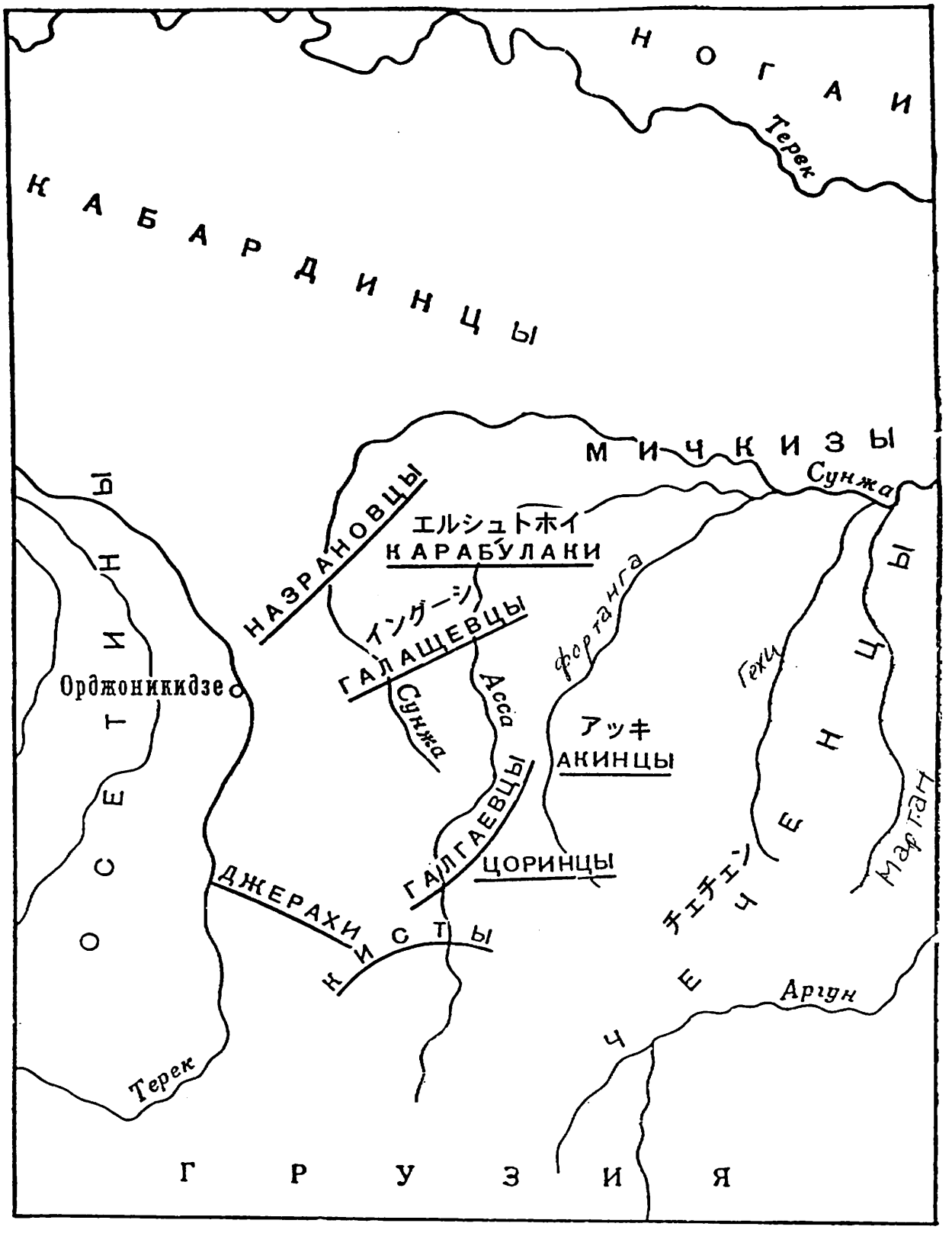


図　4　中世のヴァイナフ諸種族

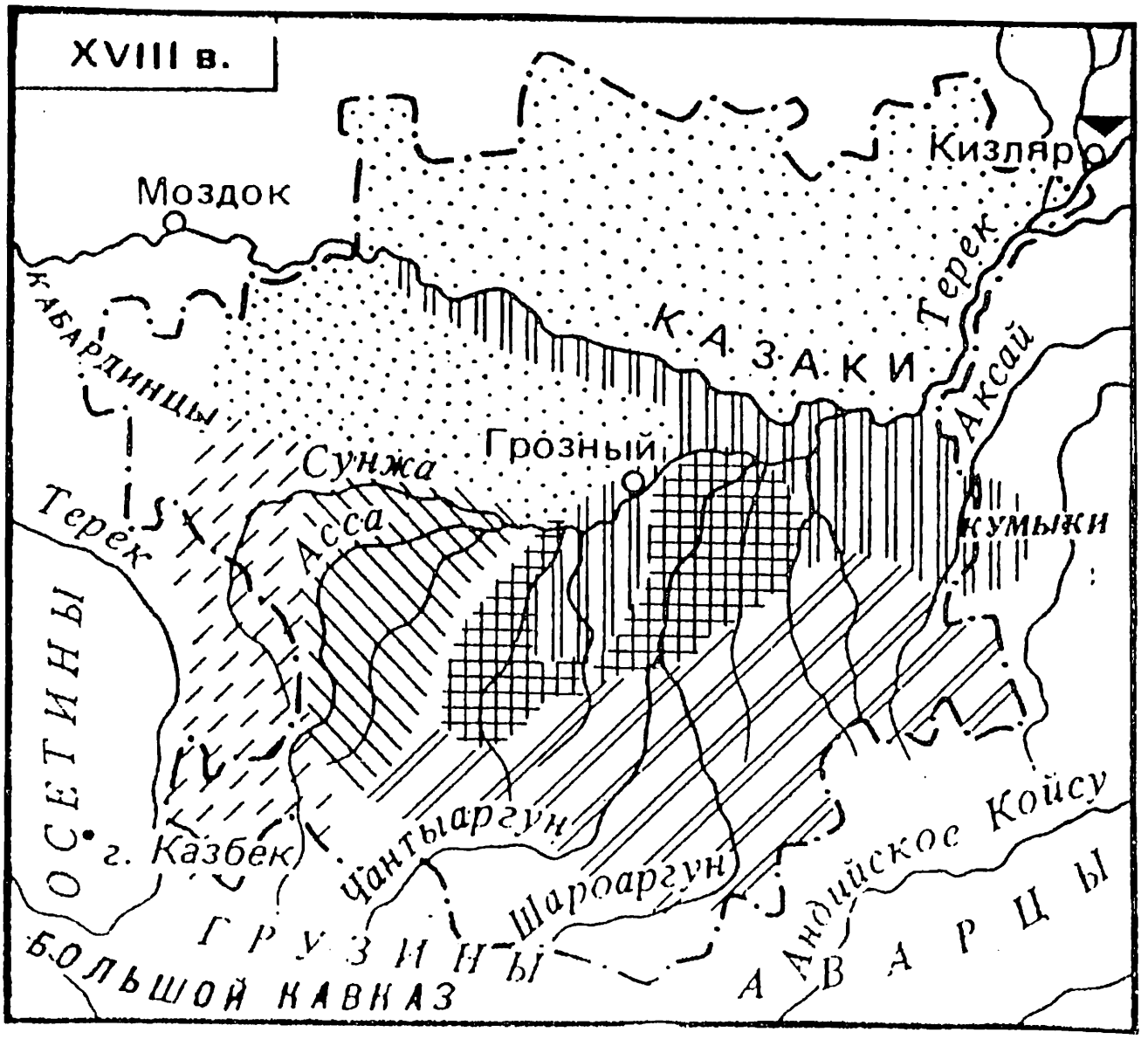
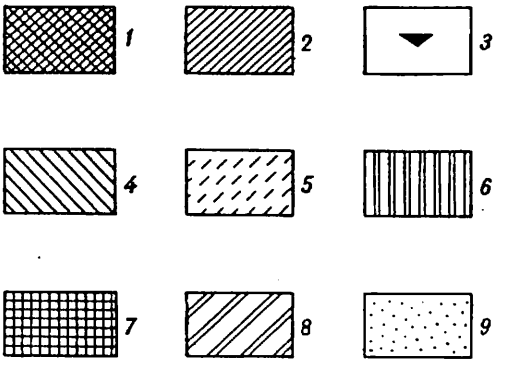


図　5　18世紀のチェチュニャとイングーシェティア



3　キズリャルのオコキ（アッキ）族
4　カラブラキ（エルシュトホイ）族
5　イングーシ人
6　30-70年代ロシアに臣属したチェチェン人
7　1781年にロシアに服属した平地のチェチェン人
8　山地チェチェン人　9　1781年までの無住地

チェコの市民社会の翳としてのロマ問題
——ウースチー・ナド・ラベム Ústí nad Labem[1]の「壁」問題——

佐藤 雪野

1．はじめに

昨年 1999 年 11 月に、チェコはチェコスロヴァキア社会主義政権崩壊に繋がった「ビロード革命」の 10 周年を迎えた。この 10 年の「体制転換」過程において、チェコは、スロヴァキアとの分離、政治制度の民主化、市場経済化などの、大きな変化を体験した。そして、転換の過程はまだ終わっていない。

チェコの体制転換の成果としては、OECD や NATO といった国際機構への加盟、ＥＵ加盟交渉開始など、「西側」国際社会への参加の実現があげられる。そして、1997 年に経済危機が露呈したものの、概してチェコの政治的・経済的な転換は順調に進んでいるように見える。

その中で、転換期のチェコに目立つ社会問題、人権問題として、外国メディアを騒がせるのは、チェコにおける人種差別問題、特にロマ（ジプシー）に関する問題である。

1997 年夏には、カナダに移住したチェコのロマの「ばら色の生活」を取り上げた民放ノヴァ社のテレビ番組をきっかけとして、大量のロマのカナダへの難民申請問題、更にイギリスへの難民申請問題がニュースとなった。彼らは、チェコ国内で、民族的に差別・迫害されているので、政治的難民の認定を求めると主張した。このニュースは日本でも報道された。

1999 年秋には、北ボヘミアのウースチー・ナド・ラベム市にロマ系住民とチェコ系住民を隔てる「壁」が建設されるというニュースが、世界に広がった。

度重なるロマ問題から判断して、体制転換期のチェコ社会は、政治上の形式的な民主化にもかかわらず、非寛容で、人権侵害的な社会なのであろうか？チェコ市民社会の民主化は不完全なものなのだろうか？本稿では、ウースチー・ナド・ラベムの「壁」問題の実態を探ることにより、チェコ市民社会の現状を明らかにする。

2.「壁」問題の背景

マチチニーMatiční 通りはウースチー・ナド・ラベムのネシュチェミツェ Neštěmice 区、クラースネー・ブジェズノ Krásné Březno 地区のノヴィー・スヴェト Nový svět（新世界）にある。クラースネー・ブジェズノ地区の中にあるとはいえ、ノヴィー・スヴェトは地区の他の部分とは、ドレスデン＝プラハを結ぶ幹線の鉄道線路により、遮断されている。ノヴィー・スヴェトと他のクラースネー・ブジェズノ地区は線路の下を通る地下道で結ばれている。この立地も問題と関係してくる。

ウースチーはドイツ語名アウシッヒ Aussig としても知られており、かつては、ドイツ系住民が多い町であった。マチチニー通りの名称はチェコ系の学校協会 Matice školská に由来しており、チェコ・ナショナリズムと関わり深い名称である。この通りがこの名前になったのは、第二次世界大戦後の 1945 年のことである。

第二次世界大戦後も静かな美しい地域で、ドイツ系の老人も住んでいたと言われる。戦後のドイツ系住民の追放を辛くも逃れる事ができたのであろう。ドイツ系の住民追放はウースチーでも過酷に行われたが、隔離されたこの地域では状況が異なっていたのかもしれない。

ロマの人々がノヴィー・スヴェトに住み始めたのは、1980 年代のことである。初期の転入者は、先住のチェコ系住民との問題を起こさなかったようで、チェコ系住民は現在も、古くからのロマ系住民と 1980 年代末以降転入したロマ系住民を区別しているようである。

この 1980 年代の移住は、社会的弱者が、それまでの家が取り壊されたために引っ越してきたり、他地区より家賃の安いアパートに、アパート交換 [2)]の形で引っ越してくる形で行われた。これにより、ノヴィー・スヴェト地区の住環境は更に悪化することになった。

昨年大きく報道された、マチチニー通りの問題の根は、この 1980 年代末からの移住者によるノヴィー・スヴェト地区の生活環境の悪化にあるといえるが、マチチニー通りの問題が、全国的、更に国際的問題になる発端は、1993 年、1994 年に市当局が、改修済みのマチチニー通り 4 番地と 6 番地のアパートに、家賃未納者を住まわせた事にある。しかし、ノヴィー・スヴェトにおける問題は、1990

年代にはいってすぐに既に露見していたようである。住民の一部（新しい転入者）が、家賃を払わなかったり、その地の一般的習慣を守らなかったり、騒音をたてたりしたため、その他の住民が不満に思っている事が、市当局に知られるようになった。

市当局は1991年第172号法により国有財産が地方自治体に譲渡され、それまで国有だった住宅が市有となったので、そこに、家賃未納住民を住まわせることにした。このマチチニー通りの2棟のアパートには、水道（温水は出ない）とガス暖房とコンロは設置された。一般の団地アパートには、温水も出る水道、セントラルヒーティング、台所があることを考えると、かなり質の低い住宅であるといえる。

マチチニー通りの2棟のアパートには、約130人（うち成人が約80人）が住むようになった。この家賃未払い者を質の低い住宅に移すことで、良質な住宅に空きができ、ウースチーにおける住宅不足が多少とも改善されることになった。市当局はマチチニー通り以外にも、家賃未払い者向け住宅を用意して、住民を移住させたが、他の地域ではマチチニー通りほどの大きな問題は起こらなかったといわれる。

1990年代半ばになって、マチチニー通りの2棟のアパート住民と通りの反対側の庭付き一戸建て住宅（2階建て）の住民との対立が顕在化する。対立顕在化の時期から考えて、1993年、94年のアパート移住者に問題があったといえるであろう。改修前のアパートに住んでいた住民は、数的にも少なく、問題を起こさず暮らしていたことになる。そして、前述のように、チェコ系住民は、ロマ系住民を古くからの住民と新しい住民とに区別し、新しい住民に不満を表明したのである。具体的に生じた問題は、アパート住民の子供たちが、親の監督無しに道を走りまわることや、夜間の騒音であった。アパート住民は、ボリュームを最大にあげたラジオを道路側の窓辺で鳴らしていたという。

ネシュチェミツェの区役所が公式に問題を記録したのは、1996年のことで、小犯罪の増加、夜間の騒音、監督無しに子供達が駆け回り、言葉で攻撃したり、他の子供に暴力をふるうことなどが、取り上げられた。このような状況で、市警察は、24時間のパトロール体制をノヴィー・スヴェト地域に導入した。このことが、一時的に状況の改善につながったとされるが[3]、抜本的な解決にはならなかった。

上記の問題以外に、大きな問題となったのは、この地域で巨大で攻撃的なドブネズミが増えたことである。このドブネズミは、マチチニー通りの問題のアパート周辺のごみのために発生した。

問題のアパートの住民の多くは失業者で、社会的給付金で生活していたが、生活のたしにするために、ごみを集めていた。そして、ごみの中で使えるものを選り分けた残りを建物の周りに放置していた。更に彼らは、国境を越えたドイツのザクセン州からもごみを集めており、これをドイツ人達は歓迎していたという。市の技術サービス部門（清掃局にあたる）は、この地域にごみ収集用コンテナをふやすことで、ごみ問題の解決をはかったが、焼け石に水だった。アパートの地下室はごみでいっぱいになり、更に隣接の無人の8番地の建物もごみに埋もれた。

ごみ問題は1995年から発生していたが、大きな問題となったのは1997年で、区は、1997年12月から1998年1月に大掃除を実施し、16,795コルナの費用をかけて約22トンのごみを運び出した。更に1998年3月、4月に約20トンのごみ、5月13日に、建物内から5.24トン、屋外から6.32トンのごみが運び出された。

当時の記録によれば[4]、問題のアパートの住民の一部も、不衛生で無秩序な住環境に不満で、一戸建てに住む住民と協力したいと考える人々もいた。彼らは、アパートから引っ越したいと考えていたが、家賃が払えないために、他に住むところがなかった。これらの住民は、マチチニー通りの秩序と夜間の静粛を守るための委員会を創設した。

当時存在した状況改善の可能性を打ち砕いたのは、1998年4月12日に起こった20人の酔っ払ったロマが7人の市警察官に暴行した事件である。きっかけは些細な交通事故であったが、事件は大きくなり、ロマが、警察官に対して、人種差別的な言葉を浴びせながら、暴行したとされる[5]。

3．「壁」建設の発端と事件化

最初に防音バリアーの建設を一戸建て住宅の住民が要求したのは、1997年秋のことである。最終的には1998年の区予算にこのための費用が組み入れられた。それまでの、鉄製のフェンスにかわって、防音のための壁か塀がマチチニー通り

に作られ、そこには出入り口は設けられないこと、子供の遊び場が設けられ、子供たちが道に出ないようにする事が計画された。

最初の要求の後に、マチチニー通りの大規模なごみ搬出が行われたため、場合によっては、バリアーを建設しないでもすんだ可能性があったが、4月の警官暴行事件の後で、一戸建て住宅の住民は、更に強く防音バリアーの建設を区に求めるようになった。1998 年 5 月 13 日、住民代表とウースチー市長フルシュカ Ladislav Hruška の会談が実現し、バリアー建設要求を支持することを市長は表明した。

この会談には、ČTK 通信の記者が同席しており、このニュースを全国に配信した。これにより、問題は、地域的な問題から、全国的なロマ問題へと性格を変えることになった。メディアがこの問題をどのように扱うかにより、現象自体が影響を受けることになった。

まず、1998 年 5 月 14 日付『人民新聞 Lidové noviny』紙が、「ウースチーでロマを白い人々[6]から分ける壁が築かれる」と題する記事を掲載した。この記事は、ČTK 通信の配信記事に基づいており、要点は以下の通りである。

(1)住民の要求で、ロマと白い人々をわける高さ 4 メートルの壁を、ウースチー・ナド・ラベム市が市の予算 35 万コルナで建設することを、市長が約束したこと。

(2)マチチニー通りのアパートは、区が改修し、家賃未払い者を住まわせており、住民の大多数はロマであること。

(3)このアパート住民により、地域の衛生環境が悪化し、大人も子供も無免許運転するので通りを歩くのも危険だと、壁建設を要求する住民は主張していること。

(4)4 月 12 日にロマによる警官暴行事件が起こったこと。

翌 5 月 15 日にも『人民新聞』に続報が出た。見出しは「ウースチー・ナド・ラベムにゲットーを築こうとしている、とロマは警告する、高さ 4 メートルの壁は 1 つの通りの白い住民と濃い色の住民を分けなければならない」というものであった。これは、ポラーチェク Martin Poláček 記者の署名記事であった。

この記事においては、最後の部分で付け加えのように、前日の記事の(3)(4)の内容が繰り返されているが、記事のほとんどの部分が、「ロマ市民イニシアチヴ Romská občanská iniciativa: ROI」のスポークスマン、パーショヴァーHilda Pášová

の「壁がロマのゲットーを作ろうとしている」という非難と「壁が問題解決にはならない」という意見、無任所大臣ムリナーシュ Vladimír Mlynář（ロマ問題政府委員会委員長でもある）の同様の意見と、市長と区長の反論から成っている。パーショヴァーは、壁建設費用で、ごみの清掃や街のパトロールをした方が、壁建設よりも秩序維持に効果的だと述べていたが、前述のように彼女の提案する方策は既に試されていた。

また『若い戦線－今日 Mladá fronta DNES』紙に最初に記事が出たのは、5月15日であった。「秩序を保てないロマはどうするか？壁で囲むのだ」というセンセーショナルな見出しがつけられた。ヴァツァ Jan Vaca 記者とイェリーネク Jan Jelínek 記者の署名記事である。

この記事は、まず、一戸建て住民の声を紹介し、次に、アパート住民ではあるが、秩序を乱していないロマ系住民の声を紹介している。更に区長の反論、4月の警官暴行事件、ロマ系住民の声が書かれている。確かに、最初に壁を要求する側の意見を取り上げ、また、区長の意見も紹介しているが、見出しのセンセーショナリズムとロマ系住民の意見の紹介から、記事全体のトーンは、壁に反対するものとなっている。

最初にアパート住民として紹介されている女性は、家賃をきちんと払っており、にもかかわらず、一部の住民による無秩序を市が解決してくれず、挙げ句の果てに壁で自分達を隔離しようとする、と不満を述べている。それに対して、区長は、ロマも壁建設に不満を持っていない、と述べている。区長自身、高い壁でなく、塀でも足りるかもしれないということと、壁建設が抜本的解決にもならないかもしれないと考えている。しかし、アパートの三方が壁で閉鎖され、通りの向かい側に何の建物がない側だけが開放されることにより、マチチニー通りにごみが直接捨てられることや、アパートの敷地からいきなり子供が走り出してくることは減るだろう。また、アパートの敷地のごみの集積状況が、一戸建て住民の目に触れなくなる。壁により、一戸建て住民とアパート住民の摩擦が少しでも回避できればよい、と区長は考えていたようである。

同じ日の『若い戦線—今日』には、「ロマには壁建設の決定は気に入らない」という記事も出ている。ロマ市民イニシアチヴが、ロマ系住民の多い地域に問題が多いことを認めつつも壁建設に反対であることが、副議長トゥレヨヴァーMarta

Tulejová の発言として書かれている。そのほかは、同日の『人民新聞』の記事に近く、前述のムリナーシュの意見や、ロマ問題政府委員会のロマ系の委員ファツナ Josef Facuna の「現在は壁を崩す時代で作る時代ではない」という見解や心理学者の意見が紹介されている。このファツナと同じ意見を政府の人権担当代表ウール Petr Uhl も持っていた。

ロチェクも指摘しているが[7]、最初の ČTK 通信の記事は、5月 14 日の『人民新聞』の記事に見られるように、かなり中立的なものだった。もっとも、『人民新聞』の「ロマと白い人々を分ける壁」という表現には、人種差別主義批判の意図が入っていると言わざるをえない。

5月 15 日の記事になると、論調は、ウースチーにロマ系とチェコ系の住民を隔てる「ベルリンの壁」のような壁が築かれようとしており、その壁により、ロマ系住民はゲットーに閉じ込められるのである、というものになる。これは、取り上げた2紙とも変わりはない。

地元の市長や区長は、一戸建て住民の平穏に暮らす権利や、警官暴行事件が、ロマ側のチェコ系に対する差別的な行動に基づく犯罪である事を主張するが、こちらは記事では、重要視されず、言い訳にすぎないような扱われ方である。

全体として、中央のロマ系運動家や心理学者などは、ロマ系とチェコ系の間に壁が築かれるということで、ロマ系が隔離され、迫害される、と判断したようである。彼らは、マチチニー通りの現状についての知識無しに、「壁」に反応していたようだ。

アパート住民のロマの考えは、新聞記事と区長発言で食い違っている。アパート住民のロマの中でも、秩序を破壊する人々とそうでない人々があり、また、その中でも、壁建設に対する考えが分かれていたのであろう。

4．問題の拡大とその評価

前述のように報道2日目から、マスメディアの論調は、「壁」がロマを隔離する非人道的で人種差別的なものである、というものに統一されていた。それに対して、地元では、実状を知らずに一方的に自分達を人種差別主義者と決め付けていると反発した。

「壁」建設計画がニュースとなった後の6月末に、問題のアパートには、住民の中から管理人が選出され、一時的に秩序が回復された。住民自身、マスメディアの注目を浴びた事で、秩序を回復しようと努力したようである。

そこで区長ハルツィニークは、壁の建設をやめ、子供の遊び場の建設と、既に存在する鉄製フェンスの代替として、高さ 1.8 メートルの陶製の塀を建設することで、一戸建て住民の同意を得た。アパート住民側にも特に反対はなかった。区長はこのことを9月 15 日の区議会で提案した。

しかし、塀になっても、ロマ活動家にとっては、ロマとチェコ人を隔てる「壁」に変わりはなかった。9月 17 日の『人民新聞』には「ロマ・イニシアチヴ：ウースチーのマチチニー通りの塀建設は何の解決にもならない」という記事が載った。

このニュースは外国にも伝わることとなり、9月末にヨーロッパ評議会の代表がマチチニー通りを視察した。代表の見解は、壁を築くことは近視眼的な解決方法で、長期的に見ると危険であるというものであった。(『人民新聞』1998 年 9 月 30 日)

チェコ中央のメディアの論調は、「壁」が作られようとした時と同様に、「壁」がゲットーを作り、アパート住民の人権を阻害するもので、ウースチー市や区当局及びチェコ系住民は人種差別主義者である、というもの一色であった。中央の政治家も同調し、1999 年 1 月 1 日の大統領ハヴェル Václav Havel の年頭演説でも、名指しではなかったものの、ウースチーの「壁」問題をほのめかすところがあった。

しかし、ウースチー市及び区当局は、中央政府の建設中止勧告も無視し、1999 年 10 月、塀（「壁」）の建設を強行したが、ロマの抵抗で工事を完成することができず、工事を中止した。結局、問題解決のために、市が、一戸建て住民の家を買い上げ、一戸建て住民が別の土地に引っ越すこととなった。

最初は、壁や塀の建設に反対していなかったアパート住民のロマも、マスメディアやロマ活動家などの影響で、壁や塀が自分達を隔離し、差別するものとして、反対するようになったようである。これは、彼らが人権意識や民族差別に目覚めたということになるのであろうか。その目覚めは評価できることであるが、外部に躍らされているような危うさも感じられる。

ロマ系住民の多くが、チェコ的な市民生活という観点からは、問題の多い生活

を送っていたのは確かで、一戸建てに住むチェコ系住民も被害者である。彼らの生活権を守るために、何らかの方策をとらなければならず、大規模な清掃やパトロール活動の効果が限られていたとき、塀や「壁」の建設を手っ取り早い解決策として被害者側が考えつくのは自然なことである。しかし、その迷惑集団が別の民族に属している場合、それは、民族差別、民族隔離と容易に理解される、ということにも気づいてしかるべきである。特に一般住民ではない、地方政治家が、それに思いいたらなかったことに、チェコ市民社会の未成熟さを感じる。

中央の政治家や中央のマスメディア、更にヨーロッパ連合や人権運動家も、マチチニー通りの実状を知らずに、壁＝ゲットーとして、一方的にウースチー市を批判したことは、市の態度を頑なにするという点で逆効果であった。むしろ、彼らは、ロマがチェコ的な市民生活を送れるように援助すべきであろう。

ロマの失業率は、他のチェコ系市民に比べて、非常に高いが、その理由の一つとして、彼らの学歴が低く、大多数が義務教育しか受けていないことがあげられる。かつて非熟練労働の場を求めて、ロマはスロヴァキアから北ボヘミアに移住してきたが、その非熟練労働の場は減少し、更にウクライナ人などの外国人労働者との競争にもさらされた。

ロマ以外の市民や、高学歴者の失業も問題になっている中で、ロマなど低学歴者の雇用創出は非常に困難であろうが、雇用問題の解決は最も緊急な課題である。更に、ロマ系の子供の教育も重要である。差別のない雇用・教育の実現のために、チェコ系市民の人権教育、民族教育も忘れてはならない。

註

1)ウースチー・ナド・ラベムのナド・ラベムはエルベ川（チェコ語ではラベ川と呼ぶ）沿岸という意味である。ドイツ国境にも近い。
2)社会主義期に別のアパートに引っ越そうとする場合は、普通この方法がとられた。
3)Roček (1999), 15 のネシュチェミツェ区長ハルツィニーク Miroslav Harcinik の見解。
4)Roček (1999), 20-21.
5)Roček (1999), 25-27.
6)チェコではロマを「黒い人々」と呼び、チェコ人を「白い人々」と言う。この場合の「黒い人々」は黒人を指すわけではないことに注意が必要である。
7)Roček (1999), 40-42.

本稿及びロマ問題参考文献

Bibliografie romistické literatury, Olomouc, 1994. ロマ学文献目録

Crowe, David & John Kolsti (ed.), *The Gypsies of Eastern Europe*, New York & London, 1991.

Čermáková, Jarmila, *Pindralko a třináct měsíců*, Praha, 1997. ピンドラルコと13ヶ月

Daniel, Bartoměj, *Dějiny romů. Vybrané kapitoly z dějin Romů v západní Evropě, v Českých zemích a na Slovensku*, Oomouc, 1994. ロマの歴史、西欧、チェコ、スロヴァキアにおけるロマの歴史からの断章

Davidová, Eva, *Romano Drom Cesty romů 1945-1990, Změny v postavení a způsobu života romů v Čechách, na Moravě a na Slovensku*, Olomouc, 1995. ロマの道 1945-1990、ボヘミア・モラヴィア・シレジアにおけるロマの地位、生活方法の変遷

Gabal, Ivan, et al., *Ethnické menšiny ve střední Evropě, Konflikt nebo integrace*, Praha, 1999. 中欧における民族的少数派、摩擦或いは統合

Havel, Václav, *Novoroční pozdrav prezidenta republiky Václava Havla* (http://www.hrad.cz/president/Havel/speeches/1999/0101.html) 共和国大統領ヴァーツラフ・ハヴェル新年挨拶

Hollis, Wendy, *Democratic Consolidation in Eastern Europe. The Influence of the Communist Legacy in Hungary, the Czech Republic, and Romania*, Boulder, 1999.

Hübschmannová, Milena et al., *Romsko-český a česko-romský kapesní slovník*, Praha, 1991. ロマ＝チェコ、チェコ＝ロマ辞典

Joly, Danièle, Scapegoats and Social Actors, The Exclusion and Integration of Minorities in Western and Eastern Europe, Hampshire & London, 1998.

Kladivová, Vlasta, *Konečná stanice Auschwitz-Birkenau*, Olomouc, 1994. 終着駅アウシュヴィッツ＝ビルケナウ

Malý, Karel et al., *Dějiny českého a československého práva do roku 1945*, Praha, 1997. 1945年までのチェコ及びチェコスロヴァキア法史

Nečas, Ctibor, *Historický kalendář. Dějiny českých Romů v datech*, Oomouc,

1997. 歴史暦、データに見るチェコのロマの歴史

Nečas, Ctibor (red.), *Nemůžeme zapomenout, Nucená táborová koncentrace ve vyprávěních romských pamětníků*, Olomouc, 1994. 忘れる事はできない、ロマの証言による強制収容所

Nečas, Ctibor, *Romové v České republice včera a dnes*, Olomouc, 1995[3], 1999[4] チェコ共和国におけるロマ、過去と現在

Neff, Ondřej, *Neviditelný pes, Český politický cirkus*, Chomutov, 1998. 見えない犬、チェコ政治サーカス

Pape, Markus, *A nikdo vám nebude věřit. Dokument o koncentračním táboře Lety u Písku*, Praha, 1997. そして誰もあなたを信じないだろう、ピーセク近郊レティ強制収容所に関するドキュメント

Polanský, Paul, *Tíživé mlčení, Svědectví těch, kteří přežili Lety*, Praha, 1998. 矯正された沈黙、レティを生き残った人々の証言

Roček, František, *Zed'-(The Wall) Matiční-dokument o nejslavnější uličce světa*, Ústí nad Labem, 1999. 壁ーマチチニーー世界一有名な通りに関するドキュメント

Voříšková, Marie, Zpívající housle. Pohádky, Praha, 1991. 歌うヴァイオリン、お伽話

＊定期刊行物など

Bulletin muzea romské kultury ロマ文化博物館報

Hospodářské noviny 経済新聞

Lidové noviny 人民新聞

Mladá fronta DNES 若い戦線—今日

Respekt

Transitions

Týden 週

Romano hangos (http://www.protempore.cz/romanohangos/)インターネット・マガジン

Gesellschaft für bedrohte Völker の HP (http://www.gfbv.de/)

現代ロシア人の国民的アイデンティティと読書状況

田中　継根

かつてソ連の時代にはロシア人の愛読書は、主としてプーシキン、トルストイ、チェーホフ、ゴーゴリ、ツルゲーネフなど、伝統的な古典作家の作品だった。古典作家の作品全集を家庭の書棚に並べておくことは、知識階級のみならず一般の家庭にとっても、見識や、良き趣味を示すのに必要な条件だった。ところが、ペレストロイカを経て、ソ連崩壊を経た現在、ロシア人の読書状況には、革命的とも言える変化が起こった。

１９９３年の末の調査[1]によると、好まれる文学作品（純文学だけでなく、大衆小説などもすべて含む）の順序は、推理小説、歴史・回想録、冒険小説、恋愛小説、空想小説、古典文学、現代ロシア文学、詩、その他、であるという。トップの推理小説が４８パーセントであるのに対し、古典文学はわずかに８パーセント（二項目以上を選ぶ方式）に過ぎない。また、１９９２年の売れ行き部数調査[2]では、A.デュマ９６０万、A.クリスティ２３５万、E.ガードナー１２０万などであるのに対し、ロシア古典作家では、チェーホフやレールモントフは一点もなく、クプリーン１万、ドストエフスキイ１５万、ショーロホフ１０万、トルストイ２千、パステルナーク３５万などとなっている。すなわち、ロシアの古典が読まれなくなっただけでなく、外国ものの翻訳の圧倒的な奔流の前にロシアの作品がすっかり読まれなくなってしまったのである。１９世紀までの古典のみならず、ソ連時代の有名な作家の作品も同様である。そして翻訳物の大部分が推理小説、空想小説、ポルノなど、大衆娯楽小説なのである。また、図書館の貸し出し状況を見ると、ドストエフスキイ、トルストイ、レオーノフ、ショーロホフ、ゴーリキイなどが２０位までに顔を出しているが、これは学校の授業に必要なために生徒が借り出しているもので、それらを除くと、やはり圧倒的に外国の作家のものが多いという。[3]

この激変がペレストロイカ、ソ連崩壊の結果であることは言うまでもない。政治的、社会的変化、文学者、出版界の変化、そして読者―国民の意識の変化に着目してその激変を簡単に跡づけ、ロシア人の国民的アイデンティティと絡ませてこの問題を考えてみたい。

読者の意識はどう変わってきたのだろうか。ソ連崩壊後のロシア人の生活の困窮についてはよく知られている。物価のすさまじい高騰、賃金の未払い、多数の失業者、街にあふれる物乞いなどについてはマスコミでしばしば報道されている。しかしながら、それでは

食べていくのが精一杯で、読書どころではないだろうと想像してしまうのだが、実はそうでもないらしい。かつて、ソ連は世界一の「読書王国」を誇っていた。それはロシアになってからも実は変わっていない。読書は相変わらずロシア人の余暇の過ごし方のトップなのである。ただ、好んで読む本の種類がまるで違ってしまったということなのである。(4)

確かに、ペレストロイカの時代に、いわゆる「帰ってきた文学」がむさぼるように読まれた。ソ連時代の「御用文学」はにわかに色褪せ、社会主義リアリズムはあっけなくその幕を閉じざるを得なくなった。何重もの検閲システムが廃止され、地下文学や亡命者文学が次々に発表された。主なものを挙げてみよう。ソルジェニーツィンの『収容所群島』、サーシャ・ソコロフの『ばかどものための学校』、ザミャーチンの『われら』、ナボーコフの『ロリータ』、プラトーノフの『土台穴』、ブルガーコフの『犬の心臓』、パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』などである。また、メレジコフスキイ、ギッピウス、ローザノフ、ベルジャーエフなどの哲学・宗教的著作も公表された。(5)

だが、ペレストロイカが終わり、過去の発禁本の発表がおおかた終わると、熱狂も冷め始める。そして、その後に続くべきロシアの現代作家たちがあまり作品を発表しなかった。論争・闘争に多大の勢力を費やしたのがその主な理由であるが、作家達を襲った経済的困窮も無視できない。ソ連時代、作家同盟に保護され、比較的楽な生活を保障されていた作家たちを、出版界の過酷な状況が直撃し、作家活動だけではとうてい食べていけなくなった。作家を廃業して転職する者が多数あったし、作家活動を続ける場合でも、すぐれた作品を書くための条件は整っていなかった。

ペレストロイカの時期に恐らく大半のロシア人が抱いたに相違ない、未来への熱い期待は、ソ連崩壊に伴って見事に裏切られた（と彼らは感じた）。自由、民主主義、市場経済など、新しいロシアを支えるべき原理がすべて、実は国民を圧迫し、不幸に陥れるものでしかないと判明した。ソ連はアメリカと並ぶ超大国であり、援助国であった。それが今では、外国の援助に頼らざるを得ない三等国に転落してしまったのである。プライドが大きく傷つく中、国民的アイデンティティをどこに求めていいのか、どこにロシアの未来を求めたらいいのか。ロシア人の大多数が経済的な危機的状況のみならず、出口の見えない、精神的な危機的状況の中に陥っているものと考えられる。

共産主義と民主主義、安定と自由、全体と個人、更には、ロシア・スラブと西欧・・・これらの何組もの選択肢の中で彼らは揺れ動いているものと思われる。

かつて、ロシアでは作家は社会の教師であり、人生の教師であった。他の国の文学とは

違って、人は文学の中に人生の、社会の、歴史の大問題の解決を求めた。文学を娯楽と見なすことは稀であり、芸術至上主義的な考えは最後までマイナーなままであった。文学は哲学や宗教や社会思想を自らのうちに含むものだった。帝政ロシアの過酷な専制政治のゆえに、文学はそのような、社会や人生の教師としての役割を担わざるを得なかったのである。それがロシア文学の大きな特徴だったと言える。

だが、ソ連の崩壊の後は、文学にそのような使命を求める風潮が急激に衰えた。文学から哲学や宗教や社会思想を取り去り、本来の文学にもどせという声が大きい。現代ロシアの精神的状況の大きな特徴のひとつが脱イデオロギー化であると言って良いだろう。それは勿論、ロシアだけに限ることではないが、ソ連体制への反動としてロシアではことさら大きな問題たらざるを得ない。ロシアのかつての大作家たちは、概して反体制的な存在であり、政府や社会を批判したが、それが結局はロシア革命を招いたのだという批判もある。文学から哲学や思想を取り除けという主張、文学の脱イデオロギー化の主張にはそのような批判が大きく関与しているのかも知れない。

ソ連時代、ロシアの１９世紀の古典が大いに読まれ、（本の値段が非常に安かったこともあって）ソ連の大御所の作品もまた大いに売れた。だが、それは世界的に見れば、かなり異様な状況だったと言えよう。ソ連の崩壊後、ロシア人はソ連というイデオロギーから脱し、それに連なるロシア古典という「イデオロギー」からも脱し、あるいは脱しつつある。

出版界はどうであろうか。ソ連崩壊の後の経済的困窮で出版界もまた大きな打撃を被った。紙の値段のすさまじい高騰が経営を圧迫した。検閲が廃止され、大半の出版社は民営となった。出版社間の競争は激烈となり、従って、読者の好みと需要にあった本だけが出版されるようになったのである。読者への迎合とも言える状況が出来した。

それが上に述べたような売れ行き部数となって現れているわけであるが、ここには脱イデオロギーとか国民的アイデンティティの喪失とかいった要因だけでは説明しきれないものがある。

そもそも活字離れ、特に若年層の活字離れは世界的な傾向である。更に、そこに文学離れが加わり、古典離れが加わる。これも世界的な傾向と言えよう。ソ連の時代にはそのような傾向は他国よりずっと目立たないものだったと思われる。そこには言わば、温室の中で保護された文学状況、読書状況があったのである。だが、ペレストロイカ、ソ連崩壊とともに、西側の文化、特にアメリカの大衆文化が怒濤のように流れ込んできた。マスメディアや街頭には英語が氾濫し、英単語のロシア語への流入はすさまじいものである。ソ連

はアメリカに経済的に破れただけでなく、文化的にも破れたと言えるかもしれない。

そのような状況に伴い、現在の世界共通の精神風土はロシアをも巻き込むことになったのである。そして、ロシアの読書界もそれまでの特異な「温室の世界」から一挙に「外の世界」に放り出されたと言ってよいであろう。言ってみれば、ロシアの読書界は、ことの善し悪しはともかくとして、世界標準に達したのである。

新しい作家たちの、新しい創作への模索が続く中、出版される作品は実に多様化している。ペレストロイカ以前の出版界とは天と地との差がそこにはある。

それは、ロシア文学が文学の多様化という世界的な傾向に到達したのであると同時に、読者の興味の多様化、脱イデオロギーの所産でもある。

註

（1）阿部軍治『ソ連崩壊と文学ーロシア文学の興隆と低迷ー』彩流社、１９９８年、１５９ページ。

（2）同、１６１ページ。

（3）同、１６６ページ。

（4）同、１６４頁。

（5）今回の総長裁量経費による講演会で、講師のアンナ・シチョーガレヴァさんは、ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』が出版されたときの、書店前の長蛇の列についてなつかしく語っておられた。

「ソ連時代に関する史料の発掘・回想・研究（1990年代のロシア）：文献目録」

寺山　恭輔

（1）はじめに

ソ連ではペレストロイカ以降、それまでタブーであったスターリン時代の悲劇に関する文章が洪水のように出版され始めた。スターリン時代の強制収容所での体験、人民の敵として収容所で長期間過ごさざるを得なかった人生などに関してメモワールが定期刊行物や一般書籍に次々に掲載されていった。さらにソ連が崩壊するとそれまで研究者にアクセスが制限されていたアルヒーフが公開され、このプロセスは加速した。自国史の過去に関する関心はひところの熱烈な反応は冷め、新たな国家システム、市場経済の構築に向けた取り組みへと人々の関心は移り、経済状況の悪化も加わって歴史に対する注目の度合いは薄れつつあるかにみえる。しかし、もちろんのことであるが歴史の見直し作業は続行され、新たな史料の公開作業は続けられ、それに基づいた研究も進められている。本報告はペレストロイカ以降、スターリン時代の粛清、弾圧問題を中心にソヴィエト時代についてロシアを中心とする旧ソ連諸国でどのような文献がこれまでに出版されてきたのか、いくつかの部門に分けてその傾向を把握しようとする試みである。多数の論文、記録が新聞や雑誌にも掲載されたが、それらを網羅するのは不可能であり、それらについては例えば次のような文献　Открытый архив – Справочник опубликованных документов по истории России 20-века из государственных и семейных архивов (по отечественной периодике 1985-1995 гг.), Москва, 1997. Составитель И.А.Кондакова. 364с. 1000 экз. これは20世紀のロシア史に関して1985年から1995年にかけてロシアの定期刊行物に掲載された史料館文書や個人の保管していた文書に関する情報をまとめたものである。約3000の史料に関する情報が掲載されている。巻末には雑誌名、人名索引、事項索引がついており検索が容易である。）も出版されているので本報告では書籍及び学位論文にのみ限定したい。これらのほとんどは筆者が図書館などで閲覧してチェックしたものであり、手元にあるものは少ない。また全く目にしたことはなく、他の文献からその存在を知っただけのものもかなりの数に上るが、参考のためにリストに含めた。

特に最近の厳しい経済情勢のもとにあってもソヴィエト時代の悲劇を追悼し、歴史的に見直して過去の失われた歴史を自分たちの手に取り戻し、そのことによって新たな民主主義社会の構築のための市民的基盤を確立しようとする人々の戦いは続けられている。本報告をもとに今後のスターリン時代研究に役立てたい。

（２）粛清・弾圧の実態

特にスターリン時代の粛清、弾圧に関しては多数の文献が出ている。地域ごとに文献をまとめることにしたい。

Ⅰ　ウラル地方

① стория репрессий на Урале : идеология, политика, практика (1917-1980-е годы),Екатеринбург, 1997. 208с. 150экз.（1997年11月10－12日に行われた学術協議会での発表論文集。ウラル、エカチェリンブルグ、ニジニ・タギル、チェリャビンスク、ペルミ、トヴェリなどの大学の研究者が参加しておりウラル地方での研究状況を知るために重要な史料になる。）

② 37-й на Урале : (О жертвах сталинских репрессий.Сборник),Свердловск,1990. 304с.（主に党、ソヴィエト組織の中で粛清された人々についてまとめたものである。一般にペレストロイカ初期には特に指導的地位にあった党員で粛清された人々に関する回顧が特集される傾向にあったが、時代を経るに従い関心は一般市民、非党員に対する弾圧へと拡大していった）

③ Завещание : Воспоминания Уральцев - жертв культа личности Сталина,Свердровск,1989. 252с.

④ Кириллов Виктор Михайлович, История репрессий на Урале 1920-е – начало 50-х гг. (на материале Нижнетагильского региона), Нижний тагил, 1996.（ウラル地方の粛清、弾圧問題研究の中心人物であるキリーロフがまとめたもの）

⑤ Кириллов В.М. История реприсcии в Нижнетагильском регионе Урала 1920-е начало 50-х гг. Ч.1.Репрессии 1920-1930 гг.(232с, 300экз.),Ч.2.Тагилаг 1940- 50 –х гг. (248с, 300экз.), Нижни-тагил, 1996.（弾圧の法的側面、選挙権剥奪に関する問題、クラーク絶滅政策、反革命問

題などがまとめられ、第二部にはウラルにおけるタギルラーグの位置付け、付属文書が添付されている。中にはスヴェルドロフスク州へのスベツペレセレンツィの配置図や、ソ連のグラーグの地図も含まれる。)

II　極東地方

① утурин,Александр Степанович,Дело краевого масштаба : О жертвах сталин.беззакония на Дальнем Востоке",Хабаровск,1991.

② Политические репрессии на Дальнем Востоке СССР в 1920 –1950 –е годы, материалы первой Дальневосточной научно-пратической конференции, Владивосток, 1997, 319с. 300экз. これは約30人の専門家が各種テーマについて極東における弾圧についてまとめたものである。このテーマに関して初めて極東で学術会議が初めて開かれた。

③ Николаев,Иван Игнатьевич,Ушницкий,Иван Петрович,Центральное дело : Хроника сталинских репрессий в Якутии,Якутск,1990. 153с. (ヤクートにおける粛清)

III　シベリア

① .А.Папков, Сталинский террор в Сибири 1928-1941, Новосибирск, 1997, 450экз, 272ст.

② Из истории земли Томской : Год 1937 ...- Сборник документов и материалов, Томск, 1998.384с. 1000 экз. (トムスクの1937年における弾圧に関して約200の各種文書をまとめる)

③ Из истории земли Томской, Сибирский Белосток : сборник документов и материалов,Ханевич В.А. ред. Момск,1998. 238с.

④ Сост.Л.С.Мухин,ОЗЕРЛАГ : как это было,Иркутск,1992. 463с. (バイカル湖畔に作られた通称「湖ラーゲリ」とよばれる収容所に関してまとめたもの)

⑤ Кузнецов,Игорь Николаевич,"Массовые репрессии на территорий западной Сибирии в 1930-е годы и реабилитация жертв террора,Томск,1992. кандидатская диссертация (1930年代の西シベリ

アにおける粛清とその名誉回復に関してまとめた学位論文）

⑥ Запецкий,Владимир Михайилович,Колпашевский яр : О репрессиях органов государственной безопасности в Колпашево Томской области,Новосибирск,1992. 126с. （トムスク市の北西約 300 キロに位置するコルパシェヴォは 1932 年から 44 年にかけてナルィム管区の中心であった）

⑦ Шангин М.С., Террор против советси : Об уничтожении духовенства и трудового крестьянств в г. Омске и области, Омск, 1994. 320с. 5000 экз. （オムスクでの弾圧）

⑧ Чрезвынайщина : из истории Омского прииртышья 20 - 30-х гг. (сборник),Омск,1990. 115с.

⑨ Якунин,Юрий Анатольевич,Чёрнье и белое : заметки прокуроры,Омск,1990. 224с. 5000 экз. （オムスク州の検事であるヤクーニンが 1930 年代から 50 年代初めにかけてのオムスク州における被弾圧者に関する史料を見直して総括したもので具体的に数人の人物の運命についても取り上げている）

⑩ Самосудов,В.М.,О репрессиях в Омском Прииртышье, Омск,1998. 130экз.

⑪ Шулунов,Прокопий Михайлович, Горькие судьбы : о бурятах - жертвах сталинских репрессий,Улан-удэ,1991. 38с. （ブリヤートにおける弾圧）

⑫ Гушин,Иван Павович, Тень прошлого : Записки прокурора",2-е,Барнаул,1990. 302с. （バルナウルにおける弾圧）

⑬ В.Н.Тугужекова,С.В.Карлов,Репрессии в Хакасиии,Абакан,1998. 111с. （ハカシにおける粛清、弾圧）

Ⅳ ヨーロッパロシア

① з тайников спецхранов : очерки о репрессиях 20-50-х гг.в Новгородской области,Ленинград,1991. 127с. （ノヴゴロドにおける弾圧）

② Алексеенко,Иван Иванович,Репрессии на Кубани и Северном Кавказе в 30-е гг. 20 века,Краснодар,1993. 114с. （北カフカースとクバン地方の 1930 年代における弾圧に関してまとめたもの）

V　ロシア以外の諸共和国

① Тридцать седьмой год в Киргизии：Возвращение имена：сборник статей и очерков",Бишкек,1991.336с. 1000 экз.（1937 年に粛清されたキルギスタンの著名な党、政府の活動家についてまとめたもので前半がキルギス語、後半がロシア語で書かれている。）

② Пальванова,Биби Пальвановна,"Трагические 30-е",Ашхабад,1991. 147с. 1000 экз.　（著者はトルクメン女性として初めて教授の地位についた歴史家でアカデミー会員ということだが、新たなアルヒーフ史料を利用して 1930 年代のトルクメニスタンにおける粛清の実態の究明に取り組んでいる。）

③ Кудерина Л.Д., Геноцид в Казахстане, М, 1994. 64с. 2000 экз.（カザフスタンでの 30 年代におけるインテリの粛清について述べられたもの。）

④ Удмуртия:массовые репрессии 1930-50 годов：исслед.документы,Ижевск,1993. 81с.　（ウドムルトにおける粛清、11 人の筆者による文章。）

⑤ Багаутдинов,Флёр нуретдинович,По закону 1934 года：репрессия Татарии,Казань,1990. 136с. 15000экз.（タタール内務省の以前は利用されなかったアルヒーフを利用したと書いているが注はついていない。）

⑥ Правда и только правда：Белые пятна нашей истории,Баку,1991. 158с. 12000экз.（アゼルバイジャンにおける粛清について）

⑦ Липартелиани,Гига Муртазович, Сталинец：публицист. Очерк, Тбилиси, 1990. 82с.　（前半がグルジア語　後半がロシア語で書かれている。）

⑧ Восстанавливая правду истории",Кишнёв,1989. 156с.（モルドヴァでの弾圧について）

⑨ Мухитдинов, Нуриддин. Годы проведенные в кремле. Воспоминания ветерана войны,труда и коммунистической партии, работавшего со Сталиным,Маленковым, Хрущевым, Брежневым, Андроповым. Кн.1, Ташкент, 1994.　（1920－30 年代のタタールスタンにおける弾圧、アルヒーフの出所は示されていない。アルヒーフからといいながら。）

Ⅵ　粛清、弾圧を分析したもの等

① тецовский Ю История советских репрессий, 1997. том 1,600 с, том 2, 436с. 3000 экз.　（法律家の立場から人権擁護、自由について書いてきた著者が、ソ連時代の抑圧体制に関して包括的にまとめたもので、アルヒーフ文書も含めた引用文献は詳細である。）

② Д.Б.Павлов, Большевстская диктатура против социалстов и анархистов 1917-середина 1950-х годов,Москва,1999.

③ Судебный отчет,Москва,1997. 688с. 1000экз.（ブハーリン、トロツキー裁判の速記録）

④ А.Антонов-Овсеенко,Врага Народа,Москва,1996.

⑤ Сергей Королев,Донос в России,Москва,1996.　240с. 1000 экз.

⑥ Вадим Роговин,"1937",Москва,1996.

⑦ Александр Орлов,Тайная история сталинских преступлений : книга комиссара НКВД,в 1938 году вместе с семьей тайно оставшегося в США,Москва,1991. 352с, 100000экз.

⑧ Сталинизм в российской провинции – смоленские архивные документы в прочтении зарубежных и российских историков, Смоленск, 1999.　（地方におけるスターリニズムの研究。）

⑨ Без грифа «секретно», Новосибирск, 1997.　（1920 年代から 1950 年代初めにかけてのロシアと白ロシアにおける弾圧システムの構築に関連したもの）

⑩ Б.Б.Брюханов, Е.Н.Шошков, Оправданию не подлежит – Ежов и Ежовщина 1936-1938, СПб, 1997.（エジョフとエジョフシチナについて）

⑪ И.В.Павлова, Сталинизм : становление механизм власти, том 1, Новосибирск, 1993.

⑫ Конквест,Роберт,Большой террор, том 1,2, Рига,1991.（邦訳は『スターリンの恐怖政治』上・下（片山さとし訳、三一書房、1976 年））

⑬ 1937-й и другие годы : Сборник публицистики,Воронеж,1990. 288с. 5000экз.（1988、89 年に中央と州の定期刊行物に掲載されたものから構成されている。）

⑭ Головков,Анатолий Эммануилович,Вечный иск : Очерки,Москва,1989. 45с. 150000. （コムソモールのコサリョフらについて）

⑮ Смерч, Москва,1988. 398с. сост.И.А.Анфертьев.

⑯ Осмыслить культ Сталина",Москва,1989. 650с.

⑰ Уроки гнева и любви – Сборник воспоминаний о годах репрессий (20-е – 80-е гг. Составитель и редактор Т.Тигонен),Ленинград, 1991. 96с. 10000 экз.（弾圧された10数人による回想）。この回想集はシリーズで発行されている。以下、チェックできたもののみ掲載する（いずれもTигонен gが編集）。том 3, выпуск посвящен репрессиям во время блокады Ленинграда（第3巻、レニングラード封鎖時の弾圧）, СПб, 1992. 159с. 1000экз. Том 4, СПб,1993. 318с. 750экз. Том 5, выпуск посвящен репрессиям против российских немцев（第5巻、ドイツ系ロシア人への弾圧）, СПб,1993. 194с. 500экз. Том 7, Сборник воспоминаний о годах репрессий (1918 год – 80-е годы), СПб,1994. 320с. 999экз.

⑱ Широкстрой : Широклаг, сборник воспоминании воинов-калмыков, участников стр-ва Широковской ГЭС, книга памяти ссылки калмыцкого народа,т.3,кн. 2,Элиста,1994. 3000 экз. カルムィクにおける水力発電所建設について。

（3）被弾圧者の追悼

被弾圧者の名前をアルヒーフから探し出し、各人のデータ（生年月日、職業、不当な判決の内容、埋葬地、名誉回復日時等）を時には顔写真をつけて出版する作業が各地で進んでいる。

① История без белых пятен : сборник материалов о работе по восстановлению справедливости в отрошении жерт репрессий,имевших место в Сахалин.обл.в период 30-40-х и начале 50-х годов,Южно-Сахалинск,1989. 56с. （サハリン地方）

② Возвращение памяти : историко-публицистический альманах, Новосибирск,1994.

③ Возвращенные имена : (Ярославцы - жертвы репрессий 1935-1938

гг.),Ярославль,1991. 101с. ヤロスラヴリ州の弾圧(4 も)

④ Не передать забвению : Книга Памяти жертв Политических репрессий,связанных судьбами с Ярославской области, Т.2, Ярославль, 1994. 5000 экз.

⑤ Возвращенные имена : (О репрессированных в годы культа личности Сталина в Башкирии),Уфа,1991. 287с. (バシキーリヤにおける被弾圧者の追悼 (6 も))

⑥ Шафиков,Газим Газизович,И повесть и жертвы эпохи.Их память народа хранит : Портр. выдающихся деятелей Башкирии",Уфа,1991. 221с.

⑦ Реквием : Книга памяти жертв политических репрессий на Орловщине,т.2,Орел,1995. 3000 экз. 322с. (オリョールにおける弾圧につて。これは第 2 巻。第 3 巻は Реквием : книга памяти жертв политических реприсcий на Орловщине,том третий,Орел,1996. 3000экз.)

⑧ Балакин,Юрий Николаевич,Горькая память : очерки (По истории Орлов. края),Орёл,1992. 114с. (同じくオリョール州について)

⑨ Карачаров,Юрий Григорьевич,Все равно буду жить : Документательный рассказ о жертвах сталин.репрессий в Кировской области,Киров,1990. 191с. (キーロフ州における弾圧)

⑩ Назвать поименно : Свидеельствуют жёртвы и очевидцы сталинского террора,Горький,1990. 160с. 10000экз. (ゴーリキー州における弾圧について。ラスコーリニコフののほかМеньковский,Таубес,Спасскоя らについても言及あり。)

⑪ Забвению не подлежит・О репрессиях 30-х・начала 50-х годов в Нижегородской области,Нижний Новгород,1993. 1000экз. (ニジェゴロド州における犠牲者の集成)

⑫ Книга памяти жертв политических репрессий в Нижегородской области,Н.Новгород,1997. 1500экз. (同じくニジェゴロド州について)

⑬ Их имена останутся в истории,вып1,Чебоксары,1993. 300 экз, 312с. (チュバシにおける弾圧の犠牲者を含め、チュバシの発展に貢献のあった計 57 人についてその経歴をまとめたもの。)

⑭ Список расстрелянных в г.Боровичи по решением Особой тройки (авг. 1937 г.- март 1938 г.), Борович, 1995. 500 экз. （ボロヴィチはノヴゴロド市の東に位置する一地区で、この本は同地区のトロイカの決定で銃殺された531名の氏名がまとめられている。）

⑮ Книга памяти жертв политических репрессий Новгородской области, т.3 (1937-1941 гг.), Рос. Ассоц.жертв полит. Репрессий, Новгород.отделение. 1994., 1000 экз. Новгород. （ノヴゴロド州における弾圧）

⑯ Книга памяти жертв полит. Репрессии Новгородской области. Т.2 (1937.1938 гг. Рос. Ассоциации жертв полит. Репрессий, Новгород.отделение), 1994, 1000 экз.

⑰ Леинградский мартиролог, 1937-1938. т.1, август.сент. 1937 года,СПб, 1995. 2000 экз. (1937年8月から38年11月にここで約4万人が殺された。第一巻には37年8月、9月の犠牲者の氏名。最後に組織、地名の索引。)

⑱ Правда истории : память и боль : сборник материалов о репрессированных в 30-50-е гг. в Белоруссии,Минск,1991. 431с. 5000экз. （白ロシアの共産主義者、コムソモール員、非共産党員の名誉回復について。）

⑲ Сафаров,Рубэн Акопович,По долгу памяти : Штрихи к портр видных деятелей Узбекистана,Ташкент,1991. 188с. （ウズベキスタンにおける名誉回復作業）

⑳ Память судовтроителей · жертв пепрессий : крат.справ",Ленинград,1990. вып.1 1990. 49с. （レニングラードの造船関係者で粛清された人に関するリスト）

21 Реабилитация народов и граждан, 1954-1994 годы, Документы, Москва,1994. 250 экз. 305ст. （戦後の諸民族と市民の名誉回復について。）

22 Кузнецова, Елена Сергеевна, Реабилитация жертв политических репрессий, (по материалам Кемеровской области),Кемерово.1997,190с. кандидатская диссертация. (政治的弾圧の犠牲者に対する名誉回復作業に関する学位論文)

23 Списки реабилитированных и признанных пострадавшими от

политических репрессий , мемориал, 1997 . 239с.

24 Возвращенные имена : Сборник публицистических статей,в 2 кн.,Москва,1989.344с,318с.

25 Реабилитирован посмертно : вып. 1-2,2-е,Москва,1989. 576с.（定期刊行物に出たで出た活動家、軍人、そのほかについてのシリーズ "возвращение к правде"をまとめたもの。）

26 Реабилитация : политические процессы 30-50-х г.(сборник) (под общ.ред. А.Н.Яковлева),Москва,1991. 462с. 100000экз. （フルシチョフが第20回党大会で行った演説、いわゆる「リューチン綱領」、スターリン批判後の名誉回復の過程、でっち上げ裁判の解説などが収録されている。）

27 Возвращенные имена : писатели и поэты.Деятели культуры и искусства / Коми респ.б-ка",Сыктывкар,1992. 121с.

28 Моисеев,Сергей Борисович,Возвращенные имена",Волгоград,1990. 128с.（ヴォルゴグラードの著名活動家：Шеболдаев,Птуха,Варейкис,Семёнов,Смородин,Минин,Чуянов などの運命について。）

29 Петля - воспоминания очерки документы,"Волгоград,1992. 337с, 2000 экз. （20人あまりの人の回想。最後に200数十名の弾圧された人の氏名のリスト。同じくヴォルゴグラード。）

30 Годы террора : книга памяти жертв политической репрессии, Пермь, 1998. 3000 экз.

31 Белая книга о жертвах политических репрессий, т.6. Самара, 3500 экз. Белая книга : О жертвах политических репрессий. Т.5 самара. 1997. 800 экз. （サマラにおける追悼集（未見)、1－4巻も出ていると思われる。）

32 Не предать забвению : книга памяти жертв политических репрессий, т.5, Псков обл. Псков, 1998. 2000 экз.（これも同じくシリーズでプスコフ州における追悼集）

33 Помнить поименно. Книга памяти жертв политических репрессий Липецкого Края с ноя.1917 года,Липецк,1997. 1000 экз. （リペツク地方における革命以来の政治弾圧者を追悼するもの）

34 Забвению не подлежит : кн. Памяти ,Дубна,1997.(издат. Отдел Объед.ин-а ядр.исслед.) 300 экз. （ドゥブナにおいて）

35 Российская федерация Ивановская область, Книга памяти : посвящается 80-летию образования Ивановской области, том 6,Иваново,1997. （これもシリーズでイヴァノヴォにおける弾圧に関するもの）

36 Возвращение к правде : (Из истории политических Репрессий в Тверском Крае в 20-40-е и начале 50-х годов), документы и материалы, Тверь, 1995. 3000 экз. （トヴェリ州における弾圧）

最後にモスクワにおける粛清については、①は政治的な理由からモスクワで銃殺された人々のリストで第1巻には1934－40年にドン火葬場に葬られた670人のデータ、顔写真が残されているものについてはそれも添えられている。第二巻には1926－36年に同様に偽りの罪を着せられて銃殺されたワガニコフ墓地に葬られた約1000人の名前が掲載されている。未見だが②、③のような文献も出ている。Расстрельные списки,выпуск 1.2,Москва,1993. том1, 204с, 5000 экз. Том2, 303с, 2000экз. 1995.

① Жертвы репрессий,Москва,Юринформ,1993.

② Книга памяти т.1. 1923-1939. Москва.1998 7000 экз.

（4）被弾圧者による回想

弾圧されながらもラーゲリを生き抜いた人々による回想が多数出版されている。

① андлер,Асир Семенович,Узелки на память : Записки реабилитированного",Магадан,1988. 94с.

② Ротфорт,Михаил Семенович,Колыма - круги ада : Воспоминания",Екатеринбург,1991. 101с.

③ Память колымы : Воспоминания,письма,фотодокументы о годах репрессий",Магадан,1990. 113с.

④ Поль,Игорь Леонидович,Оглянись со скорбью : история одной семьи : документальная повесть,Иркутск,1991. 191с.

⑤ Картель, Илья Алексеевич и др.,Пока дышу - надеюсь : сборник

воспоминаний репрессированных в годы культа личности Сталина",Кемерово,1991. 325с. (3人の著者がスターリン時代の弾圧の犠牲者を回想したもの。)

⑥ Сталинск в годы репрессий : Воспоминания, письма, документы, вып.2, Новокузнецк, 1995. 142с. 2000 экз. (スターリンスクはケメロヴォ州のノヴォクズネツクが 1932 年から 61 年にかけて呼ばれていた名称である。)

⑦ Мазур,Дмитрий Прокофьевич,Наказание без преступления : Записки реабилитированного ",Краснодар,1992. 413с.

⑧ В.Славкин,Памятник неизвестному стиляге,Москва,1996.

⑨ Л.А.Гильди,Расстрелы,ссылки,мученья,СПб,1996.

⑩ Сахновский. Мирон Васильевич. Смирнов. Сергей Иванович, Заколдованная жизнь. Я не виновен. (Воспоминания о ГУЛАГе). Уфа , 1998. 191с. 3000экз. (二人の元囚人の回想)

⑪ В.В.Кураев, Дневник ссыльного большевика (1933-1935),Москва,1998. 800экз. (最近までアルヒーフに保管されていたもの)

⑫ В.Ф.Джунковский, Воспоминания – том первый,второй,Москва,1997.

⑬ Борис Рунин, Мое окружение : записки случайно уцелевшего,Москва,1995. 218 с. 1000экз.

⑭ Г.Гергардт-Федоров,Записки сына Врага Народа,Москва,1996.

⑮ Адекс Линкевич, Выживание в зоне, Минск, 1999.

⑯ Н.Н.Илькевич, Адам Бабарека : Арест лагерь смерть, Смоленск, 1999.

⑰ Верните мне свободу ! : Мемориальный сборник документов из архивов бывшего КГБ – Деятели литературы и искусства России и Германии – жертвы сталинского террора, Москва, 1997. (ロシア・ドイツの文学、芸術関係者でスターリン弾圧の犠牲になった人々のメモワール。)

⑱ Валерий Фрид,58 1/2 : записки лагерного придурка,Москва,1996г.

⑲ Ашкенази,Марк Борисович,И было в те дни : Очерки,воспоминания",Нижний Новгород,1991. 173с. 10000экз. (ニ

ジニノヴゴロドのジャーナリスト（1887－1981）による回想、1962年に書かれたが死後10年たって出版されたという。あとがきをД.Лихачёв が執筆している。）

⑳ Голидын,Сергей Михийлович,Записки уцелевшего,Москва,1990. 731с. 100000экз. （有名な公爵Голицын 家の代表の一人で、ロシア北部、ベロモルストロイ等について、1920年代後半のモスクワにおける恐ろしい生活、1930年代スターリン粛清の嵐等について。）

21 Донесь тяготеет : сборник воспоминаний дневниковых записей,стихотоворений узников тюрем и лагерей 20 - 50-е годы",Москва,1989. 587с.

22 Меньшагин,Борис Георгиевич,Воспоминания : Смоленск,Катынь,Владимирская тюрьма,1988. 247с. （ラーゲリの回想やカチンでの遺骸掘り起こしに立ち会ったことなど。）

23 Белов,Павел Федорович,Оборванная молодость : Воспоминания репрессированного ",Ярославль,1991,144с. 10000экз.

24 Кукушев,Николая Львович,Звериада : воспоминания,Москва,1991. 173с. （著名な飛行士ヴォドピヤーノフらと極地飛行を行った飛行士ケクシェフが、二回（1931年には短期、1948年には8年）にわたり弾圧を受けたことについての回想。）

25 Копелев,Лев Зиновиевич, Утоли моя печали : Мемуары",Москва,1991. 332с. （3部作の3作目　第一作はИ сторворил с себе кумира 第二作はХранить вечно　西側で出版される。）

26 Тыквенко,Константин Маркович,Реабилитированные посмертно : Горькие воспоминания,Днепропетровск,1991. 48с. 5000экз. （父が銃殺、叔父が16年の宣告を受ける。1933年から41年までの社会、政治状況を再現。）

27 Ефимов,Иван Иванович,Не сотвори себе кумира,Ленинград,1990. 429с.

28 Заболоцкий,Николай Алексеевич,История моего заключение,Москва,1991. 45с.

29 Конаржевский,Анатолий Игнатьевич,10 лет на острие бритвы " мемуары узника Гулага",Кишнев,1991. 166с. 4000экз. (スターリン体制下でも社会の健全な精神は失われなかったとする回想。)

30 Морозов,Александр Григорьевич,Девять ступение в небытие,Саратов,1991. 384с. 15000экз. (著者及びオクジャヴァの回想。)

31 Возвращение памяти " ист.публицист.аль./ сост. и авт. вступ. И.В.Павлова",Новосибирск, 277с.

32 ...Иметь силу помнить : рассказы тех,кто прошёл ад репрессий",Москва,1991. 367с. (党員、コムソモール員、学者、技師、ジャーナリスト等で弾圧された人々20人からなる文章。)

33 Брухис,Лев Иосифович,Чужой спектакль : Кн.воспоминаний,Рига,1990. 132с. 35000экз. (1941年から15年 にわたる時代の回想。)

34 Усатюк,Александр Фёдорович,Исповедь коммуниста : Критика системы сталинизма,Рига,1990. 246с. 3000экз. (スターリン崇拝時期の党員と党の運命について率直に述べる。1935-56 年、20 年以上ソ連の検察機関で働き、最も重要な時期の目撃者に。60-70年代に書かれて出版されなかったもの。特にラトヴィアでの弾圧について少し触れている。)

35 Р.Х.Гизатулин,Нас было много на челне, (1920年代末から50年代にかけての回想。モスクワの高等教育機関における学生、37 年の雰囲気、人民の敵の子供などについて。)

36 Заяра Веселая,7-35 - воспоминания,Москва,1990. 20000экз. (1949年に逮捕された人の話。)

37 М.Ф.Левкович-Маслюк,Сквозь бури времени - документальная повесть,Днепропетровск,1990. 192с. 25000экз. (Мария Остаповна Левкович の一生について。1892年生まれ、1917年10月キエフでボリシェヴィキのほう起に参加。18年クループスカヤと文部省でともに働く。内戦時ウクライナで地下活動 23-27年ウクライナの婦人部長 集団化のときシェフチェンコ管区執行委員会議長。1935 年に粛清さ

れる。56年までの話。)

38 Георгий Жжёнов,Омчагская долина,Москва,1988. 64. 150000экз. (1915年生まれ、劇、俳優として活躍、1938年逮捕、54年釈放、それからレニングラードで俳優として働く、68年から現在までモスクワに住む。その回想。)

39 Айно Куусинен,"Господь низвергает своих ангелов - воспоминания 1919-1965",Петрозаводск,1991. 240с. 70000экз. (邦訳もある『神はその天使を破滅させる』島谷逸夫、島谷謙訳、社会評論社、1990年)

40 В.А.Самсонов,Жизнь продолжится - записки лагерного лекпома,Петрозаводск,1990. (著者はペトロザヴォーツク出身、ペトロザヴォーツク大学の教授、病理解剖学者。若いとき58-10項によりラーゲリへ。фельдшерの試験に合格した。ラーゲリの苦しい生活の中でも慈悲心をもって周囲の人々に生き抜くよう助けた人々について。)

41 Виктор Самсонов,Парус поднимаю - записки лишенца,Петрозаводск,1993. 3000экз. (上の本の続編)

42 Борис Сопельняк, Смерть в рассрочку, Москва,1998.

43 Вера Пирожкова, Потерянное поколение,СПб,1998.

44 Инна Шихеева-Гайстер,Семейная хроника времен культа-личности 1925-1953,Москва,1998.

45 Владимир Чиков,Нелегалы - досье КГБ но.13676,том1.2,Москва,1997.

46 Панин,Дмитрий Михайлович,Лубянка - Экибастуз Легер.запис.",Москва,1990. 575с. (ソルジェニーツインと47-52年にかけて同じラーゲリで生活する。『イワン・デニーソヴィチの一日』にも出てくるらしい。1911年モスクワ生まれ、1972年亡命、1987年パリで死去。)

47 Разгон,Лев Эммануилович,Перед паскрытыми делами : по материалам следств.дел КГБ",Москва,1991. 46с. 84000экз.

48 Вознесенский,Эрнест Александрович,Вхождение в жизнь",Ленинград,1990. 84с. (レニングラード財政・経済大学の教授 父

はレニングラード大学学長で粛清された。その思い出。)

49 Ковалев,Афанасий Федорович,Колокол мой - правда : О репрессиях 30-х гг.",Минск,1989. 239с. 35000экз. (元白ロシア人民委員部議長で9つのラーゲリをまわった思い出を記す。)

50 Акшевский,Игорь Мечиславович,Он любил эту землю : повесть о наркоме,неправедно осуждённом,сосланном и вероятно,расстрелянном,не получившем после своей смерти пяди родной земли на могилу : о наркоме земледелия БССР Д.Ф.Прищепове",Минск,1991. 125с. 2300экз.

51 Газарян,Сурен Ованесович,Это не должно повториться :документальная повесть,Ереван,1990. 342с. (グルジア、アルメニアで活動。1937年に粛清される。1982年死去)

52 Войтоловская,Адда Львовна,По следам судьбы моего поколения,Сытывкар:Коми,1991,334с. 15000экз. (ギンズブルグ、シャラーモフの回想と並び称されるとある。34年に逮捕される。)

53 Печальная пристань : сборник,Сыктывкар,Коми,1991. 413с. 10000экз. (回想、ドキュメント、詩など)

54 З.Я.Анджукаев,Хонин Косиев : жизнь и деятельность - биографический очерк,Элиста,1992.с.72с. 1000экз. (カルムィクの文化・教育活動家で、1938年に粛清、死後名誉回復された人物に関するもの。)

55 Тюремный мир глазами политзаключеных : 1940-1980-е годы, Москва, 1998.

56 Два следственных дела Евгении Гинзбург : полит. Жертвы тоталитаризма в России, Казань, 1994, 5000 экз. (このエフゲニヤ・ギンズブルグの著作 Гинзбург,Евгения Семеновна,Крутой маршрут,Москва,1991. 734с.は日本語にも訳されている『明るい夜暗い昼』(中田甫訳、集英社文庫、1990年))

(5) 矯正労働収容所(グラーグ)について

矯正・労働ラーゲリに関する近年の研究の集大成としてメモリアルより出版さ

れたのが①であり、ホームページでも公開されている。クズバスにおけるラーゲリを研究したのが②－③である。キーロフ州北部に存在し、10の木材グラーグのうちの一つであるБятлагの歴史（1930年代から1960年代まで）をアルヒーフ史料をもとに叙述したものが④である。コミ地方のラーゲリについても研究が出ている⑤、⑥。グラーグの経済に関する文書を集めたのが⑦である。またグラーグに関して2冊の本がシリーズで出た⑧、⑨。シベリアのラーゲリの人的構成などに関する論文も書かれている⑩。この他、グラーグにおける抵抗⑪、劇場⑫、プレス⑬などについての著作、その他が挙げられる⑭－⑰。⑮の邦訳が出た(ジャック・ロッシ『ラーゲリ（強制収容所）註解事典』校閲染谷茂、監修内村剛介、梶浦智吉、麻田恭一他訳、恵雅堂出版、1996年)。

① Справочник : Система исправительно-трудовых лагерей в СССР 1923-1960, Москва,1998. 600с. 2000 экз.

② Гвоздкова, Любовь Ильинична, Сталинские лагеря на территории Кузбасса, Екатеринбург, 1997, 458с. Докторская диссертация

③ Л.И.Гвоздкова, Сталинские лагеря на территории Кузбасса(30-40-гг.) ,Кемерово, 1994.

④ Виктор Бердинских, Вятлаг,Киров,1998.

⑤ Морозов Н.А. Особые лагеря МВД СССР в Коми АССР (1948-1954 годы), Сыктывкар, 1998. 300 экз.

⑥ Морозов Н.А. ГУЛАГ в Коми крае (1929-1956),Сыктывкар,1997. 300экз. 190с.

⑦ Экономика ГУЛАГа и ее роль в развитии страны 1930-е годы : сборник документов, Москва, 1998.

⑧ Гулаг : его строители, обитатели и герои : (Россия – по дорогам фанатизма и мученичества) Москва, Междунар. Об-во прав человека, СПб, 1998, Норма. 5000 экз.

⑨ Гулаг : его строители, обитатели и герои (раскулачивание и гонение на Православную Церковь пополняли лагеря ГУЛАГа), Под ред. И.В.Добровольского, Франкфурт/Майн-Москва, 1999.

⑩ Мить Александр Анатольевич, Численность и состав заключенных

Сибирского исправительно-трудового лагеря, 1942-1960 гг., Кемерово. 1997. кандидатская диссертация, 245с.

⑪ Сопротивление в ГУЛАГе, Воспоминания, письма, документы, Москва,1992. 240с. 950экз.

⑫ Театр ГУЛАГа :воспоминания,очерки,Москва,1995.

⑬ А.Ю.Горчева, Пресса Гулага, Москва, 1996.

⑭ Сандлер,Асир Семенович , Элис,Мирон Маркович,Современники ГУЛАГа,Магадан,1991. 557с.（コリマ、カザフスタンでの流刑について日記、запись、弾圧された人の断片）

⑮ России,Жак,Справочник по ГУЛАГу：в 2 т,2-е,Москва,1991.

⑯ Правда о ГУЛАГе ： Свидетельствуют очевидцы,Тула,1991. 284с. 10000 экз.（6人の元囚人による回想　ソルジェニーツイン、Олег Волков "Погружение во тьму"に続くものとして。彼らよりも先に書いていた人も）

⑰ Ямпольский, Анатолий Соловонович. ГУЛАГ 80-х Рассказы о. Иваново. 1998. 372с. 995 экз. （推薦者、筆者 пережитом によれば、80 年代の反体制活動家ではなく、普通の人の逮捕から囚人生活をつづったもの。筆者はノスタルジーをもって思い出す風潮を批判。）

（6）集団化とそれに伴った諸問題

1920年代末のスターリンによるクラーク絶滅政策と強制的集団化、そして土地を奪われた農民の他の土地への強制的移住政策によりソ連の農業は大きな打撃をこうむり 1930 年代初頭の大飢饉につながってく。これらの問題に関しても新たな史料の発掘と各地方におけるその過程に関して様々な研究が出てきている。

集団化政策に関しては、総括的な文書集①の刊行が開始された。このほか、イヴニツキーによる②や、博士論文③が出ている。地域別ではウクライナ④、ウラル⑤－⑥、ザウラーリエ⑦、カレリア⑧－⑩、北部地方⑪、下流ヴォルガ地方⑫、シベリア⑬、カザフスタン⑭、クバンコサック⑮、白ロシア⑯といった地域におけるクラーク絶滅政策に関する具体的研究が出ている。また他の土地へ追放されたスペツペレセレンツィ（спецпереселенцы特別流刑囚）に関しても史料集、研究が出ている。ウラル⑰－⑱、西シベリア⑲、コミ⑳、ナルィム21、その他22へ

のスペツペレセレンツィの強制移住とその後の生活に関する文献である。

① Трагедия советской деревни – коллективизация и раскулачивание : документы и материалы. 1927-1939, том 1,май 1927-ноябрь 1929,Москва.1999.

② Н.А.Ивницкий,Коллективизация и рускулачивание (начало 30-х голов),Москва,1996.

③ Шашков,Виктор Яковлевич,Раскулачивание в СССР и судьбы спецпереселенцев (1930-1954г.г.),Москва,1995.докторская диссертация.

④ Валерий Васильев, Линн Виола, Коллективизация и крестьянское сопротивление на Украине (ноябрь 1929-марта 1930 гг.), Винница,1997.

⑤ Базаров,Александр Александрович,Кулак и агрогулаг : Коллективизация на Урале,Челябинск,1991. ч.1,1991. 319с. 12000экз.

⑥ Еремин Алексей Семенович,Коллективизация крестьянских хозяйств на среднем Урале (Ирбитскиий феномен),Екатеринбург,1997. кандидатская диссертация.

⑦ Сплошная коллективизация и раскулачивание в Зауралье, курган, 1995, 134л. 1000экз.

⑧ Никитина,Ольга Александровна,Коллективизация и раскулачивание в Карелии,Москва,1993. кандидатская диссертация.

⑨ О.Й.Никитина,Коллективизация и раскулачивание в Карелии,Петрозаводск,1997. 367с.

⑩ Сандлер,Асир Семенович,Из истории раскулачивания в Карелии,1930-1931 гг. : Документы и материалы,Петрозаводск,1991. 295с.

⑪ Доброноженко Г.Ф., Коллективизация на Севере 1929-32,Сыктывкар, 1994, 500 экз. 195с. (30年代初めの集団化とクラーク絶滅策)

⑫ Савельев, Серегй Иванович, Раскулачиваие : как это было в Нижне-Волжском крае, Саратов, 1994, 149с. (下流ヴォルガのクラーク絶滅政策)

⑬ Гушин,Николай Яковлевич, Раскулачивание в Сибири (1928-1934 гг.), Новосибирск, 1996,159с. (シベリアにおけるクラーク絶滅政策)

⑭ Народ не безмолвуствует : (по материалам конф. По теме «Насильств. Коллективизация и полит. Репрессии в Казахстане»,нояб. 1994 г.) Алматы, Простoк,1996. 302с. 5000экз. (カザフスタンにおける集団化、1995年2月アルマトゥイで行われたコンフェレンツィア Насилиственная коллективизация и политические реприсcии в Казахстане と、1994年11月にチュメニで行われたその集団化された子供、孫の集いにおける史料をまとめたもの。後半は、発表された論文など。)

⑮ Алексеенко И.И.,Коллективизация и казачество Кубани в 1929-1933 гг.,в кн.: Проблемы истории казачества,Волгоград,1995,с.236-249. (コサックの歴史、24人の研究者による論文集。1993年クラスノダール州 Анап で、Казачество в истории России の題名でコンフェレンツィア。その史料。)

⑯ Врублевский,Александр Петрович,Протько,Татьяна Сергеевна,"Из истории репрессий против белоруского крестьянства 1929-1934 гг.",Минск,1992. 144с.

⑰ Раскулаченные спецпереселенцы на Урале (1930-1936гг.) сборник документов,Екатеринбург,1993. 221с. (ウラルへのクラークの強制移住)

⑱ Т.И.Славко,Кулацкая ссылка на Урале 1930-1936,Москва,1995. Мосгорархив.

⑲ Спецпереселенцы в западной Сибири 1930-весна 1931.,Новосибирск,1992. 286с. В.П.Данилов (отв.ред.).

⑳ Спецпоселк в Коми области : по материалам сплошного обследования : июнь 1933г. Сборник документов, 1997. Сыктывкар,. 298с. 300 экз.

21 Нарымская хроника – 1930-1945 – трагедия спецпереселенцев (Документы и воспоминания)(составление и комментарии В.Н.Макшеева), Москва,1997. (クラーク絶滅政策によってシベリア、トムスクの北西に位置するナルィムへ強制的に移住させられた農民に関して特にトムスクの史料館に保存されていた文書を、1941年にエストニアで家族ともに捕えられこのナルィムへ強制的につれて来られた編者が発掘し、まとめたもの。)

22 Касперович,Эдуард адамович,"Спецпелеселенцы",Минск,1991. 110с. 1300экз.

飢饉に関しては①のような小冊子から、北カフカースにおけるその実態について②、カザフスタンの飢饉に関する③などの著作が出ている。また、この時代とは異なるが戦後期の飢饉については④がある。近年のロシアにおける集団化に関する歴史学の動きについて⑤がある。また、⑥にも集団化とそれに対する農民の抵抗が描かれていると思われる。

① Голод 1932-1933годов",Москва,1995.

② Е.Н.Осколков,"Голод 1932/1933 - хлебозаготовки и голод 1932/1933 года в Север.Казахском крае",Ростов-на-Дону,1991. 95с.

③ Валерий Фёдорович Михайлов,"Хроника великого джуга - документальное повествование",Алма-Ата,1990. 206с. 50000экз. (30年代カザフスタンの悲劇である大規模な飢饉について初めて明らかにしたもの。ただしアルヒーフ史料などに関する言及はない。)

④ В.Ф.Зима,Голод в СССР 1946-1947 годов : происхождение и последствия,Москва,1996.

⑤ Самосудов В.М., Современная отечественная историография коллективизации 1980- середины 1990 г. Омск, 1998.

⑥ Михеев, Вадим Иванович, Сопротивление курского крестьянства политике большевиков в 1918-1933 гг, Курск, 1998,254с. Кандидатская диссертация.

⑦ Великий голод в Украйн : 1932-33 = The great famine in Ukraina",Toronto,1988. 163,146с. (カナダで出版されたもの)

（7）反体制的活動

1960－70年代における異論派、反体制派に関してまとめたのが①、ソ連時代の人民の抵抗をまとめたのが②である。⑧も1980年代までをカバーしている。⑨はスターリン時代に敢えて反体制的な意志を明らかにした人々についてまとめている。⑩は特にЛ.Серебряков,А.Базилевич,Ю.Калмыковらに関する情報が載せられている。特定地域としてウラルにおける戦後の反体制派について③、文学的に反体制的な意味を持っていたものについて④、亡命地で反ソ運動を行っていた人物（ポレムスキー）の死後（1997年ドイツ）、彼の文章を集めたもの（亡命についても文献は多数に上るが本報告にはまとめて取り上げていない）⑤、体制への抵抗を亡命という形で示した外交官の一人で、亡命先でソ連の内情を暴露した本を書いていたベセドフスキーの本が最近になってロシアでも刊行された⑥。巻末には彼について解説もなされている。同じく邦訳も出ているクリヴィツキーの本もロシア語で刊行された⑦『スターリン時代』（みすず書房）。⑨はスターリン体制に抵抗した人々についての論文集。⑪は1930年代初めにスターリンを厳しく批判して執筆されたリューチン綱領として知られている「スターリンとプロレタリア独裁の危機」の他、ボルシチャゴフスキーがこの文書の運命について書いた論文が掲載されている。⑫の教科書は、1.労働者反対派、トロツキズム、新反対派、トロツキー・ジノヴィエフ、右派らのグループ分け、2.反対派の分析、理論的、3.シリャプニコフからラスコーリニコフらの反対派の文書などからなっている。戦後のモスクワ、ヴォロネジの学生による反スターリン的な地下運動グループ結成に関しても著作が出た⑬－⑭。

① Королева,Лариса Александровна. Диссидентское движение в СССР в 60- 70-е гг.,Москва,1995. 229с. Кандидатская диссертация.

② Коммунистический режим и народное сопротивление в России, 1917-1991. Москва, Посев, 3000 экз.

③ Прищепа, А.И. Инакомыслие на Урале (сер. 1940-сре. 1980 гг.),Сургут, 1998. 1000 экз.

④ Григорий Свирский,На лобном месте : литература нравственного сопротивления 1946-1986,Москва,1998.

⑤ В.Д.Поремский, Стратегия антибольшевицкой эмиграции – избранные статьи 1934-1997, Москва,1998.

⑥ Григорий Беседовский,На путях к термидору,Москва,1997.

⑦ Вальтер Кривицкий,Я был анентом Сталина,Мсоква,1991, 365с.

⑧ Лукин,Юрий Федорович,Из истории сопротивления тоталитаризму в СССР : 20-80 годы,Москва,1992. 203с. 2000экз. (1980年代までをカバー)

⑨ Они не молчали : О сопротивлении в годы культа личности Сталина : Сборник,Москва,1991. 446с.

⑩ Лимонов,Новомир Семенович,Противостояние : сборник,Москва,1991. 256с. 100000экз.

⑪ Рютин,Мартемьян Никитич,"На колени не встану,Москва,1992. 15000экз, 352с.

⑫ Б.Н.Земцов,Оппозиционные группировки 20-30-х годов (Саморазрушение революции),Москва,1992. 126с.

⑬ Жигулин,Анатолий В,Чёрные камни,Москва,1989.

⑭ Израиль Мазус, История одного подполья, Москва. 1998.

⑮ Тоталитарзм в России (СССР) 1917-1991. Опоозиция и репрессии Матиралы науч. Практ. Конф. 12-14 сент. 1995. 1998. 192с. (1995年9月、1996年9月にペルミで行われたコンファレンスに出された論文集をまとめたもの。)

⑯ Яков Рокитянский,Рейнхардт Мюллер,Красный диссидент,Москва,1996. (リャザノフについて)

⑰ Кремлевский Самосуд : секретные документы политбюро о писателе А.Солженицыне,Москва,1994. (ソルジェニーツィンについて)

⑱ Тоталитаризм и антитоталитарные движения : международная научная конференция,Харьков,1995.

⑲ Петро Григореко, В подполье можно встретить только крыс..., Москва, 1997. (グリゴレンコ)

⑳ Лукин,Юрий Федорович,Социально-политическая активность и

протест в истории советского общества : учеб пособие",Архангельск,1991. 110с.

（8）捕虜に関する問題

第二次世界大戦後、ソ連で捕虜として労働に従事した人々についての研究も進められている。ソ連の捕虜政策全般を論じたもの①、②もあれば、特定国の捕虜、例えばドイツ人捕虜を扱ったもの③－⑦がある。第二次世界大戦中捕虜になったソ連人 570 万人のうち、帰らなかったのが 330 万人。ソ連の捕虜になったドイツ人は 320 万うち、110 万人は捕虜で死亡したという（数字に関して論争ありとのこと）が、⑦は 400 人以上のドイツ軍高官捕虜のリストについてまとめたものである。また、フィンランド人捕虜についてまとめたものに⑧がある。日本人捕虜についてもいくつかの研究が出ておりシベリアにおける日本人捕虜全般について⑨のほか、特定地域、ブリヤート共和国⑩、ハバロフスクにおける日本人捕虜⑪に関する研究がある。⑪の作者は、ハバロフスクの『メモリアル』の議長だが、ジャーナリストで観光案内しながらアルヒーフ文書を豊富に使用して本書を書いたという。

① Власова,Ирина Вениаминовна. Работа с военнопленными в тыловых районах советских фронтов в годы Великой Отечественной войны,Москва,1994,236с. Кандидатская диссертация.

② Безбородова И.В. Управление по делам военнопленных и интернированных НКВД – МВД СССР (1939-1953), Москва,1997.кандидатская диссертация.

③ Историк о судьбах немецких военнопленных в СССР, Москва,1997.

④ Конасов, Виктор Борисович, Политика Советского госдарства в отношении немецкои военнопленным (1941-56 гг.),Москва,1998. докторская диссертация.

⑤ Конасов В.Б., Судьбы немецких военнопленных в СССР : дипломатические, правовые и политические аспекты проблемы, Очерки и документы, Вологда, 1996, 1500 экз. 321с.

⑥ Конасов В.Б. Судебное преследование немецких военнопленных в

СССР. Внешнеполитический аспект проблемы, Москва,1998. 1000 экз.

⑦ Военнопленные второй мировой войны : генералы вермахта в плену, Москва, 1998.

⑧ В.П.Галицкий, Финские военнопленные в лагерях НКВД (1939-1953 гг.), Москва, 1997

⑨ Виктор Карпов, Пленники Сталина – Сибирское интернирование Японской армии. 1945-1956 гг., Киев- Львов, 1997.

⑩ Базаров, Олег Дашиевич. Японские военнопленные в Бурятии , 1945-1948гг, Иркутск, 1997. 184с. Кандидатская диссертация.

⑪ Кузьмина М.А.Плен : (Японские военнопленные в Хабар.каре),Комсомольск-на-Амуре,1996.1000экз.

一方、ソ連人でドイツ、フィンランドの捕虜になったものについても以下のような文献が出版されている。

⑫ Преодоление рабства : фольклор и язык остарбайтеров : 1942 – 44 , Москва, 1998. 200с.1000 экз. （ドイツ軍に連行されて彼らのために働いたソ連人、いわゆる「東方労働者」が残した文章について。また、ロシア語で東方労働者に関する代表作は Полян, Жертвы двух диктатур. Остарбайтеры и военнопленные в Третьем рейхе и их репатриация, Москва, 1996. であるらしい。）

⑬ Шимон Янтовский,Лагерь советских военноплённых - Евреев в Финляндии (1942-1944 год) : справочник воспоминаний и документов,Иерусалим,1995. 2 сент.

⑭ Н.Д.Толстой, Жертвы ялты, Москва, 1996. 544с. 5000экз. （1944 年から 47 年にかけて西側連合国がソ連に引き渡した 200 万人以上のロシア人の悲惨な運命について。1978 年に英語で出版され、1988 年にパリでロシア語で出版されていた。）

また、被占領地におけるナチス・ドイツによるユダヤ人絶滅政策についても史料が出ている

⑮ Черная Книга : о злодейском повсеместном усийстве евреев немецко-фашистскими захватчиками во временно оккупированных

районах советского союза и в лагерях польши во время войны 1941-1945 гг.,Вильнюс,1993.

⑯ Неизвестная черная книга,Иерусалим - Москва,1993. 464с. 占領されたソ連領土におけるユダヤ人絶滅策について。

（9）学者と粛清

特に様々な学問分野の学者がスターリン時代受けた弾圧に関しても、まとまった著作が出されている。①は各学問分野におけるスターリニズムの影響、様々な学者の悲劇的運命に関する論文集、それに各種史料が入っている。②は①の続編で同様の内容である。③はヴァヴィーロフ、コンラッド、リャザノフら弾圧された著名な学者約 10 人に関する個別の論文の他、最後には弾圧された 100 名を越えるアカデミー会員、同通信会員のリストが載せられている。④はアラブ研究に貢献した 3 人の学者の悲劇的な人生を中心に 20－30 年代のソ連におけるアラブ学を検討したものである。

特にルィセンコ主義がソ連の生物学に及ぼした悪影響に関しても多くの出版がなされている。それとともに、弾圧されたヴァヴィーロフら著名な科学者にも光があたっている⑤－⑧。

① Репрессированная наука (под общей редакцией М.Г.Ярошевского), Ленинград, 1991. 560с. 12000 экз.

② Рессированная наука (под общей редакцией М.Г.Ярошевского),выпуск II,Санкт-Петербург, 1994. 320с. 3000 экз.

③ агические судьбы : репрессированные ученые Академии наук СССР.Москва,1995. 255с, 1070 экз.

④ естные страницы отечественного востоковедения, Москва, 1997. 392с. 600 экз.

⑤ Е.С.Левина,Вавилов,Лысенко,Тимофеев-Ресовский,Москва,1995.

⑥ Н.И.Вавилов : документы,фотографии,Санкт-Петербург,1995.

⑦ Николай Иванович Вавилов : научное наследие в письмах,международная переписка,том1,Петроградский период

1921-1927,Москва,1994.

⑧ Суд палача：Николай Вавилов в застенках НКВД – биографический очерк. Документы, Москва, 1999.

⑨ С.Э.Шноль, Герои и элодеи Российской науки, Москва,1997. （筆者は生化学者、生物物理学者でヴァヴィーロフ、ティモフェーエフ・レソフスキーら生物学者他についてまとめたもの）

その他以下のような文献がある。

⑩ Г.Озеров,Туполевская Шарага,Посев,1973.（著名な飛行機設計者ツポレフに対する弾圧について。最近、内容を増補した英語版が出版されている。）

⑪ В.И.Вернадский,Публицистические статьи,Москва,1995.

⑫ Куманёв,Виктор Александрович,30-е годы в судьбах отечественной интеллигенция,Москва,1991. 255с.

⑬ Возвращенные имена：Сотрудники АН Беларуси,пострадавшие в период сталинских репрессий,Минск,1992. 120с.

（１０）宗教的弾圧

ソ連時代の国家と宗教との関係、各種教会への国家による弾圧、利用などに関して大量の文献が出版されている。この分野の学位論文が増大していることがわかる。

① Александр Нежный, Комиссар дьявола, Москва, 1993. 272с. 50000 экз.

② Русская православная церковь в советском время,книга1,2,Москва,1995.

③ О.А.Лиценбергер,Евангелическо-лютеранская церковь Святой Марии в Саратове (1770-1935),Саратов,1995.

④ Лиценбергер Ольга Андреевна,Евангелическо-лютеранская церковь и советское государство (1917-1938),Саратов,1997. кандидатская диссертация.（聖書ルター教会の活動）

⑤ Лютеранская церковь в Советской России (1918-1950 гг.)：документы и материалы,Москва,1997.（ルター派教会について各史料館より約 80 の文書を集めたもの。）

⑥ Д.В.Поспеловский,Русская провославная церковь в 20 веке,Москва,1995.

⑦ Коголь,Татьяна Николавна. Русская Правосбавна Церковь и государство,1917-1927гг. (На материалах Западной Сибири), Томск,1995.217с. кандидатская диссертация.

⑧ Кривова Наталья Александровна, Власть и русская православная церковь в 1922-1925 гг. (политика ЦК РКП по отношению к религии и церкви и ее осуществление органами ГПУ – ОГПУ), Москва,1998. докторская диссертация.

⑨ Разумов, Дмитрий Сергеевич, Антицерковная политика Советской власти , 1921-1929гг. (По материалам Верхнего Поволжья), Ярославль 1997. 251с. Кандидатская диссертация.

⑩ Неживых,Николай Александрович, Взаимоотношения партийных и советских органов с православной церковью в 1920-1929 гг. (На материаах Западной Сибири), Омск,1998. 206с. Кандидатская диссертация.

⑪ Петюкова О.Н.,Русская православная церковь в российской деревне в 1920-е годы (По мат.губерний Центр. России), Москва,1997. кандидатская диссертация.

⑫ Кашеваров А.Н. Государственно-церковные отношения в советском обществе 20-30 –х гг. (Новые и мало изученные вопросы),СПб, 1997 100 экз. 48с.

⑬ М.В.Шкаровский,Иосифлянство : течение в Русской православной церкви,СПб,1999.

⑭ Российская церковь в годы революции (1917-1918 гг.), Москва,1995. Материалы по истории церкви книга 8. 272с. 5000 экз. （10 月革命をまたぐ時期について 2 人の聖職者が残した回想からなる。）

⑮ М.В.Шкаровский, Русская православная церковь при Сталине и Хрущеве (государственн – церковные отношения СССР в 1939 – 1964 годах), Москва, 1999. 400с. 3000 экз. （革命から 1930 年代までの国家の

教会政策に関しても最初に触れられているし、史料に関しても解説されている。)

⑯ Религия,Свобода совести,государственно-церковные отношения в России,Москва,1996.

⑰ Архивы Кремля：Политбюро и церковь 1922-1925 гг.,Москва,1997. 99年購入 Архивы Кремля – Политбюро и церковь 1922-1925, книга 2, Москва,1998. 648с. 2000 экз. (大統領アルヒーフ他、中央の史料館よりこれまで機密とされていたソヴィエト政権初期の宗教、教会に対する弾圧政策に関する文書をまとめたもの。)

⑱ Сергей Волков,Последние у Троицы：Воспоминания о Московской духовной академии (1917-1920),Москва,1995.

⑲ Мученики,исповедники и подвижники благочестия Российской православной церкви 20 столетия ：жизнеописания и материалы к ним,книга 1,Тверь 1992. 2 сент.

⑳ Русская православная церковь и куммунистическое государство 1917-1941 документы и фотоматериалы,Москва,1996. 352с.

21 А.Ф.Иванов,Тайны храма Христа,Москва,1995.

22 Советское государство и русская православная церковь ：к истории взаимоотношений",Москва,1990. 50с.

23 Алексеев,Валерий Аркадьевич,Иллюзии и догмы：взаимоотношения Сов.государства и религии",Москва,1991. 398с.

24 Шохова,Людмила,18лет ГУЛАГа из жизни епископа Ивана Федотова",Б.Н.,1992. 192с. 20000экз. (主教 Иван Федотов の 18 年の獄中生活より)

25 Владимир Степанов (Русак),"Свидетельство обвинения",том1,2,3,Москва,1993.

(１１) 強制移住を中心とする諸民族の抑圧政策

第二次世界大戦前後に少数民族のいくつかが集団で移住を強いられた悲劇があっ

たが、この問題に関しても史料集、研究が多数出版されている。

① Иосиф Сталин - Лаврентию Берии : Их надо депортировать : документы,Факты,коммент",Москва,1992. 286с.

② Н.Ф.Бугай,Л.Берия - И.Сталину : Согласно Вашему указанию...,Москва,1995.

③ Депортации народов СССР (1930-е - 1950-е годы),часть2=депортация немцов(сент.1941-февраль 1942гг.),Москва,1995.

④ Депортации народов СССР (1930-е - 1950-е годы),часть2=депортация немцов(сент.1941-февраль 1942гг.),Москва,1995.

⑤ Гонов А.М. Проблемы депортации и реабилитации репрессированных народов Северного Кавказа : 20-90 годы 20 века, Ростов-н.д,1998. докторская диссертация.

⑥ Депортация карачаевцев. Документы рассказывают. Черкесск.1997. 5000 экз. Составитель,автор предисловия,вступительной статьи и заключения Тебуев Р.С.

⑦ Алферова И.В., Гос.политика в отношении депортированных народов (конец 30-х – 50-е гг.),Москва,1997. кандидатская диссертация.

⑧ В.И.Козлов,История трагедии великого народа : русский вопрос,Москва,1997.

⑨ Судьбы нац-ных меньшинств на Смоленщине, 1918-1938 гг., документы и материалы, Смоленск, 1994. 1000 экз. 320с. （スモレンスク州の少数民族の運命について。）

⑩ Хунагов А.С, Депортация народов с территории Красноярского края и Ставрополья, Москва.1998. кандидатская диссертация.

チェチェン人、イングーシ人に対する強制移住を中心とした弾圧に関してはボリュームは小さいがいくつかの冊子が出版されている（⑪－⑭）。

⑪ Авторханов,Абдурахман,Убийство чечено-ингушекого народа,Москва,1991. 79с.

⑫ Трагедия ингушеского народа : сборник",Грозный,1991. 61с.

⑬ Живая память : О жертвах сталинских репрессий : сборник М-во культуры ЧИАССА,Грозный,1991. 80с.

⑭ Джургаев,Магомед Юсупович,джургаев,Олег Маговедович,Курга ада : О насильств.выселении чеченцев и ингушей в КазССР и о репрессиях 30-50-х гг в СССР,Грозный,1989. 64с.

⑮ Н.Ф.Бугай, А.М.Гонов,Кавказ : народы в эшелонах (20-60-е годы),Москва,1998. (カフカース諸民族についてまとめたもの)

⑯ Шабаев,Давид Викторович,Правда о выселени балкарцев - Начальн.,Эльбурс,1992. 276с.

⑰ Хутыз,Ким Кансаович,Адыги в многонациональной семье народов Севернаого Кавказа : опыт и уроки (1917-1940гг.),Майкоп,1991. 268с. 1000экз. (当時の民族政策の一例をしるには参考になるかもしれない。)

⑱ Н.Ф.Бугай, Операция «Улусы», Элиста, 1991, 88с, 20000экз. (カルムィク人の強制移住について新たに発掘された史料をもとにまとめたもの。)

1944年5月に中央アジアへ強制移住させられたクリミア・タタール人と、その帰還運動に関しても一連の文献が出ている。

⑲ Червонная,Крымскотатарское национальное движение (1994-1996),Москва,1997.

⑳ Крымские татары : проблемы репатриации,Москва,1997. 172с. 500 экз. (クリミア・タタール人に関する諸問題に関する論文集。)

21 Сафонов,Николай Степанович,Записки адвоката : Крым.татары,Москва,1990. 175с.

22 Забвению не подлежит (Из истории Крымскотатарской государственности и Крыма),Казань,1992.256с. 11000экз. (今までクリミア・タタールについて客観的な記述なかったということだが、著名な学者らによってクリミアへのタタールの移住から現代までを通観する試み。)

朝鮮人に関しても、そのロシアにおける歴史、強制移住に関して一連の文献が発表されている

23 Кан Г.В., История корейцев Казахстана, Алматы, 1995. 208стр.

24 Белая книга : О депортации корейского населения России в 30-40 гг. : междунар.конференция корейских ассоц.Моск.мождунар.ун-т.Москва,1992. 208с. 3000экз.

25 Нам С.Г. Российские корейцы : история и культура (1860 –1925 г г.),Москва,ИВ РАН,1998. 250экз.

26 Ли У Хе,Ким Ен Ун, Белая книга о депортации корейского населения в 30-40-х годах кн.2. Москва,1997. МККА 302с. 1000 экз. (第一巻は1992年に出版)

27 П.Г.Ким,Корйцы Узбекистана,Ташкент,1993.

28 Г.Ким и Д.Мен,История и культура корейцев Казахстана,Алматы,1995.

29 Я.М.Агарунов,Большая судьба маленького народа : воспоминания, Москва,1995.

30 Так это было : нац. репрессии в СССР 1919-1952гг.,Документы,Вомпоминания,фольклор,публицистика,проза,поэзия,драматургия,в 3т,Москва,1993. том-1,Корейчы,курды,немцы,карачаевцы и прочие советские народы. том-2,Карачаевцы,калмыки,Ингуши,Чеченцы,Балкарцы и прочие советские народы. том-3,

31 Четвёртая сессия Верховного Совета РСФСР :Бюл. совмест.заседания Совета республики и Совета национальностей Москва, Сборник законодательных и нормативных актов о репрессиях и реабилитации жертв политических репрессий,Москва,1993.

32 Репрессии против поляков и польских граждан, Москва, 1997. (ポーランド人に対する弾圧) Густав Герлинг-Грудзинский,Иной мир. советские записки,Москва, 240с. 50000экз. (ポーランドの有名なジャーナリスト、作家。グラーグで生き延びアンデルス軍の一員として闘う。ロシア国民への敵意でなく共感、希望、善意を抱く。ポーランド語は1951年に出版されていたがロシア語では初めて。)

33 Карельские дело : Депо о так называемой Карельской буржуазно

й националистической террористической контрреволюционной организации,Тверь,1991. 39с. （トヴェリ州に住むカレリア系民族に関する問題）

（１２）ドイツ人問題

ロシア、旧ソ連諸国に在住する諸民族のうち、ドイツ人に関してはかなりの史料集、研究が出版されているのが目立っているといえよう。強制移住させられ、民族名を冠する共和国がつぶされ、その後も復活することがなかったというドイツ民族の苦難の歴史、第二次世界大戦時には祖先の祖国と戦わねばならなかったという複雑な事情、等ドイツ人問題は多民族国家ロシアにおいても特異な位置を占めている。ドイツ人に関してまとめることにしたい。1762－64 年にツァーリ政府が未開地の開拓のため外国人の入植を進めたのが期限だが、1770 年までに大部分がドイツ人からなる 100 以上のコロニーが作られ、19 世紀半ばには 500 を越えるようになった。そのうち土地不足も深刻になり、オレンブルグ、アルタイ、中央アジア、カザフスタンへの移住プロセスが進んだ。このようにロシアの中に住むドイツ人一般に関するものと、特定地域のドイツ人に関する文章が見られる。

カザフスタンのドイツ人①、アルタイのドイツ人②、シベリアのドイツ人③について、④の著者は第一国家ドゥーマの代議員で、150 年にわたるヴォルガ沿岸ドイツ人についての歴史を執筆したいてのだが、第一次大戦と革命のためにその後 80 年間出版できなかったのだが、今回それが出版されたということである。⑤はドン、カフカース、ヴォルガのドイツ人についてまとめたものである。⑥は、ロシアにおける移住ドイツ人の様々な時期における活動についての論文集であり、⑦はロシア・ドイツ人の歴史全般に関する文書をまとめたものである。⑧は、戦前存在したドイツ人自治共和国の歴史に関する博士論文である。⑨もソ連時代を通じたドイツ人の民族自決に関する論文である。⑩はキルギスタンに強制移住させられた人の回想など、特にソ連在住のドイツ人の悲劇についてまとめたものでアルヒーフ文書も含んでいる。⑪は 1930 年代にソ連へ移住したドイツ人とその後の悲劇についてまとめたものである（なぜ移住したのか）。⑫はドイツ人も免れなかった集団化についてまとめたもの。⑬は戦時中に「労働軍」（収容所に入れられ、軍事的組織を持ち、経済活動に利用された）として利用されたロシア系ドイツ人についてまとめたものである。この点、捕虜に関する文献と重なりあうとこ

ろがある。この他、露独関係についてまとめたもの⑭や、特に戦後のドイツ人による民族主義的な運動に関してまとめた一連の著作が挙げられる⑮－⑰。また、ドイツ人の移住動向についてまとめたものもある⑱。ドイツ人に関する研究は活発に行われているように思われる。

① Из истории немцев Казахстана (1921-1975 гг.), сборник документов, Алматы- Москва, 1997. 2000 экз, 376с.

② Малиновский Л.В.,Немецы в России и на Алтае : популярно-исторические очерки,Барнаул,1995. 182с. 2200экз.

③ Немцы в Сибири : история и современность : материалы международ. Науч.практ. конф.(Омск 17-19 апр. 1996г.),Омск.1997. 200 экз.

④ Яков Дитц, История поволжских немцев – колонистов, Москва,1997. 496с.3000 экз.

⑤ Российские немцы на Дону,Кавказе и Волге : материалы Российско-Германской научной конференции.

⑥ Немцы в России – люди и судьбы, Санкт-Петербург,1998. 312с. 600 экз.

⑦ История Российских Немцев в документах (1763-1992 гг.),Москва.1993.

⑧ Герман,Аркадий Адольфович, Национально-территориальная автономия немцев Поволжья,1918-1941 гг., Саратов,1995,559с. Докторская диссертация.

⑨ Овсянников Валерий Петрович,Национальное самоопределение и проблема восстановления самоуправления российских немцов /1920-1991гг/,Тольятти,1996. кандидатская диссертация.

⑩ Штраус. Алексей Александрович. Панкратц. Светлана Яковлевна, Свидетельства преступлений : российские немцы в 1917-1956 гг. Бишкек, 1997 . 250с.

⑪ Олег Дель,От иллюзий к трагедии : немецкие эмигранты в СССР в 30-е годы, Москва,1997.

⑫ Л.П.Белковец,"Большой террор" и судьбы немецкой деревни в Сибири (конец 1920-х - 1930-е годы), Москва,1995.

⑬ А.А.Герман, А.Н.Курочкин, Немцы СССР в турдовой армии

(1941-1945),Москва,1998.

⑭ Россия и Германия,выпуск 1,Москва,1998.

⑮ Владимир Бауэр,Татьяна Иларионова,Российские немцы : право на надежду : К истории национального движения народа (1955-1993),Москва,1995.

⑯ Виктор Дизендорф, Прощальный взлет : судьбы российских немцев и наше национальное движение, Москва.1997.

⑰ Становление и развитие Сообщества немцев Российской федерации, сборник материалов выпуск 1,2, Москва,1996.

⑱ Миграционные процессы среди российских немцев : исторический аспект (материалы международной научной конференции, Анапа, 26-30 Сентября 1997 г.), Москва, 1998.

（１３）検閲問題

検閲に関しては、包括的な文書集①が出版された。これはイデオロギー問題に関する党指導部のやり取り、検閲機関が残した文書、検閲機関とされる機関とのやりとりなど 300 を越す文書が含まれている。②は検閲問題に関して新たに公開されたアルヒーフ文書をもとに書かれた論文を集めたものである。このほか個別問題として、ソ連時代のユダヤ問題に関する検閲に関する③などの著作が挙げられる。④は 1993 年 5－6 月に行われた検閲に関する展示会のカタログで、帝政時代を含め約 700 冊の本が収録されている。

① История советской политической цензуры, Москва, 1997. 672с. 2000 экз.

② Исключить всякие упоминания... : осерки истории советской цензуры,Москва,1995. 334с. 700экз.

③ А.В.Блюм,Еврейский вопрос под советской цензурой 1917-1991,СПб,1996. 186с. 1000 экз.

④ Цензура иностранных книг в российской империи и Советском Союзе – каталог выставки Москва. Май – июнь 1993г.,Москва, 1993. 111с. 5000экз.

（１４）軍における粛清

軍における粛清については、最近になってアルヒーフ史料をふんだんに使って書かれた研究が出た①。付録には第二次大戦前に粛清された 2000 人以上の将校に関するデータが掲載されており、それぞれの生年、入党日、逮捕されたときの職名、さらに逮捕、判決、死刑執行、名誉回復の期日がわかる。現時点で最も詳しい情報である。②のような論文も書かれている。③も軍の粛清についてまとめている。このほかアレクサンドロフがパリで出版した本④、ラパポルトによる軍の粛清に関する本⑤もロシア語に訳されている。このほか、⑥、⑦のような本も出ている。

① О.Ф.Сувениров, Трагедия РККА 1937-1938, Москва, 1998. 528с.

② Нармин,Олег Николаевич,Репрессии против командного,политического и начальствующего состава красной армии в 1937-1941 гг. : причины,масштаб и последствия,Москва,1993. кандидатская диссертация.

③ Якупов,Назым Мухаметзянович,Трагедия полководцев : репрессии 30-50-х гг. в СССР,Москва,1992. 349с.

④ Александров,Виктор Михайлович,Дело Тухачевского,Ростов н/Д,1990,192с. 1962年パリで出版。邦訳は『ソビエトの悲劇ートハチェフスキー元帥粛清事件の真相ー』高橋正訳、弘文堂、1963年。

⑤ В.А.Рапопорт,Ю.Геллер,Измена Родине,Москва,1995.

⑥ Борис Соколов, Михаил Тухачевский : жизнь и смерть красного маршала, Смоленск, 1999.

⑦ А.И.Муранов,В.Е.Звягинцев,Досье на Маршала : из закрытых судебных процессов,Москва,1996.

⑧ Реабилитированы историей : очерки о первых начальниках Гл.полит.упр.Сов.Армии и ВМФ,Москва,1989. 94с. (Смилга,Серебряков,Антонов-Овсеенко,Бубнов,Гамарникの５人の赤軍政治部長についてまとめたもの)

⑨ Николай Смирнов, Вплоть до высшей меры,Москва,1997. 2000 экз.

222ст.（第二次世界大戦中とスターリンが死ぬまでに、不当に粛清された軍人に関したもの）

⑩ Сергей Зонин, Флагман：повесть об адмирале Л.М.Галлере, СПб, 1995. 136с. 3000экз.（1948年に逮捕され、1950年に収容所で死んだソ連海軍提督ガレルに関して）

（１５）ベロモルカナルを中心とするロシア北部、カレリア地方について

白海・バルト海運河、通称ベロモルカナルはスカンジナヴィア半島を迂回せずにバルト海と北海を結ぶことを目的に作られ一面軍事戦略的な意義を有していたが、グラーグシステムが最初に大々的に拡大した地域として極めて重要である。このベロモルカナルについては、1934 年にゴーリキー他の編集でその建設史が出版されていたが、1937 年に回収、廃棄されていた。それが 1998 年になってリプリント版として再出版された①。このベロモルカナルについて、またそれが通過するカレリア地域についてまとまった史料集、著作が出版されている。いくつかの文献の紹介も含めて当時のカレリア・ムルマンスク地方についてまとめたことがあるので（拙稿「1920－30 年代のカレリア、ムルマンスク」『西洋史学論集』34 号（1996 年））参照してほしい。最近、これらの問題に関して出版された文献は以下の通りである。⑧－⑪はソロフキの収容所に関するもの。

① Беломорско-балтийский канал имени Сталина：история строительства 1931-1934 гг., под редакцией М.Горького, Л.Авербаха, С.Фирина, 1998. 616с.

② Чухин,Иван Иванович, Каналоармейцы：История строительства Беломорканала в документах,цифрах,фактах,фот.,свидетельствах участников и очевидцев,Петрозаводск,1990. 248с. 30000 экз.

③ Их называли КР：Репрессии в Карелии 20-30-х гг. сборник,Петрозаводск,1992, 2000экз, 336с.

④ Гулаг в Карелии,Сборник документов и материалов 1930-1941,Петрозаводск,1992. 226с, 500 экз.

⑤ В.Я.Шашков,Спецпереселенцы на Мурмане · роль спецпереселенцев в развитии производительных сил на

Кольском полуострове (1930-1936 гг.),Мурманск,1993. 140с.

⑥ Проблемы истории репрессивной политики на Европейском севере России (1917-1956) - Всероссийская научная конференция 8-11 ноября 1993 г. тезисы докладов,Сыктывкар,1993.

⑦ Кузнецов,Михаил Николаевич,Произвол,// Аринин В,Тень генералиссимус,Архангельск,1991. 159с. 10000экз. (ボロクタでの流刑について)

⑧ Розанов,Михаил,Соловецкий концлагерь в манастыре 1922-1939 годы - факты,домыслы,параты,1979.

⑨ Ширяев,Борис Николаевич,Неугасимая лампада,Москва,1991. 411с. 100000экз. (Белая книга России. Вып. 6). (著者は1889年生まれ。2回死刑を宣告されたが逃げる。2回目の逃亡のあとソロフキへ、それからドイツのラーゲリへ移り、その後イタリアに在住。1952年に最初の本が出た。この本はソロフキでの出来事について。)

⑩ Архимандрит Феодосий (Алмазов),Мои воспоминания (записки соловецкого узника),Москва,1997.

⑪ Мальсагов,Созерко,Адские острова : Сов.тюрьма на Дальнем севере,перевод с англ. Ш.Яндиева,Алма-Ата, 127с.

（１６）治安機関、検察機関の活動について

弾圧した側の機構に関する研究、分析、そこで働いていた人たちの回想の出版もかなりの量に上る。これらの文献は、スターリン的抑圧システムの解剖のためには欠かせない。НКВД、КГБだけでなく検察機関に関する史料、検察官の回想も見られる。

① Владимир Некрасов,Тринадцать "железных" наркомов (История НКВД – МВД от А.И.Рыкова до Н.А.Щелокова 1917-1982),Москва,1995.

② Валентин Ковалев,Два сталинских наркома,Москва,1995. 25 июля. (元ロシアの法務大臣、スキャンダルで失脚したコヴァリョフがヤゴダとエジョフについて書いたもの。1と同様、引用文献に関する記述はない。)

③ Петров Михаил Николаевич,Формирование и деятельность органов

ВЧК-ОГПУ .1917-середина 1920-х гг.(на материалах Северо-Запада России),СПб.1995. докторкская диссертация. （特定地域におけるこの機関の生成について検討されているものと思われる。）

④ Мартианов Владислав Евгеньевич, Органы НКВД краснодарского края накануне и в годы великой отечественной войны (1937-1945 г.), Краснодар, 1998. кандидатская диссертация.（戦前から戦中にかけての活動をまとめたもの。）

⑤ Олейник Ирина Ивановна, Юристы и власть:Кадры работников органов юстиции в 1929-1936 гг.(на материалах Ивановской промышленной области), Иваново,1998. кандидатская диссертация.

⑥ ВЧК-ОГПУ о политических настроениях северного крестьянства . 1921-1927 годы. По материалам информ.сводок ВЧК – ОГПУ, Сыктывкар, 1995. 192с. （ВЧКやОГПУが残した報告をもとに農民の政治的傾向を分析しようとする研究も最近現れてきている。これについてはすでに大きな史料集が出版された。次の7である。）

⑦ Советская деревня глазами ВЧК-ОГПУ-НКВД, том 1 1918-1922,Москва,1998.

⑧ Служим отечеству.Органы государственной безопасности Республики Коми, (документы, материалы, воспоминания ,1918-1998),Сыктывкар, 1998. 500 экз. （粛清時代の機関の活動に関してはあまり触れられていない。）

⑨ Коровин В.В. История отечественных органов безопасности : учебное Пособие, Москва. Норма, 1998. 3000 экз. （治安機関の組織的発展に関する教科書）

⑩ Кубанская ЧК : Органы госбезопасности Кубани в документах и воспоминаниях- Краснодар : Сов.Кубань, 1997. 5000 экз. （クバン地方におけるその活動史をまとめたもの。）

⑪ Открытые архивы :народный фольклор глазами сотрудников органов НКВД (по документам выставки,посвященной Дню памяти жертв политических репрессий),Екатеринбург,1996.

⑫ Михаил Шрейдер, НКВД изнутри：записки чекиста, Москва,1995.

⑬ А.Г.Звягинцев,Ю.Г.Орлов, Распятые революцией – Российские и советские прокуроры 20 век 1922-1936,Москва,1998. （同じ著者による В эпоху потрясений и реформ – российские прокуроры(1906-1917), Москува, 1996. の続編で、1922 年から 1936 年にかけての検察機関の変容をロシア共和国及びソ連の検事総長 6 人の活動を通して分析したものである。巻末には 200 ページにわたって関係文書が添付されている。）

⑭ Павел Судоплатов,Спецоперации：Лубянка и Кремль 1930-1950 годы, Москва,1998.

⑮ КГБ：вчера,сегодня, завтра：международные конференции и круглые столы, законодательство Общественный контроль Спецслужбы и права человека,Москва,1995. （シリーズ、他にも КГБ：вчера,сегодня,завтра 3-я конференция,Москва,1994.）

⑯ В.И.Бережков, Питерские прокураторы, СПб, 1998. （ペテルブルグの検察について。）

⑰ Лубянка ВЧК-КГБ, 1917-1960, Справочник, Москва, 1997. （チェカー以来のソ連治安機関の構造、歴史に関して初めてのまとまった著作。）

⑱ Элизабет Порецки,Тайный Агент Дзержинского,Москва,1996.

⑲ Органы и войска МВД России：краткий исторический очрек ,Москва,1996. （内務省軍の歴史）

⑳ В.А.Буков,От Российского суда присяжных к пролетарскому правосудию：у истоков тоталитаризма,Москва,1997.

21 Евгений Лукин,На палачах крови нет,СПб,1996. 96с. 5000 экз. （レニングラードにつとめた NKVD の 12 人の勤務者の伝記をまとめたもの。）

22 Викторов,Борис Алексеевич,Без графа секретно：записки воен.прокурора,Москва,1990. 333с. 200000экз.(Возвращенние к правде：вып 3). （スターリン死後の見返し時期の検察に関する回想）

23 Дмитриев,Петр Федорович,Солдат Берии：Воспоминания лагарного охранника,Ленинград,1991. 157с. （1951 年に МВД の軍によばれた人物の回想）

（１７）鉄道建設問題

鉄道建設には多くの囚人が動員されたと思われるがソ連全土にわたるその包括的な研究はまだなされていない。一部の研究がこの問題を明らかにしている。バム（БАМ＝バイカル・アムール鉄道）の建設については①の博士論文が書かれている。その建設は極東における飛行機、造船の軍需工場の基地として建設が始まったコムソモリスク・ナ・アムーレとシベリア鉄道を接続することを目的として1932年に開始されたが、すぐに行き詰まると輸送路を太平洋側に求めることになった。そして建設が目差されたのがソヴェーツカヤ・ガヴァニまでの路線である。その建設について②が出ている。また、北部鉄道ラーゲリ（Севжелдорлаг）に関しても③の文献が出ているようだ。これは Дьяконов という人物が語ったことを Ю.Мартыненко が記したもの。

① Еланцева Ольга Павловна,Строительство Байкало-Амурской железнодорожной магистрали (30-е - начало 50-х годов).Исторический опыт,Владивосток,1996. докторская диссертация.

② О.П.Еланцева, Строительство но. 500 СССР : железная дорога Комсомольск-Советская Гавань (1930-40-е годы)（未見）

③ Дьяконов В.Я., Лагерная пыль свидетельствует, Астрахань, 1996, 99с. 3000 экз.

（１８）その他の諸問題

その他、様々なテーマに関して書籍が出版されている。

① Библиографический указатель изданий общества Мемориал (1988-1995),Москва, Мемориал,1995. 64с.（『メモリアル』が出版した書籍の目録。ホームページでもこれまでの出版文献について知ることができる。）

② Неправедный суд : последний сталинский расстрел (стенограмма судебного процесса над членами еврейского антифашистского комитета), Москва, 1994. 400с. 10000экз.（反ファシズムユダヤ人委員会に対する裁判プロセスの筆記録。スターリン最後の犯罪といわれる。）

③ Рапопорт,Яков Львович,На рубеже двух эпох : Дело врачей 1953 года,Москва,1988. 271с. 100000экз. （2と同じテーマ。1898年生まれのこの人物は病理解剖学者で 1953 年の医師団事件で逮捕されるが、その時の状況について語ったもの。この問題についてはルイス・ラーパポート『医師団陰謀事件』駐文館訳、1993年が出ている。）

④ Росляков,Михаил Васильевич,Убийство Кирова : Полит.и уголов.преступления в 1930-х гг.,Ленинград,1991. 128с. 50000экз （キーロフが暗殺されたときにスモーリヌィにいて死体に立ち会った人物による回想。）.

⑤ Алла Кирилина,Рикошет-или сколько человек было убито выстрелом в Смольном,СПб,1993. 136с, 10000экз. （同じくキーロフ暗殺について）

⑥ Боль и память – документатальные очерки о журналистах, репрессированных в 30-40-е гг.и их воспоминания, Москва,1993. 288с. 10000экз. сост.Б.С.Бурков,В.А.Мякушков（特にジャーナリストで粛清の犠牲になった、或いは生き延びた人たちについて 19 人の文章。）

⑦ Борев, Юрий Борисович, Сталиниада : Мемуары по чужим воспоминаниям с историческими анекдотами и размышлениями, Иркутск, 1992, 368с. （『スターリンという神話』（亀山郁夫訳、岩波書店、1997年）という題で邦訳が出た。）

⑧ Берия : конец карьеры",Москва,1991. 416с. сост.В.Ф.Некрасов. （ドイツ語からの重訳が出た『ベリヤ:スターリンに仕えた死刑執行人』(森田明訳、エディションq、1997年））

⑨ Антонов-Овсеенко,Антон Владимирович, Карьера палача : о Л.Берии,Омск,1991. 446с. （同じくベリヤについて）

⑩ Султанбеков,Булат Файзрахманович,Первая жертва генсека.Мирсаид казань Султан Галиев : судьба,люди,время,1991. 206с. （スルタンガリエフについて）

⑪ Ваксберг,Аркадий Иосифович,Царица доказательств,Вышинский и его жертвы,Москва,1992. 349с. （ヴィシンスキーについて）

（カチンの森）事件に関して次のような著作⑫－⑮がある。

⑫ Россия 20 век：Катынь：Пленники необъявленной войны,Москва,1997. 607с, 3000экз.（この問題に関して包括的な文書集)。

⑬ Катынь：преступление против человечества, Москва,1996.

⑭ Наталья Лебедева, Катынь：преступление против человечества,Москва,1996. 351с. 1000экз.（初めてカチンの森事件のほか、併合後のポーランド人に対する弾圧に関して明らかにした。)

⑮ Катынская драма：Козыльск,Старобельск,Осташков：судьба интернир.польских военнослужащих,Москва,1991. 200с.

（クロンシュタットの弾圧）に関して次のような史料集が出ている。

⑯ Россия 20 век：Кронштадт 1921 документы,Москва,1997. 431с. 3000экз.

⑰ Кронштадтская трагедия 1921 года：документы, Москва, 1999. книга 1,688с, 1000 экз. Книга2, 672с, 1000 экз.

（ニコライ二世一家虐殺）問題に関しては多数の研究が出ている。例えば

⑱ Правда о екатеринбургской трагедии：сборник статей, Москва.1998. под редакцией доктора истор. Наук Ю.А.Буранова. 5000экз. 242 с.（ニコライ 2 世一家虐殺事件に関する論文集。)

（コムソモール）における粛清に関しては⑱－⑳の研究が出ている。

⑲ Криворученко,Владимир Константинович,В тисках сталинщины：трагедия комсомола,Москва,1991. 200 экз, 398с.（コムソモールという団体に及ぼしたスターリニズムの影響とコムソモール内の粛清についてまとめている。)

⑳ Бухарина,Берта Христиановна,Ушёл в бессмертие：о комсорге Мос к.метрополитена А.М.Шаширине,Москва,1991. 253с.（モスクワのメトロ建設に参加した人物について。)

21 Мильчаков,Александр Иванович,РЛКСМ：Молодость светлая и тра гическая,Москва,1988. 159с.

22 Трагедия Казачества том 1,2,Москва,1996.（シクロ、クラスノフ、ヴランゲリらコサック軍のアタマンによる回想のほか、シードロフにより集められたコサックによって書かれた手紙が収録されている。)

23 Россия 20 век : Филипп Миронов документы,Москва,1997. 791с,300 0экз.（フィリップ・ミローノフについて）

（その他）

24 Рыцари без страха и упрека. Правозащитное движение : дискуссии последних лет. Москва, 1998. 335с. （セルゲイ・コヴァリョフ、ユシェンコフなどが最近の人権擁護問題について執筆。）

25 Возвращенная литература : имена,книги,страницы истории",Москва,1991. 334с.

26 Распятые : писалили - жертвы политических репрессий (автор-составитель, Захар Дичаров),СПб,1993. вып.1,тайное становится явным 236с. 2000экз. （弾圧された作家約30人に関する情報）

27 Распятые. Писатели-жертвы политических репрессий : Могилы без крестов. Вып.II,СПб, 1994. 215с. 2000экз. （25と同じシリーズ）

28 Нарушение международных норм и российского законодательства в отношении прав беженцев и вынужденных переселенцев, Москва,1998.

29 Решение проблем беженцев и вынужденных переселенцев через законодательную,судебно-правовую и административную системы,Москва,1997.

30 Чирков,Юрий Иванович,А было всё так",Москва,политиздат,1991. 379с.

31 В недрах Ухтпечлаге,1989. 24с.

32 Сергей Паварцов,"Причина смерти-расстрел : Хроника последних дней Исаака Бабеля",Москва,1996.

33 Виталий Шенталинский,Рабы свободы в литературных архивах КГБ,Москва, 1995. 391с, 50000экз. （バーベリ、ミハイル・ブルガーコフ、フロレンスキー、ピリニャーク、マンデリシターム、プラトーノフ、クリューエフ、ゴーリキーらソ連時代に弾圧されたり、或いは意に添わない活動を強いられたりした作家に関して、旧KGB、検察のアルヒーフに保管されていた新史料に基づいてまとめたもの。現代のアルヒーフ史料公

開をめぐる闘いに関しても触れられている。)

34 П.Н.Березин, Учреждению АМ-244 Свыше 50 лет,г.Соликамси,Пермской области.

35 Крестьянское восстание в Тамбовской губернии 1919-1921 гг. Антоновщина, документы и материалы, Тамбов, 1994, 3025 экз. (タンボフの農民反乱)

36 Бобренев В.А., Рязанцев В.Б., Палачи и жертвы, Москва, 1993. 379с. 30000экз. (白軍の将軍アンネンコフ、バルト艦隊政治委員クジミン、将軍パヴロフの他、強制収容所の日本人などに関する情報)

ロシアにおける貧困問題について
—住民の意識、社会階層の変化、家計の動向—

徳永　昌弘*・松本　かおり**・林　裕明***

はじめに

「…私は国民の皆さんに許しを請いたい。私たちが抱いた夢の多くは実現されることなく、すぐにでもできると考えていたことは実際には非常に困難であったからである。…いくつかの点で私はナイーブでありすぎたし、いくつかの問題は困難でありすぎた。私たちは過ちと失敗の中で苦闘していたのである。」昨年末のエリツィン大統領の辞任演説は、ロシアの経済改革が予期したような成果を挙げることができず、大多数の国民に大きな負担を強いる結果に終わったことを率直に詫びたものである。それは、まず何よりも、経済システムの転換が惹起した生活水準の低下である。ロシア連邦が誕生してからすでに10年近く経とうとしているが、日常生活に対する人々の不満は解消されるどころか、その窮乏化に対する批判の度はますます強められている。

ロシアでは体制転換以降、特にハイパー・インフレーションの時期（92～93年）に貧困問題がクローズ・アップされ始めた。その定量的な把握と分析には、世界銀行を筆頭に多くの諸機関が取り組んできた[1]。しかし、貧困という現象に対する概念上の相違から、用語の定義や依拠するモデルが論者によって異なるため、その分析結果は必ずしも一意的ではなく、特に現物経済の領域をいかに評価するのか、という点が論争となっていた。さらに大きな問題は、こうして得た結果の一部が住民の感覚と大きくずれていることである。例えば、1996年11月に行われた意識調査によると、貧困ラインに関する回答額の平均は一人当たり月収290,000ルーブル（デノミ前）であったが、政府の公式統計によると96年の最低生活費は360,000～380,000ルーブル（同）である[2]。これは、数字でみるロシアの貧困問題が、住民の意識からすれば過大評価されている可能性を示唆している。

---

* 東北大学東北アジア研究センター
** 大阪大学大学院言語文化研究科
*** 京都大学大学院経済学研究科

その背景には、最低生活費の算出をめぐる統計上の問題の他に[3]、住民の関心が生活水準そのものよりも、その急激な低下と所得格差の拡大という「他者との関係」に向けられていることもある。それゆえ、ロシアにおける貧困問題を論じる際には、さまざまな統計資料と並んで、住民に対する意識調査の活用が有効である。

本稿は、以上のような観点から、ロシアにおける経済改革のひとつの帰結ともいえる貧困問題について、年金・給与の遅配や貧困層の増大という言葉だけからは伺い知ることのできない実態の一端を明らかにしていこうとするものである。まず、ロシア市民が生活水準の格差についてどのように考えているのか、という点を世論調査の結果から探っていきたい。次いで、社会の階層化という問題に焦点を当て、一部統計資料を交えながら、そのプロセスとそこではたらいている要因について検討する。最後に、住民の生活状況を包括的に把握できる資料として家計調査を取り上げ、その結果から浮かび上がるロシアの貧困問題を明らかにしてみたい。

1. ロシアにおける世論調査と世論の動向について

1.1. 世論調査の動向

ソビエト社会主義共和国連邦（以下、ソ連と略す）で世論調査が本格的に始まったのは、ペレストロイカ以降と言うことができる。もちろん、それ以前に調査による研究が全くなかったわけではないが、ソ連における社会学研究の位置づけに影響を受け、長年の間、停滞していた。スターリン時代には、正式に認められず、西側の社会学批判の道具でしかなかった社会学研究は、1958年にソビエト社会学会が設立されることで復権し、それ以降、日本でも、Г.オシポフやA.ハルチェフ[4]などの調査研究が翻訳された。しかし、これらは、内容的に主に西側諸国へのプロパガンダの役割を担っており、自己批判や自己改善につながる研究にはならなかった。当然、言論の自由が保障されていない状況での調査結果の真偽の程は、定かでなかった。

また、冷戦時代のソ連では、情報の制御や外国人との接触の制限などがあり、西側諸国では、ソ連国民の世論について知ることができなかった。そのため、1950～51年にかけて、ハーバード大学ロシア研究所のプロジェクトにより、社会心理

学者 A.インケルスらが、ソ連からの避難民[5]の調査を行い、イデオロギーに左右されないソ連人の意識を見出すことを試みた。しかし、その対象者は、何らかの形でソ連国内にとどまることができなくなった人々であり、標本の偏りは否めなかった。その他にも、ジャーナリストや外交官が、自分たちの経験を基にしたソ連人論を展開したが、その対象であったソ連人は、彼らがつきあうことを許された範囲に限られており、客観的研究は不可能であった。

以上のような理由から、ソ連では国民の世論に関する研究の蓄積がほとんどなく、まだ始まったばかりである。そして、現在では、移行期における国民意識の動向を分析するための世論調査が数多く行われており、それらは今後のロシアの行方を考察するためにも重要な役割を果たしている。また、それらのデータは学術論文に利用されるだけでなく、さまざまな雑誌や新聞で広く紹介され、人々に影響を与えている。

世論調査機関として先駆的存在となったのが、全ロシア世論調査センター（ВЦИОМ）である。これは、ペレストロイカの大きな原動力となった改革派社会学者 T.ザスラフスカヤを中心に、旧西ドイツの世論研究センターを模範として設立された世論調査機関である。1988 年から研究活動を始め、現在、*Мониторинг общественного мнения: экономические и социальные перемены* を隔月に発行している。

現在のロシアで世論調査を実施することは、政治的には自由になったのであるが、全く問題がないわけではない。例えば、日本と比較して考えてみてもわかるとおり、地域間格差、生活水準格差、民族間格差などが大きく、決して均質な社会ではない。また、標本の選び方や調査方法が明らかにされていない調査がほとんどであり、そのためデータの信用性にも問題がないわけではない。厳密な意味では、さらにミクロな研究が調査が必要であろう。しかし、全ロシア世論調査センターは 12 の地域の機関を統合しており、大勢を掴むためにはその調査の意義が否定されるものではない。そこで、本稿では、全ロシア世論調査センターのデータを中心に、ロシア国民の体制移行期に対する評価の中でも、特に市場経済への移行において必然的に生じる収入格差についての世論を見ていく。

1.2. 広がる収入格差

1992年の価格自由化以来、ロシアでは急激な物価上昇が起こっている。そのような中でも、時流に乗って金儲けができた者はいわゆる「新ロシア人」とよばれ、ソ連時代には経験できなかった贅沢を尽くしている。しかし、その反対に市場経済に適応できず、ソ連時代よりも苦しい生活を強いられている者も少なくない。1995年の調査では、上層10%の人々と下層10%の人々との収入格差は、25倍に達していることが報告されているが、実際にはさらに大きな格差があることが予想されている[6]。**表1**によると、収入格差が大きいという実感を持つ者が増加しており、7年間に88%から94%になっている。また、他の資本主義諸国（アメリカ、ドイツ、ノルウェー）との比較においても、かなり高い数字となっている。ソ連時代には、一生懸命働く者でも仕事をさぼる者でも、収入格差が大きくなかったことが、労働者のモチベーションを下げる原因になっており、悪い意味での平等を維持していたことが、経済停滞につながったと考えられていた。それでは、この格差は国民にとって容認されるべきものなのだろうか。市場経済が生み出す収入格差は、ロシア社会の発展にとって致し方のないことなのだろうか。

表1　「ロシア*では現在収入格差が大きい」という意見に、賛成ですか？

（単位%）

	1992年	1999年	1992年		
	ロシア		アメリカ	ドイツ	ノルウェー
全く賛成	58	78	28	31	22
どちらかといえば賛成	30	16	49	53	49
どちらでもない	4	3	11	9	14
どちらかといえば反対	4	1	10	6	12
全く反対	3	1	2	1	3

* ロシア以外の国では、それぞれの国の名前を入れて質問した。

（資料）Хахулина Л.（1999）, стр.28.

表 2　「大きな収入格差は、ロシア*の繁栄のために不可欠である」という意見に、賛成ですか？

（単位%）

	1992 年	1999 年	1992 年		
	ロシア		アメリカ	ドイツ	ノルウェー
完全に賛成	14	7	4	4	5
どちらかといえば賛成	20	9	22	22	25
どちらでもない	12	11	23	23	31
どちらかといえば反対	24	21	38	38	30
全く反対	31	52	13	13	9

* ロシア以外の国では、それぞれの国の名前を入れて質問した。

（資料）Хахулина Л.（1999）, стр.28.

表 3　「国家が人々の収入格差を縮小しなければならない」という意見に賛成ですか？

（単位%）

	1992 年	1999 年	1992 年		
	ロシア		アメリカ	ドイツ	ノルウェー
全く賛成	36	60	10	20	17
どちらかといえば賛成	29	23	29	46	43
どちらでもない	10	8	20	15	16
どちらかといえば反対	17	6	29	15	18
全く反対	9	3	13	5	6

（資料）Хахулина Л.（1999）, стр.30.

収入格差がロシアの繁栄にとって不可欠な条件であるかという質問に対して、1992 年には 34%が格差を必要とすると回答していたが、99 年には 16%に半減している（表 2 参照）。つまり、市場経済がロシアの経済を刺激し、人々の労働に対するモチベーションを高め、それが経済発展や西側と同等の生活水準をもたらすという希望は徐々に幻想となりつつある。そして、改革当初は、移行期の痛みとしてある程度容認された収入格差も、国民にとって受け入れがたくなってきている。そのため、再び経済への国家の介入を求める国民の声が強くなっている（表

3参照)。つまり、当初目指したアメリカ型の自由市場経済をロシアに適応することができないと、国民は判断するようになってきている。社会主義体制に戻ることができないとすれば、北欧型の経済が目指される方向であるかもしれない。ただし、人々が市場経済に不可欠な合理性や競争になじめず、以前のモラル[7]を社会的遺産（социальная наследственность）として持ち続けるとすれば、北欧型の経済もまたロシアにうまく適合するとは考えられないだろう。

1.3. 社会の流動性

前項では収入格差が広がり、それに対する不満が高まっていることについて述べてきた。しかし、ロシア社会が、流動性の高い、誰もが上層を目指すことができる出発地点の平等が保障される社会であれば、公正な競争を促す体制とも言うこともできる。そこで、次にロシア社会における流動性に対する意識について検討してみよう。

ソ連時代には、官僚制に寄生する特権階級ノメンクラトゥーラが存在した。彼らは、閉じられた社会階層であり、その地位を利用してさまざまな特典を獲得してきた。その上、ソ連崩壊後にも特権を失うことなく利用し、国有財産の分配に際しても有利な立場にあることが指摘されている。そのためか、ソ連崩壊以後の7年で、出自の重要性が依然として高いと見なされている点は、国民の目から見ても公正な競争が行われていないことを示している（表4)。一般的には、経済的に下層にいる者が公正な競争を求める場合、学歴による社会的上昇が大きな可能性を持っていると考えるだろう。しかし、経済資本だけでなく、ブルデューが指摘する文化資本もまた相続されることを考慮すれば、結局は上層にいる人々が、学歴取得により有利な立場にある。つまり「教育システムは客観的に、恵まれていない社会階層になればなるほどいっそう強く排除の作用を及ぼしている」[8]のである。例えば、現在のロシアでは、英語習得はビジネスにおいて重要な意味を持っているので、英語を重点的に教える私立学校に子どもを入学させることができるかどうかは、子どもの将来を有利な状況にしてやれるかどうかの格差を生みだしている。上層へのアクセスの閉塞感は、今後の生活水準上昇の可能性についての否定的な態度からも分かる（表5)。現在のロシアでは、社会における流動性はあまり認識されておらず、国民経済に活気を与える要素としての役割を果たし

ていない。逆に、階層が固定され停滞した社会が成立しつつあると認識されている。上昇可能性の小さい社会状態では、労働に対するモチベーションは上昇せず、モラルも低下し、経済に悪影響を与えるであろう。このように社会階層の再生産が、ソ連時代とは違い、公然と人々の目に触れ、正当化されるようになった。今後、この状況は、悪平等の時代とは違った意識を生み出していくのだろうか。そして、機会の平等がどのように確保されるかという問題が、経済再建へのひとつのポイントとなるだろう。

表 4　裕福な家庭出身であることは、人生で成功するかどうかに、どの程度重要ですか？

（単位％）

	ロシア	
	1992 年	1999 年
とても重要	19	21
どちらかといえば重要	22	24
どちらでもない	27	28
どちらかといえば重要でない	19	18
全く重要でない	13	9

（資料）Хахулина Л.（1999）, стр.29.

表 5　「現在のロシアで、あなたのような人々が生活水準を上げる可能性を十分持つ」という意見に賛成ですか？

（単位％）

	ロシア	
	1992 年	1999 年
完全に賛成	6	4
どちらかといえば賛成	15	11
どちらでもない	14	15
どちらかといえば反対	31	25
全く反対	33	44

（資料）Хахулина Л.（1999）, стр.29.

1.4. 世論調査に現れるロシアの「経済文化」

「経済文化（экономическая культура）」[9]は、社会システムの大きな部分を占めており、また経済活動においてのみ存在するのではなく、人間関係、規範、道

徳、宗教などの中にも生きている。また、それは安定性を持っており、簡単に変化せず維持され続けるものである。つまり、ソ連時代に体得された行動様式は簡単に変化するものではなく、悲観的な見方をすれば数世代を経なければ変化しない可能性があると言えるだろう。もちろん、若者は社会の変化に適応する力を持っており、それほど今後の状況を悲観する必要はないかもしれない。しかし、社会的遺産は簡単に消滅するものではない。表6によると、高収入者の半数以上が現在のロシア社会を肯定的に捉えているが、低・中収入者の半数以上はペレストロイカ以前のソ連時代にノスタルジーを感じている。西側諸国が求める市場経済の「経済文化」に、ロシア人の多くは、まだなじむことができないのである。特に勝者となりえなかった人々にとって、市場経済は苦痛となっている。

表6　もしこの国のすべてが1985年までのままならば、もっと良かっただろうにと多くの人々が言っています。あなたはこの意見に賛成ですか？*

（単位％）

	低収入者 月収217ルーブル以下	中収入者 月収217～680ルーブル	高収入者 月収680ルーブル以上
賛成	68	65	33
反対	15	22	55
答えられない	17	13	13

* 低収入者は回答者中最も低収入の者から20%、高収入者は回答者中最も高収入の者から20%とし、残りを中収入者とした。

（資料）ВЦИОМ（1999），стр.95.

一方、ソ連崩壊を惜しむ人々は、市場経済での勝者と考えられる高収入者であっても半数を超えている（表7）。「ソ連」という国家の存在は、その崩壊によって利益を得たものにとっても、経済的利害以上の何らかの意味を持っていたことが予測できる。しかし、その要因はどのような点に求められるだろうか。大国としての誇りが奪われたことによるのだろうか。それとも、高収入者にとっても、競争に追われる現在の体制は生きにくい社会なのだろうか。今後、これらの要因は研究すべき課題であろう。

表7　ソ連の崩壊を残念なことだと思いますか？*

（単位％）

	低収入者 月収 217 ルーブル以下	中収入者 月収 217～680 ルーブル	高収入者 月収 680 ルーブル以上
残念だ	78	78	62
残念ではない	11	13	28
答えられない	12	9	10

* 低収入者は回答者中最も低収入の者から 20%、高収入者は回答者中最も高収入の者から 20%とし、残りを中収入者とした。

（資料）ВЦИОМ（1999）, стр.95.

以上のように、ロシア経済における問題は、経済学上の問題だけではなく、社会心理的、文化的な深いところにもその問題が存在していると言えるだろう。そして、世論調査を活用することは、ロシア経済で必要とされている労働者のモラルやモチベーションを分析する有効な手段である。改革が頓挫している今、何らかの処方箋を見出すことが望まれているが、世論調査のデータは処方箋を考えるひとつの材料となるだろう。そして、現在のロシアでは、それらの材料を基に、まず自らを知り、分析することが重要ではなかろうか。自らを知らなければ改革はありえない。どこの国を模範とした経済を目指すのか、という問題を考えるよりも先に、社会的遺産である自らの「経済文化」と市場経済との折り合いを、「ロシア国民なりに」どのようにつけることができるのだろうか、そのことをまず考えていく必要があるだろう。

2. ロシアにおける社会階層の変化

2.1. 社会階層分析の動向

体制転換から 8 年が経過し、ロシアの社会・経済状況の変化に伴い、転換過程についての研究の焦点も変化してきた。当初、市場移行や民営化といった経済学的側面に研究の中心があったのに対し、近年、エリート研究などに代表される移行過程の担い手・主体形成や制度形成といった社会学・政治学的側面の分析に焦点が移っている。さらに、経済学的分析も、貧困などの移行の社会的コストの問題や社会政策に代表される生活・労働面の研究に重心が移っている。こうした傾向をうけて、本節ではロシア社会の社会階層の変化に焦点を当てる。体制転換に

伴い、所有と権力の関係が一変し、エリートの集中的な交替、新しい社会集団の出現、社会の最下層の急激な増大に示されるように、社会階層のメカニズムが再編成され、それにしたがって、集団の利害関係、行動様式、社会的相互作用も大きく変わった。ロシア社会に現れたこうした変化を表面的な政治家の変動ではなく、階層の主体と行動の変動としてより深くとらえる必要があろう。

本節では、ロシアの社会階層について多方面から分析を行った Центр комплексных социальных исследований и маркетинга, *Социальная стратификация современного российского общества*, Москва, 1995 と、さらに社会学の観点から、現代ロシアの社会階層をペレストロイカ期以前の階層と比較検討した Заславская, Т.И., Громова, Р.Г., Трансформация социальной структуры российского общества// Львов, Д.С., *ПУТЬ В XXI ВЕК: Стратегические проблемы и перспективы российской экономики*, Москва, 1999, Глава 8 に基づき、体制転換後のロシア社会の社会階層の全体図を描き、それがもつ問題点を検討する。

2.2. 社会階層の変化

社会階層の基本的な基準には、以下のようなポテンシャルが考えられる。①権力機能や管理機能の大きさに現れる政治的ポテンシャル、②所有と所得の大きさや生活水準に現れる経済的ポテンシャル、③教育・文化水準、労働者の熟練や専門性、生活様式やその質の特徴といったものに現れる社会的ポテンシャルである。

今日の社会階層の基準は、ソ連期の特徴や体制転換期の特徴を反映しないわけにはいかない。古い社会関係の破壊が新しい社会関係の編成に先んじているため、変化の過程は複雑である。この過程を分析する際に、市場移行後のロシアの社会階層とソ連期の社会階層の基本的な特徴を比較することが有効である。概して言えば、ソ連期には政治的ポテンシャルにしたがって身分ーヒエラルキー構造が作られていたが、体制転換後、政治的ポテンシャルの影響力は相対的に低下し、経済的・社会文化的ポテンシャルの影響力が強まり、資本と労働に立脚する階級構造が形成されつつある。以下、それぞれの基準から階層の変化と連続性（惰性）をみていくことにする。

2.2.1.政治的ポテンシャル

ソ連社会の階層においては、政治的なポテンシャルが決定的な役割を果たした。党－国家ヒエラルキーにおける社会集団の地位が最も決定的であった。権力・統制システムにおける地位が、単に管理権の大きさだけでなく、分配過程に参加する権利や当局の認可を得ない機会をも付与した。政治システムの安定性は、政治エリート（ノメンクラトゥーラ）のメンバー構成や地位の安定性の基盤となり、さらに、エリートに管理される集団からの閉鎖性や隔離の基盤となった。

ロシアの体制転換下の状況は、国家権力の急激な弱体化によって特徴づけられる。ソ連期に形成された権力階層は「半崩壊の状態」にある。つまり、骨組みはまだ残っているが、再生産のメカニズムは破壊されている。しかし、現状において、ノメンクラトゥーラは維持されている。表8から現在のエリートのうち約70%が旧ノメンクラトゥーラ出身であり、特に地方でそれが維持されていることがわかる。政党エリートやビジネス・エリートは相対的に断絶性が強いが、全体として旧エリートの連続性がみられる。旧ノメンクラトゥーラのメンバーの間には、それに特有な階級意識の保持を促す、安定した仕事上の関係が維持されている。

表8 エリツィンチームにおけるソビエト・ノメンクラトゥーラの出身率（%）

	トップ指導層	党エリート	地方エリート	政府	ビジネスエリート	平均
ノメンクラトゥーラ出身比率	75.0	57.1	82.3	74.3	61.0	69.9
（内訳）						
党	21.2	65.0	17.8	—	13.1	23.4
コムソモール	—	5.0	1.8	—	37.7	8.9
ソビエト	63.6	25.0	78.6	26.9	3.3	39.5
経済	9.1	5.0	—	42.3	37.7	18.8
その他	6.1	10.0	—	30.8	8.2	11.0

（資料）溝端（1997），p.100. ただし、原出所は Kryshtanovskaya, O. and White, S., From Soviet nomenklatura to Russian elite, *Europe Asia Studies*, Vol.48, No.3, p.729.

また、国家権力の急激な弱体化にもかかわらず、政治的ポテンシャルの影響力は完全に低下したわけではない。国有資産の再分配への直接的・間接的関係にお

いて、政治的ポテンシャルは体制転換以前よりも大きな影響力をもっている。

2.2.2.経済的ポテンシャル

ソ連期の社会集団の経済的ポテンシャルは、社会の富の所有、分配、利用への集団の参加によって計測された。この基準には3つの階層が該当する。①不足している社会の富を配分した官僚、②企業の財政・生産を運営し、少数の例外はあるが、闇経済に関わっていた生産の指導者、③資材－機械補給、卸売・小売商業、サービスやその他の分野の働き手である。このような経済力をもつ階層は、社会の賃金や家計所得を決定した。所得は、仕事の性質や内容、分野、企業の縄張り主義的特徴、さらに、家族の人数・構成などの多くの要素に依存した。経済、社会、地域、人口、その他の要素の相互作用によって、経済的に有力な階層はかなり不均整で多様であった。

体制転換後、経済的ポテンシャルが階層区分にもつ意味は大きくなり（**表9**）、それには3つの構成要素が含まれる。それは、①所得を生んでいる資本による支配、②社会的生産物の分配・移動・交換の過程への関与、③個人所得や消費の水準である。そのうち、①は特に重要である。多様な形態の非国家的所有（個人、集団、協同組合、株式会社、コーペラチフなど）が積極的に編成され、異なるタイプの資本（金融、商業、工業）が生まれた。また、私的資本の所有者ははっきりと目に見えて増加している（**表10**）。ただし、こうした資本は、**表9**で示した異なる階層にそれぞれ属している。また、個人農場を所有したり、土地所有者になった農民は特別な地位を占めている。

さらに、資本形成では、国家資源へのアクセスも重要である。この面での受益者は、株式会社を含めて、国営・混合企業の経営者、商業における責任ある働き手や専門家、物財の供給機関のスタッフ、ビジネスの新しい（もしくは、極端な場合、初めて合法化された）専門家、すなわち、販売取引人、ブローカー、ディーラーなどである。

私的資本も、国家の富の分配へのアクセスももたない階層の割合は、近年若干減少しているが、社会のもっとも大きな部分を占めている。彼らの経済的ポテンシャルは、主に賃労働からの所得水準によって決まる。

表 9　全労働人口に占める社会層の比率の動態（1993～1997 年、単位：%）

	1993	1994	1995	1996	1997
上層	5	7	6	5	6
中層	13	14	15	19	18
標準層	73	72	70	66	66
下層	9	7	9	10	10

（資料）Заславская, Т.И., Громова, Р.Г.（1999）, стр.315. ただし、「上層」は大・中企業家、生産面の管理者、高級専門家、官僚など、「中層」は小・半企業家、熟練の専門家、管理者、軍人など、「標準層」は大部分の知識層、半知識層、平均的熟練労働者、工業労働者、農民など、「下層」は非熟練労働者などを指す。

表 10　雇用人口の経済部門別配分（%）

	1985	1990	1992	1994	1996	1997
国家的所有	91.1	82.6	68.9	44.7	42.0	40.1
私的所有	8.9	12.5	18.3	33.0	35.6	39.9
混合所有		4.0	11.7	21.1	21.0	18.3
その他		0.9	1.1	1.2	1.4	1.7

（資料）Госкомстат（1998）, стр.54.

2.2.3. 社会文化的ポテンシャル

社会文化的ポテンシャルは、ソ連期の階層に従属的にしか作用していない。他国と比較して、ソ連での文化的地位と政治的・経済的地位との相互依存関係は弱い。すなわち、ソ連の支配層の上層部には、充分な教育を受けていない人々や、文化に対して敵意すらもった人々も含まれ、社会文化面の専門家の労働には十分な報酬が与えられなかった。

市場移行にともない、才能、教育水準、専門能力、新しい知識の習得能力、文化的見識といった、個人の人的資質の影響力は高まっているが、同時に、社会文化的ポテンシャルと結びつきの少ない資質（若さ、エネルギー、意志、野心、組織能力、リスクへの対応力、積極性など）が新しい経営者の資質になっている。特に、人的ネットワークの果たす役割は大きい。

1992 年からの市場移行後のロシアの社会階層には、ソ連期の階層からの変化の側面と、ソ連期に存在した特徴をかなりの程度保持した連続性（惰性）の側面の

両面がみられる。特に、経済的ポテンシャルが強くはたらき、階層間の格差が顕著になっていることが確認される。以下では、このような社会階層の変化を、統計資料と社会調査の結果を用いて確認しておこう。

2.3. 中間層と階層間格差

前項で掲げた表 9 は全労働人口に占める各社会層の比率を示したものである。中層の比率はわずかながら増加しているものの、中層と上層とをあわせても全体の 1/4 に満たず、中間層の形成があまり進んでいないことを示している。人口の 50～67%が相対的貧困層である状況（表 11）から考えて、人口の 6 割以上を占める標準層の多くは生活が不安定であり、実質的に下層に含まれると推定される。

表 11　ロシアにおける相対的な貧困レベル（1994 年）

絶対的貧困のレベル	基　　準	人口に占める比率（%）
窮乏	最低賃金を超えない所得	5
極貧	最低限の食費より低い所得	5～7
貧困	最低限の生計費以下の所得	10～15
生活不安定	最低限の生計費以上だが、現在ロシアにふさわしい生活を行う基準以下の所得	30～40
	総　　計	50～67

（資料）Центр комплексных социальных исследований и маркетинга（1995），стр.53.

次に、ジニ係数の変化を確認しておこう。1991 年の 0.260 から、体制転換後には 1994 年の 0.409 へと急速に上昇し、経済格差は拡大したが、それ以後若干低下し、横ばいで推移している（1995 年－0.381、1996 年－0.375、1997 年－0.375、1998 年－0.379）[10]。

また、表 12 は産業分野別の賃金格差を示している。輸送、建設、金融・保険といった高賃金分野と、農業、教育、文化・芸術、保健といった低賃金分野との間に大きな賃金格差が生じており、ジニ係数の場合と同じ変化を示していることが確認できる。特に、高賃金分野は市場経済化にともなって成長している領域であ

り、市場経済化に対する適応力は、階層分化のひとつの基盤になっていることが伺われる。少なくとも、現在ロシアの階層化には、経済的ポテンシャルや社会文化的ポテンシャルの影響が強くはたらいているといえる。

表 12　産業分野別賃金（平均賃金を 100 としたときの値）

全産業分野	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997
工業	103	111	118	108	104	112	110	111
農業	95	84	66	61	50	50	48	46
輸送	115	120	146	151	150	156	144	141
建設	124	127	134	133	129	126	122	128
金融・保険	135	180	204	243	208	163	193	177
教育	67	71	61	68	69	65	70	65
学術	116	90	64	68	78	77	83	94
文化・芸術	62	67	52	62	62	61	65	62
保健	67	76	66	76	76	74	77	70
管理機構	120	99	94	115	117	107	120	131

（資料）Госкомстат（1997）, стр.123, Госкомстат（1998）, стр.84.

表 13　仕事にたいする態度（%）

	1989 年（ソ連期）	1995 年 1 月（ロシア）
賃金に関わりなく、仕事は重要で面白い。	15	11
仕事は重要だが、他により重要なものがある。	54	16
仕事は生活手段を得る基本的な源。	25	64
仕事は不快で、可能ならば働きたくない。	6	5
答えられない。	—	5

（資料）Центр комплексных социальных исследований и маркетинга（1995）, стр.37. ただし、原出所は ВЦИОМ, *Мониторинг общественного мнения: экономические и социальные перемены*, 1995, No.2. стр.41.

以上のように、経済的・社会文化的ポテンシャルがより強く作用することで、現代ロシアの社会階層構造は、ごく一部の富裕層と圧倒的多数の生活不安定層の存在、両者に挟まれた中間層の未発達を特徴としている。多数の生活不安定層の存在や中間層の未発達は、民主主義や市場の制度・ルールを不安定なものとし、

先進市場経済国の市場・市民社会とは異なる社会構造を生み出している。さらに、多数を占める労働者は、ソ連時代に政治的に下位に位置していたが、現在でもそれと同様に下位の階層を形成している。もっとも、彼らの意識は、市場経済下に対応した意識に変化してきている。仕事を所得の源泉としてのみ考える傾向が強まっているからである（**表 13**）。

中間層には、さらに以下の特徴がある。一般に中間層を規定する要因は、所得だけでなく、生活水準、教育水準、政治的態度などがあり、職業上の分類では、技師、中級以下の管理職、知識人の一部、中・小資産所有者、高熟練の労働者、サービス部門の労働者などが該当する。社会学では、通常、中間層を旧（伝統的）中間層と新中間層に分類しており、前者には自営業者などの中・小資産所有者が、後者には経営者、知識人、高熟練の労働者などの社会文化的ポテンシャルの高い集団が含まれ、前者は工業化社会の産物であるのに対し、後者はポスト工業化社会の特徴であるとされる。先進市場経済国においては、旧中間層が減少し、新中間層が増加する傾向にあり、人口の約 70%を中間層が占めている。体制転換後、ロシアにおいて自営業者などの中・小資産所有者が出現し、人口の約 10%が旧中間層に含まれると推定される。しかし、**表 9** や**表 11** に示されるように、その多くは生活が不安定であり、生活水準の点で中間に位置しているわけではない。さらに問題なのは、知的能力の高い新中間層にたいする評価が低く、下位の階層に分類されていることである。市場経済を安定化させるための主要な条件として中間層の確立を考える場合、以下の点が重要であろう。まず、旧中間層にあたる層に対し、労働の保全やセーフティー・ネットの付与を行い、職能と生活水準との間に相関関係をもたせることである。次に、新中間層の評価基準をソ連期の不明確なものから客観的基準に変化させ、新中間層の形成を促すことである。そのためには、労働市場を整備して労働に対する正当な評価を可能にすると同時に、市場経済に適合的な経営戦略を企業にとらせる必要があろう。こうした問題が解決されなければ、今後もロシアにおいて不安定な市場経済が存続するであろう。

3. 家計調査からみるロシアの貧困問題

3. 1. 家計調査（Выборочное обследование бюджетов домашних хозяйств）の概要

ロシアにおける家計調査は、住民の生活状況を把握することに加え、消費者物

価指数と国民経済勘定の算定に供するデータを収集することも視野に入れている。現在、調査の対象となっているのは 49,175 世帯で、1994 年に行われたミクロ・センサスのデータから、ロシアの連邦構成主体レベルで都市・農村別に無作為二段階抽出法によって選ばれたものである。各世帯は、2 種類の調査用紙（двухнедельные дневниковые записи；四半期に 2 回、журнальные записи；月に 1 回ないし 2 回）に各々の家計データを記入する他、用紙の回収時、各四半期、各年にそれぞれ聞き取り調査を受け、データの追加・修正が施されると同時に、家計に影響する要因（家族構成の変化など）が記録される。集められたデータは所定の方法にしたがって集計され、家族構成別や所得階層別に編集された家計データが国家統計委員会によって毎年発表されている[11]。

家計調査の歴史は 1952 年にまで遡るが、他の統計データと同様に、ソ連の崩壊以後、調査・集計方法が大きく変更されている。もっとも根本的な点はサンプル抽出基準の変更で、ソ連時代に採用されていた産業部門別の抽出法は 1995 年に廃止され、翌年から地域（連邦構成主体）別に行うことが決定された。ただし、96 年は移行段階にあり、完全に地域原則に移されたのは 97 年からである[12]。同年には調査項目も修正され、家計支出構造がより包括的に把握されるようになり、とかく問題が多いと指摘される所得データを補うかたちになっている[13]。そのため、現物で取得・消費した物品の貨幣換算額は、同時に可処分所得を構成するものとされ（後述の表 14、15 を参照）、貨幣所得のデータだけでは掴まえきれない「生活の現物化」の一端を明らかにしようと努めている。

以上のような事情から、現時点では家計調査に関する時系列での分析は困難であり、以下では 1998 年の調査結果を検討し、そこから浮かび上がるロシアの貧困問題について論じることにする。時系列での生活水準の変化については、他の統計資料も用いることで、その概観を示すにとどめたい。

3.2. 家計の所得・支出構成

表 14 と表 15 は、それぞれ所得と支出に関する家計データを示したものである。すでに指摘したように、現物で取得・消費した食料品と助成・特典の金銭的評価額が双方のデータに含まれている。まず、可処分所得階層別にみると、調査対象となった家計のおよそ 4 割（第 1～4 分位）が、一人当たりでみると 1998 年の最

低生活費（493.3 ルーブル）を下回る可処分所得しか得ていない。さらに、下位の階層に向かうほど、現物で取得する物品の比重が大きくなり、食料品については第 6 分位（表 14）ないし第 7 分位（表 15）に至るまで家計の 1 割以上を占めている。現物形態で供与された助成・特典が家計に占める割合も第 1～7 分位までほとんど変わらないことから（可処分所得の 1.6～1.8%、最終消費支出の 1.9～2.0%）、ロシアではおよそ 7 割の住民が「生活の現物化」に取り込まれていると考えられる。ただし、上の数字が第 7 分位に至るまで変わらないということは、所得が減少するのにしたがって現物での助成・特典の供与も減ることを意味しており、低所得者層に対する所得の再分配としては機能していないことを示している[14)]。

表 14　可処分所得に関する家計調査データ（1998 年）

	可処分所得（家計成員一人当たり月平均、ルーブル）	最低生活費に対する比率（%）	可処分所得源泉の構成（%）			
			貨幣所得	現物で取得した食料品の価値	現物形態で供与された助成・特典の価値	貯蓄・借金他
全家計平均	767.1	155.5	85.0	9.9	1.3	3.8
家計の成員数						
1人	1162.8	235.9	84.0	10.9	1.5	3.6
2人	935.9	189.8	84.6	10.1	1.3	4.0
3人	846.6	171.7	86.6	8.4	1.1	3.9
4人	686.8	139.3	85.4	9.5	1.3	3.8
5人以上	523.5	106.2	82.3	12.7	1.7	3.3
16歳未満の子供数						
1人	762.1	154.6	86.3	8.6	1.3	3.8
2人	595.3	120.8	83.1	11.7	1.9	3.3
3人	450.6	91.4	75.9	18.3	2.4	3.4
4人以上	299.4	60.7	71.6	21.0	2.3	6.1
年金受給者の家計	700.0	201.1	82.9	9.6	3.7	3.8
可処分所得階層別 *						
第1分位（最下位10%）	204.5(2.7%)	41.5	79.6	14.9	1.8	3.7
第2分位	307.4(4.0%)	62.3	81.1	14.0	1.6	3.1
第3分位	386.0(5.0%)	78.3	82.0	12.9	1.6	2.9
第4分位	468.1(6.1%)	94.9	82.7	12.7	1.6	2.8
第5分位	559.9(7.3%)	113.6	84.2	11.3	1.8	2.7
第6分位	675.0(8.8%)	136.9	84.9	10.3	1.9	2.9
第7分位	820.7(10.7%)	166.5	87.0	8.8	1.6	2.6
第8分位	996.6(13.0%)	202.2	89.1	7.5	1.1	2.3
第9分位	1229.2(16.0%)	249.3	89.3	7.2	1.1	2.4
第10分位（最上位10%）	2023.5(26.4%)	410.4	81.9	10.1	0.9	7.1

* 括弧の中は可処分所得総額に対する各分位の比率。

（資料）Госкомстат（1999a），стр.117, 119.

さらに、世帯の成員数別に家計データをみると、16 歳未満の子供の存在が家計の大きな負担になっていることがわかる。特に、子供の数が 3 人を超えると可処分所得が最低生活費を下回り、所得構成では貨幣所得の割合が 8 割を切るまでに

なる（表 14)。その結果、支出の部面に目を向けると、食費のおよそ 3 分の 1 を現物調達で賄うという状況が生じている（表 15)。こうした世帯の生活環境は、往々にして貧困問題でクローズ・アップされる年金受給者と比べても、はるかに劣悪である。子供を抱える世帯の貧困はソ連時代に端を発する問題であると同時に [15]、体制転換の前後の時期に確固たる収入源のない 10 代女性の出生率が上昇したことも大きく影響していると考えられる [16]。その一方で、子供をもつことが生活上の大きなリスクになっているという今日の状況は、全体の出生率の低下を招いており、子供（出産）と貧困の関係をめぐる問題は複雑な様相を呈している。

表 15　最終消費支出に関する家計調査データ（1998 年）

	最終消費支出（家計成員一人当たり月平均、ルーブル）**	最終消費支出の構成（%）					
		食費		食料品以外の日用品への支出	アルコール飲料への支出	サービスの供与に対する支出	現物形態で供与された助成・特典の価値
		購入した食料品	現物で取得した食料品の価値				
全家計平均	644.0	46.1	11.8	26.2	2.3	12.0	1.6
家計の成員数							
1人	989.4	51.8	12.7	19.2	2.3	12.2	1.8
2人	786.9	47.7	12.0	24.3	2.4	12.0	1.6
3人	700.3	44.3	10.1	29.5	2.4	12.3	1.4
4人	577.4	43.2	11.3	29.4	2.1	12.4	1.6
5人以上	444.8	47.9	15.0	22.5	2.0	10.7	1.9
16歳未満の子供数							
1人	641.2	44.6	10.2	29.4	2.2	12.1	1.5
2人	514.5	42.1	13.5	28.9	1.8	11.5	2.2
3人	387.2	41.9	21.3	22.8	1.6	9.6	2.8
4人以上	261.2	48.2	[illegible]	15.9	1.4	7.8	2.6
年金受給者の家計	630.6	52.9	[illegible]	13.4	2.0	10.0	2.9
可処分所得階層別*							
第1分位（最下位10%）	186.2(2.9%)	54.3	16.3	13.4	1.1	12.9	[illegible]
第2分位	277.7(4.3%)	53.5	[illegible]	15.1	1.3	12.7	[illegible]
第3分位	346.1(5.4%)	53.0	[illegible]	16.2	1.6	12.4	[illegible]
第4分位	416.5(6.5%)	51.9	[illegible]	17.9	1.8	12.2	[illegible]
第5分位	498.1(7.7%)	53.4	[illegible]	18.0	2.1	11.6	[illegible]
第6分位	585.8(9.1%)	50.3	[illegible]	21.7	1.9	12.2	[illegible]
第7分位	700.0(10.9%)	47.0	[illegible]	26.2	2.3	12.2	[illegible]
第8分位	849.1(13.2%)	46.5	8.8	29.2	2.5	11.7	1.3
第9分位	1021.5(15.9%)	44.5	8.7	30.2	2.7	12.6	1.3
第10分位（最上位10%）	1559.0(24.1%)	37.3	13.3	34.2	2.5	11.5	1.2

* 括弧の中は消費総額に対する各分位の比率。

** 投資、外貨・有価証券の購入、銀行預金、奢侈品の購入、住居の修繕などに対する支出は含まれていない。

（資料）Госкомстат（1999a）, стр.120, 122.

3.3. 家計調査にみられる貧困層の特徴

調査の対象となった世帯ないし住民の属性を家族構成と成員の職業等によって分類したものが表 16 である。ここでは、各属性ごとに、一人当たりの平均貨幣所得と平均可処分所得が最低生活費とその 2 分の 1 を下回る割合を示している。前

項で指摘したように、3 人以上の子供を抱える世帯の家計がもっとも厳しく、最低生活費以下の家計の比率は失業者のいる世帯のそれを上回っている。特に、両親が揃っていない場合、最低生活費以下の割合は 8 割にまで上り、そのうち半数は最低生活費の 2 分の 1 を下回るという状況である。子供を取り巻く生活環境の厳しさは、**表 17** からも読み取ることができ、下位の所得層に向かうほど 14 歳未満の子供が占める比率は高くなっている。

次に、ロシアの年金受給者をめぐる問題について考えてみたい。彼らは経済的弱者で、経済改革のしわ寄せを受けたと言われているが、その一方で、選挙時における票田としての重み故に、社会政策において常に優先されるべき存在として扱われている。家計調査から伺い知ることのできる彼らの生活像は、以下の 2 点である。第一に、その生活に占める現物取得・消費の大きさである。**表 16** によると、労働に従事していない年金受給者とその世帯では、最低生活費以下の貨幣所得者（世帯）の割合と可処分所得者（世帯）のそれとの差が 14 ポイント前後にまで達し、他のグループを上回っている。彼らの家計では、現物で取得した食料品が最終消費に占める比重も 18.8%と大きいことから（**表 15** を参照）、ロシアの年金受給者は「生活の現物化」の主役であるとともに、生活に欠かせない物品を現物で取得するという「労働」に従事していると言える。彼らの第二の特徴は、**表 17** から明らかなように、年金を得るだけでなく、貨幣所得の源泉となる労働に従事することで生活の維持と改善を図っている点である。その結果、他のグループと比べると、労働に従事している年金受給者の生活は相対的に良好である（**表 16**）。したがって、年金受給者の貧困問題の所在は、年金の額そのものに加え、物品ないし貨幣の稼ぎ手として労働に従事し、家計を支えていかなければならないことにもある[17]。

最後に、ロシアの貧困問題が性別によって異なる様相をみせている点に触れておきたい。**図 1** は、最低生活費以下の所得者層の割合を男女・年齢別に示したものである。男性の場合、年齢とともに比率が下がっているのに対し、女性は 50 代後半を境に再び上昇している。それゆえ、女性は高齢になると、男性に比して働き口を得ることが難しくなっていると推察される。逆に、男性の立場では、青年期から壮年期にかけて低賃金でも働かざるを得ないという、いわゆる「働く人々の貧困（層）」を形成している[18]。

表 16　世帯・住民の属性別にみた家計の状況（1998 年）

	一人当たり平均貨幣所得		一人当たり平均可処分所得	
	最低生活費以下の比率(%)	最低生活費の1/2以下の比率(%)	最低生活費以下の比率(%)	最低生活費の1/2以下の比率(%)
全家計平均	40.5	15.0	30.4	7.1
都市部	35.4	10.5	28.3	5.8
農村部	54.6	27.1	36.3	10.4
両親のいる家計				
子供1～2人 *	52.2	21.1	42.0	10.2
子供1～2人＋親族	56.6	23.1	46.4	12.6
子供3人以上	77.8	[illegible]	[illegible]	[illegible]
子供3人以上＋親族	80.1	[illegible]	[illegible]	[illegible]
片親の家計				
子供1～2人	51.6	20.0	41.5	10.1
子供1～2人＋親族	63.5	26.0	53.6	15.0
子供3人以上	86.5	59.2	[illegible]	[illegible]
子供3人以上＋親族	88.9	58.0	[illegible]	[illegible]
失業手当の受給者のいる家計	71.1	38.2	58.4	19.7
労働に従事していない年金受給者のいる家計	28.7	7.4	[illegible]	2.0
労働可能年齢の単独世帯家計	15.3	4.8	10.0	1.7
労働可能年齢外の単独世帯家計	19.2	4.2	7.9	0.7
全住民平均	47.9	19.3	37.8	9.8
雇用労働従事者	43.1	15.9	34.2	7.8
企業経営者	40.0	18.6	32.5	9.8
一時的失業者	64.7	34.0	54.8	19.2
労働に従事していない年金受給者	38.8	12.4	[illegible]	5.1
労働に従事している年金受給者	22.1	[illegible]	[illegible]	[illegible]
家計支持者の喪失にともなう年金の受給者	61.0	26.4	48.6	12.6
1.5歳までの育児手当の受給者	65.2	31.9	55.9	18.6
失業手当の受給者	73.0	40.5	60.0	21.4

* 子供は 18 歳未満で、すでに独立している場合は除く。

（資料）Госкомстат（1999c），стр.59.

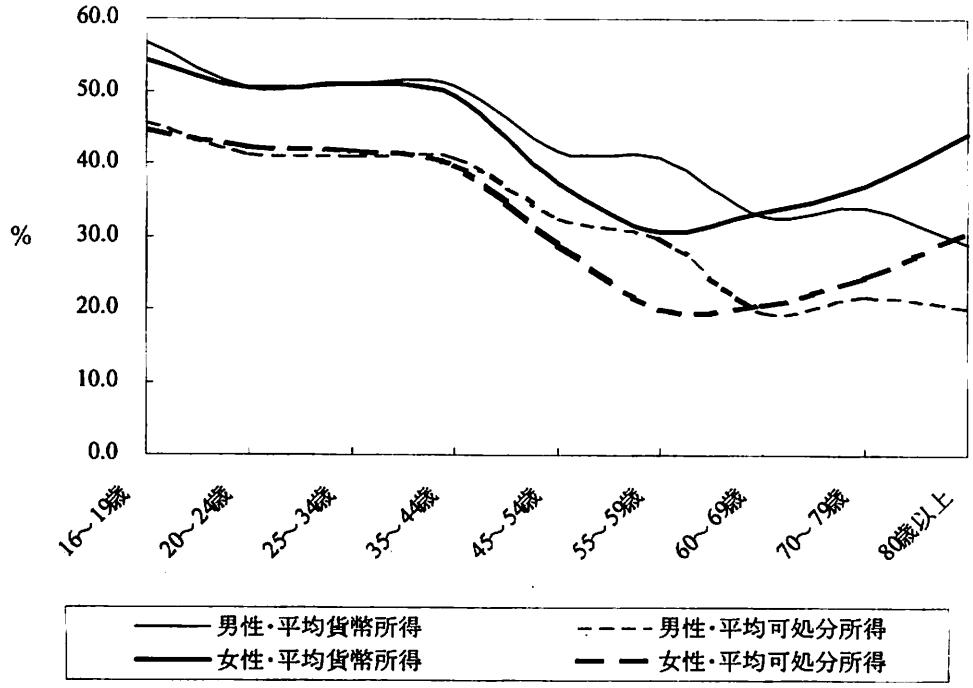
表 17　可処分所得階層別にみた住民の属性（1998 年）

	労働従事者	一時的失業者	労働に従事している年金受給者	労働に従事していない年金受給者	14歳未満の子供	その他 *
全住民平均	43.6	6.4	3.0	16.4	17.7	12.9
可処分所得階層別						
第1分位（最下位10%）	35.3	10.9	[illegible]	12.2	[illegible]	14.3
第2分位	38.9	8.5	[illegible]	14.7	[illegible]	14.1
第3分位	40.0	7.5	[illegible]	16.4	[illegible]	14.0
第4分位	41.1	6.6	[illegible]	17.7	[illegible]	13.1
第5分位	42.2	5.5	[illegible]	19.2	[illegible]	13.2
第6分位	43.5	5.6	[illegible]	17.9	[illegible]	12.9
第7分位	44.5	5.3	[illegible]	16.2	[illegible]	14.4
第8分位	48.2	5.0	[illegible]	14.3	[illegible]	12.8
第9分位	49.4	5.0	[illegible]	16.7	[illegible]	12.1
第10分位（最上位10%）	52.4	4.3	[illegible]	18.6	[illegible]	8.6

* その他は、14 歳以上の学業従事者、家事従事者、自営業における家族労働者など。

（資料）Госкомстат（1999a），стр.154.

図 1　男女・年齢別にみた最低生活費以下の所得者層の割合（1998 年）



（資料）Госкомстат（1999c），стр.59.

表 18　生活水準の変化（1970～1998 年）

	1970	1975	1980	1985	1990	1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
貨幣所得													
所得階層別（%）													
第1分位（最下位20%）	7.8	9.5	10.1	10.0	9.8	11.9	6.0	5.8	5.8	5.5	6.2	6.0	6.2
第2分位	14.8	14.8	14.8	14.6	14.9	15.8	11.6	11.1	10.2	10.2	10.7	10.2	10.5
第3分位	18.0	18.6	18.6	18.3	18.8	18.8	17.6	16.7	15.2	15.0	15.2	14.8	14.9
第4分位	22.6	23.3	23.1	23.1	23.8	22.8	26.5	24.8	23.0	22.4	21.5	21.6	21.0
第5分位（最上位20%）	36.8	33.8	33.4	34.0	32.7	30.7	38.3	41.6	46.3	46.9	46.4	47.4	47.4
最低生活費以下の貨幣所得の住民比（%）									22.4	24.7	22.1	20.8	23.8
同住民数の対前年比（%）								94	71	110	89	94	114
一人当たり平均貨幣所得の購買力（月）													
牛肉（kg）	33	46	44	50	68	53	36	37	58	49	56	47	40
全乳（liter）	246	343	432	490	717	879	443	404	354	235	255	306	285
卵（個）	654	995	1100	1291	1955	1864	1277	1533	1551	1318	1381	1589	1393
ジャガイモ（kg）	493	497	484	568	500	335	273	402	391	292	371	473	412
パン類（kg）	274	332	403	444	551	548	257	380	272	190	170	194	197
一人当たり食料品消費量（年）*													
食肉・肉製品（kg）			70	70	70	65	58	57	58	53	48	57	58
						69	60	59	57	55	51	50	
牛乳・乳製品（kg）			390	378	378	348	294	305	305	249	235	257	245
						347	281	294	278	253	232	229	
卵（個）			286	265	231	229	243	236	210	191	173	177	198
						288	263	250	236	214	207	210	
ジャガイモ（kg）			117	108	94	96	105	112	113	102	108	107	110
						110	118	127	122	124	125	130	
パン製品（kg）			112	105	97	101	104	107	101	102	97	108	120
						120	125	124	124	121	117	118	
一人当たりエネルギー消費量（日、Kcal）			2964	2739	2590	2527	2438	2550	2427	2293	2200	2586	2775
うち、動物性食品の割合（%）			32.6	34.8	35.9	35.0	32.5	31.0	34.0	31.2	29.9	28.1	26.2

* 上段は家計調査データによる消費量、下段は食料需給バランスから計算した消費量である。

（資料）Госкомстат（1999b）, стр.139-180, Госкомстат（1999e）, стр.120-149.

3.4. 近年における生活水準の動向

ロシアにおける生活水準の変化を確認するために、表 18 ではいくつかの指標を掲げてみた。そのうち、一人当たりの食料品消費量（上段）とエネルギー消費量は、家計調査から得たデータである。本節の冒頭で説明したように、1997 年以降にサンプルの抽出法が地域原則に移行したため、それに起因すると思われる数字の変動が散見される（食品・肉製品やカロリーの消費量の急増など）。そこで、家計調査に拠らない他の資料も用いながら、近年における生活水準の動向を確認してみたい。

第一に、1992 年初の価格自由化が惹き起こしたハイパー・インフレーションの影響である。同年における一人当たり平均貨幣所得の購買力は、91 年に比しておよそ 3 分の 2 となり、一般の人々にとって経済改革を評価するプリズムである食料品価格の暴騰は、改革の遂行に対する大いなる疑念を市民の中に生んだと考えられる。第二に、90 年代に進行した食生活の変化である。体制転換後、明らかに動物性食品の消費量が減少し、その分をジャガイモやパン類で埋め合わせている。ただし、これについては、ソ連時代には価格補助金を背景に畜産物に対する過大な需要が発生していたため、現在はそうした過剰消費を是正する調整過程にあるとする見方もある [19]。第三に、1998 年 8 月に発生した金融危機の影響である。前年と比べると、購買力は低下し、最低生活費以下の貨幣所得者層も増加している。最後に、92 年以降に大きく変化した貨幣所得別階層の構造である。下位層である第 1 分位と第 2 分位が減少し、第 5 分位が大きく伸びている。明らかに実態から乖離していると思われる現象は、ロシアの日常生活を論じる場合に、貨幣所得だけを指標とすることの限界を示していると言えよう。ただし、留意すべき点は、この間に第 3 分位と第 4 分位の比率が低下していることである。前節の最後で触れたように、中間層の動向は社会の安定性を測るバロメーターとも言われるだけに、この現象の社会的含意に関する慎重な分析が求められている。

むすびにかえて

ロシアにおける貧困問題は、もっぱら経済格差の拡大に起因する相対的なものとして理解されている。言い換えれば、飢餓が頻発するような絶対的な貧困ではないということである。この点は否定できないが、格差を示す数字だけではなく、

その内容に一歩踏み込んでみると、社会階層の変化は公正な競争の結果として生じたというよりは、ソ連期の社会関係にまで遡る根深い問題であることがわかる。しかも、以前からの構造的な貧困問題を拡大再生産している一方で、人々が貧困層に転落するリスクを増大させている[20]。他国と比較すると、こうした現象を市民が極端に否定的にとらえていることは、本稿で指摘したとおりである。日常生活の領域で現物経済が幅を利かせているロシアでは、貧困問題ひとつをとっても数字では割り切れない側面があり、経済生活に対する市民の意識を可能な限り反映した調査やそれに基づく指標の開発などが、今後の重要な課題となるであろう。

注

1) Klugman, Jeni (ed.), *Poverty in Russia: public policy and private responses*, The World Bank, 1997 や、Milanovic, Branko, *Income, inequality, and poverty during the transition from planned to market economy*, The World Bank, 1998 などを参照。

2) Кларк (1998), No.10, стр.110. ただし、最低生活費の金額は、Госкомстат (1997), стр.116 に基づいて一部修正した。

3) 田畑（2000）, pp.2-5.

4) 例えば、Осипов, Г.（рд.）, *Социология в СССР*, Москва, 1965〔田中清助訳『ソヴェト社会学』青木書店、1967 年〕や Харчев, А., *Брак и семья в СССР*, Москва, 1964〔寺谷弘壬訳『ソ連邦における結婚と家族—社会学的研究の試み』創元新社、1967 年〕。

5) ナチスによる強制移住者や戦時捕虜などで、戦後ソ連へ帰還しなかった者や政治的亡命者を含む。

6) Заславская, Т.（1997）

7) 袴田（1995）によると、ロシア経済は一種の人間不信を伴った前近代的なバザール経済の性格を濃厚に保持している。

8) Bourdieu（1964）

9) P.リフキナによると、経済に関わるその国の文化のことである。経済発展は国民のさまざまな能力（識字率、教養、理性、誠実さ、規律正しさなど）に依拠しており、それらはすべてその国の文化に関わっていることから、「経済文化」はロシアの経済発展の大きな鍵であると言えよう。

10) Госкомстат（1997）, стр.107, Госкомстат（1999a）, стр.144.

11) 詳しくは、Госкомстат（1999c）, стр.49-53 を参照。

12) 山村（1999）, pp.216-217.

13) Госкомстат（1999c）, стр.50.

14) なお、最高位である第 10 分位において、現物で取得した食料品の比率が高まっている。パーセンテージの伸びについては、他の項目の変動に伴うものとして一部説明できるが、問題は換算額そのものも大きく伸びていることである（第 9 分位の 88.5 ルーブルに対し、第 10 分位は 204.4 ルーブルに上る）。この傾向は 97 年の家計調査にも現れているが（Госкомстат（1998）, стр.168, 171）、その原因を他の調査結果から特定することはできなかった。

15) Кларк（1998）, No.11, стр.125.

16) Госкомстат（1999d）, стр.153 によると、1987 年を境に全体の出生率は低下しているが、15～19 歳層の女性の出生率だけは上昇を続け、1989～92 年には千人当たり 50 人を超えるという、これまでにない水準を記録した。

17) Кларк（1998）, No.11, стр.126.

18) McAuley（1995）, pp.187-188.

19) 山村（1999）, pp.215-230.

20) Braithwaite（1997）

参考文献（著者名アルファベット順）

Абакумова Н.Н., Подовалова Р.Я., *Политика доходов и заработной платы*, ИНФРА-М, 1999

Beliaeva, Liudmila, The "New Middle Classes" in Russia, *Sociological Research*, Vol.38, No.5, September-October 1999

Bourdieu, Pierre, Jean-Claude Passeron, *LES HERITIERS—Les etudiants et la culture*, Editions de Minuit, 1964〔石井洋二郎訳『遺産相続者たち—学生と文化』藤原書店、1997 年〕

Braithwaite, Jeanine D.(1997), The old and new poor in Russia, in Klugman, Jeni (ed.), *Poverty in Russia: public policy and private responses*, The World Bank, 1997

Госкомстат России, *Социальное положение и уровень жизни населения россии*,

1997

———, *Социальное положение и уровень жизни населения россии*, 1998

———, *Социальное положение и уровень жизни населения россии*, 1999a

———, *Российский статистический ежегодник*, 1999b

———, Организационно-методологические основы обследования бюджетов домашних хозяйств в системе государственной статистики, *Вопросы Статистики*, No.8, 1999c

———, *Демографические ежегодник россии*, 1999d

———, *Статистический Бюллетинь*, No.4 (54), 1999e

Кларк, Саймон, Бедность в России, *Эко*, No.10-No.12, 1998

Хахулина, Л., Социальное неравенство в российском обществе: мнения и оценки, *Мониторинг общественного мнения:экономические и социальные перемены*, No.4, 1999

袴田茂樹「ロシアにおけるバザール的エトスと分離派的エトス」『ロシア研究』No.21、1995 年

Inkeles, Alex and Raymond Augustine Bauer, *THE SOVIET CITIZEN –Daily life in a totalitarian society*, Harvard University Press, 1959〔生田正輝訳『ソヴェトの市民—全体主義社会における日常生活』慶應義塾大学法学研究会編、1963 年〕

石川晃弘「ロシア・旧ソ連の社会学」森岡清美他編『新社会学事典』有斐閣、1993 年

McAuley, Alastair, Inequality and poverty, in Lane, David (ed.), *Russia in transition: politics, privatisation and inequality*, Longman, 1995

溝端佐登史「移行経済ロシアにおける経済エリートの再編」『経済』1997 年 6 月 (No.21)

Рывкина, Р. *Экономическая социология переходной России: люди и реформы*, Дело, 1998

田畑理一「ロシア地域における『貧困化』現象－製造業空洞化との関連で」(mimeo)、1999 年度スラブ研究センター冬期シンポジウム、2000 年

Центр комплексных социальных исследований и маркетинга, *Социальная стратификация современного российского общества*, Москва, 1995

ВЦИОМ, *Мониторинг общественного мнения: экономические и социальные перемены*, No.3 & No.4, 1998,

———, *Мониторинг общественного мнения: экономические и социальные перемены*, No.4, 1999

山村理人「体制移行期ロシアの食料市場－需要と輸入の分析を中心として」『スラヴ研究』第 46 号、1999 年

Заславская, Т., Социальная структура современного российского общества, *Общественные науки и современность*, No.2, 1997

———, Как рождался ВЦИОМ, *Мониторинг общественного мнения: экономические и социальные перемены*, No.1, 1998

Заславская, Т.И., Громова, Р.Г., Трансформация социальной структуры российского общества//Львов, Д.С., *ПУТЬ В XXI ВЕК: Стратегические проблемы и перспективы российской экономики*, Москва, 1999

Rafis Abazov

The Foreign Policy Making in Transitional Countries: The Case of Interest Groups in Kyrgyz Republic

Introduction

I would like to start this paper with simple but challenging questions: What do we know and we don't know about the foreign policy process in transitional countries? How can we systematically transform our empirical knowledge about foreign policy institutions, structures and actors in these countries into theoretical generalisations and conceptualisation and consequently into understanding on how have the foreign policies been made in these countries?

Despite the fact that during the last decade we witnessed the inflow of the number of publications on Central Asia in general and on the Central Asian international politics in particular, we have barely advanced in research and understanding foreign policy process in the Central Asian Republics (CARs). There are several problems in the studies of foreign policies and foreign policy decision making in the transitional countries. First, the Central Asian Republics are new actors in the international arena since they achieved sovereignty and independence in internal and external policy making not long time ago. Although, the CARs established their Ministries of Foreign Affairs (MFAs) in 1944, these Ministries have never been plenipotentiary and functioning institutions during the Soviet era. In general, all Central Asian Republics started to restructure and to develop their MFAs into workable foreign policy institutions only after achieving independence in 1991. Therefore, these institutions and their activities as subject of the research foci are quite new.

Second, traditionally, the foreign policy process in general and the diplomatic world in particular are sensitive issues for any members of the international community. The sensitivity lies in the elements of the secrecy and exclusiveness in the diplomatic world because of the nature of their activities. The case of the former Soviet countries that just "came out of cold", is even more complicated practically in all aspects of their life due to the long lasting existence of the 'iron curtain'.

Third, the studies of the international politics in the former Soviet Union often have been dominated by the *Kremlinologists* who repeatedly focused on the individual politicians and individual leadership. This approach has two general features. On the one hand, it assesses the state as a 'rational actor' and often uses a 'rational actor model' (Morgentau,

Kissenger) in assessing the foreign policies of these states. On the other hand, it often overestimate capacities of the individual leaders in their reaction to the changes, evaluation, perception and in their contributions to the real policy making. This approach often isolates the CARs leaders from the social, political and bureaucratic environment, from other political actors and from the political system to which they belong.

Approach of this research

In this paper, I would like to argue that foreign policy making process is a group action in a particular political, social and economic environment. Thus, in order to present the foreign policy making in Kyrgyzstan during transitional period of the 1990s in analytical and systematic form, I will assess several major variables. First, I assume that foreign policy determinants classified by Rosenau (the size, state of economy, political accountability, penetration or non-penetration, and issue area)[1] shape the environment of the decision making. Second, the organisational structures of the foreign policy making in the country have to be analysed. Third, major actors who have interests to influence foreign policies and who actually contribute to foreign policy process in a given country. Here I would like to focus on four groups: political parties; military and security services; private businesses and private interests, and academic circle. Fourth, The decision making process is largely affected by perceptions of the foreign policy issues by the leading actors. As David Edwards puts it: "Man reacts, of course, to how he perceives reality rather than to reality as such. The sum of what we think we know, rather than what is really true, determines what plan or policy we adopt and what actions we then attempt."[2]

I believe that it is particularly important to analyse the perception of foreign policy issues, which affects foreign policy actions. For this purpose I use materials of the survey study conducted in 1997 and in 1999 in Central Asian Republics. The research did not aim to survey the opinion of the general public. Rather it focused on a top layer of the so-called **'attentive public'**,[3] the group of policy-makers and experts who were well informed, articulated and involved directly or indirectly in the intellectual debates, decision making and expertise and "problem representation."[4]

With this in mind, I decided to focus on the foreign policy of one individual state rather than group of states. The assessment of the foreign policy of the Kyrgyz Republic might be essential from an academic perspective, because it may help us to move further in understanding the foreign policy formation and the interaction of the major foreign policy

actors in the transitional countries. Firstly, despite its small size, Kyrgyzstan has become an important actor in the post-Soviet political arena and it is considered one of the few democratic and liberal states in the CIS. Secondly, like many other transitional countries in the CIS, Kyrgyzstan inherited from the Soviet past underdeveloped international institutions and limited international experience. Thirdly, after unexpected (at least for Kyrgyzstani elite) disintegration of the Soviet Union, Kyrgyzstani government has struggled to find a balance in its relations with the East and West, Russia and the USA, the South and the North.

The Research Design: the Survey Study

The population of the study was selected through three stages. During the first stage I conducted a survey of the CARs mass media and selected several institutions, which were the most important and influential in the CARs' foreign policy formation. Also the researcher analysed the current foreign policy debates in the region through assessing local mass media and academic publications and then he selected the most important issues for the CARs foreign policy making.

During the second stage, the researcher conducted qualitative interviews with the CARs experts on foreign policy formation. During this stage the researcher clarified the structure and size of the analysed institutions, obtained information on their research and other activities and clarified important issues in CARs foreign policy formation. Additionally at this stage, the questionnaire was pretested in the Centre for Social Research of the Kyrgyz Academy of Science.

During the third stage the researcher selected Central Asian institutions for the survey study, improved the questionnaire and conducted the survey. The population of the study covered 1669 staff members in different organisations and institutions, whose work was related to the field of international relations. They were from three Central Asian newly independent countries: the Republic of Kazakhstan, the Kyrgyz Republic, and the Republic of Uzbekistan. The list was generated with the help of respective organisations who provided necessary information on their staff members.

This paper is based on the survey study conducted in Kyrgyzstan in 1999. Population of the study consisted of (1) academics, scientists and researchers, (2) members of the parliament, political parties and mass media, and (3) the personnel of the CARs' Ministries of Foreign Affairs (see Appendix 1). Proportional random technique was used to select the sample.

In 1999, the author with the assistance of the Centre for Social Research of Kyrgyz Academy of Science and research centres in Kazakhstan, conducted a survey study. A questionnaire-based survey was used for data collection. This study was conducted among citizens of Bishkek (Kyrgyzstan), Almaty and Astana (both in Kazakhstan).[5] The research, conducted within the framework of the project on formation of foreign policies in Kazakhstan, Kyrgyzstan and Uzbekistan, focused on the perceptions of the foreign policy issues by the Central Asian policy makers and foreign policy experts.[6] The questionnaire was designed to investigate: (a) the opinion of local experts on foreign policy making process in Central Asia; (b) the perception of security issues and international development; (c) opinion on the role of the CARs leaders in the formulation of national interests and security policies in the post Soviet period. Mostly structured questions, Likert and semantic-differential scales were designed to collect the data.

In this paper, I will take a case of Kyrgyzstan. I will briefly analyse the foreign policy determinants, the formation of the foreign policy institutions in Kyrgyzstan, the role of the various foreign policy actors in foreign policy making and the policy perceptions among the foreign policy experts and policy makers. I decided to depart from the conventional listing of the major external actors and their strategic concerns in the Central Asian Republics as well as their role or influence in the Kyrgyz Republic. Rather, I will focus on the internal variables of the Kyrgyzstani foreign policy. First section provides a brief overview of political, social and economic settings for international politics of Kyrgyzstan in the post-Soviet period. Second section assesses the formation and restructuring the foreign policy institutions in the Republic. Third section analyses the major foreign policy actors who play an essential role in the foreign policy formation. Forth section reviews the foreign policy debates and the Kyrgyzstan experts' evaluation of the foreign policy issues. The final section summarises the findings of the papers and discusses the foreign policy making process in Kyrgyzstan. The main arguments of this paper supported by the findings of the survey study conducted by the author in Kyrgyzstan in 1999.

1. Foreign Policy Determinants and Foreign Policy Context: Internal and External Challenges

Political turmoil of the 20th century, social and demographic changes, economic modernisation, and the legacy of the 'Great Game' have been determining peculiarities of the security system within the Central Asian region in the modern era. The course of the political events of the 20th century isolated, what are now the Central Asian Republics (CARs), from their geographic neighbours, cut traditionally strong historical and cultural links of the CARs with South Asia and the Middle East, and created new political realities of the Soviet system. The Soviet modernisation changed social and economic landscape of the region and made the CARs quite different from Afghanistan, Iran, Pakistan or Turkey. All together, these developments left their distinctive marks on Kyrgyzstan as well.

It is important to stress that for the CARs the partition of the USSR, unlike the case of British Indian territories in the 1940s or Yugoslavia in the 1990s, was peaceful. Assuring a system of regional and national security and searching for the new means of co-operation were the main driving force of the CARs decision to join the CIS and sign the *Alma-Ata Declaration* in December 1991. The *Alma-Ata Declaration* highlighted five major principles: "assuring the territorial integrity and inviolability of the national boundaries; creation of a system of political security; creation of a military system of security, and last but not least, stabilisation of inter-ethnic relations within the former USSR."[7]

Although in 1991, Kyrgyzstan had more favourable conditions then war-burden Georgia, Azerbaijan or Tajikistan, the Republic confronted a complex of intractable social, economic ethnic and political issues, which appeared and strengthened after the unexpected 'catapult to independence'.[8]

Interethnic conflicts

In 1990, there were several conflicts on the Kyrgyz-Tajik border raised over the disputable borders, land and water. In May and June 1990, the major violent conflicts took place in **Osh** and **Uzgen** (southern Kyrgyzstan). A discord between local communities of the Kyrgyzs and Uzbeks turned into a disastrous conflict in Uzgen and Osh (both are heavily populated by the Uzbeks). The official calculations indicated that 220 were dead and a thousand hospitalised (unofficial estimations gave 600-1200 killed during the turmoil) and a dozen of thousands people displaced from their villages[9]. The aggravating

factor in this conflict was the popular perception people in unfair distribution of resources and influences to one community on the expense of other. As a consequence of the conflicts some radical nationalistic groups even called for the partition of the southern Kyrgyzstan (Osh province) to Uzbekistan. Another disturbing issue raised during this conflict was a demand by some nationalistic groups to revise the national borders between Kyrgyzstan (4.5 mln people) and Uzbekistan (20 mln people) in order to accommodate the ethnic composition.

Although the conflict was localised during 1990-1992, the inter-ethnic issues remain one of the potential threats to the security of the Republic in the post-Soviet era. On the eve of the Soviet disintegration, the non-titular people constituted 47.6% (2.1 million out of 4.5 million in 1989) in Kyrgyzstan, including 913 thousand Russians, 108 thousand Ukrainians, 102 thousand Germans[10]. However, due to the rise of inter-ethnic tensions and economic recession in Kyrgyzstan, there was a large scale immigration of the so-called Russian speaking population, when between 1995 and 590 thousand people left the country[11]. This brought the proportion of Kyrgyzs above 60 per cent in 1999 and they will possibly reach the proportion above 70 per cent within next decade.

Sub-ethnic Conflict

In Kyrgyzstan, the political patronage was centred around the existed tribal relations[12]. Patrimonial and tribal loyalties mobilisation have survived throughout the Soviet era and continued to influence significantly the political relations in the Republic. Traditional Kyrgyz society was structured around a confederation of numerous tribes subdivided into two major groups: Ong Kanat and Song Kanat (sometimes for simplicity called northern and southern clans respectively). Under the Soviet leadership, the representatives of these two traditional groups have competed for political power and for party and state positions in the Republic, however, after the disintegration of the USSR there was a real danger that this rivalry may become violent. The experience of the Civil War in the neighbouring Tajikistan in the 1990s clearly shows that if the sub-ethnic conflicts (regional clan rivalry) go out of control and if the society fails to consolidate, there are dangerous threats to a very existence of the newly independent nation-state.

Political Strife and Social Tensions

Political relations in Kyrgyzstan of the 1990s were characterised by rising tensions within the society itself. A combination of factors, complicated by the power struggle between political, ethnic, and clan fractions has made the political process in the Republic especially tense. In order to halt these tensions, President Akayev had departed from the Soviet practice: his government introduced and maintained one of the most liberal regimes in the region, allowing numerous opposition parties and freedom of mass media.[13] However, the absence of strong political institutions, middle class and democratic traditions makes the political balance in the country quite fragile.

This balance was broken in the early 1990s, when the power struggle between the President and the *Jogorku Kenesh* (Parliament) culminated in 1994 by the defeat of the later and by desolation of this allegedly conservative legislative body. The conflict in Kyrgyzstan did not reach the violent level of Boris Yeltsin's battle with the Russian Parliament, but it clearly indicated that the 'temperature' of the political process in the Republic was very high. The new Parliament was elected in 1995 with considerably reduced power, nevertheless it remained a serious contra-balance to the executive power.

Economic Changes and Economic Problems

Kyrgyzstan's transitional recession after 1991 was especially steep. Kyrgyzstan's GDP dropped by 15.9 per cent in 1992, 16.0 per cent in 1993, 26.2 per cent in 1994 and a further 10.0 per cent in 1995. The country's industrial sector experienced an even deeper decline: 26.4 per cent in 1992, 25.3 per cent in 1993, 24.5 per cent in 1994 and 19.5 in 1995. The Republic experienced severe shortage of energy having almost no gas and oil reserves. Enterprises in industrial and agricultural sectors were privatised mainly in favour of the former *nomenklatura,* who could not bring new investments or management skills. In the 1990s, the Republic attracted some foreign direct investments for processing its natural resources (it produced 17 tons of gold in 1998). However, a very small fraction of the society benefited from the economic changes and foreign investments.

In the economic policy, the Republic steadily followed prescriptions of the IMF and World Bank in reforming the country's economy. Although the *Structural Adjustment Programme* stabilised the economic situation in the Republic in 1996-1997, the reforms changed the structure of the national economy. The country lost most of its economic achievements of the Soviet era and is gradually transforming into a typical third world country with the economy based on the export of basic commodities, such as gold,

antimony, uranium oxide and cotton and silk. Other consequences of the transitional recession include the increasing polarisation of the society in term of income distribution, rise of shadow economy and of organised crime.[14]

By and large, the economic recession and post-Soviet economic development put considerable constraints in the ability of the Republic to relocate any considerable economic resources for building up an effective military capacity.

External Military Threat

The international environment on the eve of the USSR's disintegration made the Kyrgyzstan vulnerable to major international conflicts of the Middle East and South Asia. The Civil war in Afghanistan affected the regional security environment and threatened to flood Kyrgyzstan with drugs, weapons and extremist militant groups. Additionally, it was expected that such countries like Russia versus China, Iran versus Turkey and Pakistan versus India will contend with each other in their attempt to achieve geopolitical gains in their competition with rivals.

The delimitation created highly disputable borders between Kyrgyzstan and China (858 km of common borders) and the other CARs. During the Cultural Revolution, China made extensive territorial claims to Kyrgyzstan, which were later denounced, but during meetings with Kyrgyzstani officials, the Chinese government expressed disagreements on around 12 sectors of the borders. Although the territorial disputes with China were solved within multilateral framework of *Shanghai Declaration* in 1996, there were series of disagreements, which sparked diplomatic protests at the south-west borders of Kyrgyzstan (Ferghana Valley), such as unresolved territorial claims and community disputes with Tajikistan and Uzbekistan.

Relations with Foreign Countries

Kyrgyzstan's relations with the neighbouring countries are set up within the frameworks of the several international groupings:[15] *CIS Treaty on Collective Security,*[16] Central Asian Economic Union and Shanghai agreement.[17] Despite all their shortcomings and existing problems, these organisations allowed to maintain fragile peace and security in the region. The political unrest and the Civil war of 1992-1997 in neighbouring Tajikistan had seriously threatened Kyrgyzstan's security, and the Republic sent its peacekeeping battalion in 1993 as a part of the CIS peacekeeping mission along with Russia, Kazakhstan

and Uzbekistan. However, if before 1999 the conflict was restrained within Tajikistan, since the Summer 1999 there was a kind of spill over to other republics, including Kyrgyzstan and Uzbekistan. This included the guerrillas raids into the territory of Kyrgyzstan and alleged involvement of some guerrilla groups in bombing in Tashkent in February 1999.

The Kyrgyzstani government efforts to democratise the society and to introduce market oriented reforms, attracted attention of the major Western countries, who supported these changes. This support included funding of the numerous NGOs and private businesses as well as developing training facilities and expertise.

Religious Fundamentalism

At the end of the 1980s and the beginning of the 1990s there were fears among both local and international experts with regards to the Iranian politics in the CARs[18]. These fears were founded on an assumption that Iran would attempt to 'export' the Islamic revolution and Islamic model of development to the newly independent states of Central Asia through nursing and supporting radical Islamic groups in the CARs.

Although the perceived threat from the export of the 'Islamic revolution' from Iran did not materialise, these fears transformed into a fear of radical Islamic groups. These groups found a fertile ground in the southern *oblasty* in Kyrgyzstan, which are situated in the Ferghana valley, a historical stronghold of Islam in the region. The weakness of political institutions and general dissatisfaction of the people with economic disarray made the society receptive to the radical political ideologies, including religious fundamentalism.

***

By and large, Kyrgyzstan has undergone considerable changes in all aspect of life. However, despite polarisation of the society and severe economic recession, political competition and political struggle remained within the framework of the organised political process. Despite the fact that the state system and state bureaucracy largely remained intact after the decade of the post-Soviet development, numerous challenges and changes severely undermined state's ability to control the society. The state institutions has still been at their stage of transformation and consolidation and could not isolate from from social and political process. Therefore, despite some totalitarian features and Soviet habits the ruling regime has kept the policy making process relatively open for inputs from different organised and unorganised groups of the society.

2. Foreign Policy Institutions

From Akayev's first days in office, external factors have been an important driving force in his politics. In the early 1990s, the President and Kyrgyzstani reformers largely relied on political and moral support from democratic circles in Moscow against the communist opposition. Later, they relied on the external economic and political support from Russia as well as from the major western countries to implement unpopular 'shock therapy' economic reforms. In this regard, the foreign policy institutions had a very important role to play not only in formation of the Kyrgyzstani diplomatic relations with the other countries, but also in formulating and conducting internal changes.

The foreign policy institution building in Kyrgyzstan was quite different from the Russian experience and the experience of the Third world countries due to several reasons. First, unlike Russia, there was a need to start building the foreign policy institutions practically from scratch. Although the Ministry of Foreign Affairs in Kyrgyzstan was created in 1944, it largely played a ceremonial role and had few staff members.[19] Second, unlike Russia and some Third world countries, where the army played an important role in the society and in the formation of the foreign policies,[20] at the beginning of the 1990s the national army of Kyrgyzstan practically did not exist as an independent entity. Third, unlike Russia and other countries, there were no strong foreign economic institutions, business groups or private interest groups with strong links outside Kyrgyzstan. Fourth, there were no strong political parties and competitive political views on foreign policy directions. The Kyrgyzstani bureaucracy (*nomenklatura*) became the driving force for independence and political changes, including formulation of foreign policy priorities. From the beginning the *nomenklatura* became an exponent of the national interests as well as the agent for implementation of the foreign policies. However, the *nomenklatura* could not monopolise foreign policy decision making because it did not have the necessary expertise and knowledge of international affairs. Therefore, it initiated foreign policy debates and involvement of public institutions into the foreign policy formation. This included wide use of the local academic community for foreign policy expertise through consultations, discussions and direct recruitment to the foreign policy institutions.

The Kyrgyzstani government decentralised the foreign decision making, and it created several foreign policy institutions that were competing in the foreign policy decision making.

a) President and Presidential Administration

The Presidential Administration was created in January 1991 replacing the directorate of the Council of Ministries of Kyrgyzstan. This administrative board was created to support administratively the newly created position of the President of Kyrgyzstan.[21]

From the very beginning the Presidential administration had the 'Directorate for coordination of external political, economic and humanitarian relations' which included the International Department. This department was modelled after the international department of the former Soviet Union and the international department of the Russian presidential administration.

From 1991-1992, this department started to play an increasing role not only in organising protocol events for the President, preparing speeches, foreign policy documents and other materials, but also in the formulation of the foreign policies of the Republic. Being small and mobile, the department conducted a wide range of foreign policy activities. However, it had no clearly defined and regulated responsibilities, and it quite often competed with the MFA,[22] provoking sharp criticism from the MFA officials.

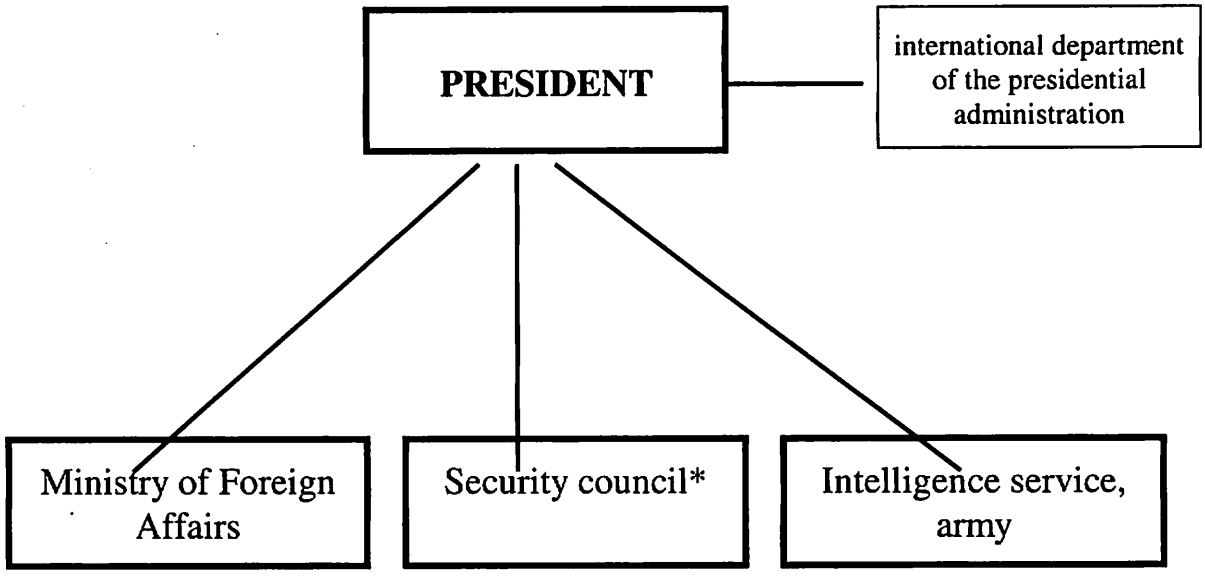
By the middle of the 1990s, the department consolidated itself into cohesive foreign policy institution well integrated into the foreign policy making process.

b) Ministry of Foreign Affairs

The MFA underwent major restructuring from 1991 to 1994, when it was transformed into an operational foreign policy agency and established first diplomatic missions outside the former USSR.

There were three major sources of the foreign policy professionals. First, there was the former Soviet MFA and other Soviet foreign policy institutions. The CARs leaders invited the natives who served in the former USSR Ministry of the Foreign Affairs to return to their republics. They became a relatively small, but solid core of foreign policy professionals in Kyrgyzstan. One of the most apparent examples is the Kyrgyzstan's leading diplomat Roza Otunbaeva. She served in the senior positions in the Soviet MFA from 1989 until 1992 and had a strong international experience.[23] She was the Kyrgyz Minister for Foreign Affairs in 1992 and between 1994 and 1997. Between 1992 and 1994, she was the Kyrgyz ambassador to the USA and Canada.

FOREIGN POLICY DECISION MAKING IN KYRGYZSTAN



The Second source of foreign policy professionals was the local academic circle and foreign policy specialists from local universities. From 1992 to 1995, these experts group were actively recruited by the MFAs and other foreign policy institutions in Kyrgyzstan. During this stage the foreign policy specialists from various academic institutions were frequently invited to provide expertise for local foreign policy institutions or to join a team of foreign policy professionals in the government bodies and think-tanks.

The third source of foreign policy specialists emerged in the middle of the 1990s. They represented a relatively young and numerous cohort of specialists, who were trained or retrained overseas. Many of them studied diplomacy and other disciplines in the USA and Western Europe, however some of them were trained in such countries as Malaysia, Pakistan and Turkey.

From the beginning, the structure and management system of Kyrgyzstani MFA was organised under the heavy influence of the Soviet/Russian model. Moreover, during the first years after the creation of the CIS (1991-1994), the Russian embassies provided the diplomatic support to the Kyrgyzstani citizens and officials. Although at that time Kyrgyzstani MFA had few professional diplomats of medium and junior level, the transfer

of several high-ranked and experienced Soviet diplomats (Roza Otunbayeva, Muratbek Imanaliyev, and some others) strengthened the Kyrgyzstani MFA.

During the first years after achieving independence, the major weaknesses of the MFA were not only in absence of trained personnel, under-staffing and under-funding, but also in the absence of the bureaucratic consensus on the division of labour in conducting foreign policies and in the absence of a clear consensus on the foreign policies.

After almost two years of personnel reshuffling, in December 1992 E. Karabayev, who was one of the most influential politicians, was appointed Minister for Foreign Affairs. However, Karabayev's exposure to domestic political struggle weakened the influence of the MFA in policy making. In 1994 he was dismissed from his position and replaced by the professional diplomat Rosa Otunbayeva, who returned from her post as the first Kyrgyzstani Ambassador to the USA (1992-1994). She brought the bureaucratic autonomy and her style to the MFA, was able to reverse the rate of attrition and tried to make the MFA a major foreign policy institutions at the expense of all other institutions. Those interviewed by the author in Bishkek said that this ambition was one of the reasons for her sudden appointments as an Ambassador to the United Kingdom in 1997. She was replaced by the former head of the international department of the Presidential Administration Mr. Muratbek Imanaliyev.

.

.

c) Ministry of External Trade and Industries; the Agency on Foreign Investments

During the Soviet period, all Kyrgyzstani foreign trade with the countries outside the USSR was monopolised by the Central Soviet government. Kyrgyzstan could not even export its own production directly and was obliged to do it through Moscow based foreign trade ministries and agencies. After achieving independence, the government put considerable efforts into creation of workable institutions on Foreign Trade and Foreign Investments. It consolidated foreign economic decision making by creating 'Goskominvest' (State Commission for Foreign Investments and Economic Assistance), which included the heads of seven key economic institutions and was chaired by the Prime Minister.[24]

The Kyrgyzstani government also set up the Ministry of External Trade and Industries (METI) and the Agency on Foreign Investments. With the growing importance of international economic relations, international assistance and investments, the influence of these institutions on foreign policy making has grown significantly.

With foreign trade turnover at US 1.3 billion (export US$ 510 million and Import US$ 810 million (1998); GDP US$ 1.6 billion) and US$ 247 million cumulative foreign direct investments at the beginning of 1998, the Ministry of External Trade and Industries and the Agency on Foreign Investments gradually became important foreign policy institutions in the Republic.

The MFA and METI became natural competitors in the area of international relations, because the MFA was also actively involved in the "economic diplomacy",[25] especially in the first half of the 1990s. In March 1999, the positions of the Ministry of External Trade were further strengthened at the expense of the MFA by a special presidential decree, which gave to the Ministry of External Trade exclusive rights "to co-ordinate" international economic activities.

d) Security Council

The tradition of centralised collective decision making takes roots in the former Soviet *Politburo,* the highest decision making institution in the former USSR until March 1990 when it was replaced by Gorbachev's Presidential Council and then in December 1990 by the Gorbachev's Security Council. This tradition continued in Kyrgyzstan as well. With the expansion of the Kyrgyzstani foreign relations and complication of the security issues, Kyrgyzstani leadership decided to bring together various policy institutions in order to co-ordinate these activities. Additionally, some other ministries expressed their concerns about representation of their interests in the foreign policy decision making and foreign policy activities. With this in mind, in February 1994, President Akayev issued a decree establishing the *Council on Security Issues*, which was replaced by the *Security Council of Kyrgyz Republic* in April 1996.

The *Security Council,* is a "consultative and coordinating body" headed by the President. Its tasks include "elaboration of the strategy of the national security"; "co-ordination of activities of the state institutions on guaranteeing national security"; "preparation of suggestions on internal, external and defence policies in area of the national security". Its functions include: "consideration of strategic issues in the state, economic, social, defence, information, environment and other types of security", "fighting crime and corruption", "protection of public health, and prevention and a recovery from emergency

situations".[26] In the area of foreign policy it expected to co-ordinate foreign policy activities of various state institutions.

The Security Council consists of fifteen members and includes the President who is the Chairman of the Security Council, the Prime-Minister, the First Deputy Prime-Minister, the Minister of Foreign Affairs, the Minister of Defence, the Minister of Internal Affairs, and others.

According the Statute on Security Council, the Council activities assured by the Presidential administration. The secretary of the Security Council directly subordinated to the President and may be appointed and dismissed by the Special Presidential decree. Bolot Dzhanyzakov, the current Secretary of the Security Council, is concurrently a head of the Department of Defence and Security in the Presidential Administration.[27]

The Security Council kept a relatively low profile until 1999. It played a crucial role during the emergency situation in the Summer 1999, when insurgents from Tajikistan attacked several villages in the Southern Kyrgyzstan and took hostages, including high ranked Kyrgyzstani defence official and Japanese engineers (we will return to this crisis below in our discussion of military).

3. Interests groups and Foreign Policy Expertise

Despite the totalitarian nature of Soviet political doctrine and the existence of the one-party system, the political process and policies in the former USSR, and later in the post-Soviet independent republics were determined by the interaction of various interest groups.[28] In the Soviet foreign policy making, the Communist party *nomenklatura,* the military-industrial complex, foreign economic institutions and foreign policy institutions represented major actors in foreign policy making.[29] In the 1980s, the academic community started to play a substantial role in the foreign policy debates, expertise and policy making, especially with the rise to the power of Gorbachev-Shevarnadze team.[30]

The disintegration of the USSR in 1991 brought independence to the Central Asian Republics, however for the next decade the political and economic development in these countries was largely determined by the Soviet legacies. This arises a number of questions: What have the CARs inherited from the Soviet past and what features of the Soviet political process, if any, have shaped the post-Soviet political process, in general, and foreign policy process in particular? Do the former interest groups still influence the foreign policy

process or did other groups replace them? Or have the leaders of the Newly Independent Republics monopolised the foreign policy making process?

In this section I will assess four major interest groups[31] considered the most important actors in the Soviet foreign policy making: political party(-ies); military and security services; private businesses and private interests, and academic circles.

a) Political Parties

One of the most distinctive features, which marked the last years of the USSR was a gradual shift of influence and power from a single ruling party to the bureaucratic institutions. This trend dominated the politics of the post-Soviet transition. Consequently, the centralised control and influence of the Communist Party disappeared from the political landscape in the former Soviet Republics. In some republics like Russia, this process brought radical changes not only to the political leadership, but also to the ruling elite. However, in the Central Asian Republics (with the exception of Tajikistan) the political leadership and elite remain remarkably stable.

Unlike Russia and some the East European countries, after 1991 the CARs neither experienced the drastic change of the elite in power nor the dramatic escalation of the political struggle between hardline communists and nationalists. In Kyrgyzstan, where liberally oriented Askar Akayev replaced the hardline communist Absamat Masaliyev in the contested presidential elections in 1990, there was no drastic change of the elite in power.[32] The President had been elected mostly thanks to the Democratic Movement of Kyrgyzstan (DMK), that combined almost 34 organisations and groups.[33] However, the newly elected President refused to join this movement or any other political parties. He declared that the President should be above all political parties.

One of the first steps of the Kyrgyz President was removal of a section in the Constitution, which formulated the dominant position of the Communist party of Kyrgyzstan (CPK). Another step was the introduction of the Law on Public organisations. Unlike the neighbouring countries, like Uzbekistan and Turkmenistan, the Kyrgyzstani government accepted political pluralism and diversity of the political parties and organisations, there were more than 60 organisations in 1999.[34] Although in August 1991, the CPK was banned for its support of the Coup in Moscow and an attempt to dismiss the constitutionally elected President in Kyrgyzstan, after the temporary ban on political activity, the CPK re-emerged in 1993 under a new leadership B. Amanbayev. The CPK

consolidated its position in the Parliament and represented a serious political challenge to the power and authority of the President.[35] The political environment of post-Soviet Kyrgyzstan further diversified by existing web of tribal and regional relations and loyalties. Many of the political parties represent a real opposition to the regime and criticise the government and the President for various reasons. Moreover, during the Parliamentary elections in February 2000, a number of the opposition parties received seats in the *Jogorku Kenesh* (Kyrgyzstani Parliament) contra-balancing the executive power and making legislature their forum for presenting alternative views on various issues, including foreign policy.[36]

Generally, in the 1990s, the Kyrgyzstani government moved towards democratisation, away from totalitarian one-party system of the Soviet era. The opposition political parties, numerous NGOs and independent mass-media could openly participate in the political process, although in 1998-1999 the process of democratisation was significantly reversed. Nevertheless, the political parties can influence the formation of internal and external policy through various existing channels, including mass-media, the Parliament, etc.

b) Military and Security Services

From 1991, the Kyrgyzstani government began to establish control over some parts of the military and security services replacing Moscow's appointees by locals. In the summer of 1992, Kyrgyzstan established its control over military facilities and equipment of the Soviet Army on its territory. Kyrgyzstan inherited the equipment of the 8th motorised infantry division of the Soviet Army, an air-force (attack-helicopter) training centre, some training air-planes, air-defence surface-to-air missiles, early warning radar centre and some other military facilities. In 1993, President Akayev of Kyrgyzstan issued a decree establishing the Ministry of Defence and appointed General Subanov as the Minister.

In October 1992 there was the first draft for military service for an army of 12 thousand. Initially, the officer corps in the Republic consisted of officers of Slavic nationalities (Russians, Ukrainians, etc), but from 1992 an increasing number of Kyrgyzstani officers have been joining the national army.[37] Currently, the Kyrgyzstani government maintains an army of 12,000 on an annual budget of US$ 13 million (1997).

The Republic inherited from the Soviet past well-established police (*Militsia*) and security forces (former KGB). In 1991, they both came under the jurisdiction of the Republic. They assumed the main role of maintaining law and order in the Republic and in

preserving the security of the state against any threat of terrorism, organised crime or any other actions from inside and outside the Republic. In August 1992, Kyrgyzstan created its own National Guard of about nine hundred men, an elite troop assigned to protect the President and government officials and some important state facilities. The Ministry of Internal Affairs of 25,000 remains the largest armed and trained entity in the Republic, but since 1991 it has suffered from falling discipline, poor training and poor equipment.

The border guards troops are another part of the military system in Kyrgyzstan. The border guard force of about nine thousand was established in August 1992. Kyrgyzstan and Russian signed an agreement in October 1992, which settled responsibility for guarding Kyrgyzstan's borders with China.[38] According to the agreement, Russia had taken the control and agreed to finance (up to 80 %) the border troops of 2,000 and to provide training to the Kyrgyzstani personnel and officers until further agreement was signed.[39] Until 1999 they jointly with Russian border guards patrolled the border with China and carried out the border control at all check points, including the air-ports. Last few years 61 officers and 150 sergeants received their training in Russian military centres.[40]

However, gradually the Kyrgyzstani government changed its position and decided to establish its own border guards troops and to take a full control over the borders. After several negotiations with Russia, the issue was settled and it was agreed that by December 1999 Kyrgyzstan would establish control over its borders. In March 1999, the President of Kyrgyzstan signed a Decree on the State Borders of the Kyrgyz Republic, and in May 1999 the President of Kyrgyzstan issued a Decree on Border Service of the Kyrgyz Republic, which established the Kyrgyzstan's border guards of 3000.[41]

The Kyrgyzstani leadership had uneasy relations with military and security and therefore, in post-Soviet era its attitudes to these institutions were ambiguous. On the one hand, ever since the August 1991 putsch, in which the military supported hardline communists against the President, Akayev could not rely on the armed forces. These suspicions were further strengthened by his fellow Yeltsin confrontation with military man A. Rutskoy in 1993. On the other hand, the issue of establishment of operational armed forces in Kyrgyzstan is especially important due to the geographic proximity of the Republic to the war-burdened Afghanistan and Tajikistan, and to China, that used to be the Cold War adversary of the USSR. With this in mind, Akayev always valued the personal loyalty of General Bakayev of Security forces, General Kulov of Interior Forces and

General Subanov of Ministry of Defence, and he tried to keep the military away from politics.

One of the tests of reliability of the Kyrgyzstani armed forces, security and police came in 1999. On August 5 1999, the guerrillas from Tajikistan crossed the Southern Kyrgyzstani border and took several hostages, including a Kyrgyzstani general and four Japanese workers. The guerrillas demanded a large ransom and sought some political demands. The Kyrgyzstani armed forces attempt to push the intruders out of the Republic led to heavy casualties. It took two-and-half months for the Kyrgyzstani forces to clear the area of the guerrillas. During the crisis, the police and security service assisted the army in Southern Kyrgyzstan, but the whole operation proved the very poor preparedness of the Kyrgyzstani armed forces to such a crisis.[42] The other consequence of this calamity was that for the first time the Kyrgyzstani government realised the importance of the army and so the military achieved a high political presence and influence in policy making, which they probably will keep in future.

By and large, due to political reasons, severe economic constraints and its small size, the Kyrgyzstani military has kept low political profile and influence in policy making, including foreign policy making. Until now, it could not consolidate itself into the single political entity capable to dictate policies and to influence directly decision making process in the government. In the international negotiations on military and security co-operation with Russia, the USA, Turkey, the CIS, OSCE, NATO and others, Kyrgyzstani politics was mainly driven by the political considerations rather then by the influence of the military. At this stage, the Kyrgyzstani military is under strong civil control, undergoes consolidation and only gradually becoming involved, mainly indirectly, into the policy making process.

c) Private interests and Businesses

During the Soviet period, private business existed in Kyrgyzstan only as a semi-illegal small-scale entrepreneurship. Meanwhile the Soviet managers of the state enterprises controlled the real assets, properties and often had their own businesses. They represented a well-organised group, called *nomenklatura,* that was capable of influencing many issues including policy decision-making.[43]

These managers took an active role in mass privatisation and corporatisation in Kyrgyzstan, and they benefited from the 'inside deals', establishing control over major enterprises. During the first years of independence, they formed the base of private business

and transformed themselves into entrepreneurs. These Kyrgyzstani managers/entrepreneurs preserved some of their features from the Soviet past, although they utilised new opportunities and new qualities.

The shortages in the consumer market during the Soviet time and break down of the inter-republic trade during the first years after the Soviet disintegration led to the rise of trade with overseas countries (outside of the CIS). The international trade turnover with countries outside the CIS grew from the virtually zero to almost 35% in 1999. The trade activities of small and medium enterprises led to the phenomenon of 'chelnoki' trade. 'Chelnoki', whose number reached 20.000-30.000 in 1998, bought consumer goods abroad at discounted prices and brought them into the country, often without paying any taxes. Gradually, there was also a rise of joint-stock enterprises. The number of joint ventures with foreign partners reached 400 (although a half of them were not operational) and around 880 foreign companies were registered in the republic by 1997.

A number of private enterprises entrepreneurs strengthened influence in policy making, especially due to the fact that, like their predecessors from the Soviet era, still maintain their personal network in the state bureaucracy, thus having indirect and informal channels of influence over policy making process. Second, the mass privatisation of 1992-1997, allowed these entrepreneurs to establish control over the sizeable part of the economic resources in Kyrgyzstan and to establish economic foundation for political influence, although they were still quite vulnerable and their businesses were quite unstable. Third, the liberalisation of the Kyrgyzstani external economic relations along with growing importance of the foreign trade leads to the growing interest of the private businesses in influencing the foreign policy making process.

d) Academic Circles

During the early 1990, all Central Asian Republics faced difficulties in obtaining the expertise in the formation of their foreign policies. The Kyrgyzstani government itself did not have workable foreign policy institutions. The government institutions did not have enough specialists in the international affairs. There was very few professional diplomats and specialists educated or trained in international relations. On the top of it, there was a shortage of people with knowledge of the foreign languages.

Having all these problems, the government bureaucracy could not monopolise the foreign policy making in its hands and largely turned to the academia for expertise and for

cadre. The *cadre* problem has been solved mainly by two ways. The first was recruitment of those representatives of the CARs who worked in the Russian MFA and the Russian foreign missions. The second was recruitment of the locals from various universities, academic and research institutions. According to some estimates in 1992-1994 up to 40 per cent of the new staff members came from the local universities and research institutions.

The academic circle plays a very important role in the formation of the CARs foreign policy by providing both the important guidelines for foreign policy making and the professionals for the Central Asian governments institutions. This practice is quite unique and different from the Soviet and Russia's experience.[44] From the very beginning the leaders of the region, who did not possess any experience in international relations, widely used the local academic expertise, although sometimes they recruited foreign experts as well.[45]

The Kyrgyzstani academic circle and universities became an independent and an influential group that extensively provided its expertise for the state foreign policy institutions. It became a common practice for the Kyrgyzstani policy making institutions to turn for expertise to major 'think tanks', including the Institute for Strategic Studies under the President of Kyrgyzstan and some others. Also the academia plays an important role in bridging the public opinion and interests of the various groups of the society with the government activities in the international arena.

This movement of specialists and expertise created a relatively dynamic and democratic environment in the CARs foreign policy making during the 1990s. The policy specialists moved in and out of the state institutions. There was an intensive exchange between the foreign policy experts from academic institutions and the government and the president's foreign policy making institutions. It became apparent that the specialists' assessments and perception of the foreign policy issues had a powerful impact on the foreign policy making in the CARs.

However, in the late 1990s the influence of the academic circle started to diminish due to several factors. First, due to the economic recession and economic difficulties the academic circle ceased to be a strong and consolidated group of the society as it was during the Soviet era. Second, the foreign policy institutions strengthened their *cadre* through training professional diplomats both in the Republic and overseas. Third, the foreign policy institutions obtained enough experience and human resources became able to generate the foreign policy expertise by themselves, although the 'major Think Tanks' retained their influence.

4. Interest Groups in Experts Assessments

Democratisation and opening of the political process for public participation in the post-Soviet period not only was a new opportunity for articulation of the traditional private and group interests in policy making, including foreign policies, but it also involved new political actors into the political process. The traditional interest groups still remain active in Kyrgyzstan, although they have less influence and underwent significant transformation. In this domestic environment traditional interest, groups have to accommodate the interests of the new political actors. The question is what can we identify the most influential foreign policy actors and measure the level of their influence in Kyrgyzstan?

Taking into account the complexity of the issue of foreign policy actors within the Central Asian context, the project was designed to search for the answers from the Central Asians themselves. This project has two goals. First, to identify the major foreign policy actors that are the most influential in foreign policy making in Kyrgyzstan. Second, to measure the level of their influence on the foreign policy making in Kyrgyzstan.

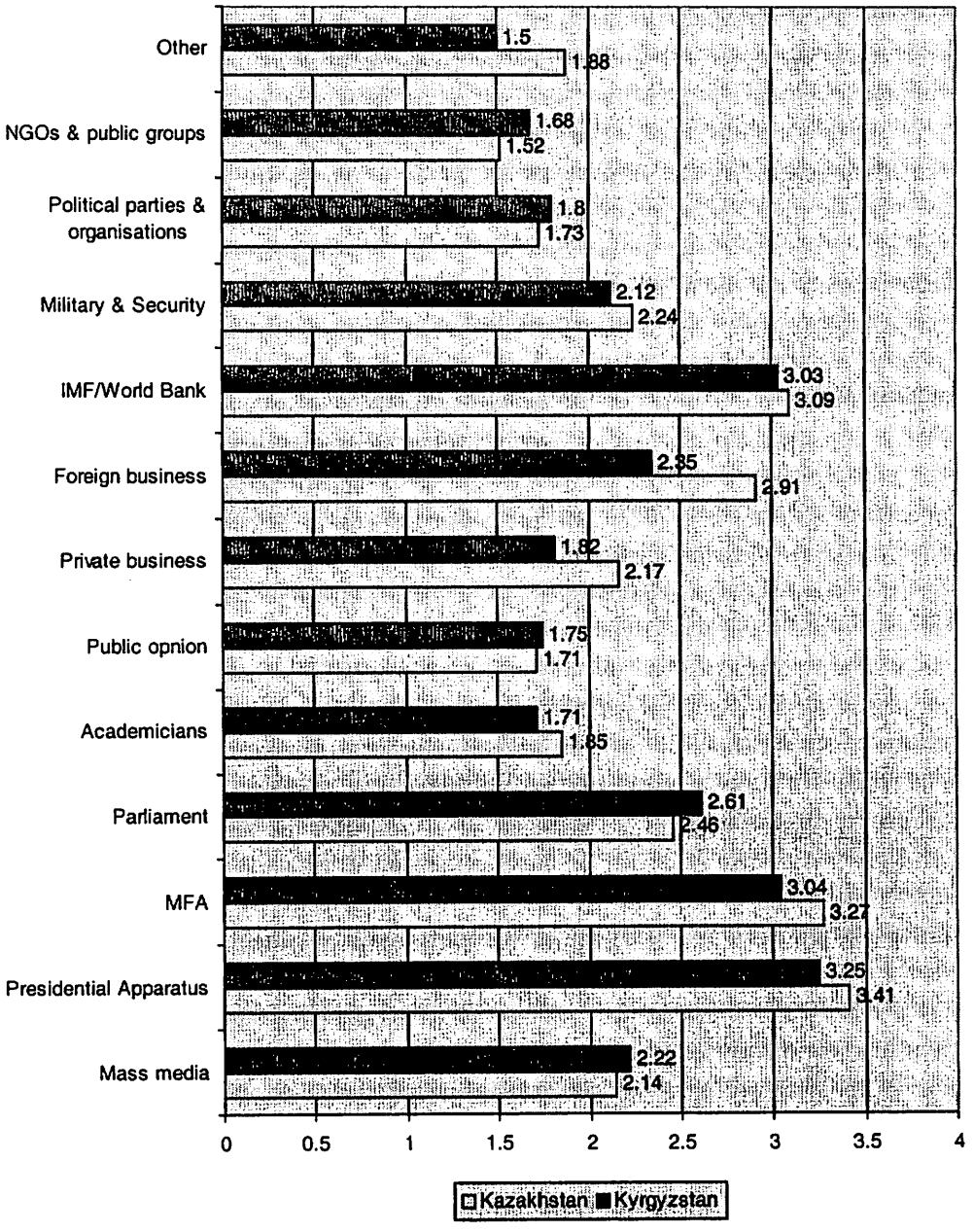
During the first stage, we planned to carry out a series of individual interviews with the Kyrgyzstani foreign policy experts and conducted the content analyse of the local mass-media in order to identify the various actors (institutional and non-institutional) that could be considered as active and influential in foreign policy making in the Republic (for the list of the groups see Figure 1).. During the second stage the survey study was planned to identify the level of the influence of the interest groups. This survey was designed to assess the existing tendencies and the balance of views on the issue of the perception of these actors by the Central Asian **'attentive public'**.

Although the survey study mainly dealt with the foreign policy issues, several questions directly or indirectly focused on the issue of the perception of the roe, of the foreign policy actors in the international arena. For this article the author selected two questions from the survey.

Figure 1

Level of Influence of Different Groups on the Foreign Policy Formation (1999)
(means)

Where 1 = no influence and 4 = the highest level of influence



One of the questions of the survey study intended to elucidate how the CARs experts evaluated inputs of the different institutions and actors in the foreign policy formation in their respective countries.

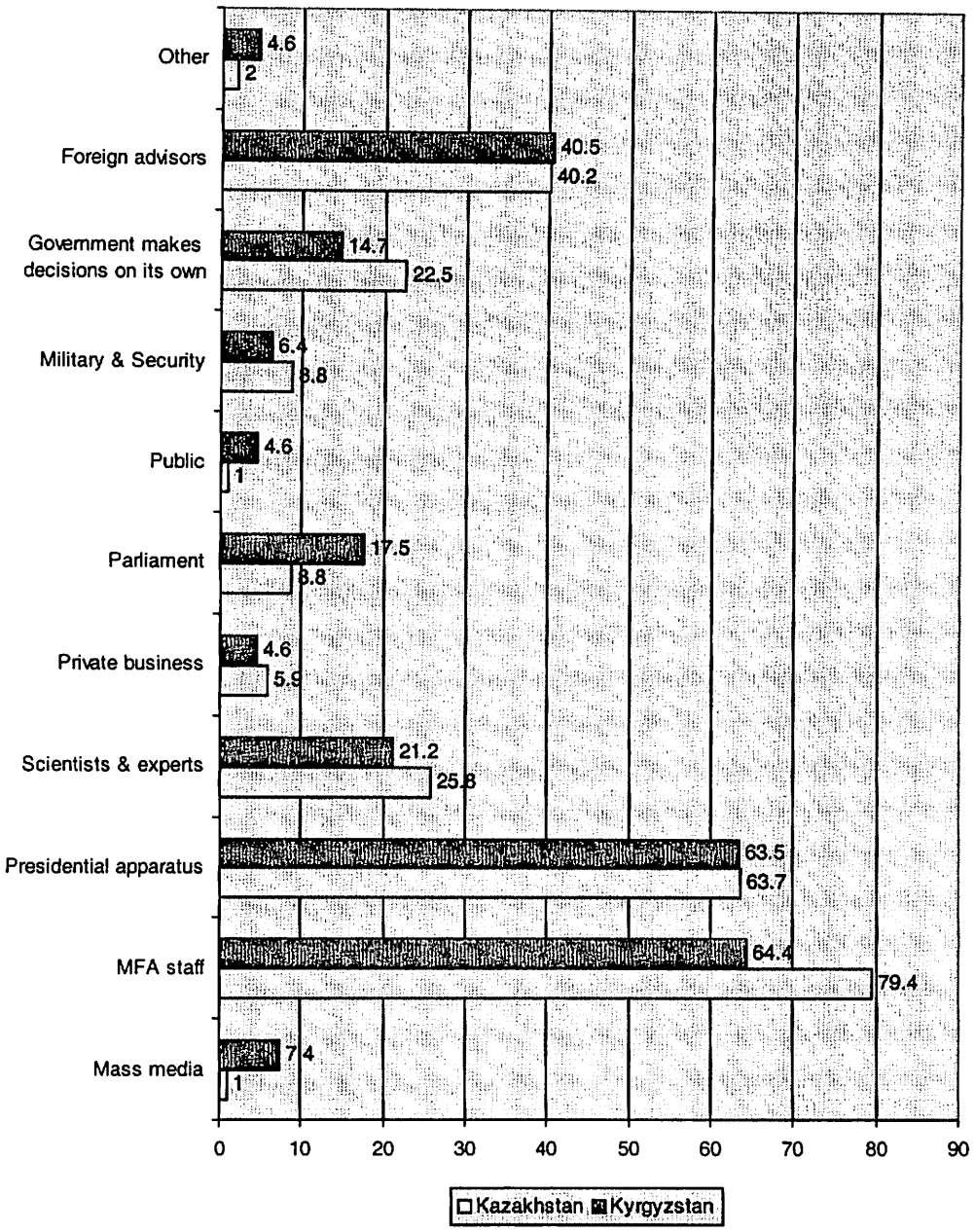
The CARs experts were asked ***'In your opinion, which of the following groups have the greatest influence on the formation of foreign policy in your republic?'*** There were several choices with marks ranging from one to four (1 = does not influence; 2 = influence insignificantly; 3 = influence significantly; and 4 = influence greatly).

The results of the survey presented in Figure 1 (the results of the survey in Kazakhstan are also given for the comparison). The survey found that the Kyrgyzstani experts believed that in their republic the president had the greatest influence on the foreign policy formation (means 3.25). It was followed by the Ministry of Foreign Affairs (means 3.04). In the third position was the IMF/World Bank (means 3.03). in the fourth position was the Parliament (2.61). Next was the foreign business (2.35), it was followed by the mass-media (2.22) and the military and security (2.12). Private businesses (1.82) and the political parties (1.80) received a quite low assessment. The experts perceived that the public opinion (means 1.75), the academician (1.71) and the NGOs and public groups (1.68) were at bottom of the scale.

However, when a series of crosstabulations was performed to determine the opinions within the specific groups of respondents, the picture was slightly different. One of such groups was a group of the foreign policy practitioners (MFA staff). The top four groups of interests remained the same. They considered the presidential apparatus in the first place (means 3.62), the Ministry of Foreign Affairs on the second (means 3.52); the IMF/World Bank in the third position (means 2.80), and the Parliament on the fourth position (2.71). However, the military and security moved up from seventh to fifth position (2.20). The mass media shared the next position with 'foreign business' (2.05). It was followed by the political parties (1.68) and the public opinion (1.67). The experts perceived that the bottom of the scale were the academicians (1.60), the private business (means 1.58), the NGOs and public groups (1.53).

Figure 2

Opinion on which groups of experts does the government turn for advice to (%) (1999)



The CARs' experts were also asked ' *In your opinion, who are the main experts for the government of your republic to go to in the process of foreign decision making? Please check no more then 3 options'* . There were several choices to mark (see Figure 2).

The survey (1999) found (See Figure 2) that the Kyrgyzstani experts believed that in their republic the government would most possibly to turn to the staff of Ministry of Foreign Affairs for advice in foreign policy issues (64.4 %) and to the Presidential Administration (63.5 %). It was followed by the 'foreign advisers (40.5 %) and 'scientists and experts' (21.2 %). The next was the Parliament (17.5 %). It was followed by the opinion that 'the government makes decisions on its own' (14.7 %) and mass media (7.4 %). The respondents considered that the last groups where the government would seek advice would be the military and security (6.4 %), private business (4.6 %) and the public (4.6 %).

***

5. Discussion

From a historical perspective a decade after the disintegration of the Soviet Union is a very short time for overcoming the legacy of the Soviet era. We have to note that the national intelligentsia, which currently represents the mainstream intellectual thought and dominates the intellectual life in both republics, was born and established during the Soviet era. Despite all internal and external political turbulence, the former *nomenklatura*, who come to power during the last years of the Soviet Union, is still firmly in control. Additionally, despite the political and social difficulties of the transition, the CARs have managed to preserve status quo not only in their internal political life, but also in their external relations with the other members of the Commonwealth of Independent States, and they established diplomatic relations with major countries beyond the CIS.

It is remarkable that the former Soviet Central Asian states could establish their workable foreign policy institutions within such a short period. The Kyrgyzstani government created a dynamic and a relatively open environment for the foreign policy making and established a strong tradition of accepting contributions from the various interest groups in their foreign policy making. Additionally, we can note that the Kyrgyzstani foreign policy has been quite well balanced, and it has been free from impulsiveness and unpredictable moves of the Russia's foreign policy. Certainly, personalities of the CARs' leaders have made an important impact and contribution to functioning of the foreign policy institutions and to their style of the foreign policy making. In this regard, although the foreign policy making in Kyrgyzstan has often been described as bureaucratic and elitist, the respondents in our research and survey did not agree that the foreign policy making was monopolised by one particular institution.

The assessment of the transitional period may lead us to some preliminary conclusions, which may be supported by the findings of the survey research.

Firstly, we found that the power and influence of the interest groups and other actors, that were traditionally strong during the Soviet era, were gradually eroding. Although they are still considered to be influential, they lost their exclusive control over the foreign policy issues. Moreover, in Kyrgyzstan, unlike the Russian Federation and some Third World countries, the army and security forces could not establish exclusive control and influence over the public life and foreign policy interests.

The research shows that there is a noticeable shift in the power of traditional interest groups to the new actors and organised groups of the society.

Secondly, the research showed that there is a number of actors, including non-governmental institutions, in Kyrgyzstan, that directly or indirectly influence the foreign policy making, although these groups deal with a strong and stable government and with a relatively weak yet vocal Parliament. The access to independent mass media gives these groups an additional weight in political bargain with and pressure on the government institutions.

Thirdly, despite all shortcomings of the transitional regimes who were often accused in authoritarianism, and undemocratic decision-making, these regimes did not monopolise the foreign policy making. The foreign policies are still open for competitions and contributions from the different interest groups. This is quite visible in Kyrgyzstan where the institutional design of the foreign policy making diversified between various state institutions.

Fourthly, various interest groups are actively involved in foreign policy-making. Our research revealed that although the government, and state institutions, and international actors are predicably the most influential interest groups in Kyrgyzstan, they are balanced by the other interest groups including mass-media, private businesses and political parties. This finding is supported by the results of the survey study conducted in Kyrgyzstan in 1999.

Although there is no straight forward correlation between the activities of interest groups and foreign policies of the countries, their presence in the society in general and contribution into the foreign policy making in particular does affect the formation of the foreign policies through various channels. In the foreign policy process it is important that the Central Asian government and foreign policy institutions do not isolate themselves from the public and the various interests within the society.

06/03/00 10:48

a17:\\\foreign policy making in Kyrgyzstan and interests.doc

Notes

[1] J. Rosenau, 'Pre-theories and Theories of Foreign Policy', in B. Farrel, ed., *Approaches to Comparative and International Politics* (Evanstom, Northwestern University Press, 1966), pp. 27-93.

[2] David V. Edwards, *International Political Analysis* (New York, Hotl, Renehart, and Winston, inc, 1969), p. 23.

[3] The concept was introduced by Gabriel A. Almond in: Gabriel A. Almond, *The American People and Foreign Policy* (New York, Praeger, 1960), pp. 139-143.

[4] For the concept of 'problem representation' see: Donald A. Sylvan and James F. Voss (eds.), *Problem Representation in Foreign Policy Decision Making* (Cambridge, Vambridge University Press, 1998).

[5] Almaty is the former capital of Kazakhstan. Astana became the official capital of the Republic in 1997.

[6] A random sample of approximately 120 individuals in each republic was drawn with the help of a computer program. The stratified-random proportional sampling was used to generate random samples. The questionnaire, designed to collect data in the Central Asian republics, was pre-tested in Kyrgyzstan and Kazakhstan in 1996. First survey was conducted in January-February 1997. In March-April 1999, the author repeated the survey using the same questionnaire as in 1997, with minor changes. The questionnaire was distributed by the author with the help from the research assistants in the respective republics. The total return of questionnaires was around 94 per cent; 11 of the received questionnaires were incomplete and, therefore, considered invalid. The collected data was analysed by using SPSS for MS Windows for descriptive statistics like frequencies, means, and cross tabulations.

For methodology and sampling see Appendix1 in: Rafis Abazov, *The formation of Post-Soviet International Politics in Kazakhstan, Kyrgyzstan and Uzbekistan,* The Donald W. Treagold Papers, No. 21 (Seattle, the University of Washington, The Henry M. Jackson School, 1999), pp. 78-88.

[7] *Kazakhstanskaya Pravda* (24 December 1991).

[8] M. B. Olcott, 'Central Asia's Catapult to Independence', *Foreign Affairs* (Summer 1992), pp. 108-130.

[9] A. Rashidov, 'Afganskii Sindrom', *Megapolis-Express* 15 (1990), p. 15. See also: Valery

Tishkov, *Ethnicity, Nationalism and Conflicts in and After the Soviet Union* (London: SAGE Publication, 1997), pp. 136-154.

[10] See for evaluation: R. Abazov, 'Economic Migration in Post-Soviet Central Asia: the Case of Kyrgyzstan', *Post-Communist Economies,* Vol. 11, No. 2, 1999.

[11] *Slovo Kyrgyzstana*, 05 January 1995.

[12] One of the explanations of the word's 'Kyrgyz' etymology derives from the Turkic 'kyrg' and 'uz', which means forty tribes (although presently a number of tribes is different). Because of the way, in which collectivisation was conducted in the 1930s Kyrgyz tribes settled as whole tribal units. Therefore, the present territorial administrative division somehow reflects the tribal pattern of Kyrgyz society, except for the capital, which became a kind of melting point for representatives of various tribes.

[13] A. A. Akayev, *Kyrgyzstan v Tsentralnoi Azii i SNG: problemy i perspektivy* (Moscow: Respublika, 1994), pp. 29-30.

[14] In 1999, there was a report that the level of narcotics smuggling through Kyrgyzstan reached an alarming level of third only to Myanmar and Thailand (*Turkistan-Economic Bulletin) Vol. 99:90, 06 August 1999.*

[15] In 1992 Kyrgyzstan, along with the other CARs, became a member of the Economic Co-operation Organisation (ECO), joining Iran, Pakistan, Turkey, and Afghanistan. However, despite significant strategic and economic potentials the organisation played a marginal role in shaping security and co-operation among the members of the ECO and had a marginal impact on the formation of Kyrgyzstan's security policy.

[16] The *CIS Treaty on Collective Security* was signed on 15 May 1992. The *Treaty* defined the security obligations and set up the framework of the security co-operation for the CIS members. In 1999, the *Treaty* was seriously undermined by Uzbekistan's and Azerbaijan's decisions to leave the organisation.

[17] The Shanghai Agreement was signed in 1995 by China, Russia, Kazakhstan, and Kyrgyzstan in order to settle down the territorial and other disputes peacefully and to create the frameworks for security cooperation.

[18] M. Mohadessin, *Islamic Fundamentalism: The Global Threat* (Washington: Seven Locks Press, 1993).

[19] In 1944 the Constitution of the USSR was amended allowing to establish *Narkomindels* in all Union republics, including Kyrgyzstan. In 1946, these newly created foreign policy

agancies were renamed into the Ministries of Foreign Affairs. J. Nichol, *Diplomacy in the Former Soviet Union* (Westport, Praeger, 1995), pp. 12-14.

[20] N. Simonia, 'Priorities of Russia's Foreign Policy and the way it Works, in: *The Making of Foreign Policy in Russia and the New States of Eurasia,* ed. by Added Dawisha and Karen Dawisha (Armonk, M.E. Sharpe, 1995), pp. 18-30.

[21] About the evolution of the state administration see: Kyrgyzstakaia Respublika: sistema organov gosudarstvennoi vlasti, in *Gosudarstvennyie sistemy sovremennosti* (Bishkek, Ilim, 1998), pp. 36-103.

[22] See an article by K. Karabayev in: *Vechernii Bishkek*, 01 November 1996.

[23] For an unofficial biography of Roza Otunbaeva See: *Res Publica*, 09 September 1992.

[24] *Kyrgyzstan Investment Guide* (Bishkek, Goskominvest, 1994), pp. 21-23.

[25] The term used by the MFA officials. See the press-briefing by the Deputy-Minister A. Dzhkshnkulov in: *Slovo Kyrgyzstana*, 20 May 1999.

[26] See: *The Statute on the Security Council of the Kyrgyz Republic*, 8 April 1996; *The Statute on the Security Council of the Kyrgyz Republic*, 29 May 1998.

[27] As per January 2000. For Dzhanazakov's views on the role of the Security Council See: *Slovo Kyrgyzstana*, 23 April 1999.

[28] I would like to highlight that interest groups in the Soviet politics were quite different from those in the USA, and they were different both in their structural organisation and in the forms of mobilisations. See for a classic research on interest groups in the Soviet politics: Gordon Skilling and Franklyn Griffiths, eds., *Interest Groups in Soviet Politics* (Princeton. Princeton University Press, 1971).

[29] P. Zwick, *Soviet Foreign Relations: Process and Policy* (New Jersey, Prentice-Hall, 1990). For the interaction of various foreign policy in post-Soviet Russia see: P. Stavrakis, 'Government Bureaucracies: Transition or Disintegration?', *RFE/RL Research Report* (Vol. 2, Nu. 20, 14 May 1993), pp. 26-33.

[30] Ivan Tiulin, 'International Relations and the Lessons of Dependency from the Soviet Union to Russia', in: *Theory and Practice in Foreign Policy Making: National Perspectives on Academics and Professionals in International Relations,* ed. by Michel Girard, Wolf-Dieter Eberwein and Keith Webb (London: Pinter Publishers, 1994).

[31] In this research I use a broad definition of interest groups such as "as any groups which articulates demands that political authorities in the political system or sub-system should

make an authoritative allocation". Jeremy J. Richardson 'Introduction: Pressure Groups and Government', in *Pressure Groups,* ed. by Jeremy J. Richardson (Oxford, Oxford University Press, 1993), p. 1.

[32] See for assessment: Rafis Abazov, 'Central Asia's Conflicting Legacy and ethnic Policies: Revisiting a Crisis Zone of the Former USSR', *Nationalism and Ethnic Politics,* Vol. 5, No. 2, Summer 1999, pp. 62-90.

[33] See for a comprehensive account of various political organisations in Kyrgyzstan: *Grazhdanskiye Dvizheniya v Kyrgyzstane,* ed. by A. Elebaeva (Moscow: Academy of Science, 1991), pp. 57-64, 94-104.

[34] *Politicheskiye organizatsii v Kyrgyzstane,* (Bishkek: Academy of Science, 2000),

[35] In fact, the legislature questioned the personal fortune of the president's closest associates and accused that many of them enriched themselves through manipulations during realisation of privatisation programme and through other deals.

[36] Criticism by the local mass media and parliament's accusations of corruption of the Prime-Minister Chyngyshev brought down the Prime-Minister and his government. The Prime Minister was forced to resign, but investigation against him was never completed.

[37] The officers were traditionally trained in Russia, but recently several dosen of them were trained ot re-trained in Turkey, Germany, the USA.

[38] *Slovo Kyrgyzstana,* 16 February 1993.

[39] *Slovo Kyrgyzstana,* 16 November 1994.

[40] *Slovo Kyrgyzstana,* 06 April 1999

[41] *Slovo Kyrgyzstana,* 01 June 1999.

[42] See for detailed coverage of the events: *Vechernii Bishkek,* 30 August 1999

[43] John Hardt, and Theodore Frankel 'The Industrial Managers' in Gordon Skilling and Franklyn Griffiths, eds., pp. 171-208.

[44] See See for evaluation: Ivan Tiulin, 'International Relations and the Lessons of Dependency from the Soviet Union to Russia', in: *Theory and Practice in Foreign Policy Making: National Perspectives on Academics and Professionals in International Relations,* ed. by Michel Girard, Wolf-Dieter Eberwein and Keith Webb (London: Pinter Publ, 1994).

[45] Olcott, *Central Asia's New States,* pp. 14-16.

Appendix 1. Respondents Profile (Kyrgyzstan and Kazakhstan)

Table 1 Age Groups of the Respondents (1999) N = 190

Age Groups	*Frequency*	*Percent*
Up to 20 years old	26	13.7
21-30 years old	60	31.6
31-40 years old	51	26.8
41-50 years old	34	17.9
51 and above	16	8.4
Missing	3	1.6
Total	**190**	**100**

Table 2. Ethnic Representation (1999)

Ethnic Group	*Frequency*	*Percent*
Kazakhs	83	43.7
Kyrgyzs	74	38.9
Russians	15	7.9
Uzbeks	3	1.6
Others	13	6.8
Missing	2	1.1
Total	**190**	**100**

Table 3. Educational Level of the Respondents (1999)

Educational Level	*Frequency*	*Percent*
Secondary/Secondary special	4	2.1
Incomplete high	20	10.5
High (institute, university)	68	35.8
High (aspirantura)	55	28.9
High (doctorantura)	14	7.4
High special (in foreign relations)	10	5.4
High special (continuing education courses)	9	4.7
High special (continuing education courses overseas)	9	4.7
Missing	1	.5
Total	**190**	**100**

Table 4. Occupation of the Respondents (1999)

Occupation	*Frequency*	*Percent*
Journalist	13	6.8
Staff of Ministry of Foreign Affairs	22	11.6
Presidential apparatus	7	3.7
Scientist/researcher	101	53.2
Parliament Member	9	4.7
State officials	8	4.2
Students	24	12.6
Others	4	2.1
Missing	2	1.1
Total	**190**	**100**

About the Author

Rafis Abazov, research associate of *the Centre for Social Research* of the Kyrgyz National Academy of Science. He graduated from Kyrgyz State University and received his *Kandidat Nauk* Degree (Political Science) from Moscow, Russia. In 1996, he was awarded a NATO research fellowship for a research on foreign policy formation in Central Asia republics.

He published two books and he has number of articles on Soviet and post-Soviet foreign policy, political and economic reforms in various Kazakhstani, Russian and international academic journals. Most recent articles has been published in *International Journal of Urban and Regional Research, Central Asian Survey, Post-Communist Economies, MEIMO* and some other journals.

講演記録

90-е : читаем по-русски

Анна ЩЕГОЛЕВА

Когда меня попросили рассказать о том, как и что чтают русские сегодня, я поначалу задумалась. Действительно, как можно поручиться за всех россиян при отсутствии подобных данных. Мне не известны статистические данные по стране, что именно сейчас читают. Если сейчас изучается читательский спрос, делается это скорее с точки зрения покупательского интереса к изданиям, что в основном показывает рейтинги новых изданий современной литературы. Вряд ли таким способом можно определить отношение, например, к классической литературе.

В советское время было хорошим тоном иметь дома полное собрание сочинений классиков – Толстого, Достоевского, Гогля, Чехова, поэтов – Пушкина, Лермонтова и многих других. Для того чтобы обзавестись подобным изданием в эпоху дефицита, когда вы не могли просто прийти в магазин и купить все необходимое – надо было сдавать макулатуру, получать талон и потом буквально охотиться по книжным магазинам города за желанным собранием. Или же бывала возможность выиграть в лотерею на работе, но тоже не сами книги, а талон, дававший возможность их купить. Это было счастьем; книги были дешевы в то время, но осознаешь это только сейчас, когда придя в книжный магазин, понимаешь, что ситуация почти как в музее: многие приходят просто посмотреть.

Сейчас вся ситуация с чтением изменилась, что естественно следует за политическими изменениями. Некоторые произведения уважаемых авторов советских бестселлеров потеряли свою актуальность настолько, что вряд ли будут переизданы.

Современные молодые семьи покупают для своих детей, как правило, издания специальных серий, рассчитанные на школьную программу. Кстати, о школьной программе – там произошли серьезные изменения, особенно связанные с изучением литератуты и истории. Мне кажется, что именно так называемые программные произведения очень показательны в качестве обязательного круга чтения более-менее образованных людей, так же и происходящие в этом списке изменения говорят об изменении отношения к определенным произведениям. В отличие от японской ситуации с чтением классики, когда можно узнать содержание

произведения через манга или адаптированные издания, русским детям в основном приходится иметь дело с оригинальным текстом, который изучается довольно тщательно. В процессе учебы необходимо также написать эссе на заданную тему, а некоторые части знать наизусть, все остальное зависит от усердия преподавателя.

Школьная программа включает в себя литературные произведения, которые следует прочитать в определенном возрасте. Странным образом кто-то решает, в каком возрасте русским детям следует прочитать Чехова, в каком классе – Горького. Так, "Войну и мир" Толстого читаем в 8-м классе (то есть в 15 лет), "Преступление и наказание" Достоевского – в 9-м. Соответственно складывается и отношение к прочитанному, относительно степени развития ребенка в этом возрасте. То, что принято познавать уже в зрелом возрасте как вершины мировой литературы, школьная программа навязывает ребятам в обязательном порядке. К сожалению, часто происходит именно так: то, что изучается в школе в качестве обязательного минимума, ассоциируется с чем-то скучным, что называется "обязаловка". То есть редко случается, что читатель возвращается к прочитанным "в детстве" книгам, многие из которых являются серьезной литературой. Счастлив тот, кому достался увлеченный учитель по литературе, кто сумел не отучиться читать и воспринимать чтение свежим взором, или успел прочитать программное произведение до того времени, на которое оно "запрограммировано". Тем не менее, в декабре прошлого года я участвовала в конференции, посвященной советской детской литературе и имиджам, создаваемым для детей писателями. В частности, представительница министерства образования досадовала на то, что в сегодняшней школьной программе отсутствуют имена нескольких любимых ею писателей. На что представители педагогического института мудро заметили, что следует оставить в покое хоть несколько имен, чтобы подрастающее поколение смогло их оценить. В ответ на эту шутку все понимающе рассмеялись. В последние годы в программные произведения были внесены такие сложные произведения, как "Мастер и Маргарита" Булгакова, "Доктор Живаго" Пастернака, Набоков и многие современные произведения типа сочинений Сергея Довлатова и других представителей русского зарубежья. Аналогично изменилась и вся картина чтения: книги, открываемые из "секртного фонда", словно из волшебной шкатулки,

становящиеся всеобщим достоянием, мгновенно раскупались. Помню, как в 80-е, когда я училась в школе, начали печатать Булгакова, и в магазинах стояли очереди за книгами. По-новому стали смотреть даже на поэтов серебряного века, ведь и они застали революционное время. Тот факт, что "певец революции" Владимир Маяковский был способен на романтические привязанности, буквально потряс страну, на него впервые стало возможным взглянуть как на поэта. Информационный бум, начавшийся после перестройки, с открытием архивных документов и исторических данных, привел к огромной популярности публицистической литературы, от которой сейчас уже все устали. Тем не менее, мемуарная литература по-прежнему популярна у определенных групп, в основном среди пожилых людей и интересующихся отечественной историей. 90-е годы ознаменовались "возвращением" книг Владимира Набокова и многих других представителей иммигрантской литературы. Целый пласт литературы, читаемый и почитаемый в окружающем мире, открывался русским читателям с опозданием в десятилетия. Постепенно менялось отношение к классикам советской литературы, от некоторого недоверия до полного неприятия. Исчез из той же школьной программы Максим Фадеев с романом "Молодая гвардия" , в пылу борьбы за современность чуть было не лишились Шолохова, но во время одумались и решили "Тихий Дон" оставить, несмотря на толки о якобы сомнительном авторстве.

Вся ситуация с отношением к литературе, особенно современной, стремительно изменилась за последние несколько лет. Изменилось и отношение самих литераторов, например Фазиль Искандер, один из самых тонких писателей и эссеистов, описывал новую ситуацию так:

"Представьте себе, что вам нужно было всю жизнь делить комнату с буйным помешанным. Мало этого, приходилось еще с ним играть в шахматы. Причем так, чтобы с одной стороны, не выиграть – и не взбесить его победой, а с другой – и поддаваться следует незаметно, чтобы опять-таки не разозлить сумашедшего. В конце концов все стали гениями в этой узкой области. .. "буйный исчез, и жизнь предстала перед нами во всей неприглядности наших невыполненных, наших полузабытых обязанностей. Да и относительно шахмат, оказывается, имели место немалые преувеличения. Но самое драгоценное в нас, на что ушло столько

душевных сил, этот виртуозный опыт хитрости выживания оказался никому не нужным хламом. Обидно " . (под буйным имеются ввиду власти и литературная игра, которую метафорически виртуозно проводил сам Искандер в знаменитой повести "Кролики и удавы" и многие другие – А. Щ.)

Русскому писателю было труднее расстаться с идеологией, чем любому другому – слишком долго и сильно он от нее зависел. Подверженная катаклизмам русская история противоречива, зато последовательна русская литература – она всегда боролась с властью, справедливо подозревая в ней кокурента. Так, А. Белинков писал: "Вся великая русская литература – это лишь то, что осталось, что не удалось уничтожить, что не было погублено в жестокой и беспощадной борьбе с нею."

На протяжени всей своей блестящей истории русская литература стремилась конкурировать с реальностью. Впрочем, это задача и любой другой литературы. Разница в том, что русским писателям повезло больше – им всегда "подыгрывали" власти (цензура, гонения и т.п.). Лучшие сочинения рождаются в момент кризиса. Самое интересное в культуре происходит на сломе традиционного сознания, когда основы уже трещат по швам, но еще держат форму. Большую литературу создают те, кто попал в счастливый зазор между естественным и противоестественным.

До тех пор, пока Россия жила вымышленной жизнью, писатель занимал в ней чересчур почетное место. В стране, где сочинялось все – от географии до цен на масло, - поэзия не могла цениться ниже правды. Русский писатель дольше других сохранял уважение к себе, потому что, воочию наблюдая пластичность окружающего мира, он уступал искушению его улучшить. Создавая как бы живых, якобы настоящих людей, писатель уподобляется божеству. Распоряжаясь судьбами своих героев, он играет роль всемогущего диктатора, который лепит реальность по своему плану. Искусственная жизнь взаимодействует с естественной – происходит наложение одной искаженной реальности на другую.

К кризису такую модель привели даже не политические, а экономические перемены. Стоит ввести в эту придуманную жизнь элементы реальности, скажем реальные цены, как привычная картина мира непоправимо исказится, став с ног на

голову. Исчезнет цельностьи и гармоничность, обеспеченная властью вымысла. Реальность губит тот реализм, который подразумевает текст с прологом и эпилогом, с мебелью и пейзажем, а главное – с действующими лицами, под которыми подразумевались лица настоящие. Поэзия, проиграв правде, обнаруживает свою условность, а это значит, что жить она может, только помня об этом роковом уроке.

События 91-го года вместе с прочими идеологическими структурами упразднили литуратуру в ее традиционном обличии. Речь идет не только о старых грехах перестроечных книг – политизации, публицистичности, мании правдоискательства. В России этап литературного экстаза завершился. Писатель оказался на той всемирной обочине, где ему и место. В новой России писатель обречен быть современным. Он стоит у той же развилки, что и любой другой автор накануне 21 века. Внешне эта развилка напоминает старую – поэзия и правда. Разница в том, что теперь писателю приходится решительно выбирать между одним и другим. Тем, кто идет путем вымысла, проще. Они всего лишь должны в этом открыто признаться, то есть осмыслить вымысел как прием. Развилка, у которой топчется русская литература, не так уж и нова. Новое – это жестокая ситуация выбора, которая и делает писателя современным. Тут в литературу вмешалась история. Русская революция, ее грандиозный провал, поставила человека на место.

Пережив эпоху "нео", мы перебрались в век "пост": посткоммунистический, постиндустриальный, постъядерный мир с постмодернистским искусством. История, слишком далеко забежав вперед, опомнилась и занялась исправлением ошибок. Ведь приставка "пост" не указывает путь в будущее, она лишь говорят, от чего избавиться, чтобы продлилось настоящее.

Если раньше у слова "культура" была только единственное число и противостояла она некультуре, то есть варварству, то теперь одной культуре противостоит другая. Культур стало много, а значит, ни одной из них не принадлежит истина. Та истина, которую искала великая русская литература прошлого. До тех пор, пока мир жил мечтой о конце пути, писатель надеялся сократить к нему дорогу. Когда выяснилось, что то, что есть, лучше того, что может быть, писатель утратил возможность творить из ничего. Литератор может говорить

правду о себе или правду о литературе, но не правду о жизни – нет ее больше, универсальной, одной на всех, большой правды.

Марианна Волкова, нью-йоркский фотограф, придумала издать альбом под названием "100 советских писателей". (Ранее она в соавторстве с Сергеем Довлатовым выпустила несколько изданий фотоальбомов деятелей культуры, первый был издан и в Росси под названием "Не только Бродский". Фотографии известных художников, артистов, музыкантов и писателей сопровождались комментариями в виде анекдотов от Довлатова.) В начале 90-х задуманное издание практически потеряло свою актуальность, превратившись в справочник на манер телефонной книги. Ходасевич говорил: то, что в хорошие времена является литературой, в смутные становится грудой книг. Мне бы хотелось рассказать о некоторых книгах, сумевших преодолеть временной барьер и оказаться в современности. Точнее, речь пойдет о писателях, которые мне кажутся наиболее читаемыми из современных авторов.

Пожалуй, ярче всех представляют постсоветскую литературу Владимир Сорокин и Виктор Пелевин. Сорокина не устают обличать, и есть за что. Его проза не может не раздражать. Причем не столько обилием шокирующих садистких описаний, сколько принципиальной непонятностью литературы Сорокина. Раннее произведение Сорокина под названием "Очередь" построено в форме бесконечного диалога людей, стоящих в очереди не понятно за чем. Сорокин ни разу не отступает от выбранной тактики, каждое предложение начинается с новой строки и дефиса, маркирующего прямую речь. Непонятно, что собираются приобрести люди из этой мифической очереди, за чем проводят несколько дней на улице, но магическое действие диалога заставляет следить за происходящим. Тема Сорокина – грехопадение советского человека, который попадает из соцреалистической утопии в бессвязный хаос мира, не подчиненного общему замыслу. Акт грехопадения происходит лингвистически, в языке. Герои Сорокина, расшибаясь на каждой стилистической ступени, обрушиваются в лингвисмический ад, повествование становится бессвязным. Сорокин оставляет читателя наедине с невыносимой смысловой пустотой. Отсюда гнев и отвращение читателя, но и эта неизбежная реакция – часть замысла, художественный прием, помогающий автору очертить

границы, прежде чем их нарушить. Его романы напоминают картины поп-арта, где автор и зритель пытаются понять, что говорит им реальность, составленная из образов бесчисленных космонавтов и ковбоев, Лениных и Мэрилин Монро, Мао Цзэ-дунов и Микки Маусов. В этой освоенной поп-артом эоне обитает Сорокин, постоянно покушающийся на все мыслимые табу и границы. Один из самых характерных романов Сорокина – "Сердца четырех", даже в неопубликованном виде он сумел стать финалистом первой Букеровской премии. Это метафизическая пародия, роман перенасыщен действием, на от читателя тщательно утаивается смысл происходящего. Все, что мы знаем, сводится к тому, что в России действует некий Союз Четыркх, члены которого связаны общей таинственной целью. Ради нее они подвергают жестоким испытаниям других и претерпевают их сами. Пытки, убийства, насилия – все это описано с леденящими душу подробностями. Зато полный туман там, где говорится, чем они, собственно, занимаются и ради чего. Сюжет строится по всем правилам, но объясняющие его мотивы отсутствуют. Сорокин намеренно оставляет фабулу без мотивов, показывая каркас авантюрного романа. Сюжетные ходы двигают действие неясным образом в таинственном направлении. Другой пародийный уровень – стиль. Как и в других своих произведениях, Сорокин заполняет текст разностилевыми мазками. Поскольку Сорокин начинал как художник, уместной для его романа аналогией была бы картина, которую написали сразу передвижник, импрессионист, футурист, сюрреалист и абстракционст. Книга написана всеми стилями, за исключением одного – авторского. Роман Сорокина – пародия на художественный язык в целом. Там построен и его последний роман "Голубое сало", начинающийся главками вроде "Чехов-1", и за этим подзаголовком следует точно стилистически чеховский текст, "Достоевский-2", Толстой, Набоков, самое начало и вовсе выдержано в стиле китайского средневекового романа, и все это не имеет никакого отношения с общим содержанием, если оно вообще есть. Тем не менее, таинственная сила, отличающая литературу, позволяет мне выделить его книги из ряда "трудного чтения".

Изданием книг Пелевина занимается московское издательство "Вагриус", первые тиражи его книг уже давно раскуплены и несколько раз переизданы, в прошлом году выпущено трехтомное издание его произведений. Книги Пелевина

производят поистине магическое воздействие, от чтения не могут оторваться даже те, кто не считает их литературой. Проза Пелевина строится на неразличении настоящей и придуманной реальности. Тут действуют непривычные правила: раскрывая ложь, мы не приближаемся к правде, но и умножая ложь, мы не удаляемся от истины. Сложение и вычитание на равных участвуют в процессе изготовления вымышленных миров. Пелевин куда осторожнее обходится с описываемой им реальностью, чем Сорокин. Этих писателей связывает интерес к советскому бессознательному как источнику мифотворческой энергии. Сорокин воссоздает сны "совка", точнее – его кошмары. Проза Пелевина – это вещие сны, сны ясновидца. Если у Сорокина сны непонятны, то у Пелевина не поняты.

Пелевин не ломает, а строит. Пользуясь теми же обломками советского мифа, что и Сорокин, он возводит из них фабульные и концептуальные конструкции. Вымысел у Пелевина есть инструмент конструкции реальности, а не насилия над ней. Считают, что он пишет сатиру, скорее – это басни. Лучшая из них – "Жизнь насекомых", переносящая читателя в обычное для этого жанра животное царство. Зверь удобен писателю своей инакостью, и Пелевин выбирает насекомых – они меньше всего похожи на человека, но чаще других живут с ним.

Взяв фольклорные фигуры чапаевского цикла – Василия Чапаева, Петьку, пулуметчицу Анку и Котовского, Пелевин превратил их в персонажей притч в романе "Чапаев и Пустота". Это произведение напоминает дзен-буддистский коан, заслуга автора в том, что содержание – буддистскую сутру – Пелевин опрокинул в форму чапаевского мифа. Появляющийся в романе образ японского бизнесмена, беседующего с другим героем по имени Петр Пустота, вынудил одного из моих знакомых японских славистов обратиться к вопросу, соответствует ли этот образ имиджу японца в глазах русских. Мне кажется,что этот персонаж появляется в романе для перехода к буддистско-философской беседе, которая составляет ядро романа, и таким образом не несет имиджевой нагрузки. В романе "Омон Ра", посвященном героям космоса, герой со странным именем Омон Ра проходит обучение в школе полетов. Невероятный процесс обучения метафорически описывает отечественное отношение к подвигу, что делает смерть во имя высокого чем-то комичным.

Последний роман Пелевина "Generation П", посвящен поколению, согласно рекламе выбравшему Пепси (напиток Pepsi-Cola), и это именно то поколение, которое зачитывается Пелевиным, который в свою очередь вернул людей к чтению, в чем его большая заслуга. В романе описывается сам процесс создания рекламных компаний с присущей Пелевину точностью и абстрагированностью.

Интерес к писателю подогревает и издательская компания, делающая эффектно стильные обложки и помещающая его портреты с закрытым руками лицом. Действительно, Пелевин никогда не появлялся на публике и даже пресконференции с ним проводятся только через сети интернет, что заставляет некоторых сомневаться в его существовании в принципе.

Кроме того, что возможно заинтересует студентов русского отделения, несмотря на то, что я привезла лишь по одному произведению авторов, тексты большинства произведений Сорокина и Пелевина можно найти в интернете на страницах издательств: www.vagrius.com, www.rinet.ru/~ad-marg, журналы о русской литературе – www.rus.ru, www.litera.ru

Естественно, современныые кумиры от литературы не ограничиваются этими двумя именами, временное пространство позволит мне лишь упомянуть Владимира Маканина и Александра Соколова, Владимира Тучкова, Андрея Битова, Андрея Синявского, Венедикта Ерофеева и Сергея Довлатова. Можно посвятить отдельную встречу разговору о современной поэзии. Невероятное "возвращение" поэзии Иосифа Бродского, второе издание собрания его сочинений зачаровывает меня вновь и вновь.

Следует заметить, что в новой волне участвуют и авторы женского пола, их вклад столь значителен, что то же издательство Вагриус выпускает отдельную женскую серию. Это не означает, что эти произведения предназначены для женского чтения. Такие писательницы, как Валерия Нарбикова, Виктория Токарева, "Квентин Тарантино" русской драматургии загадочная Рената Литвинова, сделавшая несколько фильмов вместе с кинорежиссером Кирой Муратовой, и многие другие поддерживают "времен связующую нить". Мне хочется особенно выделить новеллы Татьяны Толстой, книгу которой я привезла с собой. Есть что-то роднящее ее с прозой Саши Соколова, своеобразное бегство в замкнутый

мир, отгороженный от пошлых будней прекрасными метафорическими деталями. Чаще всего это мир детства. У Толстой есть любимый сюжет – история преступления и наказания, герой изменяет своему детству (мечте) и за это расплачивается бессмысленно прожитой жизнью и смертью, которая почти всегда подстерегает его в финале рассказа. Новеллы Толстой посвящены не эпизоду, а всей судьбе человека – от начала до конца. Метафора – главное орудие Толстой, превращающая быль в сказку. Для человека, отказавшегося вырасти, главный враг – время. А те, кто умеет жить вне времени – любимые герои ее рассказов. Лучше всех этим искусством владеют дети и старики. Дети – это другие, настолько другие, что у них даже есть жабры, как сказано в рассказе "Свидание с птицами". Существуя в сказочных координатах, дети просто не знают того, что взрослые называют "настоящим". Однако с годами и взрослые приходят к восхитительной способности не отличать подлинного от иллюзорного, ибо старые, как и малые, выпадают из времени. В этом вечно повторяющемся времени Толстая селит своих любимцев. Все они пытаются остановить мгновение, чтобы застыть в нем, как муха в янтаре. Главное – правильно выбрать мгновение, точно определить, где или когда должен замкнуться круг. Взгляд Толстой обладает сюжетопорождающей силой. Все, что попадает в авторское поле зрения, шевелится, одушевляется, обретает самостоятельную жизнь, начинает себя как-то вести. Ее мир составляют говорящие вещи, каждая из которых может рассказать нечто свое, заведомо чуждое сюжету, и главный секрет обаяния этой прозы именно в лишних историях, не имеющих отношения к сюжету. Каждая строка вынуждает читателя менять бинокль на лупу, вникая в разговорчивые детали. Иногда мне кажется, что это общее качество русской литературы – понуждать к внимательному чтению, и я рада сообщить вам, что традиция русской словесности продолжается.

９０年代：ロシア人として読めること

アンナ・シチョーガレヴァ

これは、平成１２年３月１６日に行われたアンナ・シチョーガレヴァさんの講演テキストの日本語訳である。翻訳は田中継根と桑島裕子が担当した。

今日、ロシア人がどんな本を読んでいるのかについて話すようにとの依頼を受けたとき、私は初め考え込んでしまった。実際、そのような資料がないのに、ロシア人すべてに関して請合うことができるだろうか。私は、今現在何が読まれているかの国全体の統計データを持ち合わせていない。もし、現在、読者のニーズについて研究されているとすれば、それは出版に対する購買者の関心という観点からのものであり、たいていは現代文学の新しい出版物のランキングを示すといったものである。しかし、このようにして、売れ行きから、例えば古典文学に対する関心を判断することができるだろうか。

ソ連時代、ロシアの古典文学の作品集を家庭にそろえておくことは普通のことだった。例を挙げると、トルストイ、ドストエフスキイ、ゴーゴリ、チェーホフ、また、プーシキン、レールモントフなど多くのほかの作家、詩人の作品集である。物不足の時代に、ただお店に行って必要なものを買うということができなかった時代に、このような本（全集）をそろえるためには、古新聞回収をして引換券をもらい、その後で欲しい全集を探して町のあらゆる本屋へ文字通り本狩りに出かけたものである。そうでなければ、職場のくじ引きで当てることもあった。この場合も、本そのものではなくて、やはり本を買うことができる引換券だったが。しかし、それでも幸せなことだった。というのは、当時は本が安かったからである。ただ、これは今になってようやく分かることなのである。現在では、本屋に行けばすぐに分かることであるが、多くの人はただ本を眺めるだけであり、それは博物館とかわらないのである。

現在、読書をめぐる状況は何もかもが変わってしまった。それは政治的な変化の当然の結果である。何人かのソビエト時代のベストセラー作家の作品は時代のニーズから大きく離れ、もう再版されることはないと思われる。

現代の若い家庭では、自分達の子供のために普通、学校のカリキュラムに沿ったシリーズものを買う。ところで、学校のカリキュラムについて触れると、そこでも深刻な変化が起きている。特に、文学や歴史に関してその変化は深刻である。（学校で勉強しなくてはならない）いわゆるカリキュラム作品は、多かれ少なかれ教養ある人々の必読書であると思われる。そして、カリキュラム作品のリストの変化は、ある種の作品に対する見方が変化したことを物語っている。古典を読むときに、漫画や易しく書き直されたものを通して古

典の内容にふれることのできる日本と違って、ロシアでは子供達は、基本的にオリジナルのテキストを相手にした非常に入念な勉強が求められる。勉強の過程で与えられたテーマで作文しなければならず、また幾つかの部分を暗唱させられる。それ以上は教師の熱意いかんである。

学校のカリキュラムでは、一定の年齢で読まなくてはならない文学作品が決まっている。何歳でチェーホフを読むか、何年生でゴーゴリを読むかということを、不思議なことに誰かが決めているのである。そして、トルストイの『戦争と平和』は８年生（つまり１５歳で)、ドストエフスキイの『罪と罰』は９年生で読まなくてはならない。読んだ作品に対する見方も、その年齢における子供の発達状況に応じて形成される。大人になってから世界文学の頂点と認識できるような作品を、学校ではカリキュラムに組み入れ、子供達に押しつけるのである。学校で必須のものとして勉強させられるので、子供達が「強制」、つまり何かつまらないものと取ってしまうことが、残念ながら、しばしば見られる。つまり、「子供のときの本」―その多くは純文学であるが―に帰っていくことはまれなのである。次のような人は幸せと言える。すなわち、文学を愛している先生と出会った人、読書をやめることなく新鮮な視点で読み返すことのできた人、また「カリキュラム化」される前にその作品を読み終えた人である。ところで、私は昨年１２月に、ソビエト児童文学についての会議に参加した。その中で、とりわけ教育省の代表は腹立たしげに、自分の好きな作家の何人かが現在の学校のカリキュラムに入っていないと言った。それに対して、教育大学の代表は賢明にも次のように言ったものである。これから成長する世代が楽しめるように、幾人かの作家の名前はカリキュラムに入れないでおいてほしいと。この冗談は会議の参加者の爆笑を誘った。この数年、カリキュラムに次のような難解な作品が加えられた。例えば、ブルガーコフの『巨匠とマルガリータ』、パステルナークの『ドクトル・ジバゴ』、ナボーコフ、セルゲイ・ドヴラートフのようなタイプの作家のもの、更に海外のロシア人の多くの現代文学が学校のカリキュラムに加えられた。同じように読書の状況も大きく様変わりした。まるで魔法の玉手箱が開かれるように「秘密のフォンド」から本が次々に取り出されて、共有の財産となり、あっという間に売れ切れた。80 年代、私が学校で学んでいた時にブルガーコフが出版され始め、本屋に長蛇の列ができたことを覚えている。銀の時代の詩人に対する見方も変わった。彼らもまた革命の時代に遭遇した人々だったからである。「革命の歌い手」ヴラジーミル・マヤコフスキイに熱愛する女性がいたこと、彼にもそういう私生活があったという事実は文字通り国中を震撼させた。初めて彼を生身の詩人としてみることが可能になったのである。文書館の文書や歴史資料の公開に伴うペレストロイカ後の情報ブームは、時事評論の大流行をもたらした。今ではみなこれに飽きてしまってが、少なくとも記録文学は以前通り、年配の人々や祖国の歴史に興味のある特定のグループに人気がある。90 年代は、ナボーコフやその他多くの亡命者文学を代表する文学者の「帰還」が目立つ。外国で読まれ、高い評価を受けている様々な文学が数十年遅れでロシアの読者に開かれたのである。ソビエトの古典文学への見方も徐々に変化してきた。ソビエト文学

へのいくらかの不信から完全な無視にいたるまでいろいろである。学校のカリキュラムからマクシム・ファジェーエフの『若き親衛隊』が消された。また、ショーロホフは現代性に乏しいということで消されそうになったが、考え直された。『静かなドン』はショーロホフが本当の著者であるか問題にされてはいるものの、カリキュラムの中に残された。

特に現代文学に対する見方はここ数年のうちに急激に変化した。文学者自身の見方も変化している。もっとも鋭い作家の一人でエッセイストでもあるＦ・イスカンデルは次のように言っている。「凶暴な精神異常者と一生同じ部屋に住まなくてはならなかったと想像してみてごらんなさい。それだけではなくて、さらに彼とチェスをするはめになったと。勝って彼を怒らせるようなことはしてはならず、しかし、それと同時に気付かれないような負け方をしなくてはならないのである。最後には、この狭い世界では誰もが天才になった…狂人は消え去った。そして、我々が日常の義務を達成しえなかった、半分忘れ去ってしまったという醜さだけが我々の人生に残ったのである。チェスに関しても、小さからざる誇張が行われたのである。しかし、我々の中でもっとも貴重なもの、それに対してあれほどの精神力が費やした貴重なもの、つまり生き残る為の狡猾さの巨匠的な経験は、結局、誰にも必要のないガラクタに過ぎないと判明した。腹立たしい限りである。」（ここで狂人というのは、つまり権力であり、また文学的遊びのことである。この文学的遊びとは、イスカンデル自身が彼の有名な作品『ウサギとウワバミ』や他の作品の中でいわば巨匠的に行ったものである。…Ａ・シチョーガレヴァ）

他のどこの作家よりもロシアの作家はイデオロギーを捨て去るのが困難であった。というのはあまりに長くそして強くイデオロギーに依存してきたからである。大変革にさらされてきたロシアの歴史は矛盾に満ちているが、ロシア文学は首尾一貫している。それは常に権力と戦ってきた。当然のことながら権力の中に自分の争う相手を見たからである。次のようにＡ・ベリンコフは書いている。「全ての偉大なロシア文学は残ったもの、殲滅できなかったもの、残酷な戦いの中で倒されなかったものである。」

ロシア文学は、その輝かしい歴史を通じて現実と争おうとしてきた。現実との戦いというこの課題はどの国の文学でも同じであろうが、その違いはロシアの作家はついていたということである。常に（検閲や迫害といった）権力が「伴奏」をして作家を目立たせていたからである。より良い作品は危機の中で生まれる。文化において最も興味深いものは、伝統的意識の解体の中で、土台はすでに割れ目が生じ、めりめりと音を立てているが、まだかろうじて形を保っているような時に生まれる。自然なものと不自然なものの隙間に出くわした人が偉大な文学を作るのである。

ロシアが捏造された虚構の生活を送っていたとき、作家は過度に名誉ある地位を占めていた。地理からバターの価格まであらゆるものが虚構である国において、詩は真実よりも低く評価されることはありえなかった。ロシアの作家は誰よりも長く自分への尊敬を保っていた。というのは、周りの世界の可塑性をはっきりと見て取って、それを良くしようという誘惑に負けたからである。生きている本物のような人間を創造することで、作家は神

に似てくる。自分の主人公たちの運命を左右して作家は全能の独裁者の役割を演じる。自分の計画に応じて現実を作り上げるのである。人工の生は自然の生と相互に作用し、一つの歪んだ現実の、他の現実への重ね合わせが起きる。

そのような創作のあり方を危機に追い込んだのは、政治的変化ではなく、経済的変化であるとさえ言える。この虚構の生活に現実の要素を取り入れれば、例えば現実のものの値段などを取り入れれば、世界の見慣れた光景が、天地が逆さになって手の施しようのないくらいに歪んでしまう。完全性、調和、権力によって保証された虚構が消えてしまうのである。リアリズムとは、プロローグとエピローグを備えたテキスト、家具と風景を持ったテキストであり、もっと重要なことは、本当の人間であるとされる登場人物が出てくるテキストを意味するが、現実はそのようなリアリズムを滅ぼしてしまう。詩は真実に負け、自らが条件つきの存在であることをさらけ出してしまった。つまり、詩は生きることができるにはできるが、それはこの宿命的教訓を覚えている限りにおいてであることを示しているのである。

91 年の出来事は、他のイデオロギー的構造とともに文学の伝統的姿を変貌させた。それは、過度の政治性、過度の批評性、マニアックとも言える真実の追求といったペレストロイカ時代の本の欠陥だけではない。文学が本来持つべきものがロシアで達成されたのである。世界中どこでも見られるように、作家は傾斜面に立っていることが明らかになった。新しいロシアにおいては、作家は現代的であることが運命づけられている。21 世紀の前夜、ロシアの作家は他の国の作家と同じく分岐点に立っている。外面的にはこの分岐点は詩と真実といった古い分岐点を思い出させるが、その違いは、今では作家ははっきりと二つに一つを選ばなくてはならない、という点にある。捏造を選ぶ作家には安易な道が待っている。彼らは何より公にこれを認めればいいのである、つまり、捏造を手法として主張すれば良いのである。ロシア文学は分岐点の前で足踏みしている状況であるが、この分岐点とはそんなに新しいものではない。新しいもの—それは選択の厳しい状況であり、この状況が作家を現代的にしているのである。歴史が文学に介入したのはそこなのである。（情報公開によって）暴露されたロシア革命は人をまさにその（革命の）場に立たせたのである。

「ネオ」の時代を経て、我々は「ポスト」の時代に移行した。ポスト共産主義、ポスト産業、ポスト核、ポストモダン芸術。歴史はあまりに遠くまで先走り、我に返ってその過ちの修正に取り組みだした。「ポスト」という接頭辞は未来への道を示すのではない。現在を継続させるためには何から脱するべきかをこの接頭辞は語っているのに過ぎない。

もし、かつて「文化」という語が単数形だけで、それに対立するものとして「非文化」、つまり野蛮があったとすれば、現在は一つの文化に対して対立するのは他の文化である。文化が多数になったということはつまり、そのうちのどれにも真実がないということである。それは、偉大なロシア文学がかつて捜し求めていたあの真実である。真実追究の旅の終わりを夢みて世界が生きていた時、作家はその探求の道を短くしようと志した。今あるものが、あるかもしれないものよりも良いということが明らかになった時、作家はゼロか

ら創作する可能性を失ったのである。文学者は自分自身や文学について真実を語ることができるが、生については語ることができない。もう真実は存在しない。ユニバーサルな、全ての人々に対して一つの大きな真実といったものはもう存在しないのである。

ニューヨークの写真家、マリアナ・ヴォルコヴァは『100 人のソビエト作家』という写真集を出版することを思いついた。(かつて彼女はセルゲイ・ドヴラートフと共著で何人かの文化人の写真集を出版している。彼らの最初の作品が『ブローツキイだけでなく』というタイトルでロシアで出された。写真は有名な芸術家、俳優、音楽家、作家などで、それにアネクドート形式のドヴラートフのコメントがつけられていた。) 90 年代初めに企画されていた（このヴォルコヴァの）出版は事実上ニーズを失い、電話帳のような便覧に変わってしまた。ホダセーヴィッチが言うには「良き時代に文学とみなされたものは、混乱の時には単なる本の山になってしまう」。しかし、時のハードルを越えて現代性を獲得した幾つかの本について私はお話したいと思う。より正確には、現代作家のうちで最もよく読まれていると思われるものについてお話したい。

おそらく、ポスト・ソビエト文学をもっともあざやかに代表しているのはヴラジーミル・ソローキンとヴィクトル・ペレーヴィンであろう。ソローキンは絶えず悪く言われているが、それには訳がある。彼の散文は人を苛立たせずにはおかない。それは人に衝撃を与えるたくさんのサディステックな描写の故というよりも、ソローキンの文学の根本的な分かりにくさの故である。彼の初期の『行列』という作品は、何のためか分からない行列に並ぶ人々の延々と続く対話から成っている。ソローキンは自分が選んだ戦術を決して手放そうとしない。それぞれの文章は新しい行となって、直接話法をあらわすハイフンから始まる。この神秘的な行列から人々が何を得ようとしているのか、また何のために通りで何日も過ごすのかは読者には分からない。しかし、読者は会話の魔術に捉えられ、作品中の出来事を追わないではいられない。ソローキンのテーマは罪に堕ちるソビエトの人間である。ソビエトの人間は社会主義リアリズムのユートピアから、共通の目論見に従わない、世界の脈絡のないカオスに落ちるのである。罪は言語学的に、言葉のレベルで起こる。ソローキンの主人公たちは文体の各レベルで傷つき、言語学的な地獄に崩れ落ちるのである。語りには脈絡がなくなる。ソローキンは読者を意味上の絶えがたい空虚さと対置させたままにしておく。ここから読者は怒りと嫌悪を覚えるのである。しかし、この避けがたい反応も作者の思惑の一つで、芸術的手法なのである。そして、それが著者をして境界線を引いたり、破壊したりすることを可能にしているのである。彼の小説はポップアートの絵を思い出させる。無数の宇宙飛行士、カウボーイ、レーニン、マリリン・モンロー、毛沢東、ミッキーマウスといったモチーフからなる現実が彼らに何を語りかけているのかを理解しようと、作者とその絵を見る人とが試みるのである。ソローキンは、この自分のものとしたポップアートの領域で、考えうる限りのタブーと境界に挑む。彼のもっとも特徴的な作品『4 人の心臓』は、それが出版されないうちから最初のブッカー賞の最終選考に残った。これは形而上学的なパロディーであり、小説の中には多くの出来事が詰め込まれているのが、読者

には起こっている出来事の意味が綿密に隠されている。我々が分かるのは、ロシアに 4 人連盟なるものが活動していて、そのメンバーは隠された共通の目的で結ばれているということだけである。それのために彼らは他人の厳しい試練を受け、それに耐えるのである。拷問、殺人、暴力といったものが、心を凍らせるような詳細さで描かれている。けれども、彼らが本来何のために、また何をやっているのかは深い霧に覆われていて見ることができない。物語の筋は冒険小説というジャンルが持つあらゆる規則にしたがって組み立てられているが、それを説明するモチーフに欠けているのである。ソローキンは冒険小説の骨組みを示しながら、筋を意図的にモチーフなしにしておく。主題の進展に伴って出来事は謎の方向に進む。パロディーのもう一つのレベルはスタイルに関してなされている。彼の他の作品と同様に、テキストは色々なスタイルで満たされている。ソローキンが画家として出発した以上、彼の小説にふさわしいアナロジーは絵であろう。その絵とは、移動展覧派、印象派、未来主義者、シュールレアリスト、象徴派の諸芸術家が一度に描いたような絵である。彼の本はあらゆるスタイルで書かれているが、そのたった一つの例外は作者自身のスタイルがないということである。ソローキンの小説は全体として文学スタイルに対するるパロディーである。彼の最近の小説『空色の脂』もそのように作られている。それは「チェーホフ・1」というような章で始まり、その副題の後にまさにチェーホフのスタイルでテキストが続く。次に「ドストエフスキイ・2」、トルストイ、ナボーコフと続く。そしてそもそも最初の部分は中国の中世の小説のスタイルが守られているのである。これらは全て共通の内容とは何の関係もない。ただし、共通の内容というものが存在すればの話であるが。それでもやはり、彼の文学を際立たせる秘密のパワーが、私をして彼の本を「読みにくい本」の列から選ばせたのである。

ペレーヴィンの本を出版しているのはモスクワの出版社「ヴァグリウス」である。彼の本の第一版はすでに売り切れて何度か再版され、去年、３巻本の作品集が出された。ペレーヴィンの本は本当に魔法のような作用を及ぼす。彼の本を文学とみなさない人でも読まずにはいられないのである。ペレーヴィンの散文は本当の現実と、虚構の現実との混交からなっている。そこでは我々になじみのない原則が働いている。うそを暴いても、真実に近づくわけではなく、しかし、うそを増やすからといって真実から遠ざかるわけでもない。足し算と引き算が、虚構の世界を作るプロセスに平等に加わっているのである。ペレーヴィンはソローキンよりもずっと慎重に自分の描く現実を扱っている。この二人の作家を結び付けているものは、神話創造のエネルギー源としてのソビエト的、無意識的なものへの興味なのである。ソローキンは「ソ連邦」の夢を再現する。さらに正確に言うと、その悪夢を再現する。ペレーヴィンの散文は予言的な夢、千里眼を持つ人の夢である。もし、ソローキンの夢が本来理解できないものであるとすれば、ペレーヴィンの夢はまだ理解されていない夢だと言えるであろう。

ペレーヴィンは破壊するのではなく、構築する。ソローキンと同様に、ソビエト神話の断片を使いながらも、ペレーヴィンはそこから主題とコンセプチュアリズムの構造を引き

出す。ペレーヴィンにあっては、虚構は現実を構築する道具であって、それを犯すようなものではない。彼は風刺を書いていると見られているが、むしろ彼が書いているのは寓話である。中でも最も優れたものは『虫の生活』で、読者をこのジャンルではあたりまえの、動物の世界に連れて行く。動物は作者にとって都合がいいのは人間とは違う存在だからである。そして、ペレーヴィンが虫を選ぶのは、虫は何より人間に似ていないにもかかわらず、何にもまして人間と共に住むからである。

チャパーエフのシリーズのフォークロア的人物、すなわち、ヴァシーリイ・チャパーエフ、ペーチカ、機関銃士アンカ、コトーフスキイといった人物を取り上げて、ペレーヴィンは彼らを『チャパーエフとプストタ』」の中で寓話の人物に変えてしまった。この作品は禅宗の公案を思い起こさせる。著者の功績は、仏教の経典とも見られる内容をチャパーエフの世界の形にひっくり返したことにある。この小説の中に日本人のビジネスマンが登場し、ピョートル・プストタ（空虚）という名の他の主人公と会話をする。この日本人ビジネスマンについて、私は、知り合いの日本人スラヴィストから、次のような質問を受けた。これはロシア人から見た日本人のイメージに合致するのだろうか、と。私には、この人物が小説に登場するのは、小説の核である仏教的、哲学的対話へ移行するためであって、何か特別なイメージを持っているわけではないと思われる。宇宙の英雄に捧げられた『オモン・ラ』という小説では、オモン・ラという変わった名前の主人公が飛行士学校で教育を受ける。信じがたいような教育課程は、功績というものを祖国がどう見ているかを比喩的に表現しているのであって、そのことが気高いものの名による死をコミカルなものにしてしまっている。

ペレーヴィンの最近の小説『ジェネレーション・P』は、コマーシャルに引きずられてペプシコーラを選んだ世代に捧げられている。そして、これはまさにペレーヴィンを読みふけった世代である。彼は今度は人々を読書に引き戻したのであって、これがペレーヴィンの大きな功績である。小説の中ではペレーヴィン特有の正確さと象徴性をもって、広告会社が造られるプロセスが描かれている。

作家への関心は出版社によって刺激される。かっこいいカバーを効果的につけたり、手で顔を隠した彼の写真を載せたりしている。実際、ペレーヴィンは公の場に出たことが一度もなく、記者会見もインターネットを通じてしか行わない。そこから、彼は本当に存在するのだろうかという疑問も生じている。

私が１冊ずつ持ってきたこれらの作家の本は、ロシア語学科の学生達の興味を引くと思われるが、そのほかに、ソローキンとペレーヴィンのほとんどの作品のテキストは、出版社のインターネットのホームページで見ることができる。

もちろん、文学の現代のアイドルはこの二人に限られるものではない。時間の制約があるので、名前を挙げるだけであるが、ウラジーミル・マカーニン、アレクサンドル・ソコロフ、ウラジーミル・トゥチコフ、アンドレイ・ビトフ、アンドレイ・シニャフスキイ、ヴェネジクト・エロフェーエフ、セルゲイ・ドヴラートフなどがいる。現代の詩について

ということなら、また別の講演会を催さなくてはならない。ヨシフ・ブローツキイの詩は信じられない「帰還」を果たし、彼の作品集の第二版は何度も何度も私を魅了してやまない。

新しい波には女性の作家も加わっていることを指摘しなくてはならない。彼女たちの貢献は非常にめざましく、ヴァグリウス出版社は個々の女性のシリーズを出している。これは、これらの作品が女性の読者を想定しているということではない。ヴァレリヤ・ナルビコヴァ、ヴィクトリア・トカレヴァ、そしてロシア演劇の「クヴェンチン・タランチノ」で、映画監督キーラ・ムラトヴァと共に幾つかの映画を作った謎のレナータ・リトヴィノーヴァや多くの他の女性作家が「時代を結ぶ糸」を支えているのである。私は特にタチヤーナ・トルスターヤの小説を取り上げたいと思う。私は彼女の本を一冊もって来た。彼女の散文にはサーシャ・ソコロフに何か通ずるものがあって、俗悪な日常から仕切られた、閉じた世界への独特な逃避が、美しい比喩的なディテールで描かれる。何よりもこれは子供の世界である。トルスターヤには好きな主題がある。罪と罰の話である。主人公は自分の子供時代すなわち夢を裏切り、そのことによって意味のない人生と、そしてたいてい物語のフィナーレで待ち構えている死の報いを受ける。トルスターヤの小説はエピソードではなく、初めから終わりまで人間の全運命に捧げられている。隠喩はトルスターヤの主要な道具で、これが物語をおとぎ話に変えてしまうのである。成長を拒否する人間にとって最大の敵は時間である。時間の外に住むことのできる人が彼女の物語の愛される主人公である。誰よりもこの技術を持っているのは子供と老人である。子供は他者である。『鳥との出会い』という話の中に書かれているように、エラさえ持っているほどに全く違った存在である。おとぎ話の座標軸に住んでいて、大人が「現在」と名づけているものを子供達は全く知らない。しかし時を経るごとに、大人も現実と幻想を区別しないすばらしい能力に達する。なぜなら、老人は子供と同じように時間から抜け落ちてしまうからである。この、永遠に繰り返される時間の中に、トルスターヤは自分の愛する主人公達を住まわせるのである。彼らはみな、琥珀の中のハエのように、その中で凍りつくようにと瞬間を止めようとしている。重要なことは、正確に瞬間を選ぶことで、いつあるいはどこで輪を閉じるべきか正確に見極めることである。トルスターヤの眼は物語を生み出す力を持っている。作者の視野に入るものはみなうごめき、元気づき、独立した生を得て、自分を律し始めるのである。彼女の世界ではあらゆるものが言葉を話す。そのそれぞれが何か自分のこと、明らかに主題とは無関係なことを話すことができる。そして、この散文の魅力の主な秘密は、物語の筋とは関係のないこのような余計な話にあるのである。読者をして一行ごとに双眼鏡をルーペに持ち替えさせ、話し好きなディテールに向かわせるのである。時々、これはロシア文学に共通する特徴ではないか、すなわちは読者に注意深く読むように促すのがロシア文学の特徴ではないか、と私は考える。ロシア文学の伝統はきちんと続いているのであると、みなさんにお伝えできることを私は大変嬉しく思う。

研究会配布資料

研究会へのお誘い

公開の小講演会の形式で研究会をいたしますので、
どなた様も、ご自由にご参加下さい。

題目

Central Asian Search For Identity --Evidence From the Field

日時・場所・発表者

１０月１６日（土）午後２時～４時
東北大学北川内キャンパス川内合同研究棟１０１
Rafis Abazov,La Trobe Univ.,Australia
(Author of *The Formation of Post-Soviet International Politics in Kazakhstan,Kyrgyzstan,and Uzbekistan,* Univ.,Washindton,1999)

連絡先

東北大学大学院国際文化研究科　北川研究室
電話ファックス　０２２-217-7587

この研究は総長裁量学内特別研究費にによるもので

Table 1

Crosstabulations on Developing the Foreign Policy as a part of the Following Geographical Areas by the Republics (%)

Geographic Area	*Kazakshtan N=98*	*Kyrgyzstan N=92*
Eastern Europe	8.8	11.0
Asia	36.3	46.0
Middle East	3.9	5.5
West	8.8	18.4
CIS	60.8	57.0
East and Southeast Asia	6.7	12.9
Muslim World	13.7	10.1
Eurasian Bridge (neither Europe nor Asia)	58.8	23.0
Other	31.4	30.4

Table 2

Crosstabulations on Developing the Foreign Policy as a part of the Following Geographical Areas by the Ethnic Origin in Kazakhstan (%) N=98

Geographic Area	*Kazakh*	*Russian*	*Other*
Eastern Europe	7.8	0.0	1.0
Asia	26.4	2.9	3.9
Middle East	3.9	0.0	0.0
West	8.8	0.0	0.0
CIS	51.9	4.9	4.0
East and Southeast Asia	5.9	1.0	0.0
Muslim World	12.7	0.0	1.0
Eurasian Bridge (neither Europe nor Asia)	50.0	4.9	4.0
Other	29.4	2.0	0.0

Table 3

Crosstabulations on Developing the Foreign Policy as a part of the Following Geographical Areas by the Ethnic Origin in Kyrgyzsstan (%)

Geographic Area	*Kyrgyz*	*Russian*	*Other*
Eastern Europe	9.2	0.9	0.9
Asia	34.0	5.5	6.3
Middle East	4.6	0.0	0.9
West	15.6	0.0	2.7
CIS	44.2	6.4	6.3
East and Southeast Asia	8.3	1.8	2.7
Muslim World	9.2	0.0	0.9
Eurasian Bridge (neither Europe nor Asia)	19.3	0.9	2.7
Other	24.0	2.8	3.6

CURRICULUM VITAE

MAIL ADDRESS:
Mr. Rafis Abasov
Dep. of Politics
La Trobe Uni.
Bundoora, Vic. 3083
AUSTRALIA
Ph. of.: (613) 9479-1346
Fax:(613)9479 1997
E-mail: R.Abasov@latrobe.edu.au

Name:	Mr. RAFIS ABAZOV
Date of birth:	June 7, 1966
Citizenship:	KYRGYZSTAN
Present position:	Ph.D. Srtudent, Department of Politics, La Trobe Univeristy (Australia)

Graduate and undergraduate studies

1990-1993 *Kandidat Nauk* (Ph.D., Political science), Moscow, Russia.

1989-1990 - Pre-doctorate studies (Kyrgyz state Univ.)

1984-1989 - University degree in History and Social Science, First class, Honor (Kyrgyz State University. Bishkek, Kyrgyzstan)

Research and Teaching Experience

1996-1997 - Visiting Lecturer of the University of Malaya

1993-1995 - Part-time lecturer in the International Islamic University Malaysia

1990-1993 - Ph.D. Fellowship in *"Moscow Institute Molodeji", Russia*

1991-1993 - Fellow of *ASIA Research Group*, Russia.

1989-1991 - Research fellow of Sociological Study Group on *Ethnic conflicts and Conflicts resolution* of Academy of Science of Kyrgyzstan.

PUBLICATIONS

Books

1) Studencheskaya Molodej (The Student Youth (Sociological Research Paper)) - Frunze, Kirgizstan, 1990.

2) Islam i Politicheskaya Borba v Stranah SNG (Islam and Political Struggle in CIS Countries). - Moscow: Panorama, 1992. (Co-author).

Chapters of Books

3) Some Problems of Growing the National Intelligentsia in Kirgiz SSR, *Report on the Inter-University Conference.* Frunze, 1990.

4) Problems of Ethnic Revolts in the Soviet East. *Report on the scientific conference.* Moscow: Institute Molodeji, 1992.

5) Family and Tribal Structures and Social conflicts in Soviet Central Asia. of "In a Collapsing Empire". Milan: Fernouze Foundation, 1993.[1]

6) Islam as a Foundation for Non-Violent Political Relations Among Youth. *Report on the Russian-German Seminar.* 13-14 of May 1993. - Moscow, 1993.

7) Parties and Movements in Central Asia. *In: Kultura, Politika, Molodej.* Moscow: Institute Molodeji, 1995.

8) Civilisational Dialogue in Central Asia: Conflicting Legacy and Modern Development. In: *Civilisational Dialogue: Present Realities; Future Possibilities.* Kuala Lumpur: The University of Malaya, 1998. (forthcoming).

Journal Articles

9) Central Asia: - Islam and Politics. *Politicheskie Issledovania (Journal of Political science society, Moscow),* No: 4, 1992.

10) Reconsidering Human Rights: Third World Perspective. *Politicheskie Issledovania,* No.2, 1995.

11) Geopolitical and Geoeconomic Transformation of Central Asia and Europe (Comparative Analysis). *Sayasat/Politika (Kazakhstan),* No. 7, 1995.

---

[1] Under the pen-name.

12) Russian Economy in evaluation of Foreign Experts (Review). *MEIMO. Vol. 38.* No.12, 1995.

13) The Balkanization of the Economy of the Central Asian Republics and its Impact on Non-state Sector. *International Journal of Urban and Regional Research. Vol. 20, No 4*, 1996.

14) Sociology of Foreign Policy making Process (Review). *Sociologicheskei Journal (Moscow)*. No 1-2, 1996

15) Independent Kyrghyzstan: Third Approach. (Review). *Central Asian Survey,* Vol. 15, No, 1, March 1996.

16) Kazakh Historians search for Identity (Review). *Central Asiatic Journal,* Vol. 42, No.1, 1997.

17) Reforms and New Trends in Modern Islamic Education *Sociologicheskie Issledovania (Moscow)*. No. 5, 1996

18) UNCTAD Conference "East Asian Development: Lessons for a New Global Environment (Review). *Eurasian Community: Economics, Policy, Security (Kazakhstan)*. No 2, 1996

19) Post-Soviet Development of Eurasian Space (Review). *Kazakhstan i Mirovoe Soobchestvo*. No 2, 1996.

20) Formation of the Non-state Sector and Privatisation in Kazakhstan and Uzbekistan. *Communist Economies and Economic Transformation.* Vol. 9, No. 4, 1997.

21) Islamic Political Parties and Political Process in Central Asia. *LABYRINTH (Central Asian Fesearch Forum)*. Vol. 4, No. 4, 1997.

22) Security Issues in the Post Soviet Space. *LABYRINTH (Central Asian Fesearch Forum)*. Vol. 5, No. 2, 1998.(forthcoming).

Other Positions in Private and Public Sectors

1. Editor of the University Academic Newspaper, Kyrgyzstan.
2. Political observer and consultant IMA-PRESS News service, Moscow,
3. Consultant of International Institute for Strategic Research under the President of Kyrgyz Republic
4. Consultant of Centre for Social Research, Academy of Science of Kyrgyz Rep.
5. Member of the editorial committee *'Pacifica Review'*

Language Proficiency

1. English; 2. Russian; 3. Kazakh, Kyrgyz.

Honors and Grants received

I. NATO research fellowship (1996-1998). Awarded for research on Central Asian foreign policy.

II. State scholarship, Moscow (1990-93). Awarded for Ph.D. dissertation writing.

III. "ASIA" research Grant for book writing (1992). Awarded for writing the book "Islam and Politics".

IV. Kyrgyz Academy of Science Honor (1991). Awarded for participating in research on *"Conflict resolution in Kyrgyzstan"*.

Area or Research Interests

Area of my research interests includes foreign policy making in the Central Asian/CIS countries and evolution of their political system, political history of Central Asia/Soviet Union, social, economic and political transformation in Central Asia. Topics of the researches: "Political and Economic reforms and modernisation in Central Asia", "Russian and Central Asian Republics Policy Making", "Domestic Determinations of Russian and CIS Foreign Policy", "Non-government and Islamic organisations in Central Asia".

研究会のお知らせ

日時　　２月２２日　午後１時～３時

場所　　国際文化棟　１１１教室

発表者　松長昭（文京短期大学講師）

題目　「アゼルバイジャン調査報告（２０００年１月）」

学内特別経費による
「旧ソ連圏における市民的アイデンティティーの変化に関する研究」プロジェクト・チーム

連絡先　北川研究室　電話内線　７５８７

アゼルバイジャン現代事情

松長　昭

１９９１年のソ連崩壊により独立を回復した。回復とは、１９１８－１９２０年の２３ヶ月間「アゼルバイジャン民主共和国」として独立していことがあった。

アリエフ大統領

開発独裁型

内政・外交に手堅い手腕を発揮。

ただし、ナヒチェヴァン派閥を重用（ネポティズム）。

バランス感覚（西側諸国を天秤にかける、いわば手玉にとる）。

問題点（アリエフの健康状態と後継者を息子イルハンを考えていること）

外資資本と癒着する一部官僚

アゼルバイジャン国営石油会社副総裁イルハン・アリエフ（アリエフ大統領の長男）　スキャンダル（ギャンブルなど黒い噂）と使途不明金（流用疑惑）

権威主義体制

エルチベイ大統領時代（1992－1993）には、独立の父ラスルザーデの肖像画が目立ったが、それらはバクー市内から消えてしまい、いまでは公共機関などアリエフ大統領の肖像画が目立つ。（野党ミュサヴァト党には掲示）

中央アジアでも同じ（旧共産党幹部政権）

ウズベキスタン（カリモフ大統領）

トルクメニスタン（ニヤゾフ大統領）

政　党

多数の政党

与党：アゼルバイジャン民主党

野党：中央アジアのウズベキスタンやトルクメニスタンでは野党の政活動が認められてはいないとは対照的。

人民戦線党（エルチベイ党首、アリ・カリモフ幹事長）
ミュサヴァト党（イーサ・ガンベル党首）

カスピ海石油開発

欧米は石油資源を安全保障を考える対ロシアの戦略として利用。欧米石油企業は欧米元高官を顧問に迎え入れる。
ＡＩＯＣ（アゼルバイジャン国際石油会社）　国際石油企業共同体
パイプラインの完成（バクー→グルジア国内→スプサ）と稼働
ただし、パイプラインの口径はロシアを配慮して細いものにしている。
ＡＩＯＣはパイプラインの複線を考えているが、トルコ・ルート（スプサ→ジェイハン）は費用の面で消極的。トルコ・ルートは多分にパフォーマンス。
石油の西側へ輸出する窓口が開く（ロシアを経由しないルート）
現場に働く石油労働者の賃金は低額。
欧米企業に日本企業は追従（有望鉱区は欧米石油企業が先におさえる）。
石油掘削により、天然ガスも噴出しているが、使われず燃やすだけ。
アメリカ議会の対アゼルバイジャン制裁決議（902 条）はまだ有効だが、石油産業は民間企業なので活動。

社会生活

所得較差が広がる（例：外資企業勤務者と公務員）。
店頭にトルコ・ロシアなどの物が豊富な品揃えで輸入品が増えたが、自国産業は展びてはいない。
インフラ整備の遅れ
　電話回線敷設の遅れを携帯電話でカバー
　公共輸送機関、道路、港湾などインフラ整備に投資は行われていない。
地域格差
バクーと地方都市・農村との経済格差の拡大
メディア
タブロイド版新聞（多数発行）　ラテン文字移行は進んでいない。
テレビ（アゼルバイジャン語国内放送、トルコ語・ロシア語・英語など外国語放送の放映）
インターネットの普及（電子メール、複数のプロバイダー）　しかし、バク

一以外では普及していない。

研究機関

アゼルバイジャン科学アカデミー（ソ連型で傘下に多くの大学、研究所を抱える）　アカデミー会員は研究者として尊敬されている。

バクー国立大学以外に私立大学の誕生（教育の民営化）

研究費不足と研究者の外資企業への転職、グルジアのように研究者の海外流出は少ない。

アメリカ議会の対アゼルバイジャン制裁決議（902 条）が有効なので、アメリカの公的機関の活動の制限。

日本との学術交流を望むが、研究費がないので実現していない。

ナゴルノ・カラバフ紛争

紛争は停戦が続き、ナゴルノ・カラバフはアルメニアの実効支配。

紛争解決のめどはたっていない。

紛争難民の分散収容（バクー中心街、石油関係官舎など）と劣悪な住居環境

失業者を吸収しきれない。

ソ連時代に機能していた義務教育(１１年間)が経済問題など学校からドロップ・アウトする児童・生徒の存在

日本・アゼルバイジャン関係

民間企業（伊藤忠など）が石油開発投資などで先行。

外交の出遅れ（１９９１年に外交関係樹立、その後モスクワの兼轄）

大使館の開館（2000 年 1 月）　欧米などに遅れること約１０年

しかし、本山昭代理大使などトルコ語専門官の配置は有効であろう。

欧米大使館は外交活動として文化活動（図書館、英語コース）も実施している。

日本・アゼルバイジャンの学術交流は低調

終わりに

ロシア革命の発祥の地はバクーであり、19 世紀は石油産業に支えられた都市であった。ソ連時代も石油産業を中心に発展していた。ソ連時代のアゼルバイ

ジャンの石油産業を支えたのはロシア人ではなく、アゼルバイジャン人であった。

近代において、アゼルバイジャン人たちの知的活動は、中央アジア（カザフスタン、ウズベキスタンなど）よりも先行していた。

また、バクーはソ連トルコ学研究の中心地でもあった(定期刊行物『ソビエト・トルコ学』の発行)

日本では、トルコ系ということで中央アジアが注目されがちであるが、アゼルバイジャンについて、石油開発以外でもっと注目されてもよいのではなかろうか

研究会のお知らせ

日時　　3月4日　午後２時～4時

場所　　国際棟　１１１教室

発表者　木村真（東京大学大学院助手）

題目「１９９０年代ブルガリアの少数民族をめぐる諸問題」

学内特別経費による
「旧ソ連圏における市民的アイデンティティーの変化に関する研究」プロジェクト・チーム

連絡先　佐藤研究室　電話内線　7663

９０年代ブルガリアの少数民族をめぐる諸問題

木村　真

１．１９９０年代初頭の体制転換

ブルガリアにおける変化のプロセス

１９９１年ブルガリア共和国憲法

制度的枠組みの変化と少数民族の位置づけ

２．権利と自由のための運動

誰の権利と自由を擁護するのか

政党法の存在と少数民族

３．１９９２年の国勢調査に見るブルガリアの民族集団

トルコ人

ジプシー（ロマ）

その他

４．国勢調査に現れない少数民族

ポマク

ポマクの帰属意識とより大きな民族集団、その政治組織との関係

表3　宗教別の住民構成

地方	宗教			合計
	キリスト教	イスラム教	その他	
ブラゴエフグラッド	291,699(83.0)	59,585(17.0)	49(0.0)	351,333
ブルガス	370,323(84.2)	68,674(15.6)	1,056(0.2)	440,053
ヴァルナ	411,402(89.1)	48,499(10.5)	2,048(0.4)	461,949
ヴェリコ・タルノヴォ	295,381(92.9)	22,523(7.1)	198(0.1)	318,102
ヴィディン	151,132(99.5)	700(0.5)	49(0.0)	151,881
ヴラツァ	265,909(98.3)	4,563(1.7)	50(0.0)	270,522
ガブロヴォ	151,575(93.8)	10,002(6.2)	0(0.0)	161,577
ドブリチ	179,682(77.4)	51,949(22.4)	496(0.2)	232,127
カルジャリ	53,199(24.8)	160,181(74.6)	1,259(0.6)	214,639
キュステンディル	180,916(99.6)	450(0.2)	249(0.1)	181,615
ロヴェチ	176,648(92.9)	13,080(6.9)	352(0.2)	190,080
モンタナ	207,292(99.6)	748(0.4)	50(0.0)	208,090
パザルジク	276,748(85.1)	47,883(14.7)	590(0.2)	325,221
ペルニク	162,234(99.8)	200(0.1)	101(0.1)	162,535
プレヴェン	329,615(95.2)	16,213(4.7)	350(0.1)	346,178
プロヴディフ	670,832(91.4)	59,117(8.1)	3,852(0.5)	733,801
ラズグラド	79,425(47.4)	87,892(52.5)	152(0.1)	167,469
ルセ	242,754(84.2)	44,293(15.4)	1,197(0.4)	288,244
シリストラ	102,348(63.5)	58,528(36.3)	301(0.2)	161,177
スリヴェン	211,052(90.0)	23,360(10.0)	150(0.1)	234,562
スモリャン	71,487(44.8)	87,834(55.0)	250(0.2)	159,571
ソフィア（市）	1,169,980(98.9)	6,505(0.6)	6,055(0.5)	1,182,540
ソフィア（県）	287,207(99.2)	2,209(0.8)	98(0.0)	289,514
スタラ・ザゴラ	372,549(93.8)	23,944(6.0)	752(0.2)	397,245
タルコヴィシテ	94,886(62.9)	55,798(37.0)	50(0.0)	150,734
ハスコボ	255,141(86.5)	39,425(13.4)	552(0.2)	295,118
シュメン	139,266(63.1)	80,532(36.5)	746(0.3)	220,544
ヤンボル	172,563(97.9)	3,639(2.1)	101(0.1)	176,303
合計（人）	7,373,245	1,078,326	21,153	8,472,724

Standart, № 223 (27.4.1993) より作成

表2　民族別の住民構成

地区	民族				合計人数
	ブルガリア人	トルコ人	ジプシー	その他	
ブラゴエフグラド	295,149(84.0)	39,550(11.3)	7,652(2.2)	8,982(2.6)	351,333
ブルガス	358,678(81.5)	60,940(13.8)	16,365(3.7)	4,070(0.9)	440,053
ヴァルナ	402,350(87.1)	37,539(8.1)	14,313(3.1)	7,747(1.7)	461,949
ヴェリコ・タルノヴォ	293,333(92.2)	20,271(6.4)	2,750(0.9)	1,748(0.5)	318,102
ヴィディン	144,192(94.9)	450(0.3)	6,142(4.0)	1,097(0.7)	151,881
ヴラツァ	256,285(94.7)	2,759(1.0)	9,924(3.7)	1,554(0.6)	270,522
ガブロヴォ	149,665(92.6)	8,241(5.1)	2,314(1.4)	1,357(0.8)	161,577
ドブリチ	176,812(76.2)	34,042(14.7)	17,210(7.4)	4,063(1.8)	232,127
カルジャリ	70,537(32.9)	141,078(65.7)	1,562(0.7)	1,462(0.7)	214,639
キュステンディル	174,517(96.1)	300(0.2)	6,248(3.4)	550(0.3)	181,615
ロヴェチ	176,251(92.7)	7,495(3.9)	5,581(2.9)	753(0.4)	190,080
モンタナ	186,826(89.8)	798(0.4)	18,867(9.1)	1,559(0.8)	208,090
パザルジク	271,393(83.4)	29,882(9.2)	22,124(6.8)	1,822(0.6)	325,221
ペルニク	159,780(98.3)	200(0.1)	1,604(1.0)	951(0.6)	162,535
プレヴェン	322,454(93.1)	15,212(4.4)	6,559(1.9)	1,953(0.6)	346,178
プロヴディフ	653,132(89.0)	47,712(6.5)	23,403(3.2)	9,554(1.3)	733,801
ラズグラド	79,280(47.3)	79,331(47.4)	7,639(4.6)	1,219(0.7)	167,469
ルセ	237,569(82.4)	37,519(13.0)	8,917(3.1)	4,239(1.5)	288,244
シリストラ	100,488(62.3)	53,959(33.5)	4,570(2.8)	2,160(1.3)	161,177
スリヴェン	195,280(83.3)	18,916(8.1)	17,170(7.3)	3,196(1.4)	234,562
スモリャン	146,423(91.8)	12,598(7.9)	(0.0)	550(0.3)	159,571
ソフィア（市）	1,147,823(97.1)	3,353(0.3)	10,797(0.9)	20,558(1.7)	1,182,540
ソフィア（県）	276,394(95.5)	736(0.3)	10,812(3.7)	1,572(0.5)	289,514
スタラ・ザゴラ	355,266(89.4)	15,946(4.0)	22,309(5.6)	3,724(0.9)	397,245
タルゴヴィシテ	94,335(62.6)	49,413(32.8)	6,487(4.3)	499(0.3)	150,734
ハスコヴォ	247,867(84.0)	33,710(11.4)	12,135(4.1)	1,406(0.5)	295,118
シュメン	135,678(61.5)	66,764(30.3)	15,760(7.1)	2,342(1.1)	220,544
ヤンボル	163,842(92.9)	3,539(2.0)	8,518(4.8)	404(0.2)	176,303
合計人（%）	7,271,608(85.8)	822,253(9.7)	287,732(3.4)	91,131(1.1)	8,472,724

Standart, № 223 (27.4.1993) より作成

研究会へのお誘い

公開の小研究会の形式で研究会をいたしますので、
どなた様も、ご自由にご参加下さい。

題目

多民族社会リトワの過去と現在
ー　現地調査から１９９６～８年

日時・場所・発表者

３月１１日（土）午後２時～４時
東北大学北川内キャンパス国際文化棟１１１

早坂真理（東京工業大学大学院社会工学研究科教授）
『イスタンブル東方機関』、『ウクライナ』、
『革命独裁の指摘研究』等の著者

連絡先

東北大学大学院国際文化研究科　北川研究室
電話ファックス　０２２-217-7587

多民族社会リトアニアの過去と現在
- 郷土派、士族共和制ポーランド史の見直し -

2000年3月11日
東北大学大学院国際文化研究科

東京工業大学大学院社会理工学研究科
早坂真理

【はじめに】
（1）カミェニェツ・ポドルスキの四カ国歴史家会議（1992年5月）
イェジィ・クウォチョフスキの提言／リトアニア大公国の歴史の意義
／ポーランド・シュラフタ身分団体においては排他的なサルマティア主義
／ウクライナ・コザックにおいては、フィリプ・オルリクの憲法、
ウクライナ人＝コザックは往時のハザール人の子孫
キリスト教(chrystianizacja)とフォークロア化(folkloryzacja)の
二つの過程,民衆文化を育んだ教区（parafia）が果たした役割
／政治史・国家史の志向に代えて、文化史の領域を開拓する必要を訴える。

（2）中世末から近世初、ヤギェウォ朝による中東欧の統合、緩やかな国家連合の伝統
ルブリンの連合（1569年）、今日のベラルシ、ウクライナの領土的枠組みが形成
ポーランド分割（1772年、1793年、1795年）、ヤギェウォ連合の最後の形態
国民統合の模索
＊ポーランドの場合は五月三日憲法（1791年）
＊19世紀の末から各地域の諸民族の自立化傾向、分離独立へ
（農民解放後の政治意識の高まりを反映）

【ミハウ・チャイコフスキの国家観】
ポーランド・ロマン主義時代の政治家　（19世紀中葉）
アダム・チャルトリィスキ公のスラヴ政策を指導
スラヴ連邦の盟主としてのポーランド再建計画
チャイコフスキの国家観の変遷
＊wernyhoraの予言、文学的に形象化し、政治宣伝に利用
ジェチポスポリータの再建／諸国民の春まで
オスマン帝国を後見としてウクライナの自立
（ポーランド、リトアニア、ウクライナ（ルシ）の連合国家体制）
ロシア帝国を後見と認め、ロシアへ投降
（ジェチポスポリータの再建、ウクライナの独立の可能性が消滅）、

【ウクライナの郷土派】
リピンスキの国家観、再評価の動き（1992年6月初）
ウクライナ史学の主流をなす民衆史学・文化史学
（ミコラ・コストマーロフ、ヴォロディミル・アントノヴィチ、
ミハイロ・フルシェフスキイ）に対抗する
国家史学を代表／クラクフ歴史学派（ポーランドにおける国家史学）の影響

《Przegląd krajowy》の編集（Kijów 1909）
エンデツィアの指導者ロマン・ドモフスキの「近代的ポーランド人」に対する批判
<Gente Polonus Natione Ruthenu>を提唱
ウクライナに住むシュラフタは、ポーランド化したか、
あるいは元々文化面や出自の面でポーランド・シュラフタであっても、
彼らはウクライナの民族性、少なくともウクライナの市民意識を受け入れ、
ウクライナ社会のエリートとなるべきである。」
＊チャイコフスキの wernyhora に死を宣告

【リトアニアの郷土派（krajowcy)】
ユリウシ・バルダフの研究
ボレスワフ・リマノフスキの政治論が研究の出発点
政治潮流、Ⅰ・守旧派地主勢力、
Ⅱ・エンデツィア（国民民主党）、
Ⅲ・ＰＰＳ革命派（連邦派）、
Ⅳ・郷土派（歴史的リトアニアの復活）、
Ⅴ・国際主義社会主義者〕
リトアニア法（1529 年、1566 年、1588 年）の研究

ヤン・ユルキェヴィチの研究
／1922 年の中央リトアニアのポーランド併合までの
郷土派の政治路線を詳述
B.マカウスカス、R.ミクニス
／ミハウ・レメルの膨大な『日記』の分析と紹介
*ユゼフ・アルビン＝ヘルバチェフスキ（1876～1944 年）
主著『リトアニアの復活、ポーランドの思想との関連で』
（ヴィルノ、1905 年）
*コンスタンツィア・スキルムント（筆名フトゥルス、1865～1934 年）

ミハウ・レメル（ミコラス・レメリス）
「歴史的リトアニア(Litwa historyczna)か
民族史的リトアニア(Litwa etnograficzna)か」
1920 年 10 月 9 日、 Lucjan Żeligowski によるヴィルノ占領、
中央リトアニアの成立、
1922 年 2 月 20 日、中央リトアニアのポーランド併合
郷土派の分裂、レメルはリトアニア国家を選択
<Gente Polonus, Natione Lithuanus>

【参考文献】
J.Albin-Herbaczewski, ***O odrodzeniu Litwy wobec idei polskiej.*** Kraków 1905.
J.Bardach, ***O dawnej i niedawnej Litwie***. Poznań 1988.
М. П. Драгоманов, *Историческая Польша и великорусская демократия*. Женева 1882.
F.Dvornik, ***The Making of Central and Eastern Europe***. London 1949.
М. Грушевский, *очерк истории украинского народа*. Киев 1991.

O.Halecki, ***Borderlands of Western Civilization. A History of East Central Europe***. New York 1952.
O.Halecki, ***The Limits and Divisions of European History***. New York 1950.
Z.Jundziłł, Z dzeiejów polskiej myśi politycznej na Litwie historycznej. ***Niepodeległość, t.6***, Londyn 1958.
J. Jurkiewicz, ***Rozwój polskiej myśli politycznej na Litwie ii Białorusi w latach 1905-1922.*** Poznań 1983.
J.Kłoczowski, ***Europa słowiańska w XIV-XV wieku***. Warszawa 1984.
J.Kłoczowski, Nasza Europa środkowo-wschodnia. ***Znak (1990/1)***.
M.Kosman, ***Historia Białorusi.*** Wrocław 1979
V.Lypynsky, ***Szlachta na Ukrainie***.Lwów 1909.
B.Makowski, ***Litwini w Polsce 1920-1939***. Warszawa 1986.
J.Ochmański, ***Historia Litwy (wyd.II).*** Wrocław 1982.
J.Pelensky (red.) , The Political and Social Ideas of Vyacheslav Lypynsky. Special Issue. ***Harvard Ukrainian Studies. vol.IX, no.3/4 (1985)***.
M.Rőmer, ***Stosunki etnograficzno-kulturalne na Litwie***. Kraków 1906.
M.Rőmer, ***Litwa. Studium o odrodzeniu narodu litewskiego***. Lwów 1908.
J.Sawicki, Krajowść – idea czy metoda (z dziejów polskiej myśli politycznej na Litwie i Białorusi). ***Lithuanica,*** 4(5) 1991-1(6)1992.
K.Skirmunt, ***Kartki krajowe.*** Wilno 1913.
O.Subtelny, ***Domination of Eastern Europe, Native Nobilities and Foreign Absolutism 1500-1715***. Montreal 1986.
O.Subtelny, ***Ukraine. A History***. Toronto 1988.
W.Sukieiniecki, ***East Central Europe During World War I : From Foreign Domination To National Independence.*** New York 1984.
J.Szucz, ***Les trois Europes***. Paris 1985.
J.Turonek, Białoruski ruch narodowy. ***Obóz, nr.22(1992).***
R.Wapiński, ***Polska. Małe ojczyzny Polaków.*** Wrocław 1994.
L.Wasilewski, ***Litwa i Białoruś. Przeszłość-teraźniejszość-tendencje rozwojowe.*** Kraków 1912.
ウラディーミル・ディヤコフ、『スラヴ世界、革命前ロシアの社会思想史から』（早坂訳、彩流社、1996 年）
早坂真理、『ウクライナ、歴史の復元を模索する』（リブロポート、1994 年）
早坂真理、「民族解放論から諸民族の共生論へ、ウクライナ、リトアニア、ポーランド、ベラルシの最近の研究動向から」『ロシア史研究』（第 59 号、1996 年）
早坂真理、「リトアニア現地調査（1996 年 7 月～1998 年 1 月）」所収『多民族村落におけるミクロ的意思決定と社会的協調過程の研究』（課題番号：0804419、平成 8 年度 - 平成 9 年度科学研究費補助金（国際学術研究）研究成果報告書、研究者代表、吉野悦雄）
早坂真理、「リトアニアのロシア旧教徒の生活誌」所収『ヨーロッパ史研究の新地平、ポーランド史の視点から』（中山昭吉編、昭和堂、2000 年）

公開講演会
「今、ロシア人はどんな本を好むのか？」

講師

アンナ・シチョーガレヴァ

日時：平成１２年３月７日（火）午後１時半から

場所：国際文化棟１０９番教室

講師紹介

アンナ・シチョーガレヴァさんは、ロシア科学アカデミー図書館、アジア・アフリカ文学部門の研究員で、日本の民俗学、特に天狗に深い関心を寄せて研究しておられます（著作が数点あります）。今回は、主にソ連崩壊を契機に、ロシアの読書状況、出版状況がどのように変化してきたかを、具体的にわかりやすくお話しいただきます。

どなたでも御自由に御参加下さい。

本講演会は、平成１１年度総長裁量経費（国際文化）の助成のもとに行われるものです。

お問い合わせ：言語文化交流論講座
田中継根　022-217-7649　E-mail:ttanaka@lark.langc.tohoku.ac.jp